



令和6年度
供給リスク増大下の食肉事情等理解醸成事業
消費者意識調査報告書

令和7年3月
公益財団法人 日本食肉消費総合センター

はしがき

近年、人口増に伴う世界的な食料需要の急増、気候変動・温暖化、ウクライナ情勢等によって食料輸入が不安定化しており、食料自給率の低い我が国は食肉をはじめとする食料の供給リスクが増大しています。また、飼料穀物の輸入割合が極めて高い我が国の畜産業は、最近の円安の進行や飼料価格の高騰等により極めて厳しい状況が続いています。

他方、畜産現場の遠隔地化が進んだことに加え、食肉は消費者の手に渡るまでにその形状が大きく変化するため、他の農畜産物に比べて、「生産」と「消費」のギャップが大きいという特徴があります。このため、一般消費者が食肉の供給リスクを意識したり、ましてや畜産農家や食肉関連事業者等と供給リスクについての認識を共有することは難しい実態にあります。

こうした状況にあって、国内の食肉生産を維持し、将来に亘って食肉の安定的な供給を実現していくためには、一般消費者に我が国の畜産業の厳しい経営実態を認識していただくとともに、食肉の合理的な価格形成について理解していただくことが必要不可欠です。

このため、当センターは、本年度、JRA（日本中央競馬会）からの助成を得て、昨年度に引き続いて「供給リスク増大下の食肉事情等理解醸成事業」を実施し、その一環として、食肉価格の上昇が常態化しつつある状況下での食肉購入行動の変化や生産コスト上昇分の小売価格への転嫁、我が国の畜産業の現状、食肉の供給リスク等についての一般消費者の意識を把握するための「消費者意識調査」を日本食研ホールディングス株式会社（食未来研究室）に委託して実施しました。

同調査では、食肉購入頻度が週1回以上の消費者6,000名にWEBでアンケートに回答していただきましたが、本報告書はその調査結果を取りまとめたものです。価格上昇が常態化しつつある状況下にあって食肉の供給・価格・消費等に対して一般消費者が有している意識について詳細で興味深いデータが揃っており、食肉関連事業者の皆様の今後の経営展開の一助にもなり、また、畜産行政関連施策の基礎資料としてもお役に立つものと考えております。

最後になりますが、本調査の実施に当たり貴重なご助言をいただいた調査研究委員会の委員の皆様並びにご支援をいただいたJRAの関係各位に厚く御礼申し上げます。

令和7年3月

公益財団法人 日本食肉消費総合センター
理事長 田家 邦明

調査研究委員会委員名簿

氏 名	所 属
安部 新一	宮城学院女子大学 名誉教授
(座長) 伊藤 匡美	亜細亜大学 経営学部教授
折笠 俊輔	公益財団法人 流通経済研究所 主席研究員
佐藤 勸	全国農業協同組合連合会 畜産総合対策部長
野口 敬夫	東京農業大学 国際食料情報学部教授

(五十音順、敬称略)

消費者意識調査報告書

－ 食肉価格上昇下における消費者の食肉購入行動と
供給リスクへの意識に関する調査 －

日本食研ホールディングス株式会社

食未来研究室

目次

調査概要	2
・調査設計	
・回答者属性	
・本報告書の仕様	
要約	10
1. 食品・食肉価格の上昇と購入行動の変化	
(1)値上げ状況と購入行動の変化	27
(2)食品と食肉の購入頻度	30
(3)食肉の購入状況	32
(4)牛肉の購入状況	36
(5)食肉の喫食場面	41
(6)食肉価格と購入頻度の変化	43
2. 食肉の購入行動と理由	
(1)食肉の購入で重視すること	49
(2)食肉の国産・輸入への意識	52
(3)食肉価格の許容度	55
3. 供給リスクへの消費者意識	
(1)畜産業の現状に対する認識	58
(2)食肉価格への転嫁についての認識	75
(3)今後の食料・食肉の供給についての不安	80
(4)食料供給リスクに対する意識	85
(5)現状を知ったことによる価格許容度の変化	89
(6)今後取り組むべきことは	94
総括	100
集計表・調査票	
・単純集計表	付 01
・クロス集計表	付 15
・調査票	付 97

調査概要

調査設計

◆調査目的：世界的に食料・食肉の供給リスクが増大し、飼料価格の高騰等により畜産経営が厳しい状況にある中、畜産経営の実情等についての消費者の理解度、食肉価格の上昇や価格転嫁に対する消費者の意識等を把握し、今後の食肉の販売・消費の促進に資する情報を得る。

◆調査対象：マイボイスコム株式会社のモニター 20 歳以上の男女
食肉の購入頻度が 1 週間に 1 回以上

◆調査地域：全国

◆回答数： 6,000 サンプル

◆実施時期： 2024 年 9 月

国勢調査(令和 2 年)をもとに、年代×性別×エリア別で人口構成比割付

年代:20 代、30 代、40 代、50 代、60 代、70 代、80 代

エリア別:以下の区分で割付

北海道

東北(青森、秋田、岩手、宮城、山形、福島)

関東(東京、千葉、埼玉、神奈川、群馬、栃木、茨城)

中部(新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知)

近畿(三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山)

中国(鳥取、島根、岡山、広島、山口)

四国(愛媛、高知、徳島、香川)

九州沖縄(福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄)

※中部エリアについては北陸と中部に分けて集計・分析

北陸(新潟、富山、石川、福井)

中部(山梨、長野、岐阜、静岡、愛知)

※70 代と 80 代は合算して「70 代以上」として集計・分析

(参考)

前年調査:2023 年(令和 5 年)9 月に今回調査と同一手法(調査対象、調査地域、回答数)により実施。

回答者属性

居住都道府県

	回答数	%
北海道	255	4.3
青森	64	1.1
岩手	46	0.8
宮城	140	2.3
秋田	47	0.8
山形	40	0.7
福島	79	1.3
茨城	90	1.5
栃木	54	0.9
群馬	49	0.8
埼玉	347	5.8
千葉	326	5.4
東京	775	12.9
神奈川	451	7.5
新潟	91	1.5
富山	36	0.6
石川	58	1.0
福井	21	0.4
山梨	43	0.7
長野	91	1.5
岐阜	97	1.6
静岡	147	2.5
愛知	419	7.0
三重	68	1.1
滋賀	47	0.8
京都	122	2.0
大阪	420	7.0
兵庫	277	4.6
奈良	87	1.5
和歌山	34	0.6
鳥取	24	0.4
島根	23	0.4
岡山	101	1.7
広島	130	2.2
山口	62	1.0
徳島	32	0.5
香川	43	0.7
愛媛	76	1.3
高知	27	0.5
福岡	315	5.3
佐賀	32	0.5
長崎	59	1.0
熊本	74	1.2
大分	48	0.8
宮崎	35	0.6
鹿児島	64	1.1
沖縄	34	0.6
合計	6000	100.0

地域分類

	回答数	%
北海道	255	4.3
東北	416	6.9
関東	2092	34.9
北陸	206	3.4
中部	797	13.3
近畿	1055	17.6
中国	340	5.7
四国	178	3.0
九州・沖縄	661	11.0
合計	6000	100.0

性別

	回答数	%
男性	2910	48.5
女性	3090	51.5
合計	6000	100.0

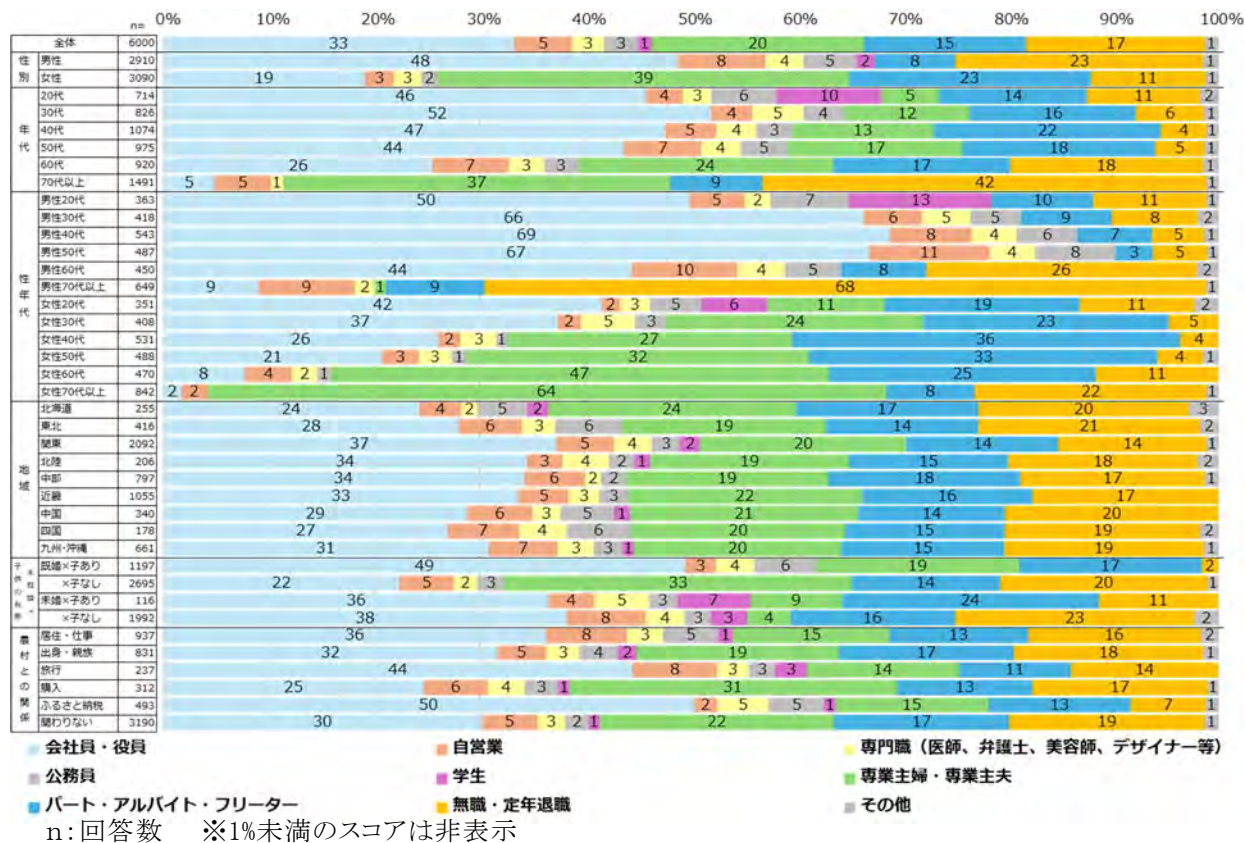
年齢階層

	回答数	%
10代	—	—
20代	714	11.9
30代	826	13.8
40代	1074	17.9
50代	975	16.3
60代	920	15.3
70代	1343	22.4
80代以上	148	2.5
合計	6000	100.0

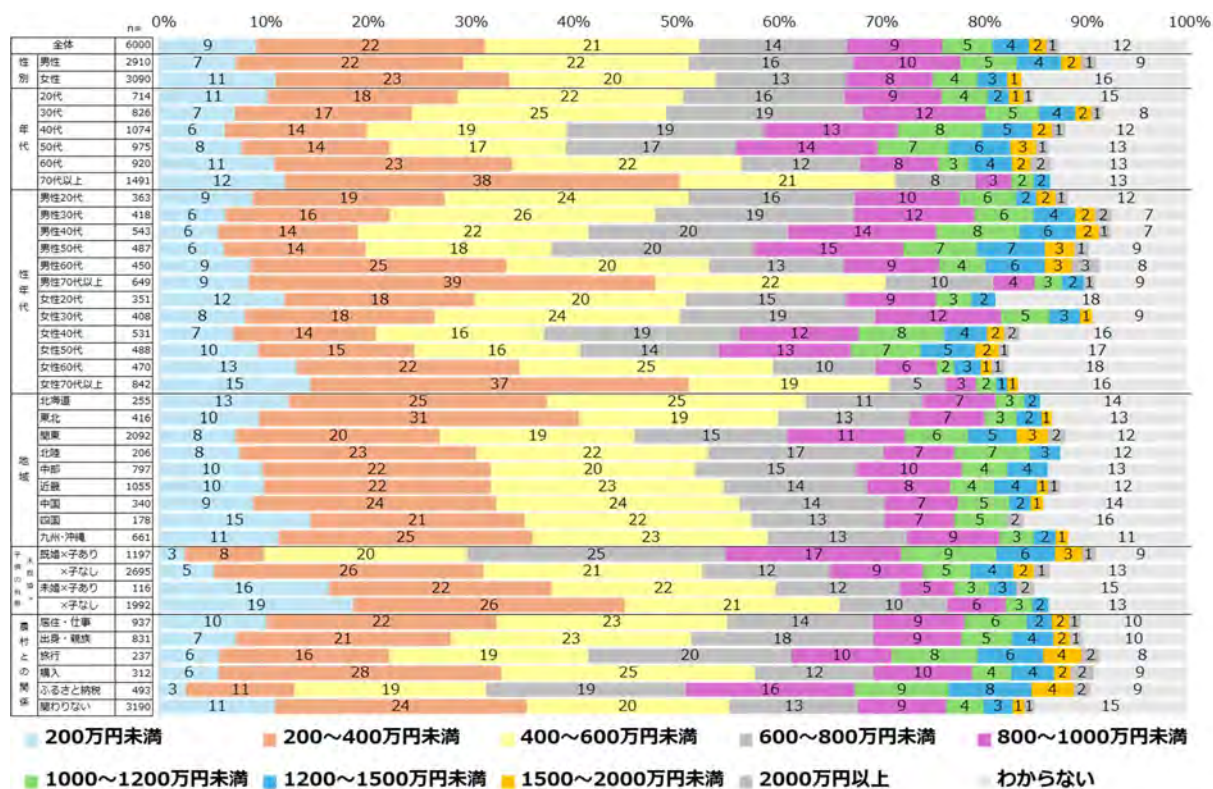
性年代

	回答数	%
男性10代	—	—
男性20代	363	6.1
男性30代	418	7.0
男性40代	543	9.1
男性50代	487	8.1
男性60代	450	7.5
男性70代	571	9.5
男性80代以上	78	1.3
女性10代	—	—
女性20代	351	5.9
女性30代	408	6.8
女性40代	531	8.9
女性50代	488	8.1
女性60代	470	7.8
女性70代	772	12.9
女性80代以上	70	1.2
合計	6000	100.0

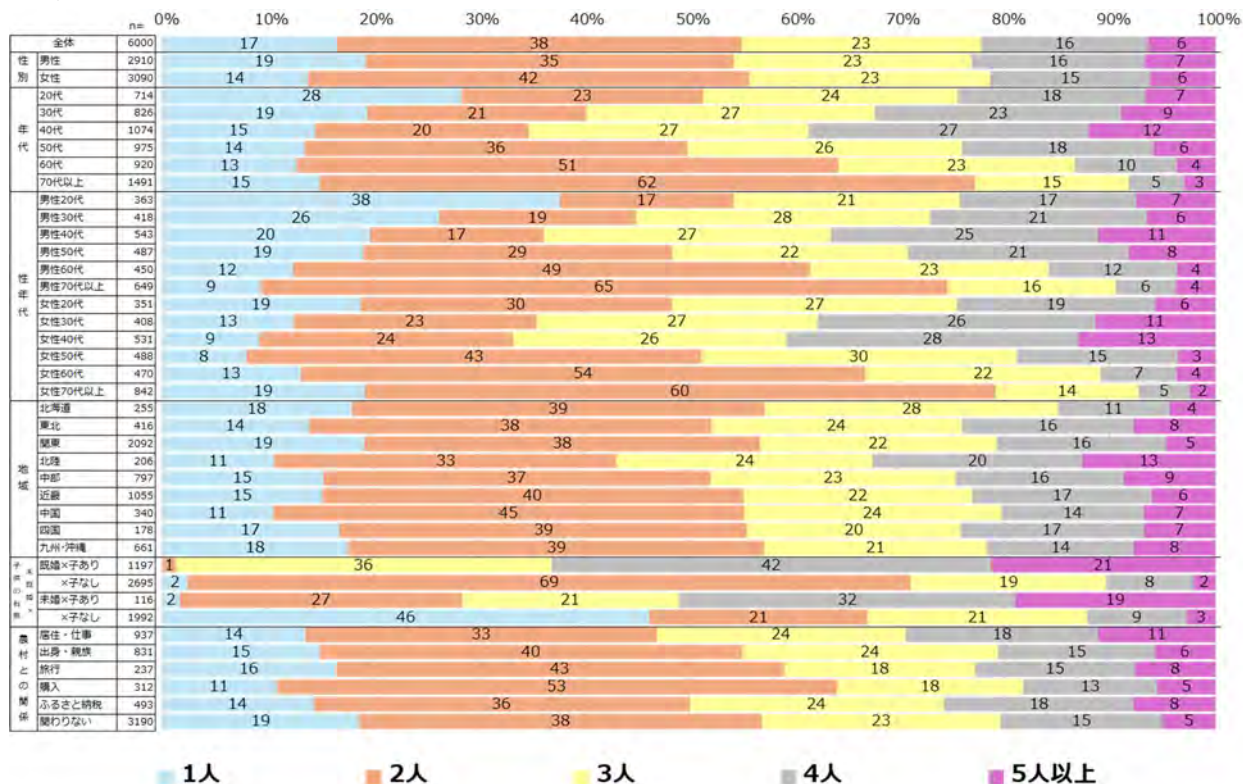
◆職業別



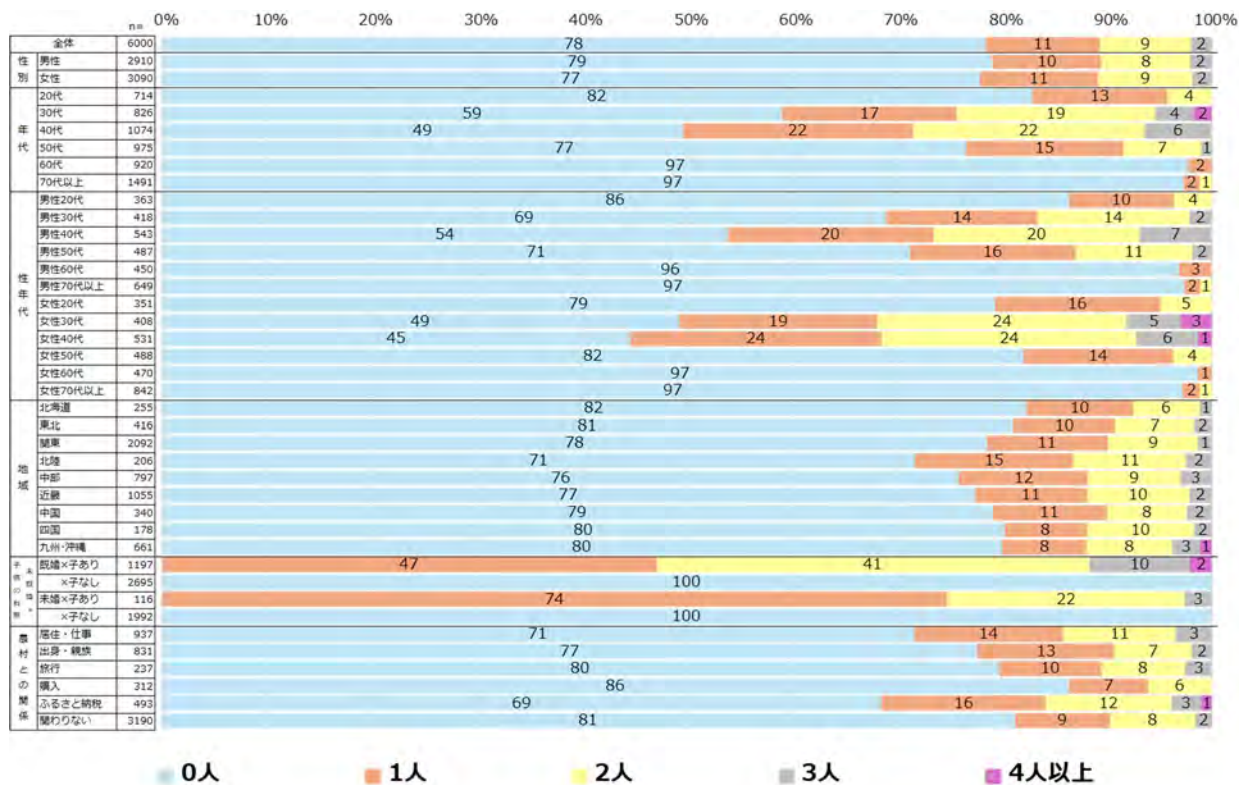
◆世帯年収別



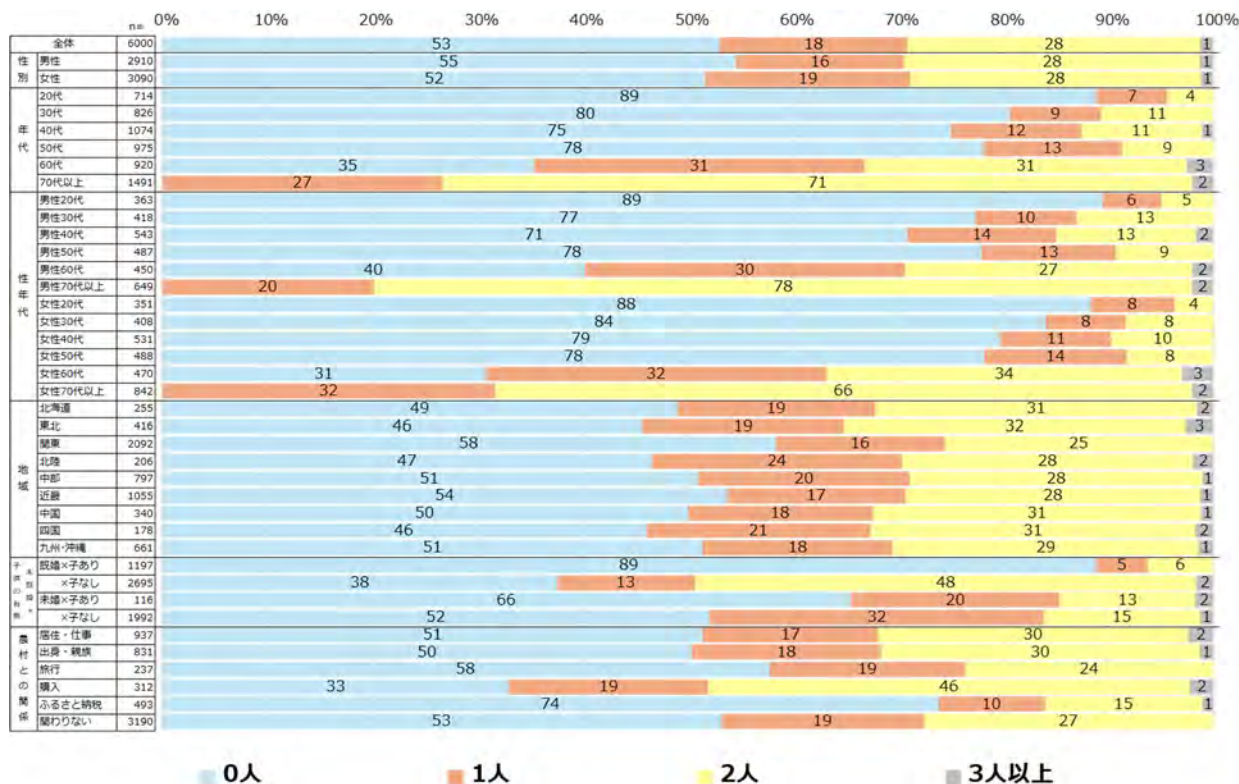
◆家族人数別



◆子供の人数別

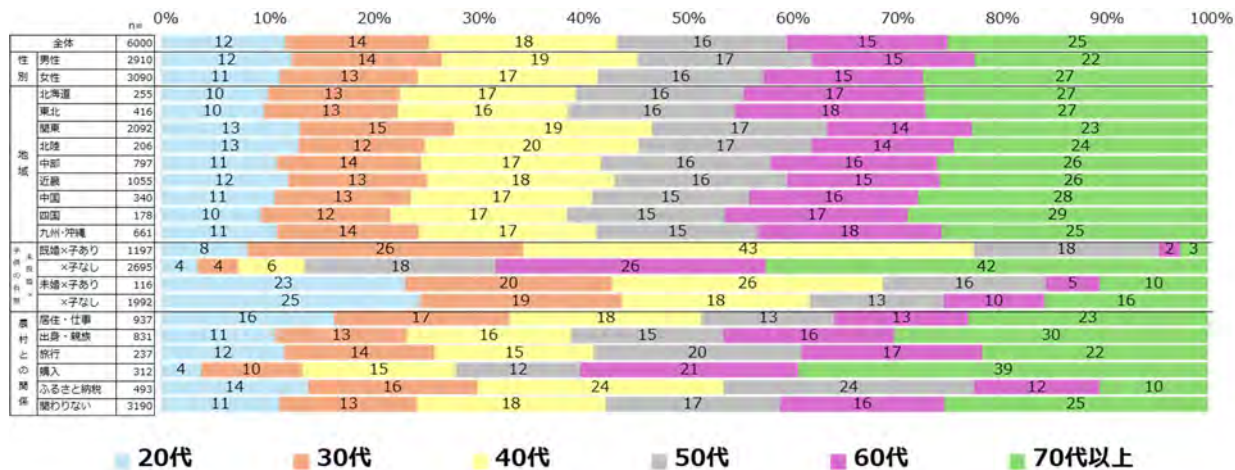


◆高齢者(65歳以上)の人数別



※1%未満のスコアは非表示

◆年代別



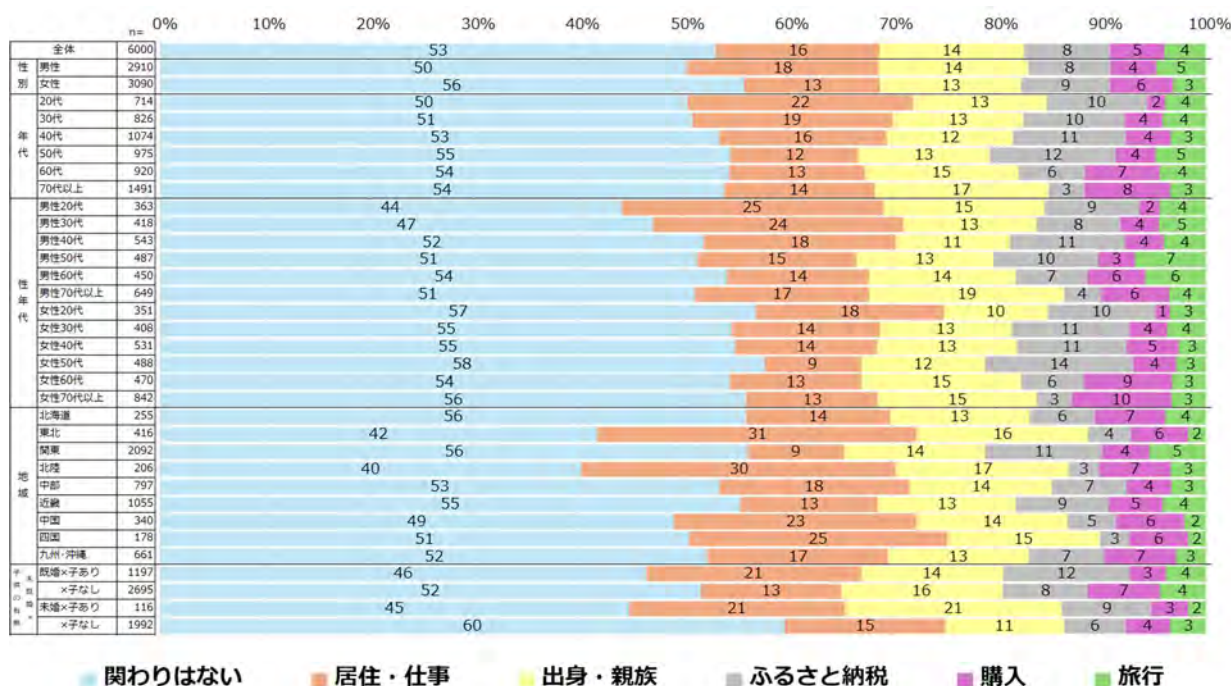
◆農村との関係別

今回、回答者の農村地域との関係性によって、価格転嫁や食料の安定供給についての理解の程度が異なるのではないかと、との仮説から、Q35 現在の農村地域との関わりについて尋ねた。

本調査では、9つの選択肢を表0-1のとおり性格の類似性から6項目にまとめて、それぞれの設問について属性分析を行った。

表 0-1: 農村との関係の分類内訳

分類	選択肢
居住・仕事	農村地域に住んでいる
	農村地域で仕事をしている
	仕事上、農村地域と関わりがある
出身・親族	農村地域に親族が住んでいる
	農村地域の出身である
旅行	旅行などで農村地域を訪れている
購入	農村地域の特産品を購入している（直接、ECなどで）
ふるさと納税	ふるさと納税で農村地域を応援している
関わりはない	農村地域と特段の関わりを持っていない
	その他



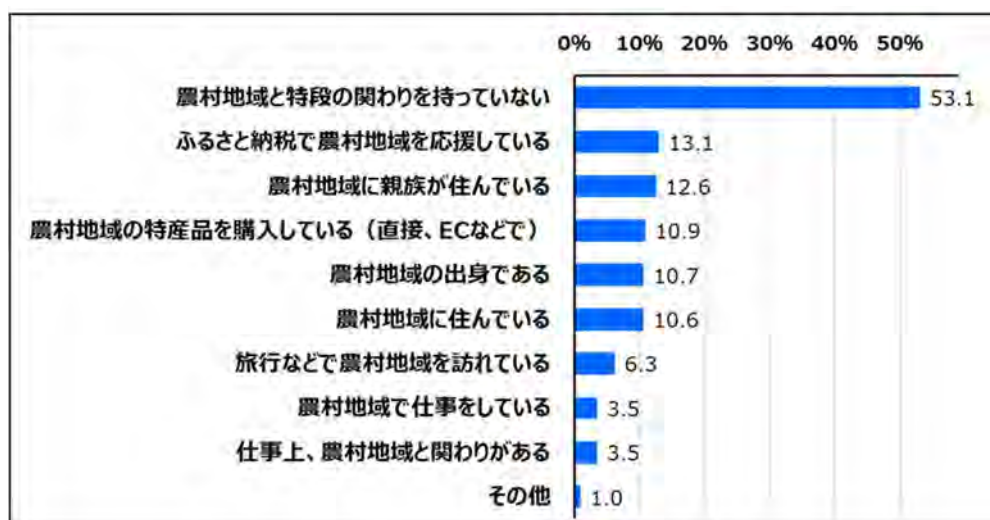
(※) 本設問は複数回答であり、複数回答者については表 0-1 の選択肢の最上位の回答選択肢の分類に整理している。

例: 「農村地域に住んでいる」「農村地域の出身である」「農村地域の特産品を購入している」と回答した人→「居住・仕事」に分類。

補足データ

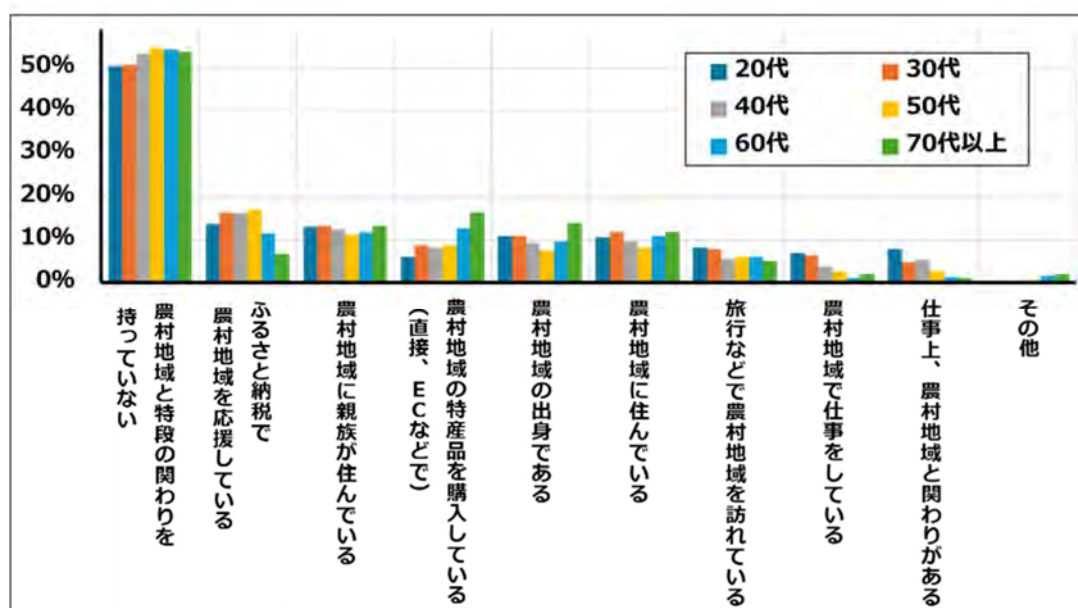
Q35 現在の農村地域との関わりについて、回答を見ると、選択肢の中で最も多かったのは「農村地域と特段の関わりを持っていない」で 53.1%と半数以上が選択していた(図 0-1)。一方、それ以外の選択肢の選択率はいずれも 10%以下で、「仕事をしている」と「仕事上関わりがある」が 3.5%と最も低かった。

図 0-1: 農村地域との関係(複数回答)



選択肢について年代別に見ると、60代と70代以上では「農村地域の特産品を購入している」割合が高く、一方で、「ふるさと納税」や「旅行で訪れている」「農村地域で仕事をしている」「仕事上、農村地域と関わりがある」は若年・中年層の選択率が高い傾向であった(図 0-2)。

図 0-2:【年代別】農村地域との関係(複数回答)



本報告書の仕様

本報告書は、供給リスク増大下にある食肉の生産・流通・消費状況等についての一般消費者の意識を把握することを目的に実施した「消費者意識調査」(以下「本調査」という。)の報告書であるが、同時に実施した「食肉家計消費等動向分析報告書」(以下「食肉家計分析」という。)での分析結果も引用しながら考察を行っている。

- ・「消費者意識調査」のグラフ: 出所の記載なし
- ・「食肉家計分析」のグラフ : 出所の記載あり

また、回答者の意識は実際の購入とリンクしているのか、スーパーの購入データである ID-POS データ(※)や政府等が公表している統計データも参照しながら食肉消費の実態を踏まえた分析を行った。

(※)ID-POS データ: 購入者の性別や年代、購入時間や同時購入なども把握できる売上データ
データ源: マギー株式会社「i-codeMS」。全国の食品スーパー28 企業の約 1,350 店舗から売上規模などに偏りがないように選出された 200 店舗で構築された ID-POS データで、性別や年代、購入時間別の売上金額や同時購入などを分析することができる。

図 0-3: カテゴリー別売上金額と前年同期比

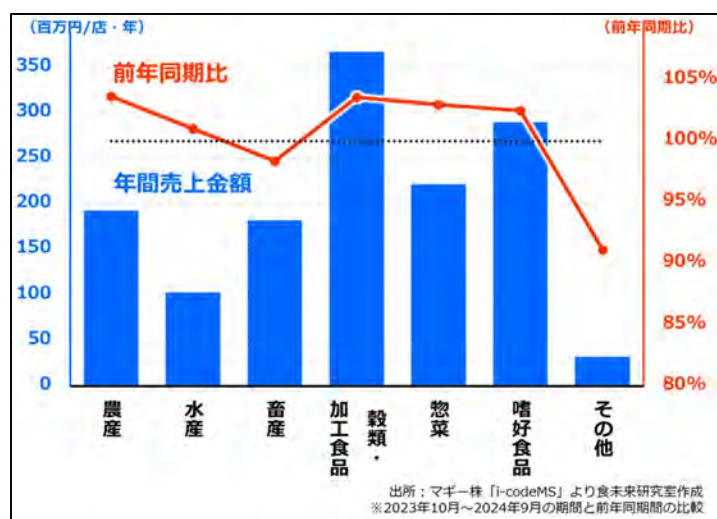
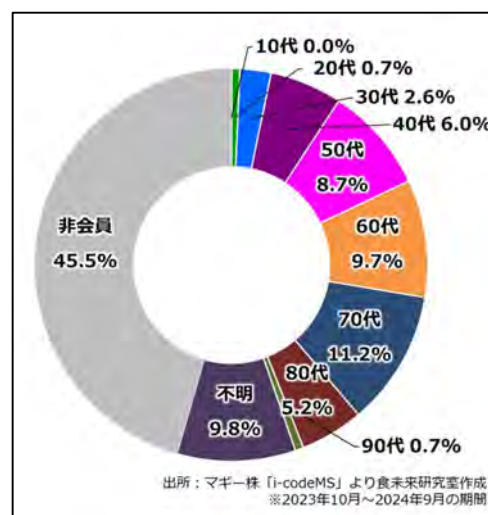


図 0-4: 年代別売上金額構成比



畜産: 生鮮肉、加工肉、鶏卵

嗜好食品: 菓子、飲料、酒類

要約

1. 食品・食肉価格の上昇と購入行動

(1) 値上げ状況と購入行動の変化

1年前と比べて、特に価格が上昇していると感じている食品を尋ねたところ、最も値上がりを感じているのは「米」で 57.7%、以下「野菜」(42.1%)、「パン」(24.2%)と続いた(表 1-1-1)。「価格が上昇していると感じている食品はない」は 2.2%にすぎず、全体の 97.8%が食品の値上がりを感じていた。

値上がりを感じている食品としては 8 位の「牛肉」は、購入量を減らした食品としては 3 位(14.5%)と順位が上がっていた。前年(5 位、11.2%)より 3.3 ポイント上昇しており、より買い控えが進んでいることがわかる。

表 1-1-1: 値上がりの実感と

購入行動について(複数回答)

順位	値上がりを 感じている食品	選択率	順位	購入を 減らした食品	選択率
1	米	57.7%	1	特になし	45.2%
2	野菜	42.1%	2	果物	15.5%
3	パン	24.2%	3	牛肉	14.5%
4	鶏卵	20.3%	4	米	11.8%
5	果物	19.9%	5	パン	10.3%
6	乳製品	17.5%	6	乳製品	10.0%
7	食用油	17.5%	7	野菜	9.2%
8	牛肉	15.2%	8	惣菜・冷凍食品	8.5%
9	豚肉	14.3%	9	魚介類	8.1%
10	魚介類	11.2%	10	食用油	6.4%
11	牛乳	11.1%	11	豚肉	5.4%
12	麺類	9.7%	12	鶏卵	4.7%
13	惣菜・冷凍食品	8.8%	13	麺類	4.4%
14	鶏肉	4.8%	14	牛乳	3.4%
15	特になし	2.2%	15	鶏肉	1.8%
16	その他	0.7%	16	その他	0.3%

(2) 食品と食肉の購入頻度

食品全体の購入頻度は「週に 2~3 回」が 49.9%と最も多く、次いで「週に 4~6 回」(22.9%)となっている(図 1-2-1)。一方、食肉については「週に 1 回」が 46.8%、「週に 2~3 回」が 45.0%となっていた。

前年と比較すると、「食品全体」では、「毎日」や「週に 2~3 回」の選択率がそれぞれ+0.4 ポイント、+0.8 ポイントと増加していた(図 1-2-2)。一方、「食肉」では、「毎日」や「週に 4~6 回」の選択率が減少(▲0.5 ポイント、▲1.4 ポイント)しているのに対し、「週に 1 回」の選択率が+1.8 ポイントと大きく増加していた。

図 1-2-1: 1 週間当たりの購入頻度

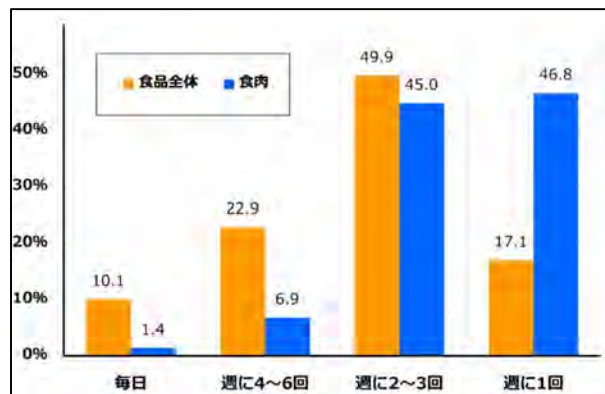
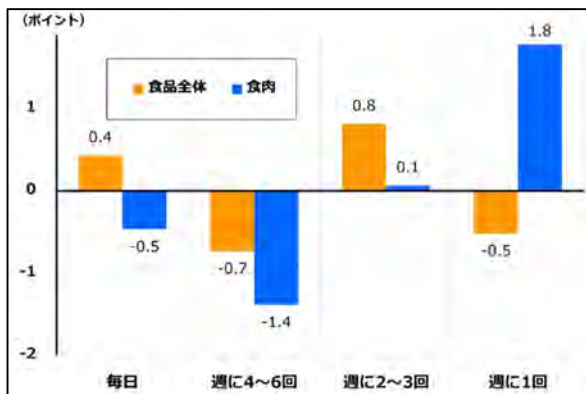


図 1-2-2: 【前年差】 1 週間当たりの購入頻度



(3)食肉の購入状況

最も購入される食肉は豚肉で、選択率は 54.6%と過半数を占めており、次いで鶏肉が 33.2%であった(図 1-3-1)。一方、牛肉は 9.8%と豚肉や鶏肉に比べてかなり低かった

前年と比較すると、豚肉が最も多く購入される食肉であることには変わりはないが今回の 54.6%へと▲0.6 ポイントとわずかに減少した。牛肉とひき肉も減少した一方、鶏肉は 31.7%から 33.2%と+1.5 ポイントと増加した。

図 1-3-1:購入する量が最も多い食肉

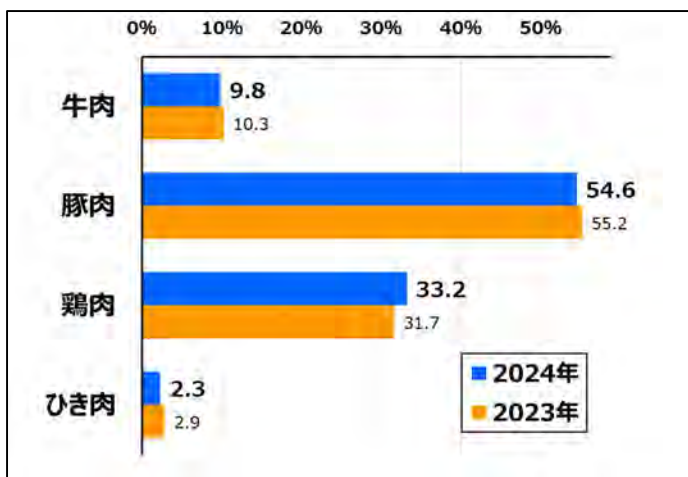
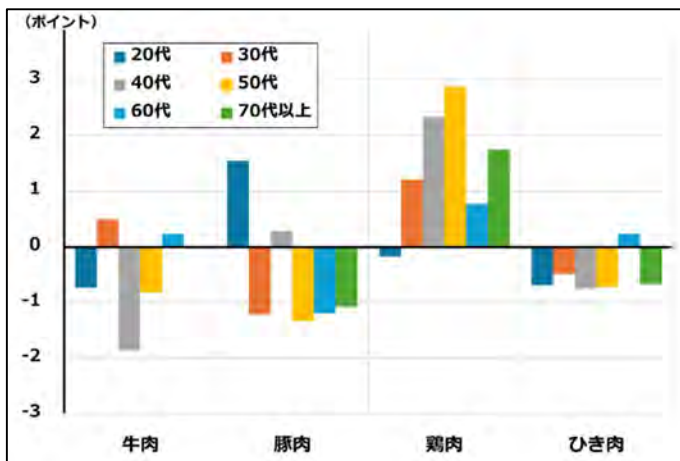


図 1-3-2:【前年差】【年代別】購入する量が最も多い食肉

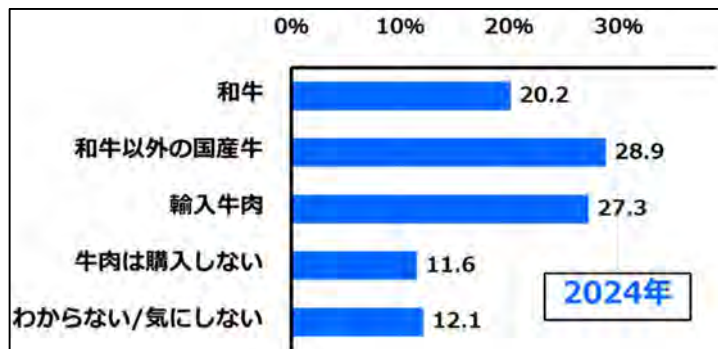
年代別に前年と比較すると、鶏肉は 20 代を除くいずれの年代でも選択率が増加しており、鶏肉の人气がうかがえる(図 1-3-2)。豚肉は普段購入される食肉として最も選択率が高かったが、20 代と 40 代を除いて前年より減少している。牛肉についても選択率が減少している年代が多く、特に 40 代で大きく減少していた。



(4)牛肉の購入状況

牛肉について、普段、購入する量が最も多いものを尋ねた設問では、「和牛以外の国産牛」が 28.9%と最も選ばれており、次いで「輸入牛肉」(27.3%)、「和牛」(20.2%)が続く(図 1-4-1)。全体として、国産牛肉への人气が高い一方で、「わからない/牛肉の種類を気にしない」との回答も 12.1%あり、1 割強の消費者が牛肉の種類にこだわらない姿勢を示している。また、「牛肉は購入しない」との回答は 11.6%あり、一定数の消費者はそもそも牛肉を購入していないことがわかる。

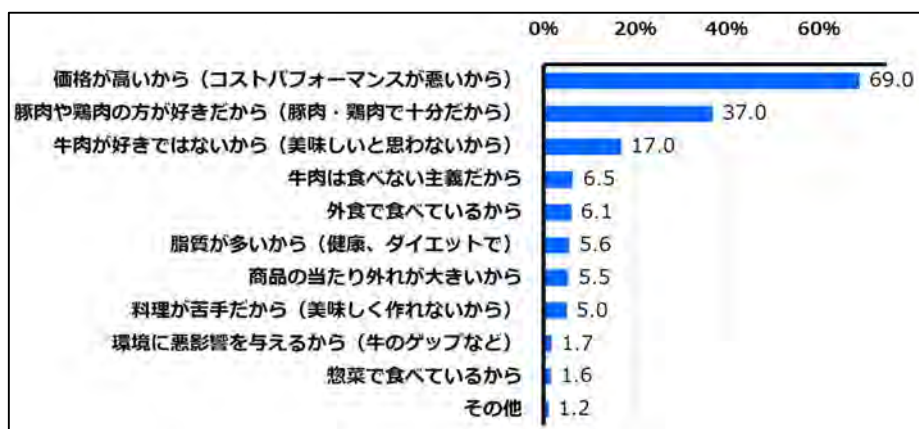
図 1-4-1:購入する量が最も多い牛肉



牛肉を購入しない理由について尋ねた質問では「価格が高いから」が 69.0%と最も多く、コストパフォーマンスが主要な要因となっていた(図 1-4-2)。次いで「豚肉や鶏肉の方が好きだから」が 37.0%、「牛肉が好きではないから」が 17.0%と嗜好上の理由が続き、「牛肉は食べない主義だから」が 6.5%と個人の倫理的な理由も挙げられた。

年代別に見ると、各年代とも「価格が高いから」が理由として最多で、若年層で選択率が高かった。また、個人の嗜好による理由は年代が高いほど選択率が高く、若年層ほど低い傾向であった。

図 1-4-2: 牛肉を購入しない理由(複数回答)



(5) 食肉の喫食場面

それぞれの食肉について、最もよく食べる場面について聞くと、牛肉は 40.7%が外食、47.1%が内食であり、他の食肉に比べ外食での消費割合が高く、日常的に家庭で消費される割合が低かった(図 1-5-1)。

図 1-5-1: それぞれの食肉について最もよく食べる場面

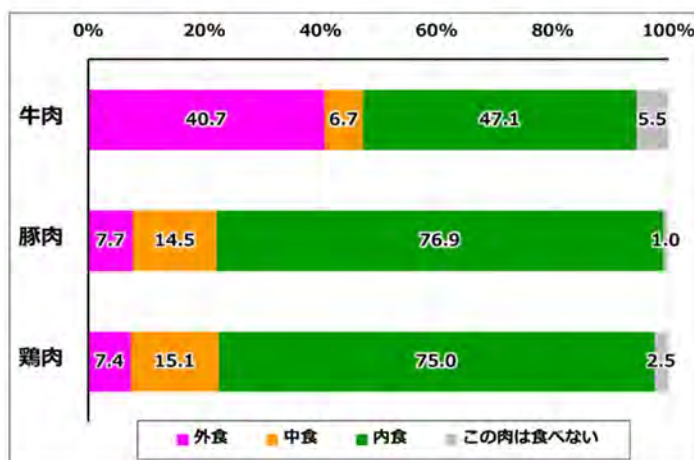
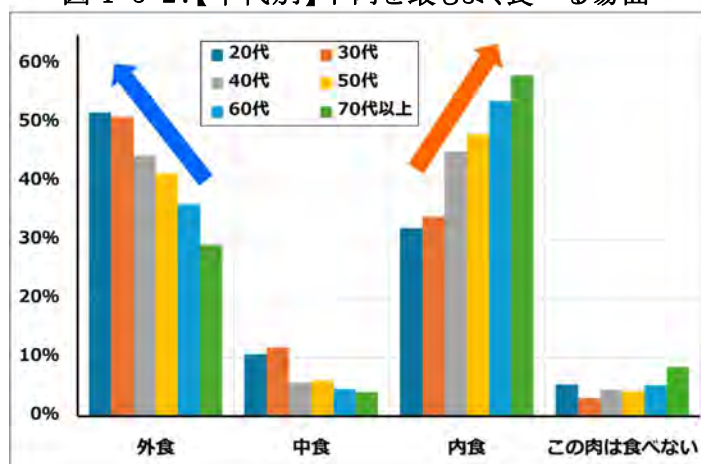


図 1-5-2: 【年代別】牛肉を最もよく食べる場面

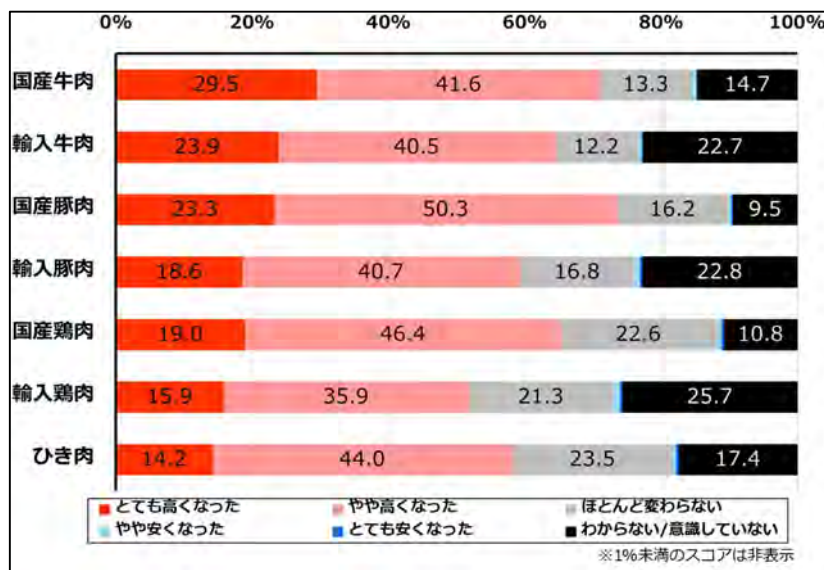
年代別の牛肉の喫食場面に関する選択率を示したグラフでは、若年層ほど外食での消費が多く、対照的に高齢層ほど内食の割合が多いことがわかる(図 1-5-2)。中食も外食と同様で、こうした傾向はいずれの食肉でも見られ、若年層ほど食肉を外食、中食で食べる人が多く、食肉消費の外部化が進んでいることがわかる。



(6)食肉価格と購入頻度の変化

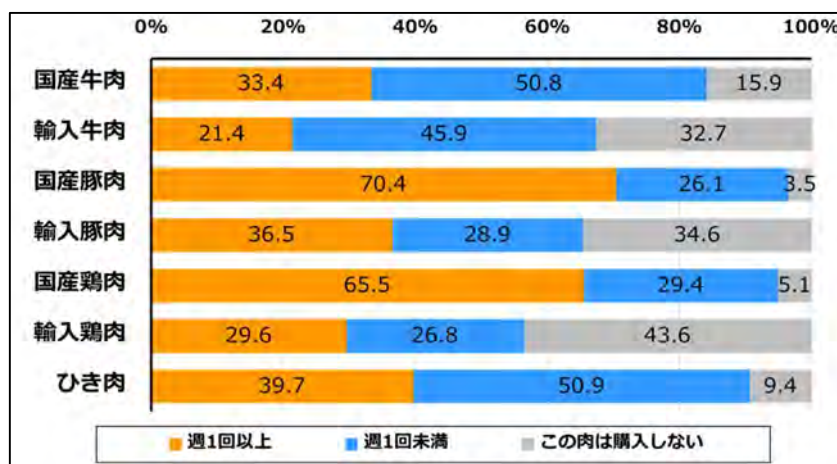
食肉の種類別の1年前と比べた価格状況を尋ねた設問では、いずれの食肉も「やや高くなった」の選択率が約4～5割と最も高かった(図1-6-1)。一方、「とても高くなった」は国産牛肉で29.5%と最も高かった。種類別に見ると牛肉>豚肉>鶏肉>ひき肉の順に、国産・輸入別で見ると国産>輸入の順に高くなったと実感していた。「わからない/意識していない」は国産食肉で1割ほど、輸入食肉で2割強ほど選択されており、輸入食肉は国産食肉ほどには価格が意識されていない傾向が見られた。

図1-6-1: 1年前と比べた価格状況



それぞれの食肉を購入する頻度を聞くと、国産食肉と輸入食肉で傾向が大きく異なった。国産食肉については、豚肉と鶏肉で「1週間に1回程度」の選択率が最も高く、次いで「2～3日に1回程度」で、「1週間に1回以上」は70.4%と65.5%であった(図1-6-2)。一方、牛肉は「1か月に1回未満」が最も多く、「1週間に1回以上」は33.4%であった。輸入食肉については、牛肉、豚肉、鶏肉ともに「この肉は購入しない」が32.7%、34.6%、43.6%と最も多く、それぞれの国産食肉での選択率を大きく上回った。

図1-6-2: 食肉の購入頻度

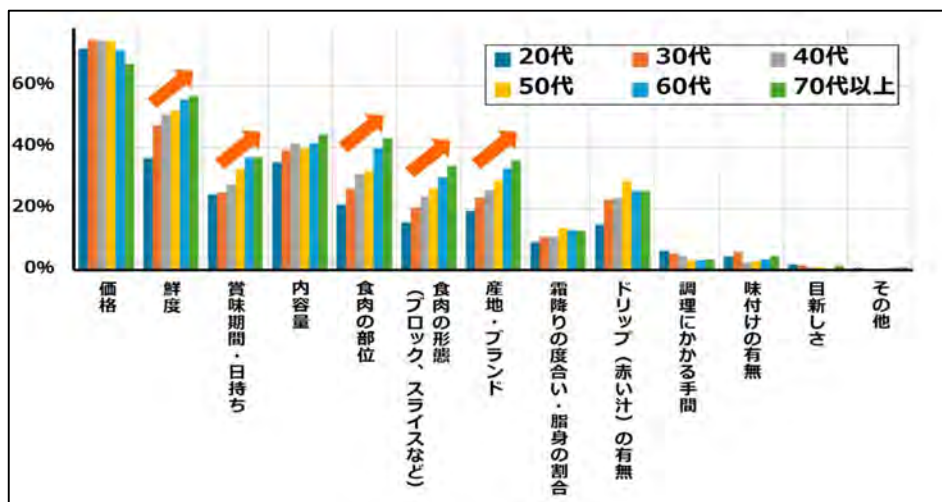


2. 食肉の購入行動と理由

(1) 食肉の購入で重視すること

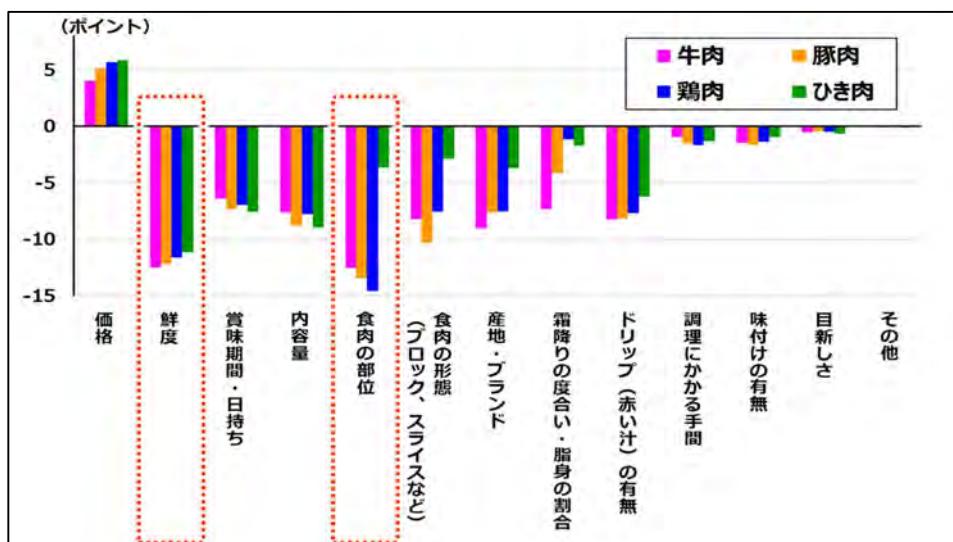
食肉を購入する際に重視する点では、いずれの食肉の種類でも「価格」の選択率が約70%で最も高く、次いで「鮮度」が約50%であった。購入量が最も多い「豚肉」に着目して年代別に見ると、「鮮度」「賞味期限・日持ち」「食肉の部位」「食肉の形態」「産地・ブランド」などは年代による差が大きいことがわかる(図 2-1-1)。前年の結果と同様、若年層は高齢層と比べると価格重視であり、鮮度や部位、産地などはあまり重視していない傾向が見られた。

図 2-1-1:【年代別】豚肉購入時に重視する点(複数回答)



今後さらに食肉の価格が上昇した場合に重視する点でも、選択率の差はあるものの、上記と傾向はほとんど同じであった。価格上昇の際の選択率から現状の選択率を引いた『価格上昇の際に重視されない(妥協される)ポイント』を見ると、前年の結果と同様、価格上昇の際には「価格」がより優先され、それ以外の項目は優先度が落ちてしまう傾向が見られた(図 2-1-2)。特に「鮮度」や「食肉の部位」の優先度の落ち方が大きかった。

図 2-1-2: 現在と価格上昇時に重視する点の差



(2)食肉の国産・輸入への意識

国産食肉又は輸入食肉のいずれかを選ぶ際に意識することでは、いずれの食肉でも「価格」が約70%と最も多く、次いで「品質」が50%弱となっていた(図2-2-1)。牛肉では「価格」と「産地・ブランド」が他の食肉よりやや多い傾向であった。前年と比較すると、いずれの食肉も共通して「価格」と「安全性」を重視するようになっており、「産地・ブランド」や「国産食肉か輸入食肉かは問わない/意識しない」が減少していた(図2-2-2)。

図2-2-1:「国産食肉」「輸入食肉」の
選択要因(複数回答)

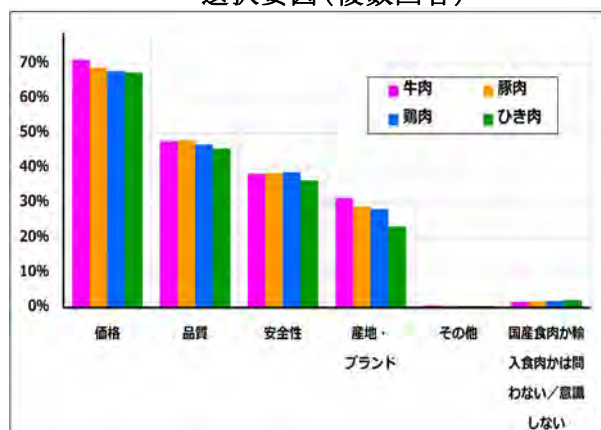
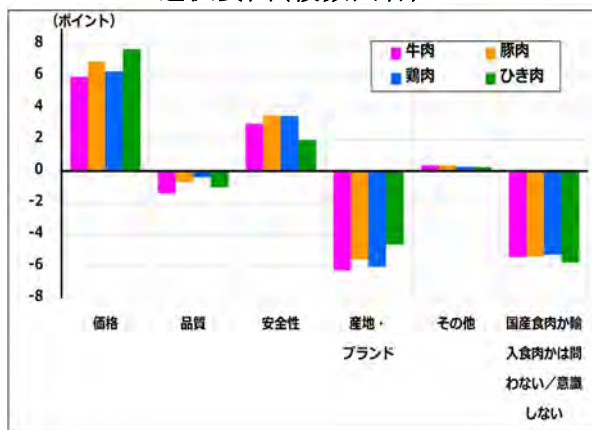
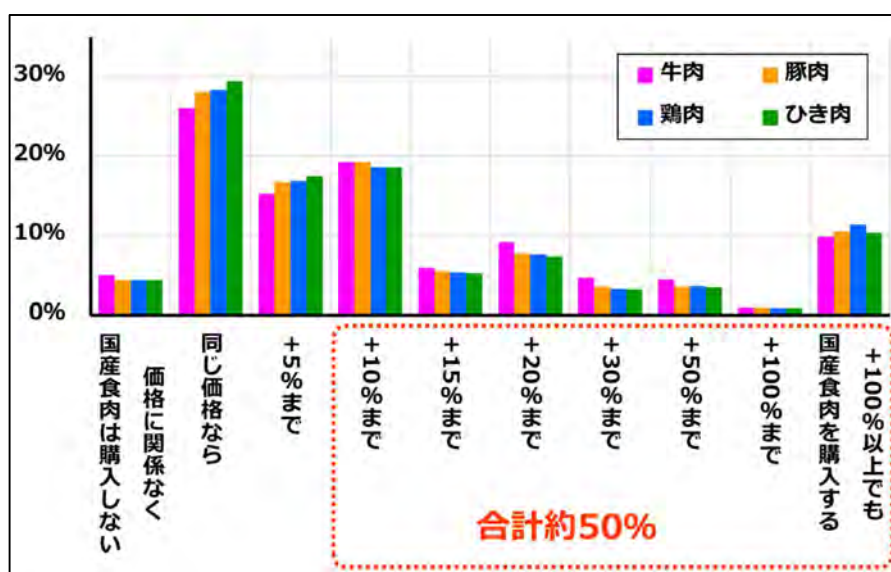


図2-2-2:【前年差】「国産食肉」「輸入食肉」の
選択要因(複数回答)



国産食肉と輸入食肉とを比べて、どれくらいの価格差までであれば国産食肉を購入するかという設問では、いずれの食肉も「同じ価格なら」購入するが25~30%と最も多く選択されており、次いで「+10%まで」が約20%となっていた(図2-2-3)。価格差が大きくなるほど選択率は低下する傾向であったが、「+100%以上でも国産食肉を購入する」も約1割選択されていた。また、約5割の人が10%の価格差を許容していた。

図2-2-3:国産食肉を選ぶ際の価格差許容度



(3)食肉価格の許容度

食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できるかを尋ねた設問では、国産食肉と輸入食肉とで傾向が大きく異なった。国産食肉ではいずれの食肉も「5%まで許容できる」が3割強と最も多く、次いで「値上げは許容できない」が3割弱であった(図 2-3-1)。輸入食肉ではいずれの食肉も「値上げは許容できない」が4割弱と最も多く、次いで「5%まで許容できる」が約3割であった。

図 2-3-1: 値上がりの許容度



消費の多い国産豚肉について年代別の選択率を前年と比較すると、「10%の値上げを許容できる」人は、30代を除いていずれの年代も前年よりも増加しており、特に70代以上は前年よりも6ポイント増えていた(図 2-3-2)。急速な円安の進行等により、様々なモノの値段が上がる状況にあることから、前年よりも許容度が上がったものと思われる。

図 2-3-2: 【前年差】【年代別】豚肉の価格許容度



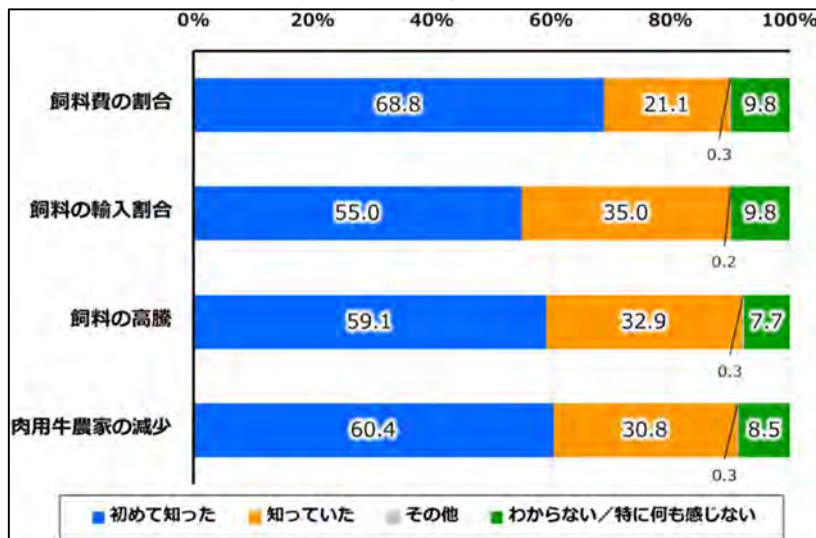
3. 供給リスクへの消費者意識

(1) 畜産業の現状に対する認識

畜産業の現状（生産費に占める飼料費の割合、飼料の輸入割合、近年の飼料価格の高騰、肉用牛農家の減少）についての認知には年代間の格差が見られた。過半数の回答者が畜産業の現状を知らない状況である一方、高齢層ほどその認知度が高く、現状を心配する傾向が強かった（図 3-1-1）。

前年と比較すると、選択肢を新設した影響もあるが、「知っていた」と回答した人の割合はいずれの設問でも減少していた。

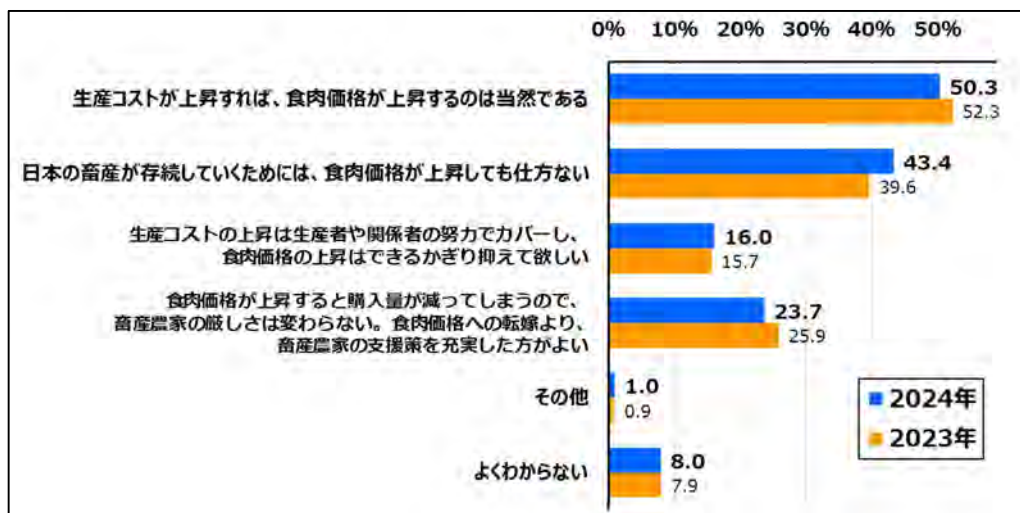
図 3-1-1: 畜産業の現状に対する認知



(2) 食肉価格への転嫁についての認識

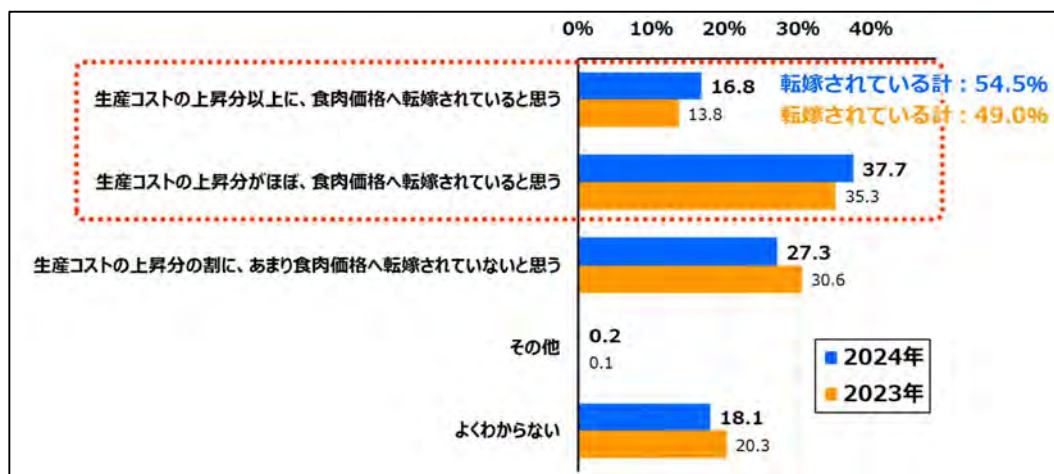
飼料価格の高騰等による食肉の生産コスト上昇の中、生産コスト上昇分を食肉価格（小売価格）に転嫁することについての考えを尋ねた設問では「生産コストが上昇すれば、食肉価格が上昇するのは当然である」が 50.3%（前年比▲2.0 ポイント）で最も多く、消費者は生産コストと食肉価格の関係を理解し、半数以上が価格上昇を当然のことと考えているようであった（図 3-2-1）。次いで「日本の畜産が存続していくためには、食肉価格が上昇しても仕方ない」が 43.4%で、前年と比較すると 3.8 ポイント増加している。様々なモノの価格が上昇する中、食肉価格の上昇は「当然」との積極的な選択から「仕方ない」との消極的な選択に意識が変化していることがうかがえる。

図 3-2-1: 生産コスト上昇分の食肉価格への転嫁について（複数回答）



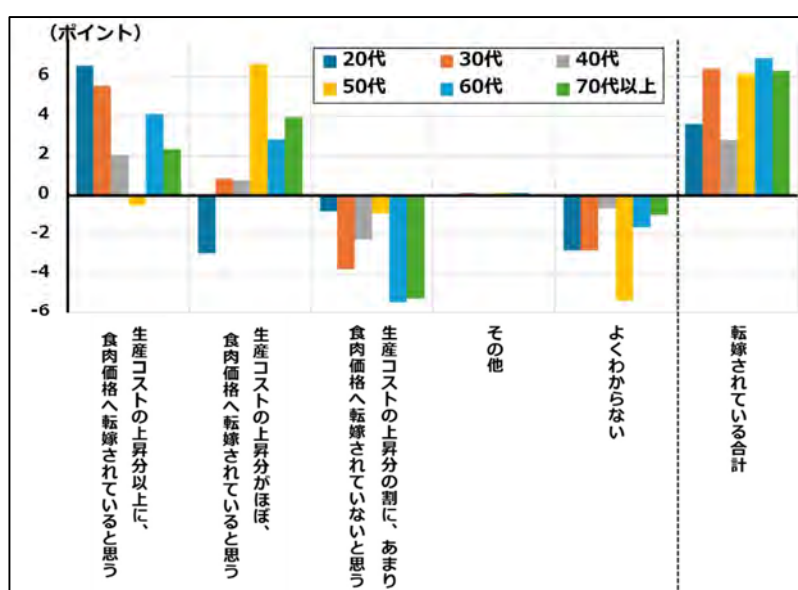
食肉の生産コストの上昇分が食肉価格(小売価格)に転嫁されているかどうかについて尋ねた設問では、「生産コストの上昇分がほぼ、食肉価格へ転嫁されていると思う」が 37.7% (前年比 +2.4 ポイント) と最も多く、次いで「生産コストの上昇分の割に、あまり食肉価格へ転嫁されていないと思う」が 27.3% (同 ▲3.3 ポイント) となっていた(図 3-2-2)。前年と比較すると、「食肉価格に転嫁されている」が増加し、「転嫁されていない」は減少する結果となった。

図 3-2-2: 生産コスト上昇分の食肉価格への転嫁について



年代別に前年との差を示したのが図 3-2-3 であるが、「転嫁されている」の選択率はいずれの年代も増加しており、特に 50 代以上で大きく増加していた。食肉価格の値上げについての許容度についての質問で、高齢層は 10% の値上がりは許容しており、その選択率は前年よりも増加していたことを考えると、「価格の上昇は許容するけれども、生産コストの上昇分はもう価格に転嫁されているのではないか？」という理解であると考えられる。

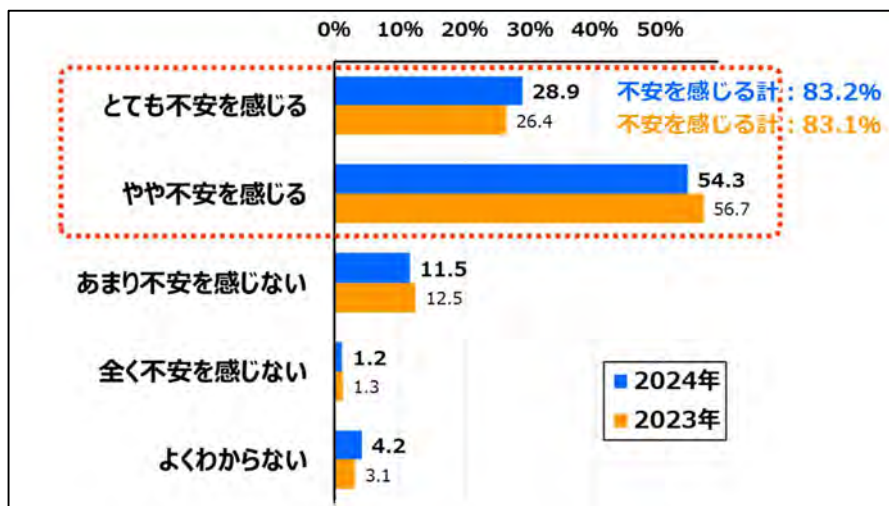
図 3-2-3: 【前年差】【年代別】生産コスト上昇分の食肉価格への転嫁について



(3)今後の食料・食肉の供給についての不安

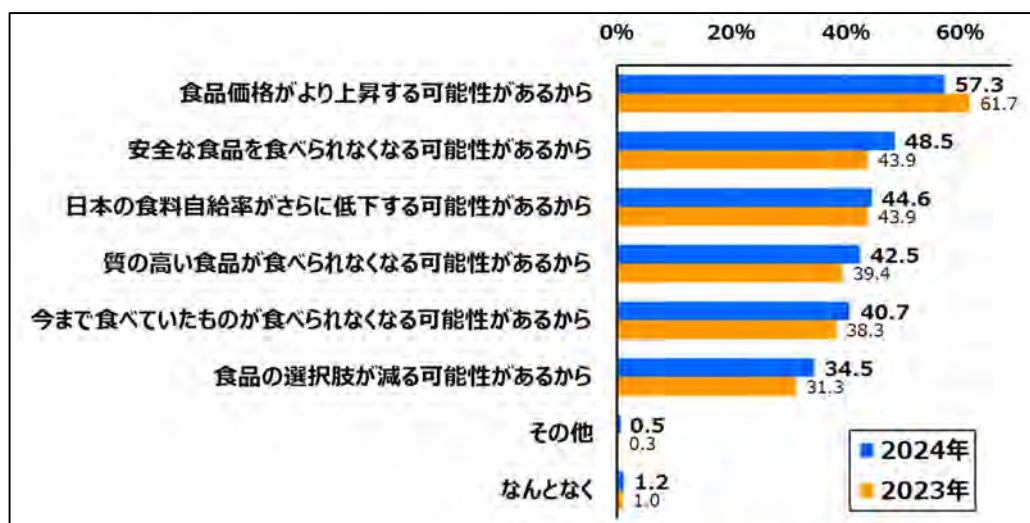
今後の食料・食肉の供給についての不安感を尋ねた設問では、「やや不安を感じる」が 54.3% (前年比 ▲2.4 ポイント)、次いで「とても不安を感じる」が 28.9% (同 +2.5 ポイント) で、合計 83.2% (同 +0.1 ポイント) が不安を感じていた(図 3-3-1)。前年と比較すると、不安を感じている割合には変化はないものの、不安感はやや強まっていた。

図 3-3-1: 今後の食料・食肉の供給についての不安感



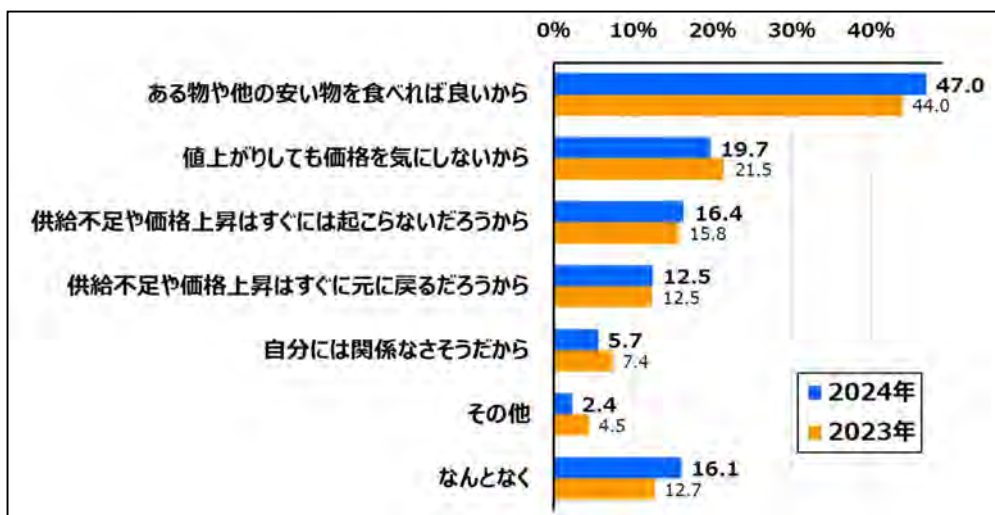
今後の食料・食肉の供給について「不安を感じる」と答えた人について、その理由を尋ねた設問では、「食品価格がより上昇する可能性があるから」が 57.3% (前年比 ▲4.4 ポイント) と最も多く、他の選択肢と比べて 10 ポイントほど高かった(図 3-3-2)。また、前年と比較すると、最も選択率の高かった価格的理由は選択率が減少する一方、それ以外の理由の選択率は増加しており、価格以外の安全性や生活の豊かさに関する不安感が増していた。

図 3-3-2: 今後の食料・食肉の供給についての不安理由(複数回答)



今後の食料・食肉の供給について「不安を感じない」と答えた人について、その理由を聞くと、「ある物や他の安い物を食べれば良いから」が 47.0%（前年比＋3.0 ポイント）と最も多かった（図 3-3-3）。前年と比較すると、「価格を気にしない」や「自分には関係なさそうだから」の選択率が減少していることから、不安を感じない人であっても価格上昇で前年よりも価格を気にするようになったり、食料・食肉の供給について身近な問題として考えるようになっている様子が見えてきた。

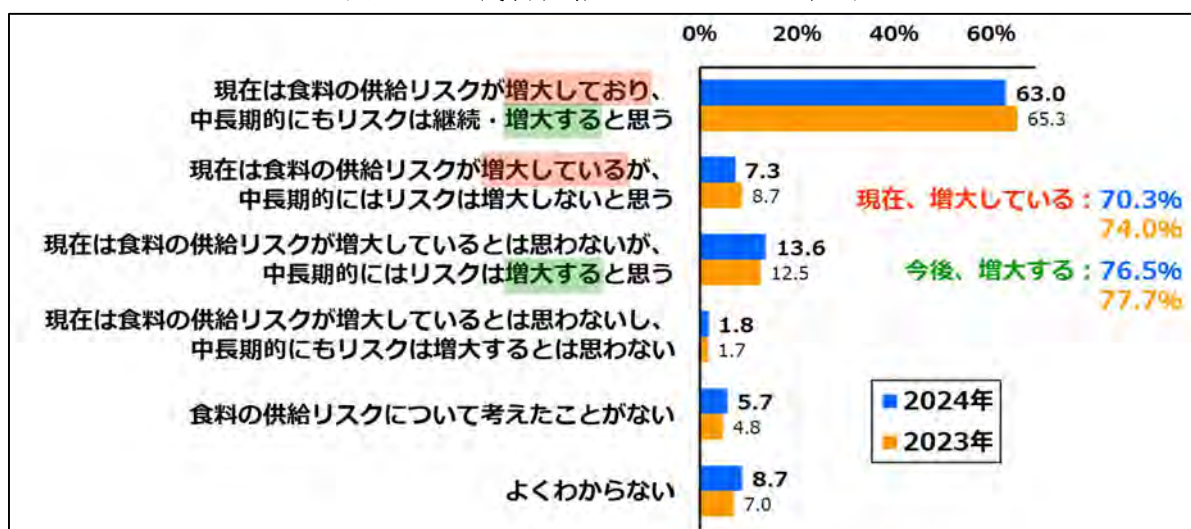
図 3-3-3: 今後の食料・食肉の供給について不安を感じない理由（複数回答）



(4) 食料供給リスクに対する意識

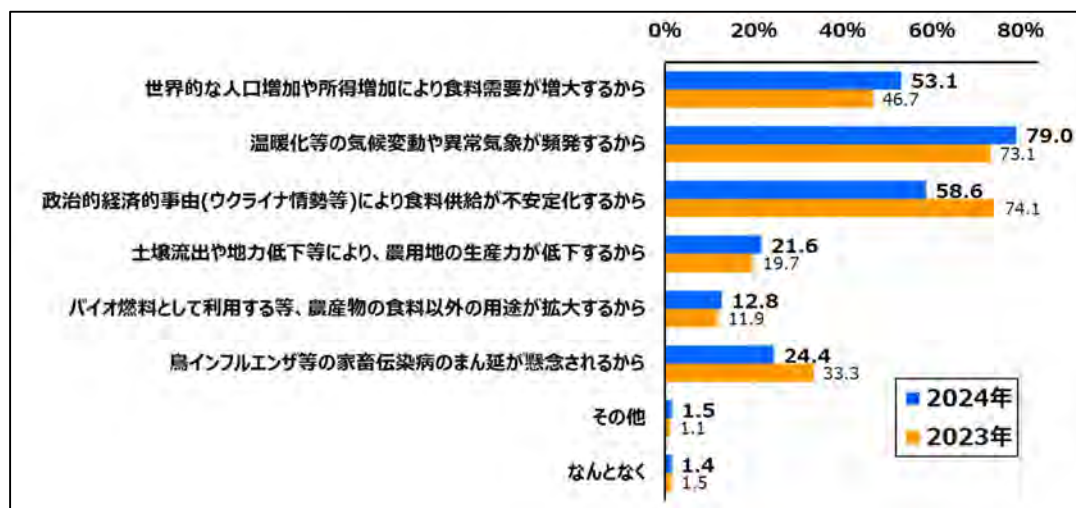
世界的な食料供給リスクについて、現在と今後の認識をたずねた設問では、「現在は食料の供給リスクが増大しており、中長期的にもリスクは継続・増大すると思う」が 63.0%（前年比▲2.3 ポイント）と最も多かった（図 3-4-1）。「現在、増大している」と思うのは 70.3%（同▲3.7 ポイント）、「今後、増大する」と思うのは 76.5%（同▲1.2 ポイント）とであり、前年と比較するとどちらも減少していた。

図 3-4-1: 食料供給リスクについての認識



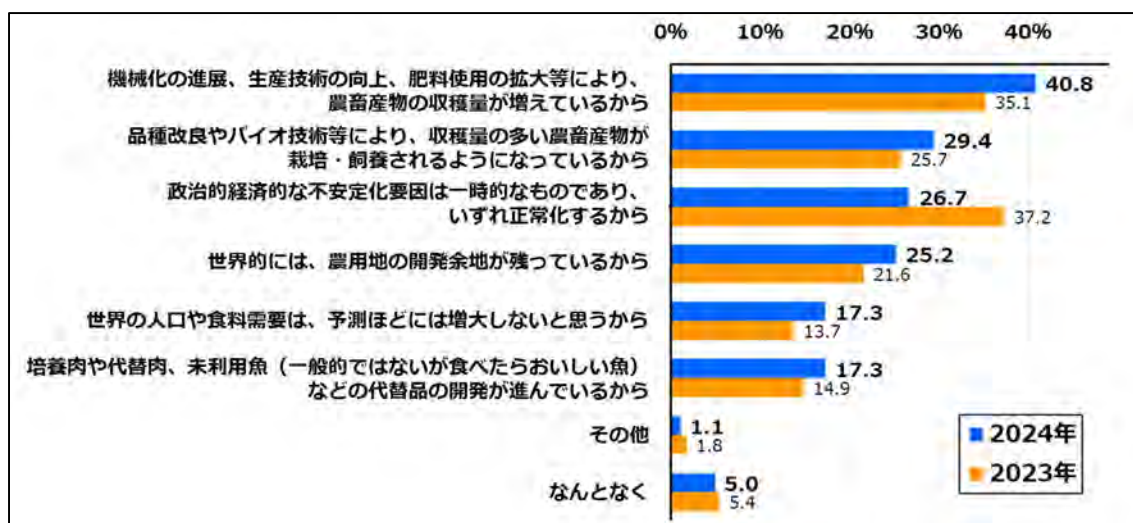
世界的な食料供給リスクについて「今後、増大する」と答えた人にその理由を尋ねると、「温暖化等の気候変動や異常気象が頻発するから」が79.0%（前年比+5.9ポイント）と最も多かった（図3-4-2）。前年と比べて「世界的な食料需要の増大」や「気候変動や異常気象の頻発」の選択率は約+6ポイントであり、これらは日本でも豪雨や洪水の被害が発生したことを意識しての結果と考えられる。

図3-4-2:リスクが今後増大すると考える理由（複数回答）



「今後、増大しない」と答えた人の理由としては、「機械化の進展、生産技術の向上、肥料使用の拡大等により、農畜産物の収穫量が増えているから」が40.8%（前年と比べ▲5.7ポイント）と最も多く、次いで「品種改良やバイオ技術等により、収穫量の多い農畜産物が栽培・飼養されるようになっているから」が29.4%（同+3.7ポイント）であった（図3-4-3）。

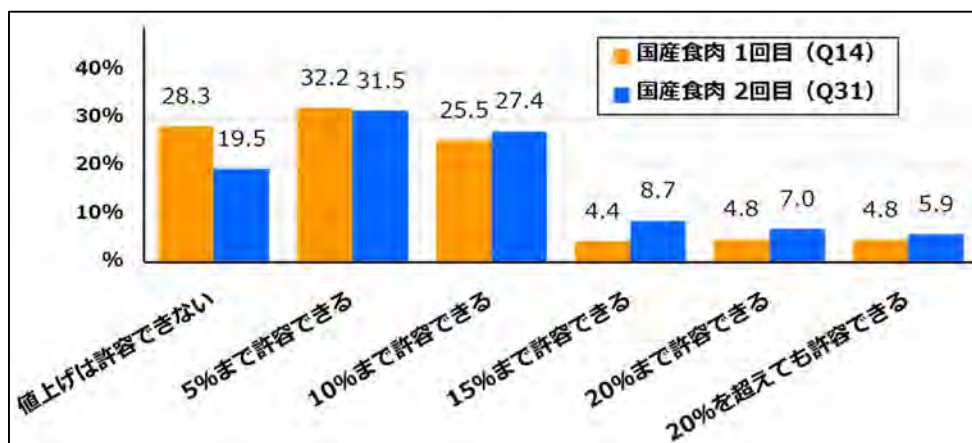
図3-4-3:リスクが今後増大しないと考える理由（複数回答）



(5)現状を知ったことによる価格許容度の変化

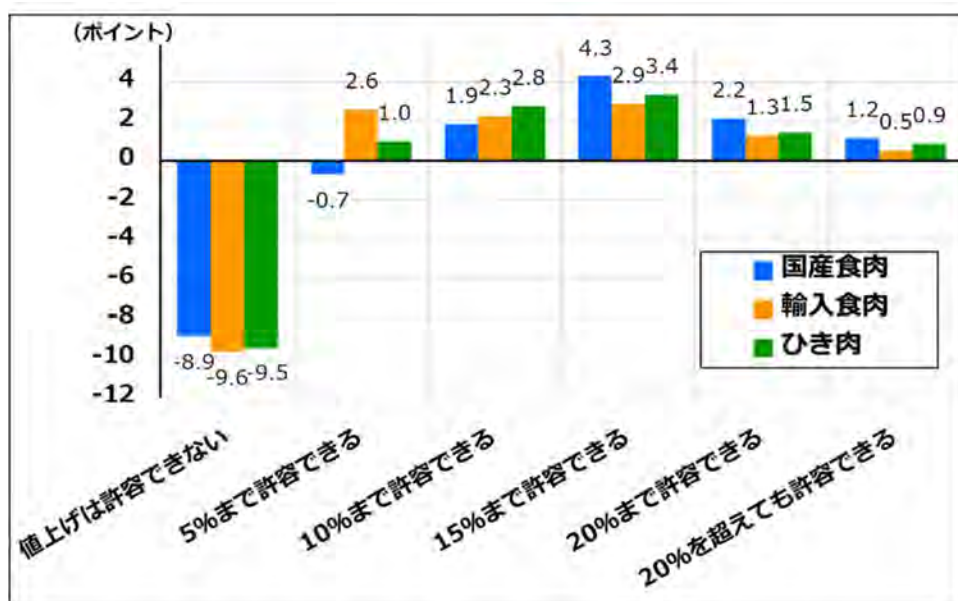
畜産業の現状や食料の供給リスクについての情報を得たことで「食肉価格の値上げについての許容度」がどのように変化するかを確認ため、価格許容度について再度尋ねたところ、国産食肉と輸入食肉とでやや差はあったものの、いずれの食肉も許容度が増加した(図 3-5-1)。

図 3-5-1:【国産食肉】1回目と2回目の価格許容度



国産食肉と輸入食肉、さらにひき肉についての価格許容度の変化をまとめたグラフが図 3-5-2 である。いずれの食肉も「値上げは許容できない」は減少し、「値上げを許容できる」は増加した。輸入食肉よりも国産食肉の方が高い許容度の選択率が増えており、一連の質問によって我が国畜産業の現状や供給リスクを知ったことで国産食肉への理解が増したと思われる。

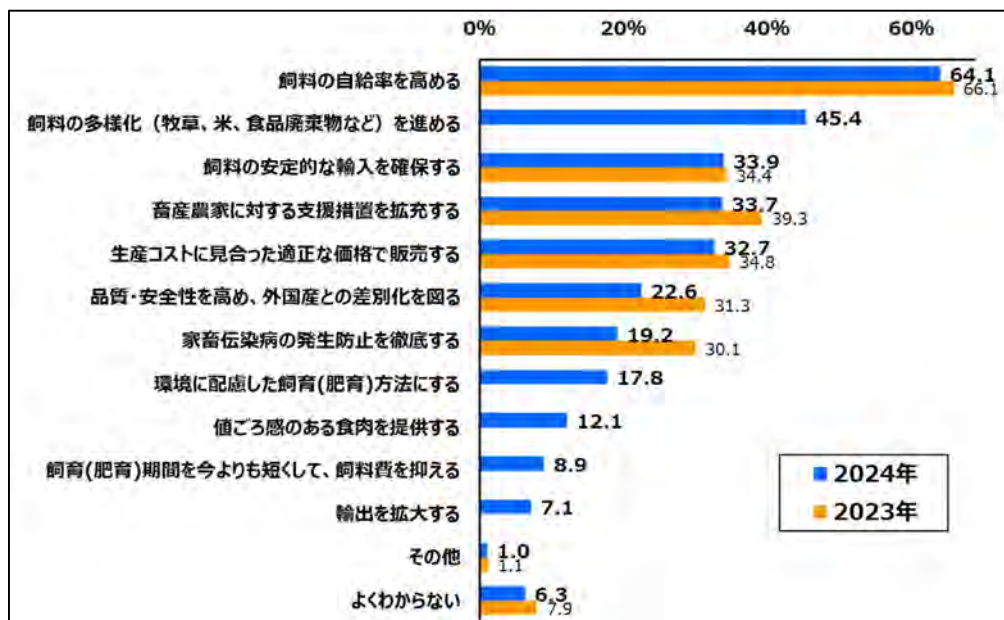
図 3-5-2: 国産食肉・輸入食肉の1回目と2回目の価格許容度の差



(6)今後取り組むべきことは

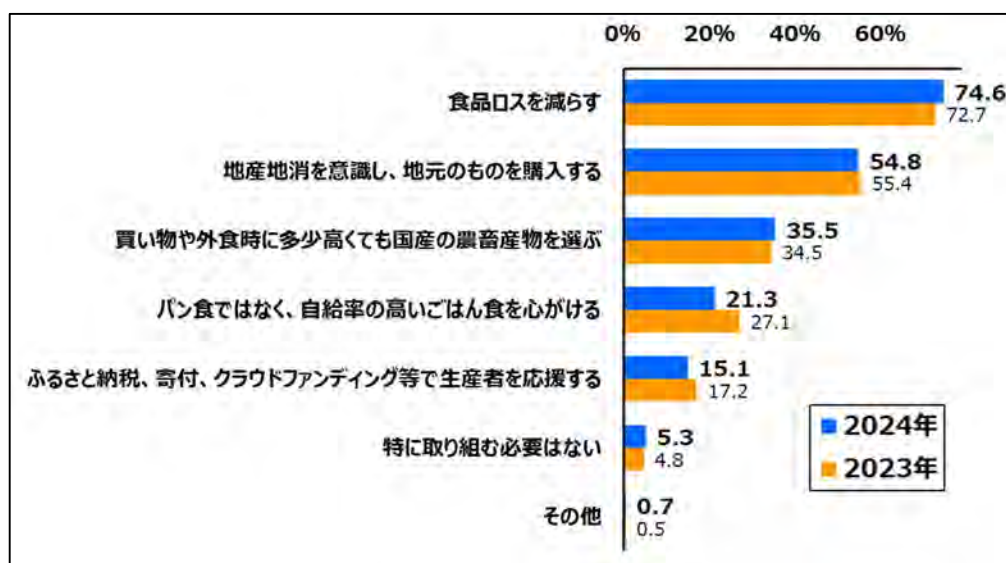
食肉の安定供給のために、日本の畜産業にとって必要であると考えられることを選択してもらった設問では、「飼料の自給率を高める」が 64.1% (前年比▲2.0 ポイント)と最も多く、次いで「飼料の多様化(牧草、米、食品廃棄物など)を進める」が 45.4% (初出)であった(図 3-6-1)。

図 3-6-1:安定供給のために必要であること(複数回答)



食料・食肉の安定供給のために、消費者が取り組むべきと考えることを尋ねた設問では、「食品ロスを減らす」が 74.6% (前年比+1.9 ポイント)と最も多く、次いで「地産地消を意識し、地元のものを購入する」が 54.8% (同▲0.6 ポイント)であった(図 3-6-2)。

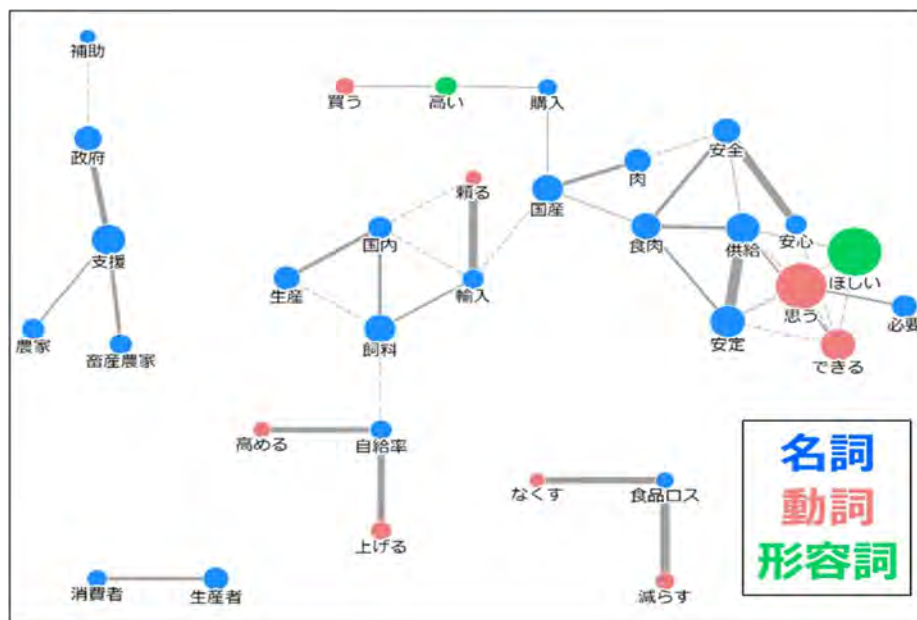
図 3-6-2:安定供給のための取り組むべきと考えること(複数回答)



食肉の安定的な供給について、あなたが期待／希望することを自由記述で回答してもらった。

具体的な回答について、テキストマイニングの手法で関係(共起)するワードを線で結んだグラフが図 3-6-3 である。このグラフを見ると、「政府による畜産農家への支援・補助」「飼料を輸入に頼らない」「国産食肉を安定した価格で購入したい」「安心安全な食肉の生産」「食品ロスを減らす」などが多いことがわかる。

図 3-6-3: 自由回答で出現頻度の多かった単語



本文

1. 食品・食肉価格の上昇と購入行動

(1) 値上げ状況と購入行動の変化

値上げの影響を受けやすい食品と受けづらい食品

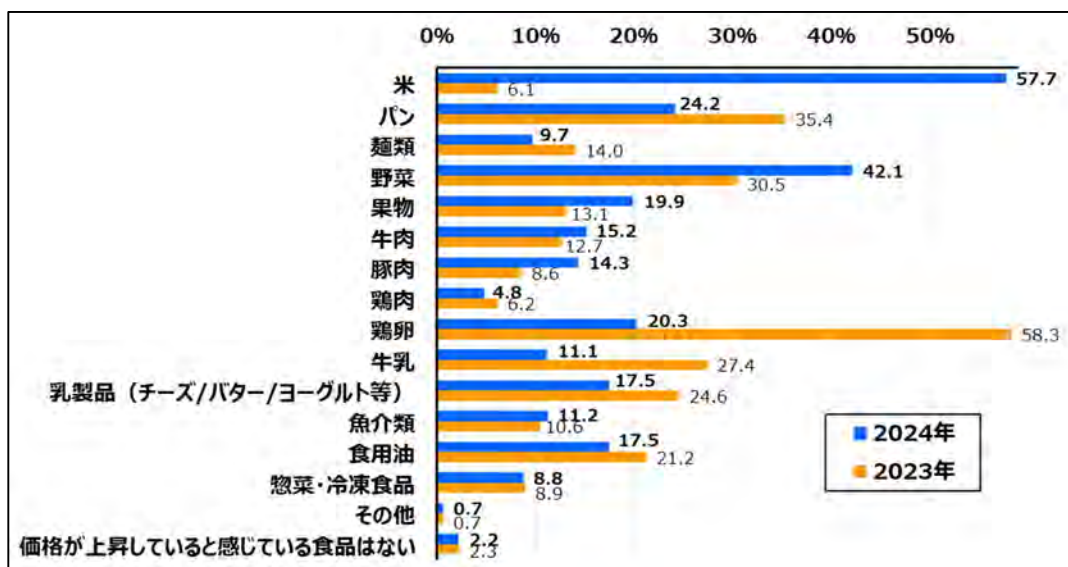
- 97.8%の人が1年前と比べ食品の値上げを感じている。
- 値上げを最も感じる食品は「米」、購入量を減らした食品は「果物」
- 前年調査以上に購入を控えられている「牛肉」

1年前と比べて、Q1 特に価格が上昇していると感じている食品(3つまでの複数回答)を尋ねたところ、最も値上がりを感じているのは「米」で 57.7%、以下「野菜」(42.1%)、「パン」(24.2%)と続いた(図 1-1-1)。「価格が上昇していると感じている食品はない」は 2.2%にすぎず、全体の 97.8%が食品の値上がりを感じていた。

食肉においては「牛肉」が 15.2%で最も多く、次いで「豚肉」14.3%、「鶏肉」4.8%であったが、「豚肉」は+5.7ポイントと大きく上昇していた。

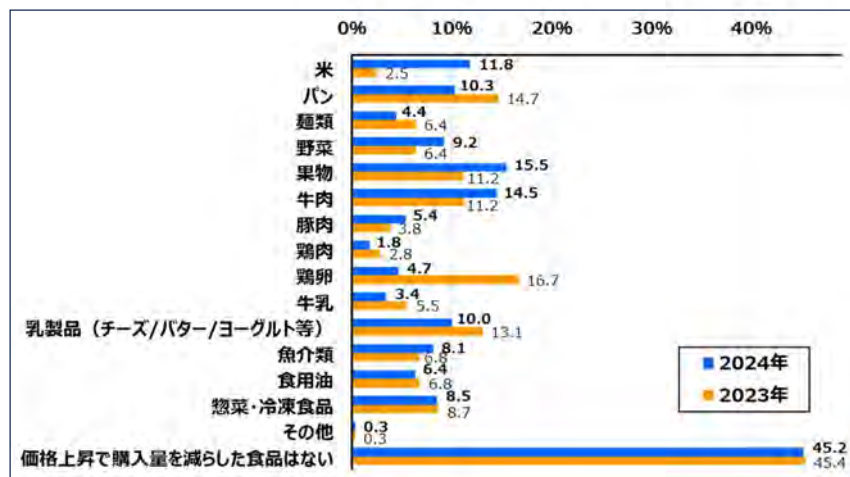
前年と比較すると、値上げを感じている人の割合は前年(97.7%)とほぼ同じであったが、項目別に見ると、前年は1位が「鶏卵」(58.3%)で、「米」(6.1%)は食品の中で最下位であった。前年の調査期間は鳥インフルエンザの影響で鶏卵の高騰があった時期であったが、今回は2024年8月に起こった「令和の米騒動」により米が品薄となり価格が上昇した時期であったことから、このような結果になったと思われる。

図 1-1-1: 価格が上昇していると感じている食品



最近の価格上昇により、Q2 購入量を減らした食品について(3つまでの複数回答)尋ねた設問では「価格上昇で購入量を減らした食品はない」が 45.2%と最も多く、食品価格の上昇を感じつつも実際には購入量を減らしていない人が半数近くいることがわかる(図 1-1-2)。前年も 45.4%とほぼ同じくらいの選択率であった。購入量を減らした食品としては「果物」が 15.5%と最も多く、「牛肉」(14.5%)、「米」(11.8%)と続いた。食肉では「牛肉」が最も多く、「豚肉」は 5.4%、「鶏肉」は 1.8%であった。

図 1-1-2:購入を減らした食品



設問 Q1 と Q2 に対する回答を選択率順にランキングしたのが表 1-1-1 である。「米」や「パン」はどちらの設問でも上位にランクインしており、値上げが実感されて購入が控えられた食品と言える。

表 1-1-1:値上りの実感と購入行動について(複数回答)

順位	値上りを感じている食品	選択率	順位	購入を減らした食品	選択率
1	米	57.7%	1	特になし	45.2%
2	野菜	42.1%	2	果物	15.5%
3	パン	24.2%	3	牛肉	14.5%
4	鶏卵	20.3%	4	米	11.8%
5	果物	19.9%	5	パン	10.3%
6	乳製品	17.5%	6	乳製品	10.0%
7	食用油	17.5%	7	野菜	9.2%
8	牛肉	15.2%	8	惣菜・冷凍食品	8.5%
9	豚肉	14.3%	9	魚介類	8.1%
10	魚介類	11.2%	10	食用油	6.4%
11	牛乳	11.1%	11	豚肉	5.4%
12	麺類	9.7%	12	鶏卵	4.7%
13	惣菜・冷凍食品	8.8%	13	麺類	4.4%
14	鶏肉	4.8%	14	牛乳	3.4%
15	特になし	2.2%	15	鶏肉	1.8%
16	その他	0.7%	16	その他	0.3%

であったが、購入を減らした食品としては 11 位(5.4%)であり、あまり購入を減らされていなかった。しかし、前年(13 位、3.8%)より 1.6 ポイント上昇しており、「豚肉」も前年より買い控えが進んでいる様子がうかがえる。

一方、値上がりを感じている食品としては 8 位の「牛肉」は、購入量を減らした食品としては 3 位(14.5%)と順位が上がっていた。前年(5 位、11.2%)より 3.3 ポイント上昇しており、より買い控えが進んでいることがわかる。後述するが、牛肉を買わない人にその理由を聞いた際の回答(Q5)では「コストパフォーマンスが悪いから」が最も多く、牛肉は、価格が上がったこともあるが、そもそも単価が高いことや他の食肉とのコストパフォーマンスの比較から、節約のために購入が控えられていると考えられる。

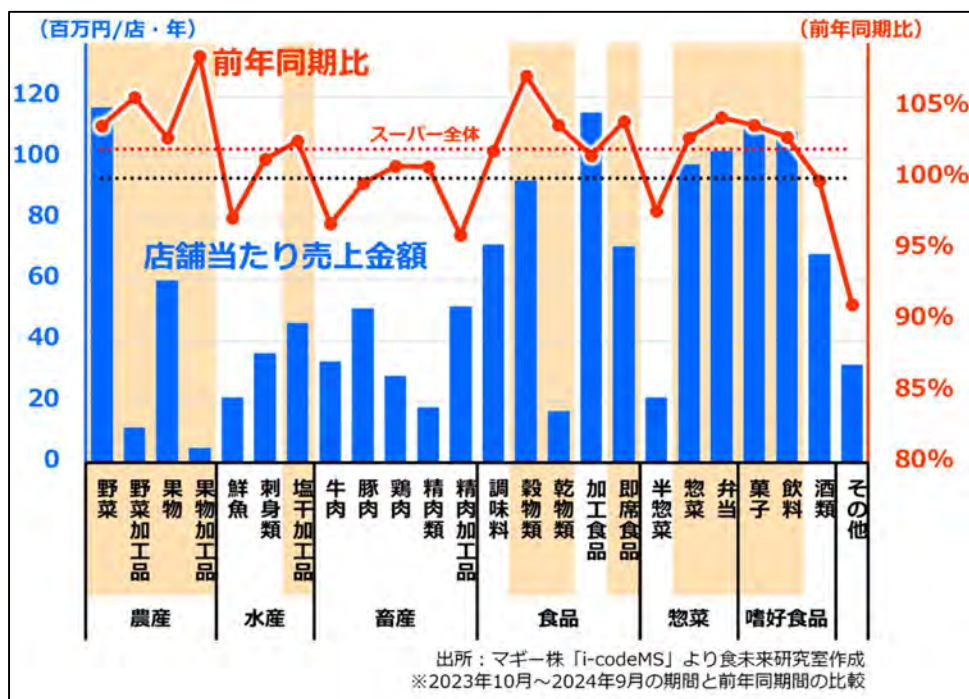
「豚肉」は、値上がりを感じた食品としては 9 位と「牛肉」と同じくらいの順位

補足データ

消費者が値上がりを感じた食品や購入を控えた食品を確認したが、実際の売上はどうなっているのか？ID-POS データでスーパー1店舗当たりの食品カテゴリー別売上金額の前年比を見たのが図 1-1-3 である。

スーパーの食品全体の売上金額前年比が 102.1%の中、全体平均を上回っているのは惣菜や菓子、飲料などの嗜好品、値上がりした米を含む穀類、利便性の高いカット野菜を含む野菜加工品や即席食品などとなっている。一方、畜産や水産はカテゴリーによってはスーパーの全体平均や前年を下回っている状況である。今回の調査結果では肉類のうち豚肉や鶏肉は比較的買い控えられていなかったが、実際の売上を見ると厳しい状況であることがうかがえる。

図 1-1-3:スーパーのカテゴリー別売上金額と前年比



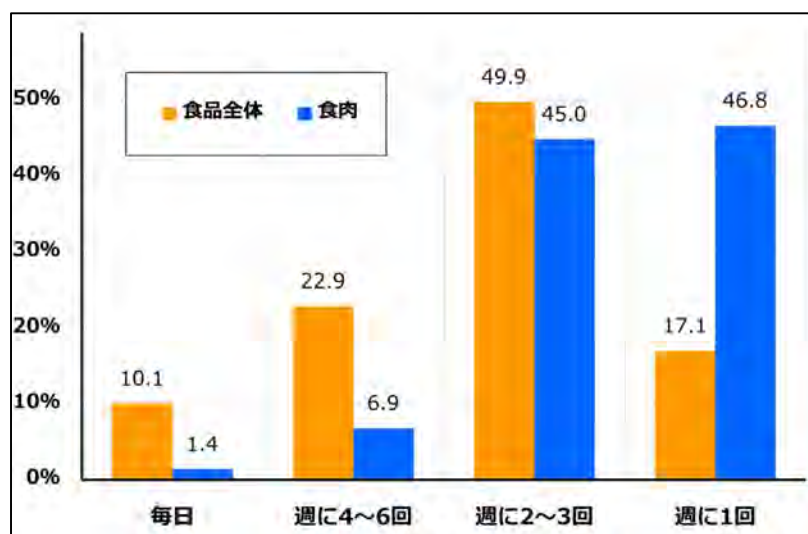
- (※) 精肉類: ひき肉(牛豚肉、牛肉、豚肉など)、内臓肉、馬肉、羊肉など
精肉加工品: 加工肉、味付肉、鶏卵など

(2) 食品と食肉の購入頻度

食肉の購入頻度は週 1～3 回で約 9 割

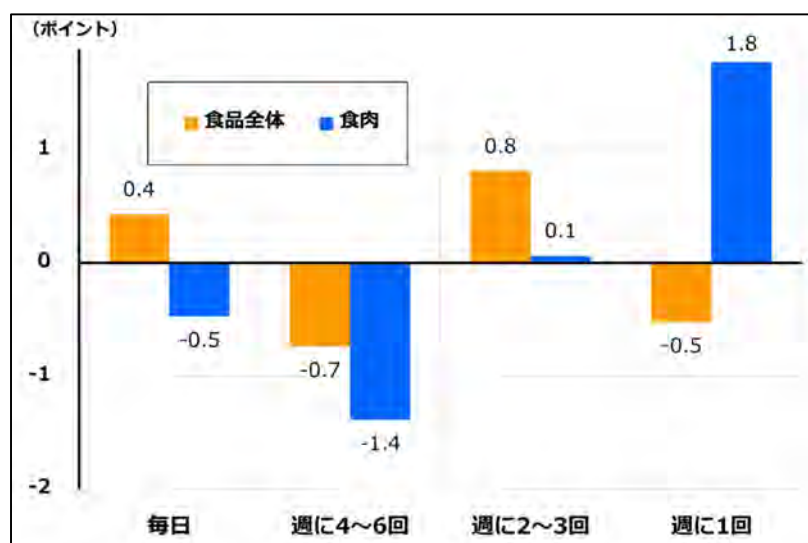
- 食品全体の買い物は「週に 2～3 回」が最多で 49.9%
- 食肉の買い物は「週に 1 回」が最多の 46.8%、「週に 2～3 回」も 45.0%
- 食肉の買い物頻度は「週に 1 回」が前年調査より増加

図 1-2-1: 1 週間当たりの購入頻度



食肉を週に 1 回以上購入する消費者に対して、SQ1「食品全体」と SQ2「食肉」の買い物の回数を調査した(図 1-2-1)。食品全体の購入頻度は「週に 2～3 回」が 49.9%と最も多く、次いで「週に 4～6 回」(22.9%)となっている。一方、食肉については「週に 1 回」が 46.8%、「週に 2～3 回」が 45.0%となっていた。

図 1-2-2:【前年差】 1 週間当たりの購入頻度

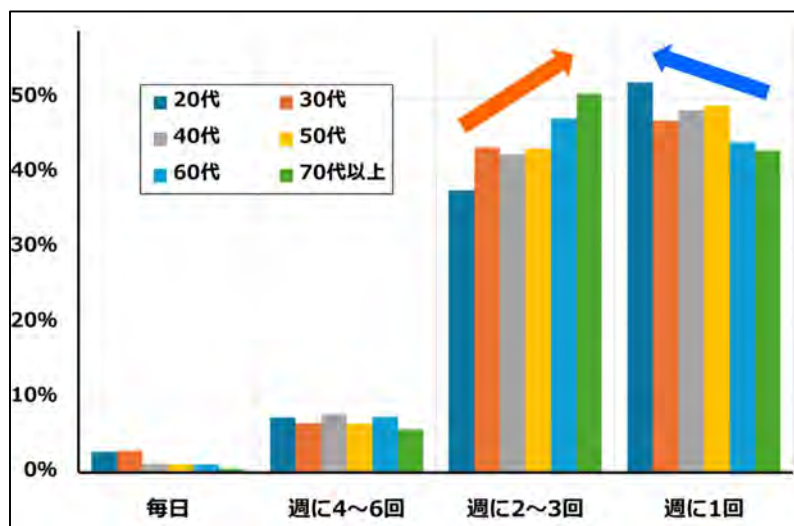


前年と比較すると、「食品全体」では、「毎日」や「週に 2～3 回」の選択率がそれぞれ+0.4 ポイント、+0.8 ポイントと増加しており、「週に 4～6 回」や「週に 1 回」の選択率は減少(▲0.7 ポイント、▲0.5 ポイント)していた(図 1-2-2)。一方、「食肉」では、「毎日」や「週に 4～6 回」の選択率が減少(▲0.5 ポイント、▲1.4 ポイント)しているのに対し、「週に 1 回」の選択

率が+1.8 ポイントと大きく増加していた。「食肉」は「食品全体」以上に高頻度での購入が減り、低頻度での購入が増えていた。

年代別に食肉購入頻度の選択率を見たものが図 1-2-3 である。年代別の傾向として、「週に 2-3 回」は高齢層ほど、「週に 1 回」は若年層ほど選択率が高くなっており、この傾向は前年と変わらなかった。

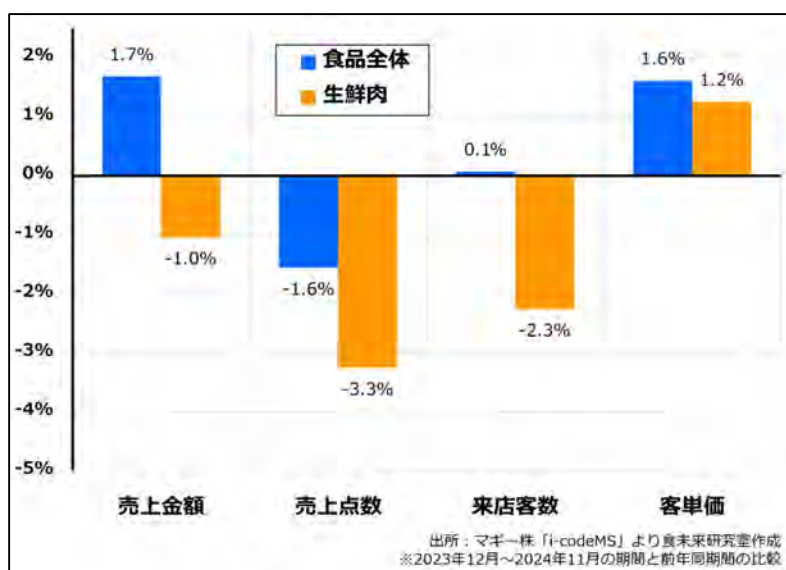
図 1-2-3:【年代別】食肉の購入頻度



補足データ

実際の ID-POS データで来店客数の変化を見てみた。図 1-2-4 はスーパーの食品全体(何かしらの食品を買った者)と生鮮肉の購入者の売上金額、売上点数、来店客数、客単価の前年比を見たグラフである。来店客数は食品全体ではほぼ前年と同じくらいであるのに対し、生鮮肉に限ると前年と比べ▲2.3%と減少していた。

図 1-2-4: 食品全体と生鮮肉の売上金額、点数、来店客数、客単価の前年比



(3) 食肉の購入状況

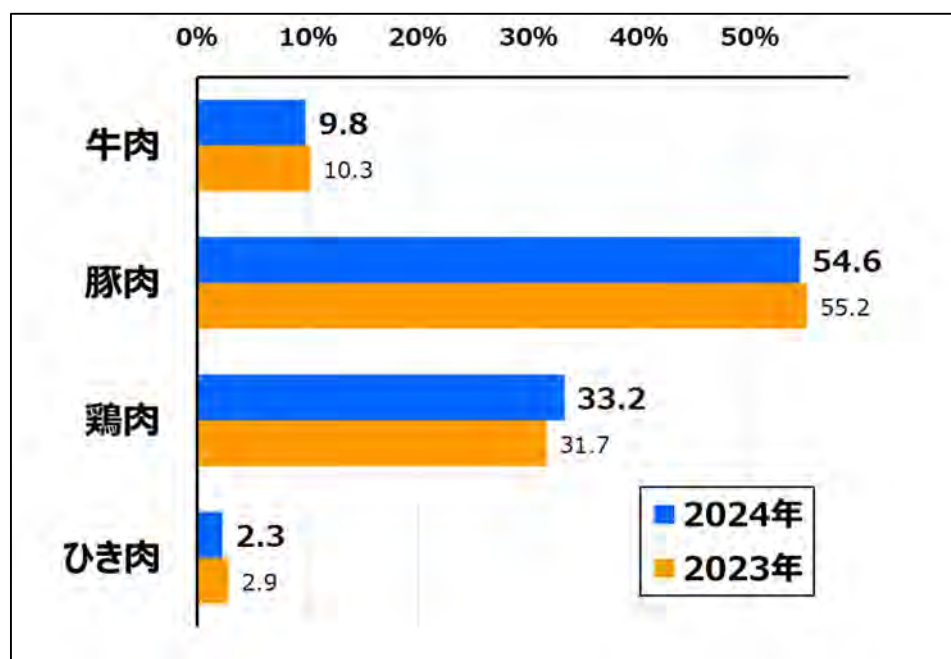
購入量が最も多いのは豚肉

- 購入量が最も多い食肉は、豚肉⇒鶏肉⇒牛肉⇒ひき肉
- 牛肉・豚肉の購入量は減少し、鶏肉が増加
- 鶏肉はほとんどの年代で増加したが、地域によっては減少

図 1-3-1 は Q3 普段、購入する量が最も多い食肉を表したグラフである。最も購入される食肉は豚肉で、選択率は 54.6%と過半数を占めており、次いで鶏肉が 33.2%であった。一方、牛肉は 9.8%と豚肉や鶏肉に比べてかなり低く、ひき肉は 2.3%と食肉の中で最も低かった。

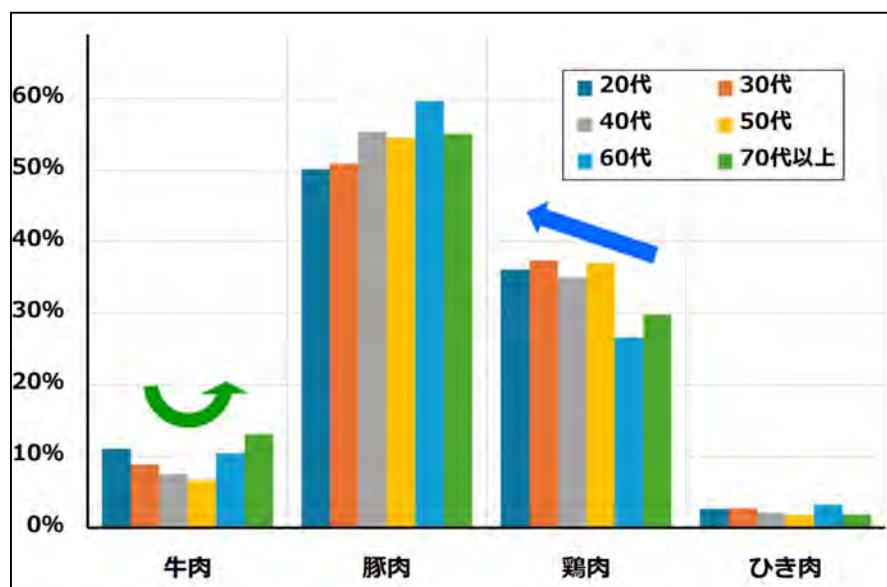
前年と比較すると、豚肉が最も多く購入される食肉であることに変わりはなく、選択率もほぼ変わらないが、前年の 55.2%から今回の 54.6%へと▲0.6 ポイントとわずかに減少した。鶏肉は 31.7%から 33.2%と 1.5 ポイント増加した。一方、牛肉は 10.3%から 9.8%へ、ひき肉も 2.9%から 2.3%に減少している。このように、選択率の増加が見られたのは鶏肉だけであった。

図 1-3-1:購入する量が最も多い食肉



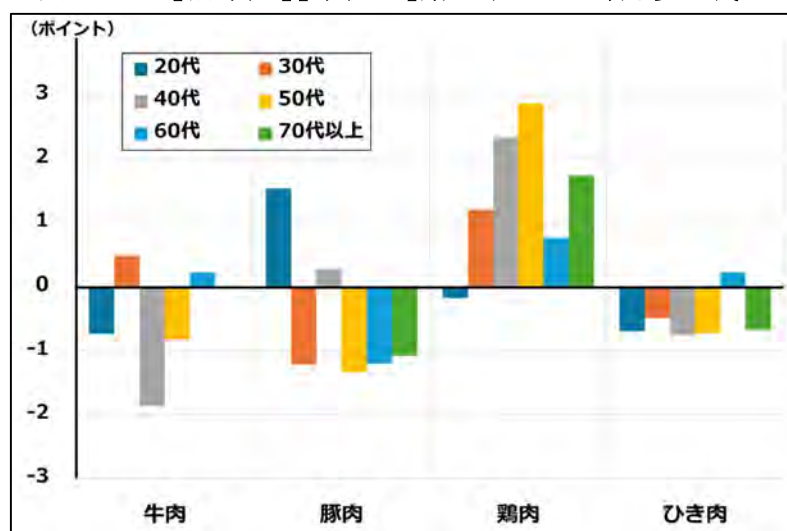
年代別に見ると、豚肉は全世代で最も多く選択されており、特に 60 代では 59.9%と高い選択率であった(図 1-3-2)。一方、鶏肉は若年層の選択率が高い傾向であった。牛肉の選択率は、70 代以上が 13.1%、若年層でも 20 代が 11.1%と高めではあるものの、40-50 代の子育て世代が特に低い傾向であり、50 代は 6.7%と最も低かった。ひき肉は全体的に選択率が低く、60 代が 3.3%でやや高いものの、他の世代では 2%台にとどまった。

図 1-3-2:【年代別】購入する量が最も多い食肉



前年と比較すると、2～3 ポイントとわずかではあるが選好の変化が見られる(図 1-3-3)。まず鶏肉は 20 代を除くいずれの年代でも選択率が前年よりも増加しており、鶏肉の人気のうかがえる。豚肉は普段購入される食肉として最も選択率が高かったが、20 代と 40 代を除いて前年より減少している。牛肉についても選択率が減少している年代が多く、特に 40 代で大きく減少していた。

図 1-3-3:【前年差】【年代別】購入する量が最も多い食肉



地域別に見ると、豚肉は全ての地域で選択率が最も高く、特に北海道では 62.4%と高い支持を得ていることがわかる(表 1-3-1)。鶏肉は九州・沖縄で 41.8%と人気が高く、逆に北陸では 27.2%と最も低い選択率であった。近畿では牛肉の選択率が 14.5%と高く、他地域よりも牛肉が好まれていることがわかる。ひき肉は全体的に選択率が低い中で、北陸が 4.4%と他地域よりもやや高かった。全体的に豚肉が支持される一方、牛肉は西日本、豚肉は東日本、鶏肉は九州・沖縄に好まれる傾向は今回の調査でも見られた。

表 1-3-1:【地域別】購入する量が最も多い食肉

(単位: %)

		n=	牛肉	豚肉	鶏肉	ひき肉
全体		6,000	9.8	54.6	33.2	2.3
地域	北海道	255	5.1	62.4	31.0	1.6
	東北	416	6.5	58.7	32.2	2.6
	関東	2,092	9.6	57.2	30.8	2.4
	北陸	206	8.3	60.2	27.2	4.4
	中部	797	6.9	59.6	31.1	2.4
	近畿	1,055	14.5	47.5	35.7	2.3
	中国	340	11.5	49.7	36.5	2.4
	四国	178	10.1	56.2	30.9	2.8
	九州・沖縄	661	10.1	46.6	41.8	1.5

【比率の差】

全体+10ポイント

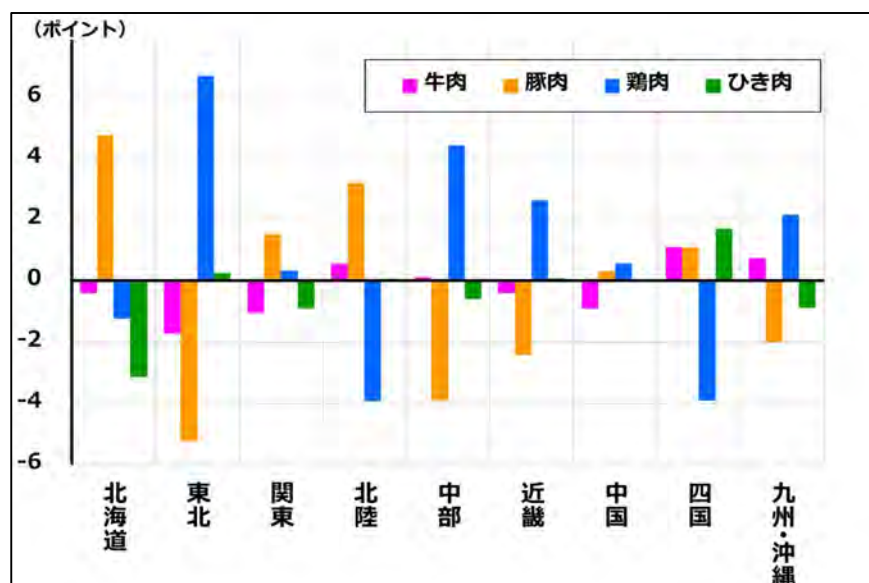
全体+ 5ポイント

全体- 5ポイント

全体-10ポイント

前年と比較すると、年代別ではいずれの年代でも選択率が増加していた鶏肉であったが、地域別に見ると東北や中部で大きく増加している一方で、北陸や四国、北海道では減少しているなど、地域によって差があることがわかる(図 1-3-4)。選択率が最も高い豚肉も、東北、中部、近畿、九州・沖縄では選択率が減少している。全国的には売上が減少している牛肉だが、四国や九州・沖縄、北陸、中部ではわずかに選択率の増加が見られた。

図 1-3-4:【前年差】【地域別】購入する量が最も多い食肉



補足データ

総務省「家計調査」(二人以上の世帯)で地域別の食肉支出金額の前年差を比較したグラフが図 1-3-5 である。本調査での「購入する量が最も多い食肉」の回答結果と同様、地域によって牛肉・豚肉・鶏肉の需要の増減が大きく異なることが支出金額の面からも見える。鶏肉については近畿を除いていずれの地域も支出金額が伸びており、豚肉も伸びている地域が多い。一方、牛肉は減少している地域が多いが、関東と北陸は支出が増加している。

なお、家計調査と本調査とでは地域区分が異なっていることに留意されたい(図 1-3-7)。

図 1-3-5:【前年差】【地域別】食肉への支出金額

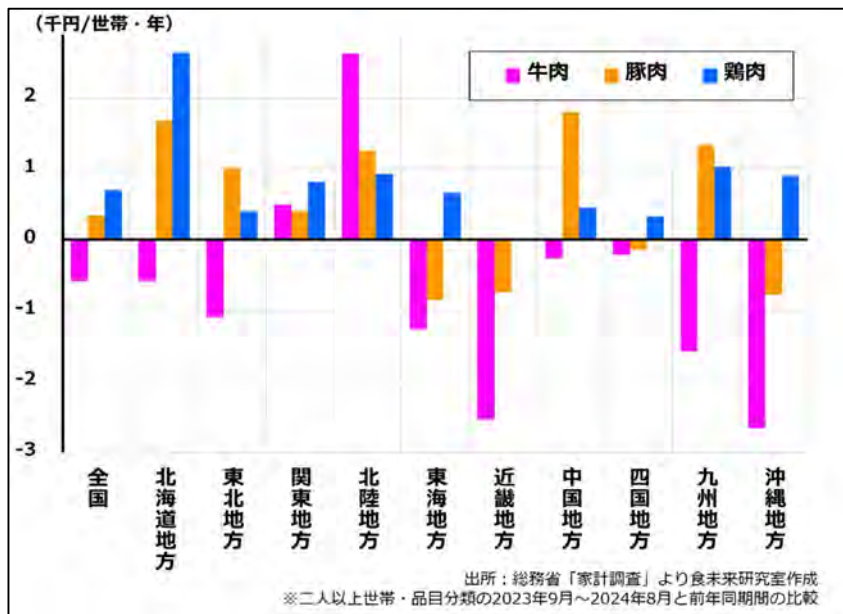


図 1-3-6:【地域別】食肉への支出金額

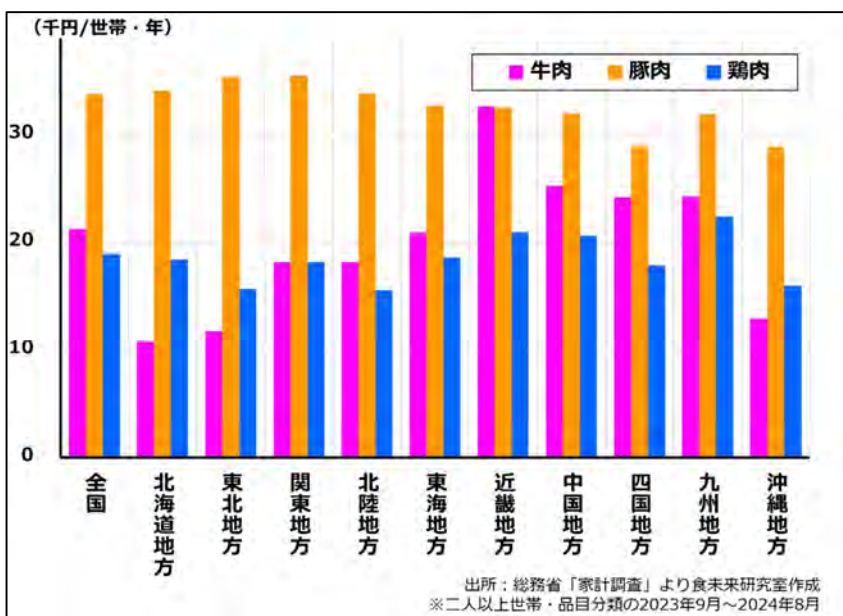


図 1-3-7:地域分類の比較

家計調査	本調査
北海道	北海道
青森	東北
岩手	東北
宮城	東北
秋田	東北
山形	東北
福島	東北
茨城	関東
栃木	関東
群馬	関東
埼玉	関東
千葉	関東
東京	関東
神奈川	関東
新潟	北陸
富山	北陸
石川	北陸
福井	北陸
山梨	中部
長野	中部
岐阜	中部
静岡	中部
愛知	中部
三重	中部
滋賀	中部
京都	近畿
大阪	近畿
兵庫	近畿
奈良	近畿
和歌山	近畿
鳥取	中国
島根	中国
岡山	中国
広島	中国
山口	中国
徳島	四国
香川	四国
愛媛	四国
高知	四国
福岡	九州
佐賀	九州
長門	九州
熊本	九州
大分	九州
宮崎	九州
鹿児島	九州
沖縄	沖縄

(4) 牛肉の購入状況

「和牛以外の国産牛肉」と「輸入牛肉」が同程度で TOP2

- 最も購入する牛肉は「和牛以外の国産牛肉」が 28.9%で最多
- 和牛の購入は高齢層が多く、若年層は少ない
- 牛肉を購入しない理由はコストパフォーマンスの悪さ

(ア) Q4 牛肉について、普段、購入する量が最も多いものを尋ねた設問では、「和牛以外の国産牛」が 28.9%と最も選ばれており、次いで「輸入牛肉」(27.3%)、「和牛」(20.2%)が続く(図 1-4-1)。全体として、国産牛への人気が高い一方で、「わからない/牛肉の種類を気にしない」との回答も 12.1%あり、1 割強の消費者が牛肉の種類にこだわらない姿勢を示している。また、「牛肉は購入しない」との回答は 11.6%あり、一定数の消費者はそもそも牛肉を購入していないことがわかる。

今回の調査では「わからない/気にしない」の選択肢を追加したため単純に前年と比較はできないものの、前年は「輸入牛肉」が最も高かったが、今回は「和牛以外の国産牛」が最も高い結果であった(図 1-4-2)。これは、最近の円安や世界的な飼料の高騰、輸送コストの増加などにより、輸入牛肉と和牛以外の国産牛との価格差が縮小したことが影響したと考えられる。

図 1-4-1: 購入する量が最も多い牛肉

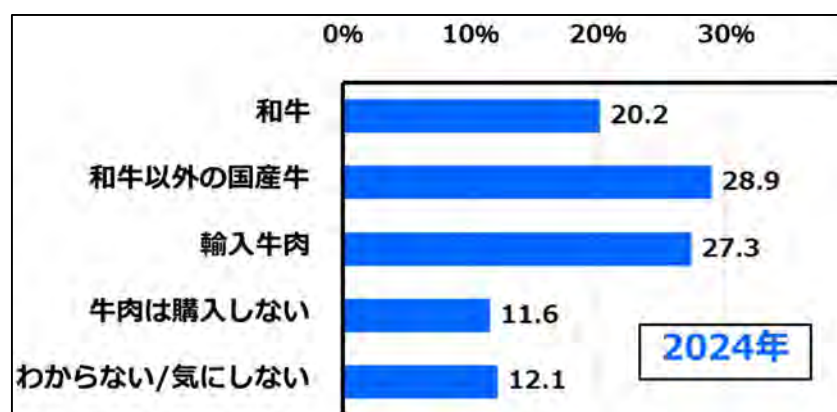
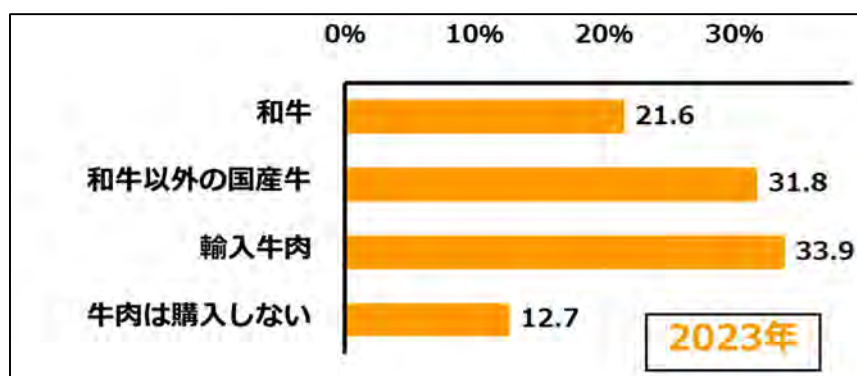
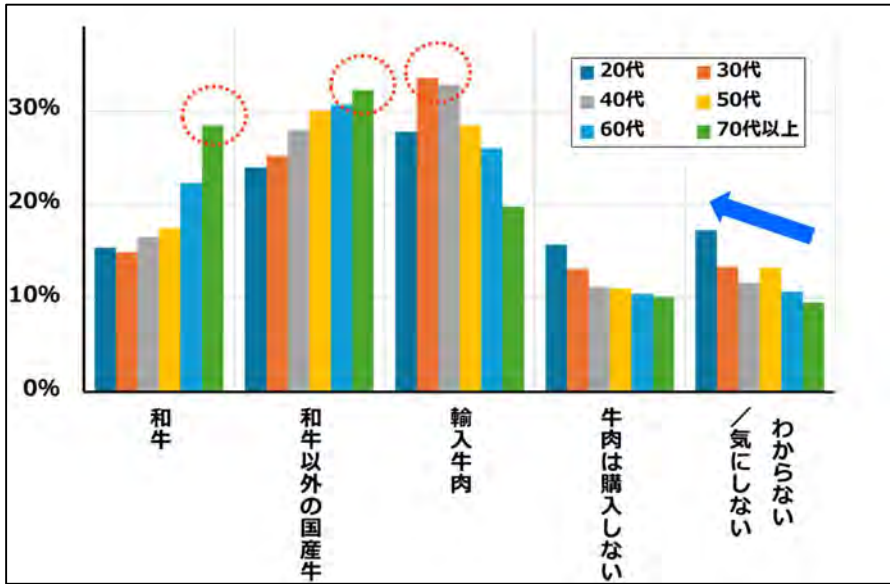


図 1-4-2: 【前年】購入する量が最も多い牛肉



年代別に見ると、70 代以上は「和牛」(28.4%)や「和牛以外の国産牛」(32.2%)の選択率が高く、高齢層ほど国産牛肉に対する嗜好が強い傾向が見られる(図 1-4-3)。一方、30 代と 40 代は輸入牛肉の選択率が高く、それぞれ 33.5%と 32.8%であった。また、「わからない/牛肉の種類は気にしない」は 20 代が 17.2%で最も高く、若年層ほど特定の牛肉へのこだわりが少ない傾向が見える。「牛肉を購入しない」割合は 20 代と 30 代が他の世代より多いが、他の選択肢と比べると年代間の違いは小さく、高齢層でも牛肉を購入しない人が 1 割ほどいることがわかる。

図 1-4-3:【年代別】最も購入する牛肉の種類



地域別に見ると、近畿は「和牛」の選択率が 28.0%と他の地域よりも高く、和牛へのこだわりが強い傾向が見られる(表 1-4-1)。一方、四国は「和牛以外の国産牛」の選択率が 43.3%と突出しており、「輸入牛肉」の選択率も 18.0%と低いことから、国産牛肉への関心が強いことがうかがえる。また、「牛肉は購入しない」が 6.2%と低いことから、牛肉の消費意欲が高いことが示唆される。「輸入牛肉」は東北(35.6%)と北海道(33.7%)で高かったが、北海道では「牛肉を購入しない」(19.6%)や「わからない/牛肉の種類は気にしない」(14.5%)も他の地域より高く、Q3 普段、購入する量が最も多い食肉でも見られたように、牛肉への関心が低い傾向が見られる。

表 1-4-1:【地域別】最も購入する牛肉の種類

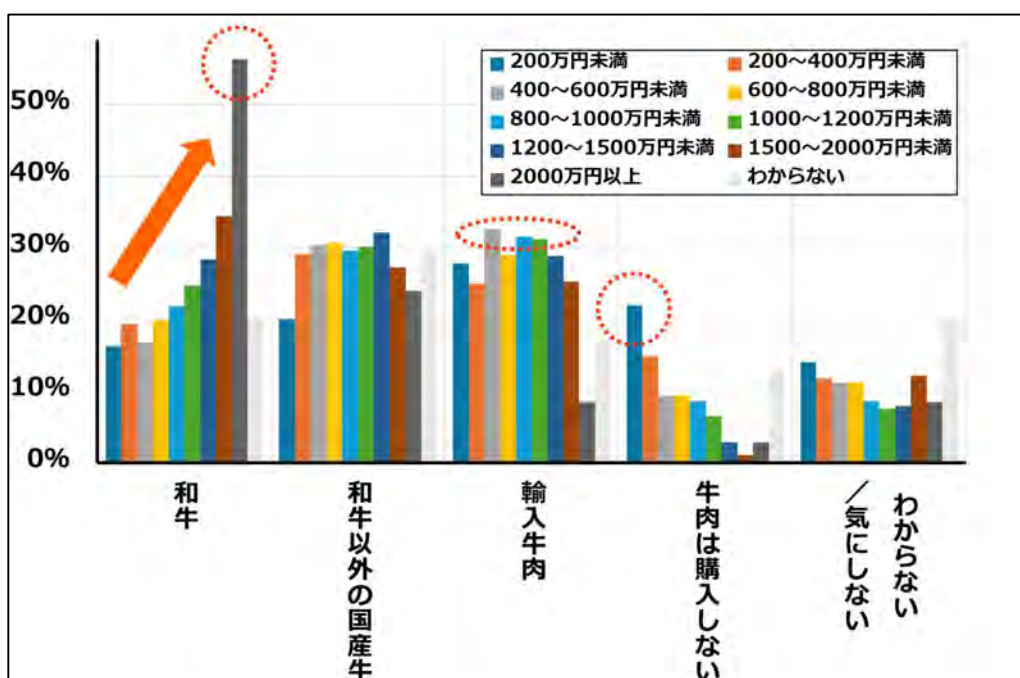
(単位: %)

	n=	和牛	和牛以外の 国産牛	輸入牛肉	牛肉は 購入しない	わからない /気にしない	【比率の差】
全体	6,000	20.2	28.9	27.3	11.6	12.1	
地域	北海道	13.3	18.8	33.7	19.6	14.5	全体+10ポイント
	東北	13.0	24.8	35.6	13.5	13.2	全体+ 5ポイント
	関東	19.4	24.7	31.4	11.8	12.8	全体- 5ポイント
	北陸	18.4	34.0	21.4	16.5	9.7	全体-10ポイント
	中部	19.1	28.5	26.3	14.1	12.0	
	近畿	28.0	33.2	20.3	8.0	10.6	
	中国	21.5	37.4	20.9	10.6	9.7	
	四国	19.7	43.3	18.0	6.2	12.9	
	九州・沖縄	18.6	32.4	26.6	9.7	12.7	

年収別に見ると、「和牛」は所得が上がるほど選択率が高くなっており、年収「2000 万円以上」は選択率が 56.3%と突出していた(図 1-4-4)。

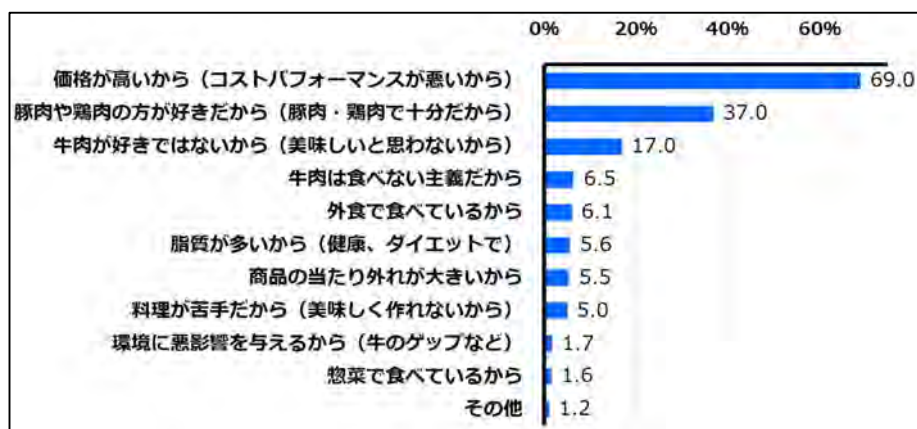
一方で、「400～600 万円未満」や「800～1000 万円未満」「1000～1200 万円未満」の層では「輸入牛肉」の選択率がそれぞれ 32.5%、31.6%、31.2%と高く、コストパフォーマンスを重視する姿勢が見られた。また、所得が低い「200 万円未満」の層は「牛肉を購入しない」割合が 21.9%と高く、購入自体を控える傾向があった。

図 1-4-4:【年収別】購入する量が最も多い牛肉



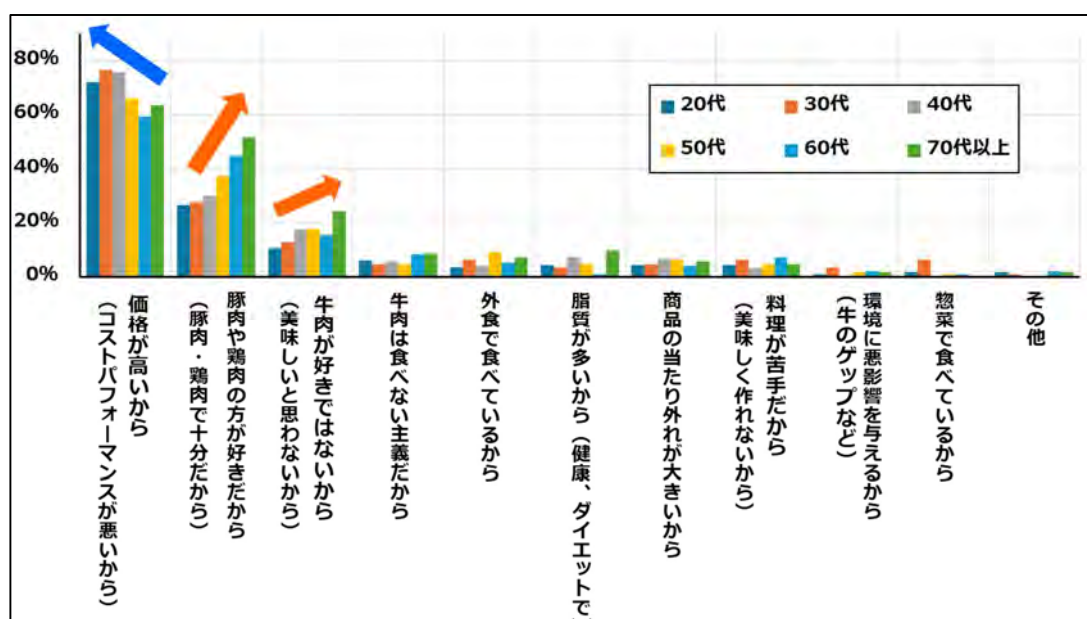
(イ) Q4 で牛肉を購入しないと回答した人について Q5 牛肉を購入しない理由について聞いた質問では「価格が高いから」が 69.0%と最も多く、コストパフォーマンスが主要な要因となっていた(図 1-4-5)。次いで「豚肉や鶏肉の方が好きだから」が 37.0%、「牛肉が好きではないから」が 17.0%と嗜好上の理由が続き、「牛肉は食べない主義だから」が 6.5%と個人の倫理的な理由も挙げられた。「環境に悪影響を与えるから」は 1.7%と少なく、環境に与える影響を考えて購入しない人はまだ少ないようであった。

図 1-4-5: 牛肉を購入しない理由 (複数回答)



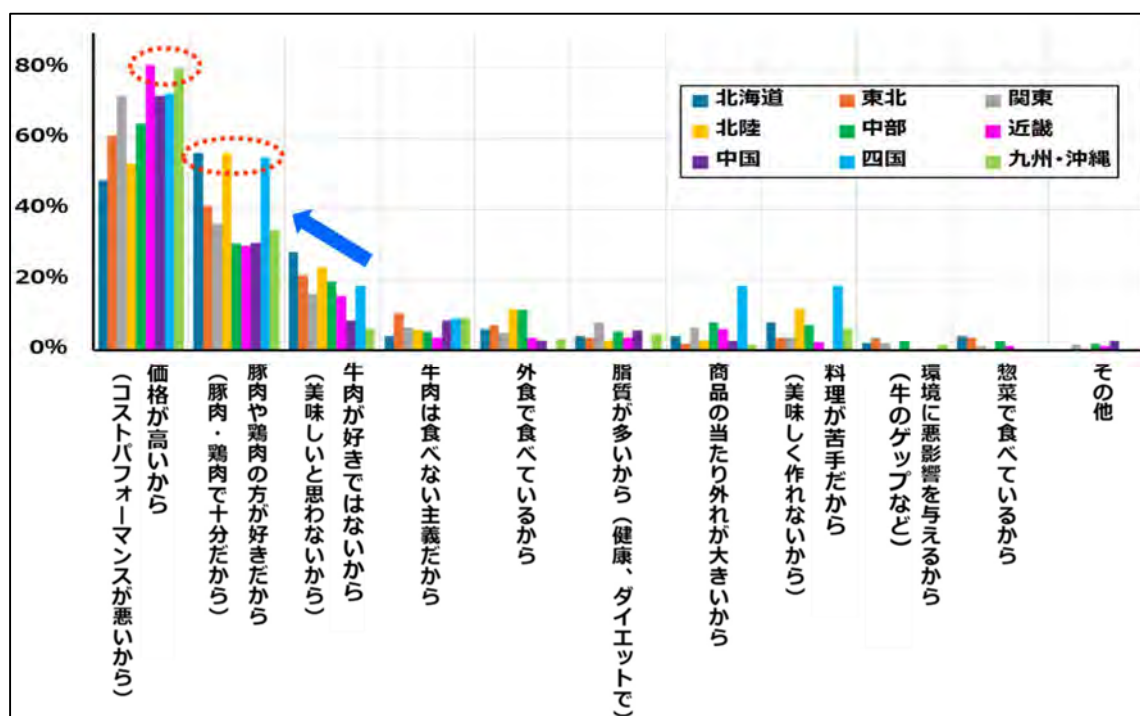
年代別に見ると、各年代とも「価格が高いから」が理由として最多で、特に 30 代で 76.9%、40 代で 75.8%、20 代で 72.3%と若年層で選択率が高かった(図 1-4-6)。「豚肉や鶏肉の方が好きだから」や「牛肉が好きではないから」という個人の嗜好による理由は年代が高いほど選択率が高く、若年層ほど低い傾向であったことから、若年層が牛肉を購入しない理由としては経済的な面も影響していると考えられる。他の選択肢では、70 代以上で「脂質が多いから」が 9.9%と健康を気にする傾向が見られた。

図 1-4-6: 【年代別】牛肉を購入しない理由 (複数回答)



地域別に見ると、「価格が高いから」はいずれの地域でも多い理由ではあるが、特に近畿(81.0%)や九州・沖縄(79.7%)と西日本の方が多く、価格を理由に牛肉を避ける傾向が強く見られた(図 1-4-7)。次に多い「豚肉や鶏肉の方が好きだから」は北海道(56.0%)や北陸(55.9%)、四国(54.5%)で選択率が特に高く、これらの地域では Q3 普段、購入する量が最も多い食肉でも、特に豚肉を好む傾向がみられた。「牛肉が好きではないから」は北海道の 28.0%をはじめ東日本ほど多い傾向で、牛肉を好む程度には地域によって差があることがわかる。また、四国は Q4(表 1-4-1)で「牛肉を購入しない」の選択率が最も低い地域であったが、「商品の当たり外れが大きい」(18.2%)や「料理が苦手だから(美味しく作れないから)」(18.2%)と、品質のばらつきや料理方法・技術の不足による理由が特徴的に多かった。

図 1-4-7:【地域別】牛肉を購入しない理由(複数回答)



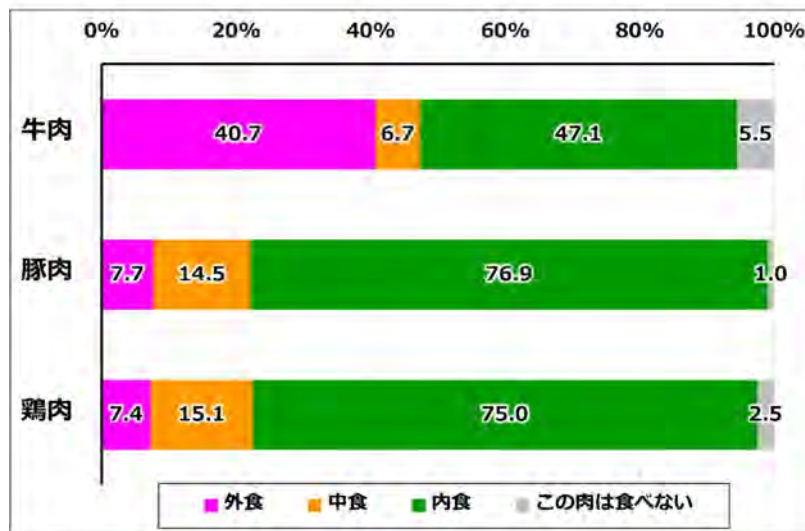
(5) 食肉の喫食場面

牛肉は豚肉・鶏肉と比べて外食利用が多い

- 牛肉は「外食で食べる」割合が豚肉・鶏肉の約 5 倍
- 外食は若年層、内食は高齢層が多い
- 高年収層は牛肉の内食率が高い

Q6 それぞれの食肉について、最もよく食べる場面について聞くと、牛肉は 40.7%が外食、47.1%

図 1-5-1:それぞれの食肉について最もよく食べる場面



が内食であり、他の食肉に比べ外食での消費割合が高く、日常的に家庭で消費される割合が低かった(図 1-5-1)。一方、豚肉と鶏肉は主に内食での消費が多く、それぞれ 76.9%、75.0%に上った。中食についても豚肉・鶏肉は牛肉(6.7%)よりも選択率が高く、4.5%と 15.1%であった。

図 1-5-2:【年代別】牛肉を最もよく食べる場面

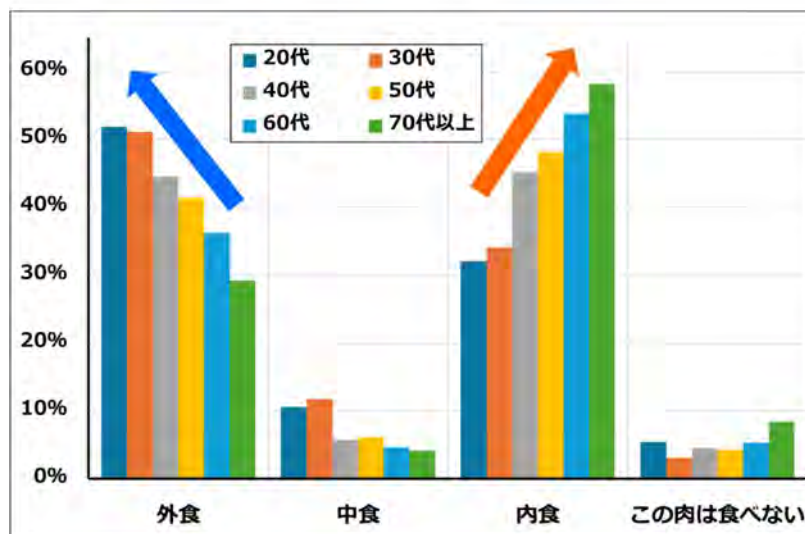
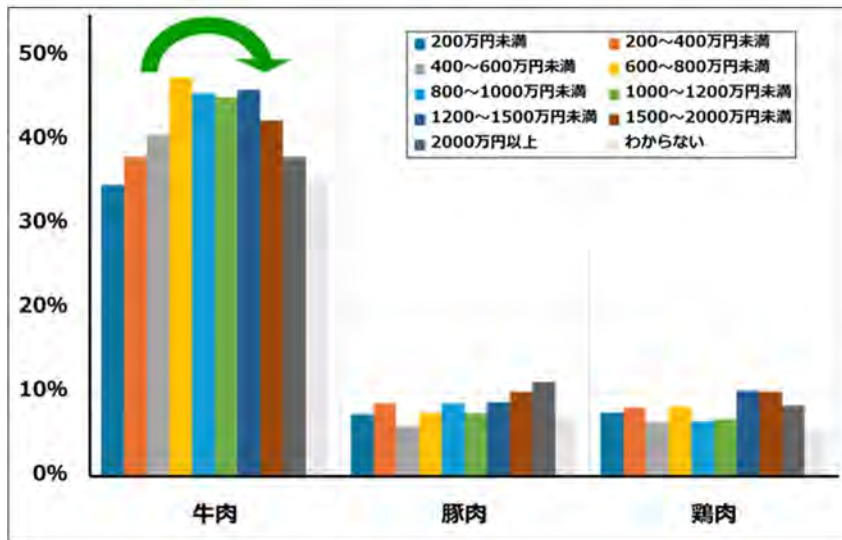


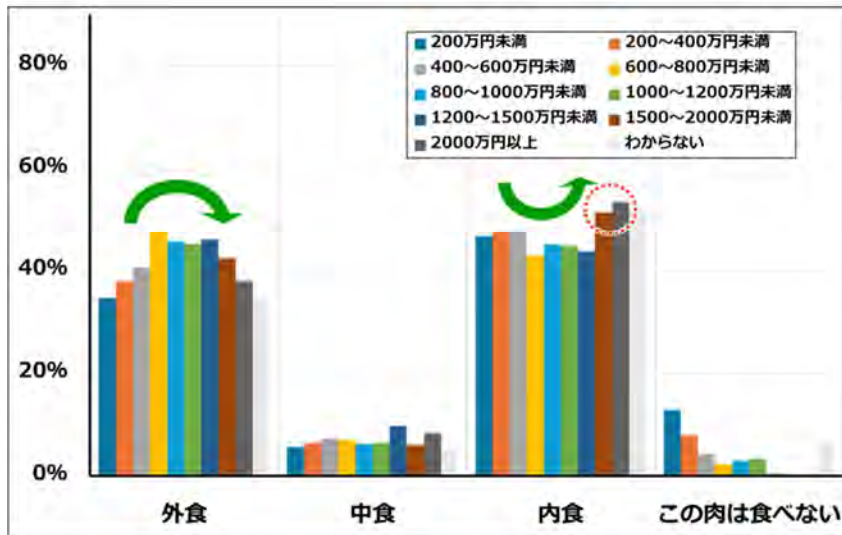
図 1-5-2 は、年代別の牛肉の喫食場面に関する選択率を示したグラフであるが、若年層ほど外食での消費が多く、対照的に高齢層ほど内食の割合が多いことがわかる。中食も若年層ほど割合が高く、こうした傾向は、牛肉ほど顕著ではないものの、豚肉や鶏肉でも同様に見られ、若年層ほど食肉を外食、中食で食べる人が多く、食肉消費の外部化が進んでいることがわかる。

図 1-5-3:【年収別】「外食で最も食べる」の選択率



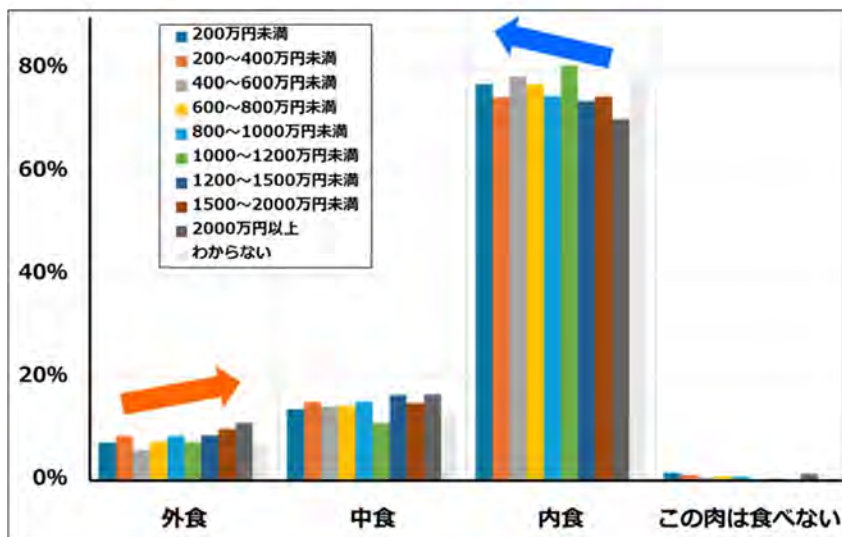
「外食で最も食べる」という選択率を年収別で見たのが図 1-5-3 である。豚肉や鶏肉は年収が多い世帯の方が外食で食べるという選択率が高い傾向が見られる一方で、牛肉については「600～800 万円未満」をピークに山型になっていた。

図 1-5-4-1:【年収別】牛肉を最もよく食べる場面



牛肉と豚肉について、年収別に喫食場面の選択率を見たのが図 1-5-4-1 と図 1-5-4-2 である。牛肉については収入が 1500 万円以上の世帯は外食での選択率が下がる一方、内食での選択率が高くなっている。豚肉については牛肉のような外食・内食傾向は見られず、収入の多い層ほど外食の選択率が高い傾向となっている。

図 1-5-4-2:【年収別】豚肉を最もよく食べる場面



「食肉家計分析」においては収入が多い世帯ほど外食支出が多くなっており、この傾向は本調査の豚肉や鶏肉でも見られたが、牛肉については 1500 万円以上の高収入層は外食よりも内食で牛肉を消費していることが示唆された。

(6) 食肉価格と購入頻度の変化

7～8割が食肉の「値上がり」を実感

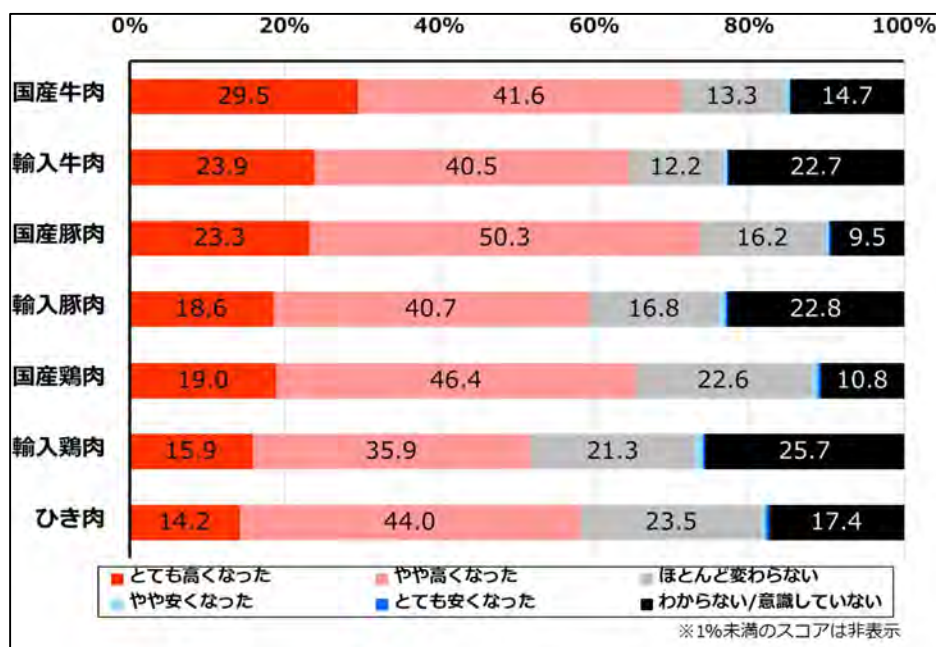
- 食肉の種類では「牛肉」、国産・輸入別では「国産食肉」の値上がりを実感
- 国産豚肉と国産鶏肉の購入頻度が高い
- 購入頻度の減少は若年層ほど小さく、高齢層ほど大きい

(ア) Q7 食肉の種類別の1年前と比べた価格状況を尋ねた設問では、いずれの食肉も「やや高くなった」の選択率が約4～5割と最も高かった(図1-6-1)。一方、「とても高くなった」は国産牛肉で29.5%と最も高かった。

種類別に見ると牛肉>豚肉>鶏肉>ひき肉の順に、国産・輸入別で見ると国産>輸入の順に高くなったと実感していた。「わからない/意識していない」は国産食肉で1割ほど、輸入食肉で2割強ほど選択されており、輸入食肉は国産食肉ほどには価格が意識されていない傾向が見られた。

また、「とても高くなった」「やや高くなった」を合わせると、国産・輸入を問わず、いずれの食肉も半数以上の人が高値を実感していた。

図1-6-1: 1年前と比べた価格状況



属性別に見ると、後述する Q8 それぞれの食肉を購入する頻度との関係が見られ、購入頻度が多い属性ほど価格が高くなったと回答する傾向が強かった。すなわち、女性は男性よりも国産食肉の購入頻度が高く、国産食肉が「高くなった」と回答していた。一方、男性は女性よりも輸入食肉の購入頻度が高く、輸入食肉が「高くなった」との回答が多かった。

年代別に見ても、購入頻度の多い高齢層ほど総じて「高くなった」と回答しているものの、若年層の購入頻度が多い輸入食肉ではその差は小さくなっていった。

地域別でも豚肉や鶏肉の利用が多い北海道で国産豚肉・鶏肉が「高くなった」との回答が特に多くなっており、性別や年代別と同様、普段よく購入する食肉ほどその値上がりを実感しているようだった(巻末クロス集計表 P 付 26～32 参照)。

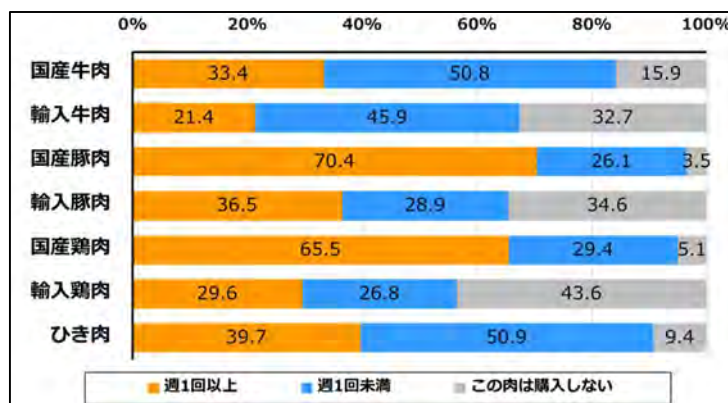
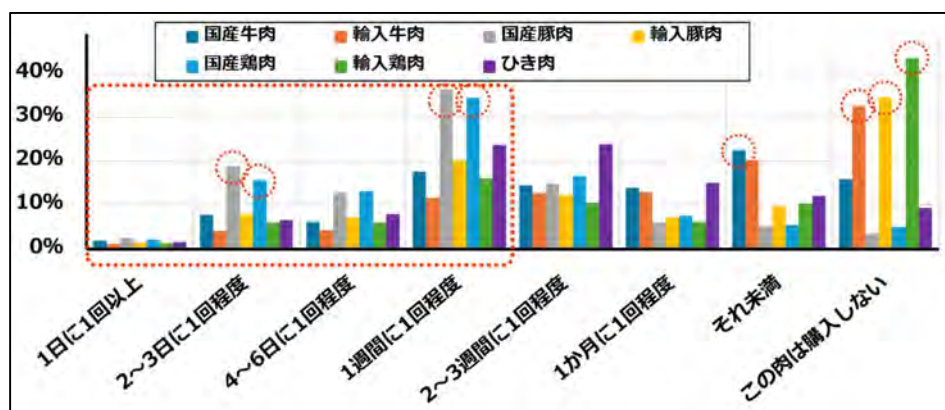
(イ) Q8 それぞれの食肉を購入する頻度を聞くと、国産食肉と輸入食肉で傾向が大きく異なった。

国産食肉については、豚肉と鶏肉で「1 週間に 1 回程度」の選択率が 36.3%と 34.4%で最も高く、次いで「2～3 日に 1 回程度」が 18.8%と 15.7%であり、「1 週間に 1 回以上(※)」は 70.4%と 65.5%であった(図 1-6-2)。牛肉は「それ未満(1 か月に 1 回未満)」が 22.6%と最も多く、「1 週間に 1 回以上(※)」は 33.4%であった。

輸入食肉については、牛肉、豚肉、鶏肉ともに「この肉は購入しない」が 32.7%、34.6%、43.6%と最も多く、それぞれの国産食肉での選択率を大きく上回った。次いで高かったのは、牛肉が「それ未満(1 か月に 1 回未満)」で 20.3%、豚肉と鶏肉が「1 週間に 1 回程度」で 20.1%と 16.1%であり、それぞれの購入頻度の国産食肉と比べると牛肉は 2.3 ポイントの差であるが、豚肉や鶏肉は 16.2 ポイント、18.3 ポイントと大きな差が見られた。

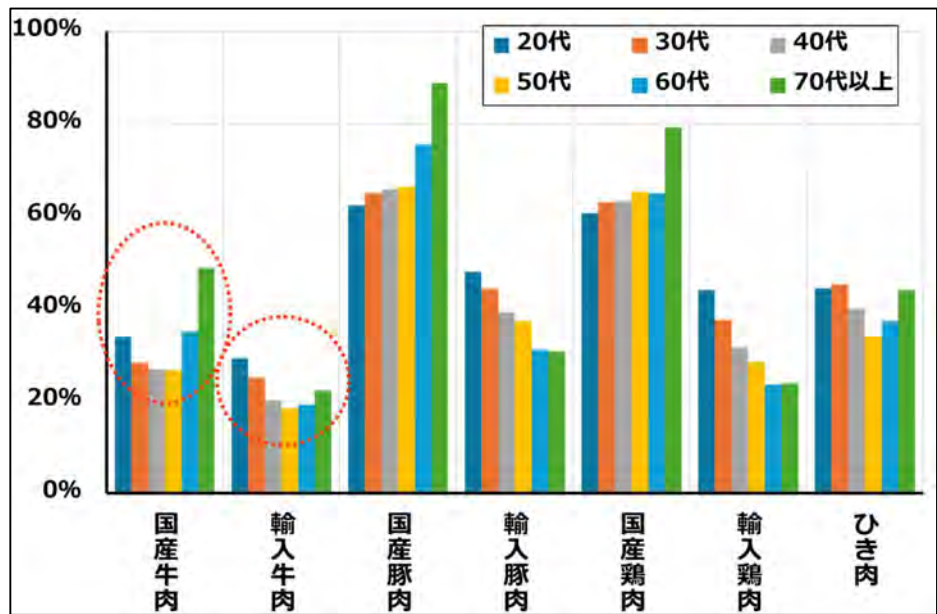
(※)「1 日に 1 回以上」「2～3 日に 1 回程度」「4～6 日に 1 回程度」「1 週間に 1 回程度」の合算値

図 1-6-2: 食肉の購入頻度



年代別に「1週間に1回以上」の選択率を比較すると、全体的に国産食肉は高齢層ほど高く、輸入食肉は若年層ほど高い傾向であった(図 1-6-3)。しかし、牛肉については、国産牛肉では高齢層ほど高い傾向ではあるものの、20代も70代以上と60代に次いで高く、輸入牛肉では若年層の20代・30代の方が高齢層よりも高い選択率であった。

図 1-6-3:【年代別】週 1 回以上購入する割合



輸入食肉について「1週間に1回以上」の選択率を比較すると、女性よりも男性が高く、性年代別に見ても男性は若年層を中心に全体的に平均よりも高い傾向であった(表 1-6-1)。後述する Q13 国産食肉又は輸入食肉のいずれかを選ぶ際に意識することを見ても、男性の方が女性よりも「品質」、「安全性」、「産地・ブランド」などを重視しない傾向が見られ、このことが相対的に安い輸入食肉の購入頻度が多くなっている理由と考えられる。

表 1-6-1:【性年代別】週 1 回以上購入する割合

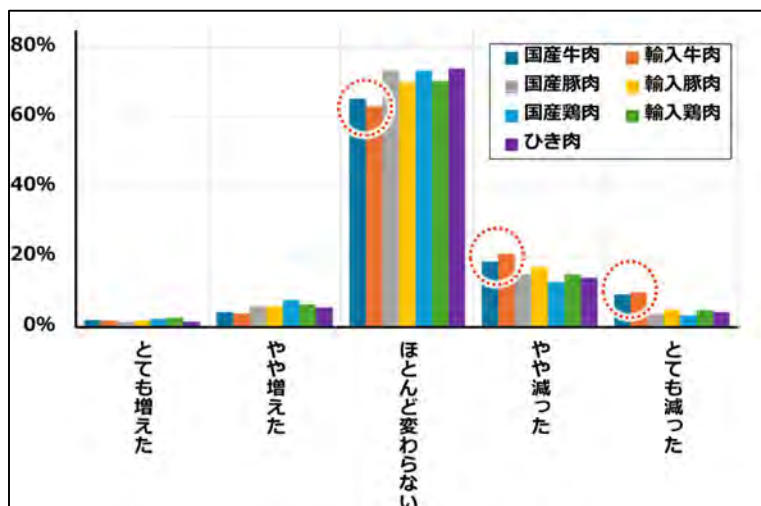
		(単位：%)						
		国産牛肉	輸入牛肉	国産豚肉	輸入豚肉	国産鶏肉	輸入鶏肉	ひき肉
全体		33.4	21.4	70.4	36.5	65.5	29.6	39.7
性別	男性	39.1	29.0	67.8	41.7	63.1	35.4	41.3
	女性	28.0	14.3	72.9	31.7	67.8	24.1	38.2
年代	20代	33.9	29.3	62.3	47.9	60.6	44.0	44.4
	30代	28.3	24.9	65.0	44.3	63.0	37.5	45.2
	40代	26.9	20.1	65.7	39.2	63.2	31.6	39.9
	50代	26.7	18.4	66.5	37.3	65.2	28.4	33.9
	60代	35.0	19.2	75.5	31.1	65.0	23.6	37.3
	70代以上	43.9	20.0	80.0	27.6	71.4	21.4	39.6
性年代	男性20代	40.2	35.5	63.1	51.5	59.5	45.7	44.9
	男性30代	36.8	33.7	62.7	46.4	59.8	42.3	43.8
	男性40代	35.5	28.2	63.5	43.3	61.5	37.0	41.8
	男性50代	32.2	24.2	64.3	41.7	62.2	34.9	35.7
	男性60代	37.8	26.9	70.9	37.6	61.3	32.9	38.7
	男性70代以上	48.8	27.9	77.7	34.7	70.4	26.0	43.5
	女性20代	27.4	22.8	61.5	44.2	61.8	42.2	43.9
	女性30代	19.6	15.9	67.4	42.2	66.2	32.6	46.6
	女性40代	18.1	11.9	68.0	35.0	65.0	26.0	37.9
	女性50代	21.1	12.5	68.6	33.0	68.2	21.9	32.2
	女性60代	32.3	11.9	80.0	24.9	68.5	14.7	36.0
	女性70代以上	40.1	13.9	81.8	22.2	72.1	17.8	36.7

【比率の差】

- 全体+10ポイント
- 全体+ 5ポイント
- 全体- 5ポイント
- 全体-10ポイント

(ウ) Q9 食肉を購入する頻度について、1年前と比べてどのように変化したかを尋ねた設問では「購入頻度はほとんど変わらない」の選択率がいずれの食肉でも6～7割と最も高く、次いで「購入頻度はやや減った」が1～2割ほどであった(図1-6-4)。そうした中、国産牛肉と輸入牛肉は、他の食肉と比較して「ほとんど変わらない」の選択率が低く、「やや減った」と「とても減った」の選択率が高かった。このことから牛肉が他の食肉よりも購入を控えられていることがうかがえる。

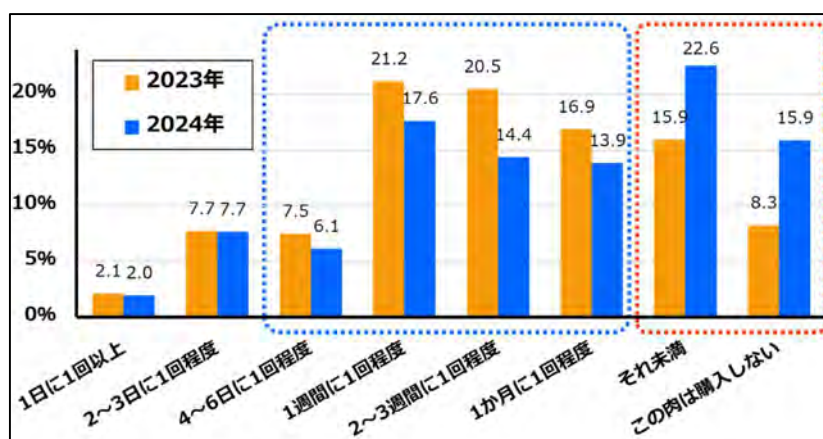
図1-6-4: 食肉購入頻度の変化



この傾向は前年の調査とほぼ同じ結果であったが、具体的な頻度を質問した Q8 それぞれの食肉を購入する頻度の結果を前年と比較すると、変化の状況がわかりやすい。図1-6-5は「減少した」との回答が他の食肉よりも多かった牛肉の購入頻度について今回と前年の結果を重ねたグラフである。前年と比較すると「2～3週間に1回程度」や「週1回程度」が大きく減少し、「それ未満(1か月に1回未満)」や「この肉は購入しない」が大きく増えている。なお、豚肉や鶏肉も牛肉ほどではないにせよ、同様に頻度の減少が見られた。

ちなみに、牛肉については、豚肉や鶏肉とは異なり、「1日に1回以上」や「2-3日に1回程度」の選択率は前年とほとんど差がなく、このような価格上昇下においてもヘビーユーザーは利用を減らしていないということが興味深い。

図1-6-5: 牛肉の購入頻度



年代別に見ると、いずれの食肉も「減った」(「とても減った」「やや減った」の合計)の選択率は若年層ほど低く、高齢層ほど高い傾向であった(図 1-6-6)。逆に、「増えた」(「とても増えた」「やや増えた」の合計)とする選択肢の選択率は若年層ほど高かった。

図 1-6-6:【年代別】食肉の購入頻度の変化

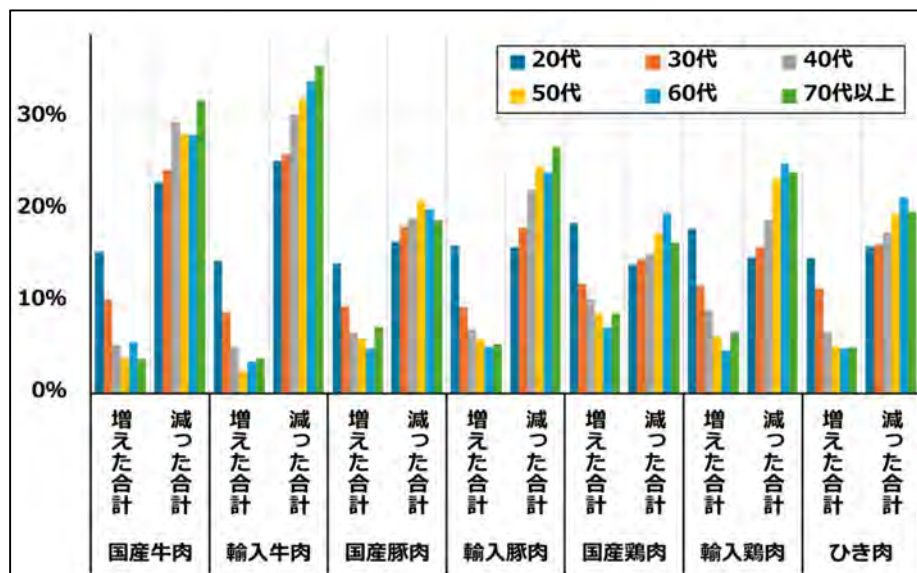
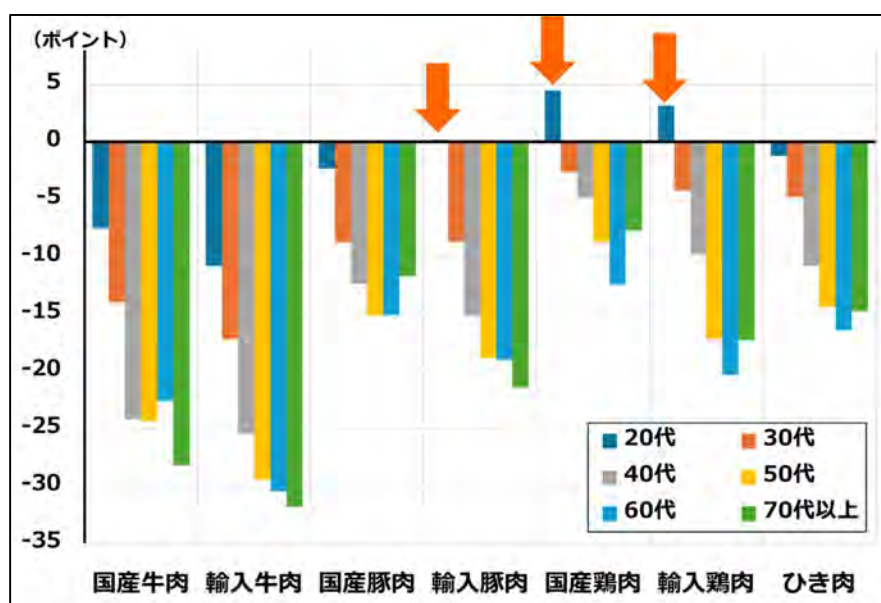


図 1-6-7 は上図の食肉の種類別に「増えた合計選択率」-「減った合計選択率」を計算したグラフである。いずれの食肉においても高齢層での購入頻度の減少が見られ、逆に若年層では高齢層と比べれば「減った」とする回答はかなり小さく、輸入豚肉や国産鶏肉・輸入鶏肉については 20 代では「増えた」の方が多い結果であった。「購入頻度はほとんど変わらない」が最も多い回答であることを考慮しても、若年層ほど食肉の購入意欲が維持されていることがうかがえる。

図 1-6-7:【年代別】食肉の購入頻度の変化(増えた合計-減った合計)



職業別に「増えた」とする選択率を表した表 1-6-2 を見ると、特に学生で「増えた」との回答率が高かった。若年層が好んで視聴している SNS や動画サイトでは料理やレシピの動画が多数あり、それらを専門とする人気インフルエンサーも多く誕生するほどに大きなカテゴリーとなっており、視聴者に影響を与えている。このような背景から、「自分でも作ってみたい」という若年層が増えるなどしたことでこのような結果になったのではないかと推察される。

表 1-6-2:【職業別】食肉別「購入頻度が増えた」の選択率

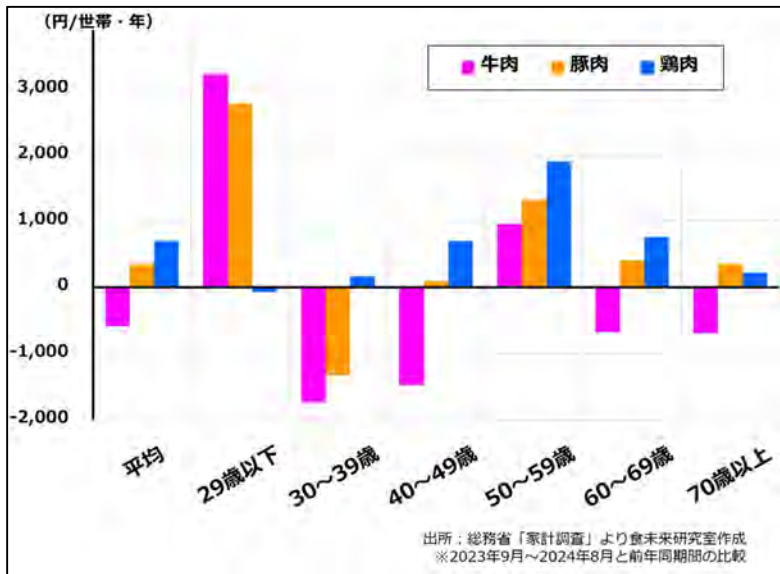
(単位：%)

	n=	国産牛肉	輸入牛肉	国産豚肉	輸入豚肉	国産鶏肉	輸入鶏肉	ひき肉	【比率の差】
全体	6000	6.5	5.9	7.6	7.9	10.3	9.4	7.4	
職業	会社員・役員	1996	9.8	8.3	8.5	8.8	10.5	10.4	全体+10ポイント
	自営業	328	5.5	5.6	8.0	5.5	9.0	6.9	全体+ 5ポイント
	専門職（医師、弁護士、美容師、デザイナー等）	183	4.3	6.1	4.5	8.4	9.6	10.2	全体－ 5ポイント
	公務員	193	7.0	5.6	6.9	7.1	10.8	13.6	全体－10ポイント
	学生	76	7.8	10.2	13.7	13.3	23.0	18.3	
	専業主婦・専業主夫	1209	4.5	3.1	8.3	7.1	9.8	6.4	
	パート・アルバイト・フリーター	923	5.4	4.4	8.0	9.0	13.7	10.8	
	無職・定年退職	1016	3.5	4.0	4.7	5.2	6.5	6.2	
	その他	76	6.7	7.5	9.5	10.7	15.3	13.5	

補足データ

図 1-6-3 (P45【年代別】週 1 回以上購入する割合)において、国産牛肉については 60-70 代以上に加え 20 代も選択率が高かったが、総務省「家計調査」の世帯支出データにおいても 20 代の牛肉消費が近年活発であることがわかる。図 1-6-8 は世帯主年代別(二人以上世帯)の食肉への支出金額の前年差であるが、全体的に支出が減少している牛肉でも 20 代は支出が大きく増加している。支出金額としては他の年代よりも少ないものの、若年層で牛肉に注目が集まっていることが示唆される。

図 1-6-8:【前年差】【年代別】食肉への支出金額



2. 食肉の購入行動と理由

(1) 食肉の購入で重視すること

約 7 割が「価格」を重視と回答 今後の値上げ次第で更に優先度上昇

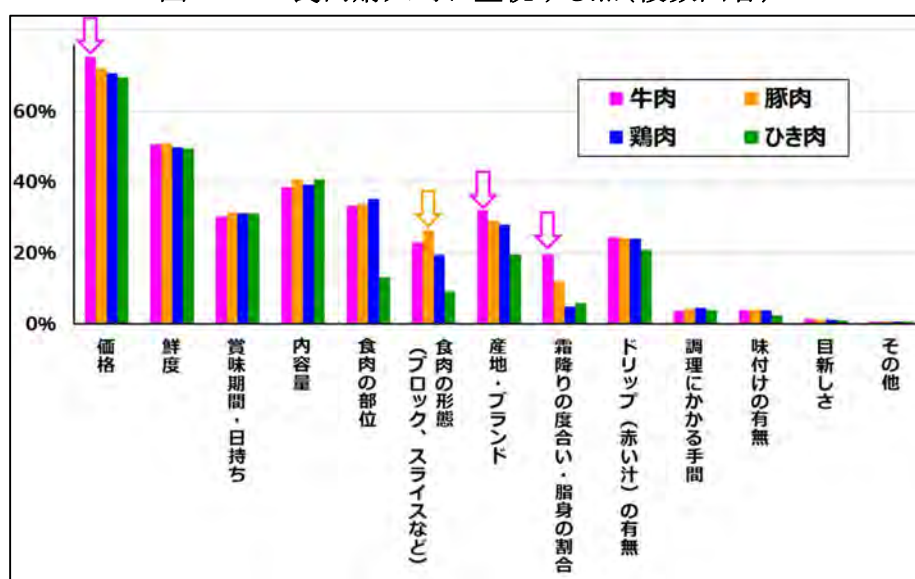
- 購入において最も重視する点は「価格」
- 高齢層は「鮮度」「部位」「産地・ブランド」等も重視
- 更に値上げとなった場合、「価格」以外は優先度が低下

(ア) Q10 食肉を購入する際に重視する点では、いずれの食肉の種類でも「価格」の選択率が約 70% で最も高く、次いで「鮮度」が約 50% であった(図 2-1-1)。

食肉の種類別では、今回の調査で新たに追加した「霜降りの度合い・脂身の割合」が牛肉で 19.7% と特徴的に高かった。その他、牛肉では「価格」と「産地・ブランド」の選択率が他の食肉よりもやや高く、豚肉では「食肉の形態(ブロック、スライスなど)」が他の食肉よりやや高い傾向であった。

「霜降りの度合い・脂身の割合」以外の項目については前年の調査と同じ傾向であった。

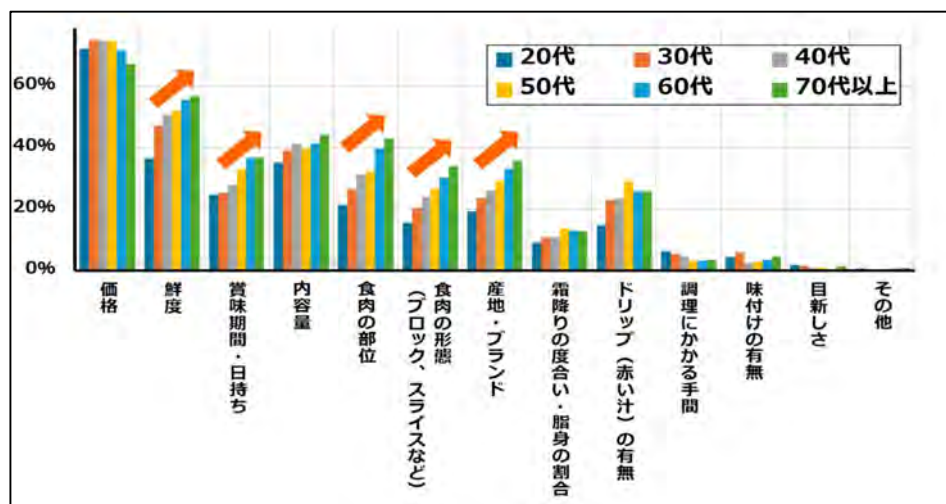
図 2-1-1: 食肉購入時に重視する点(複数回答)



購入量が最も多い「豚肉」に着目して年代別に見ると、「鮮度」「賞味期限・日持ち」「食肉の部位」「食肉の形態」「産地・ブランド」などは年代による差が大きいことがわかる(図 2-1-2)。前年の結果と同様、若年層は高齢層と比べると価格重視であり、鮮度や部位、産地などはあまり重視していない傾向が見られた。

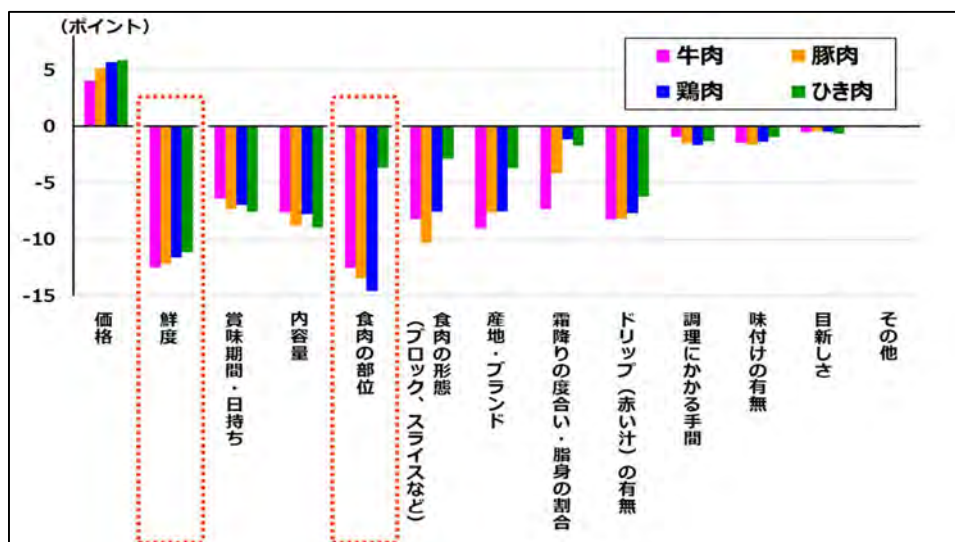
なお、新設の「霜降りの度合い・脂身の割合」については豚肉よりも牛肉で年代の差が大きく、高齢層ほど牛肉の霜降りの度合いを重視していた(巻末クロス集計表 P 付 47～50 参照)。

図 2-1-2:【年代別】豚肉購入時に重視する点(複数回答)



(イ) Q11 今後さらに食肉の価格が上昇した場合に重視する点でも、選択率の差はあるものの、Q10 と傾向はほとんど同じであった。Q11 価格上昇の際の選択率から Q10 現状の選択率を引いたグラフが図 2-1-3 である。マイナスが大きい項目ほど価格上昇の際に重視されない(妥協される)ポイントと考えることができる。グラフを見ると、前年の結果と同様、価格上昇の際には「価格」がより優先され、それ以外の項目は優先度が落ちてしまう傾向が見られる。特に「鮮度」や「食肉の部位」の優先度の落ち方が大きかった。

図 2-1-3: 現在と価格上昇時に重視する点の差



補足データ

価格がさらに上昇した場合に妥協されるポイントについては、いずれの食肉についても大きな傾向としては前年と同じであったが、前年は「鮮度」が最も妥協されるポイントであったのに対し、本調査ではわずかな差ではあるが「食肉の部位」が最も大きく優先度を下げていた(図 2-1-3)。

図 2-1-4:【前年差】鶏肉で値上がりしたときの妥協するポイント

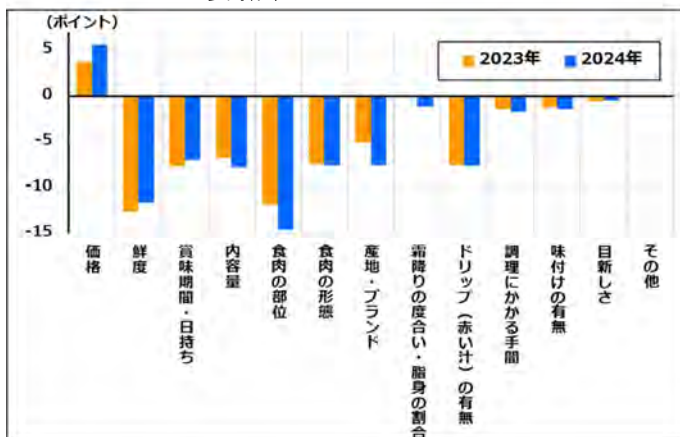


図 2-1-5: 検索者数の推移

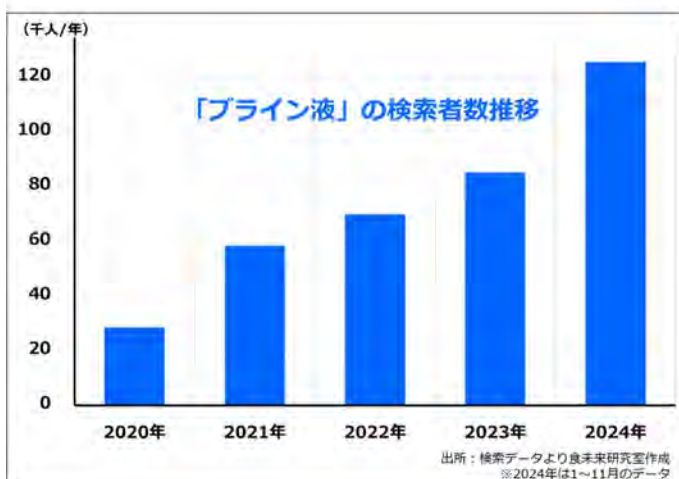
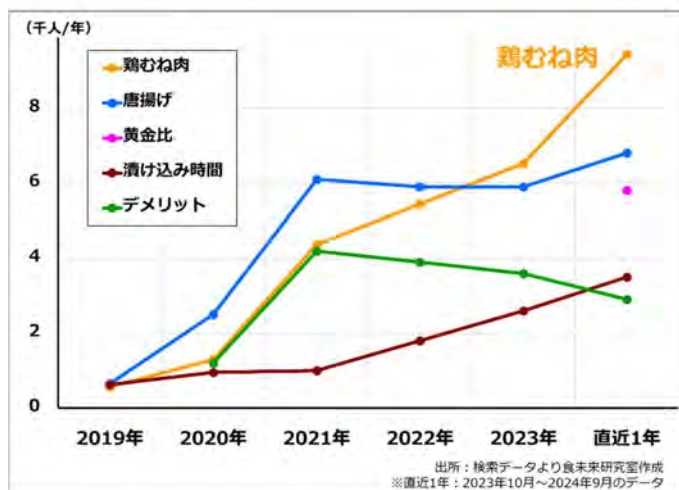


図 2-1-6: ブライン液との同時検索ワードの検索者数推移



また、牛肉・豚肉・鶏肉別に「食肉の部位」の妥協度合について比較すると、前年はいずれの食肉もほぼ横並びだったのに対し、今回は鶏肉＞豚肉＞牛肉となっており、鶏肉で最も妥協されるという結果であった。

なお、鶏肉においても、「食肉の部位」は値上げ利したときの妥協度合が最も大きく、前年と比べて大きく下がったポイントであった(図 2-1-4)。

鶏肉で「食肉の部位」と言った際に「もも肉」「むね肉」がまず頭に浮かぶと思うが、最近、むね肉を美味しく食べることのできる「ブライン液」の関心が高まっている(図 2-1-5)。

ブライン液とは水に塩と砂糖をそれぞれ5%程度溶かしたもので、これに肉や魚を漬け込むことでしっとりジューシーな仕上がりになる。このブライン液は動画や SNS などにより拡散し、検索者数は年々増加してきている。

ブライン液との同時検索ワードの推移を見ると、以前はから揚げをジューシーに作ることができる方法として検索されていたが、近年は鶏むね肉との同時検索が急激に増加しており、鶏むね肉をしっとり美味しく食べる方法としてブライン液が注目されていることがわかる(図 2-1-6)。消費者はリーズナブルな食材を工夫して調理しながら、物価高に対応しようとしていることがうかがえる。

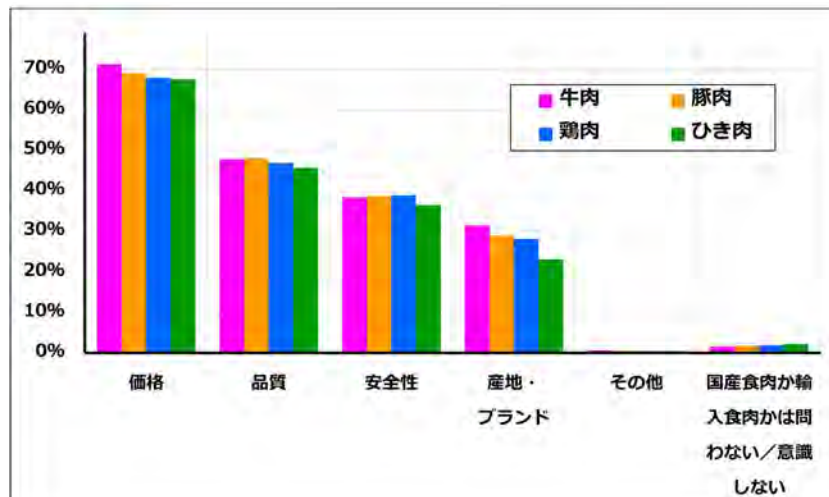
(2) 食肉の国産・輸入への意識

価格を最重視 牛肉は産地・ブランドも意識

- 約 7 割の人が国産食肉か輸入食肉かの選択要因を「価格」と回答
- 前年よりも「価格」や「国産か輸入か」を意識するように
- 価格差が+10%までならば半数が国産食肉を選択

(ア) Q12 国産食肉又は輸入食肉のいずれかを選ぶ際に意識することでは、いずれの食肉でも「価格」が約 70%と最も多く、次いで「品質」が 50%弱となっていた(図 2-2-1)。食肉の種類で大きな差はないが、牛肉では「価格」と「産地・ブランド」が他の食肉よりやや多い傾向であった。

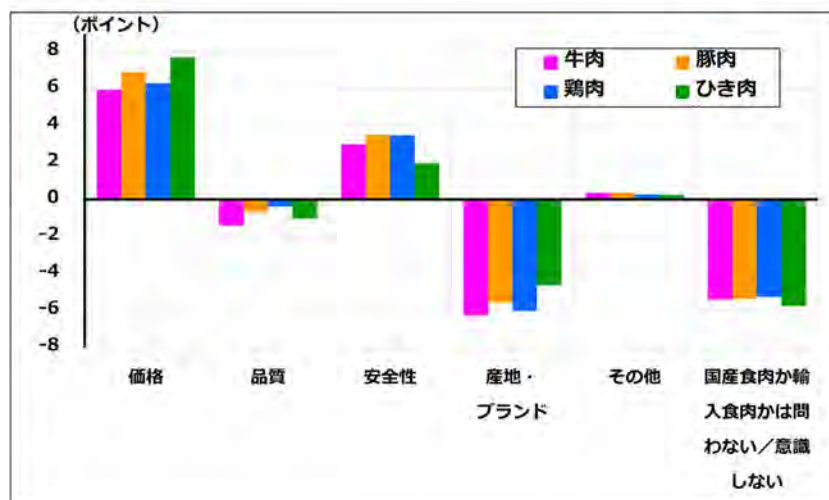
図 2-2-1:「国産食肉」「輸入食肉」の選択要因(複数回答)



「価格」が約 70%と最も多く、次いで「品質」が 50%弱となっていた(図 2-2-1)。食肉の種類で大きな差はないが、牛肉では「価格」と「産地・ブランド」が他の食肉よりやや多い傾向であった。

前年と比較すると、いずれの食肉も共通して「価格」と「安全性」を重視するようになっており、「産地・ブランド」や「国産食肉か輸入食肉かは問わない/意識しない」が減少していた(図 2-2-2)。

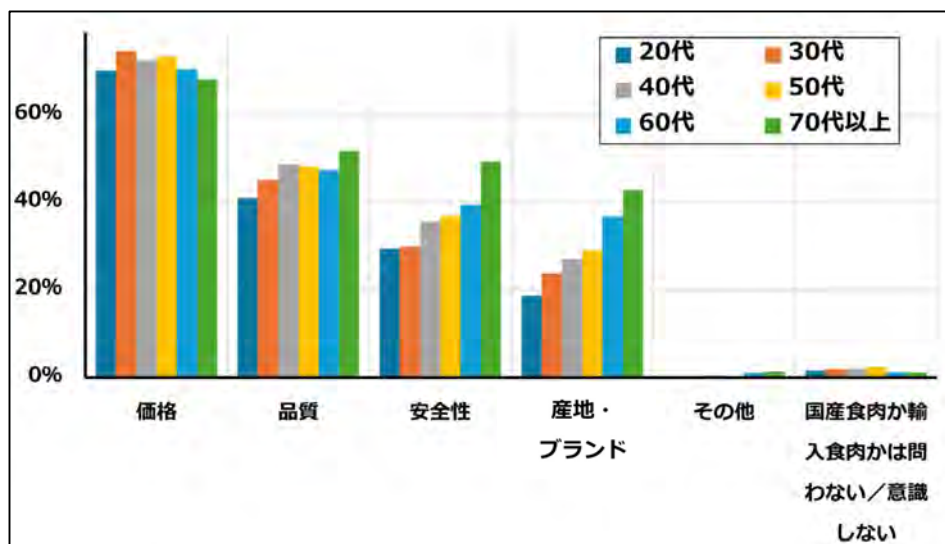
図 2-2-2:【前年差】「国産食肉」「輸入食肉」の選択要因(複数回答)



また、「産地・ブランド」を重視する人が減少したということは、「価格」の重視度が強まり、「イベリコ豚」「黒豚」「北海道産」などという謳い文句は以前ほどには重視されなくなったとも言える。

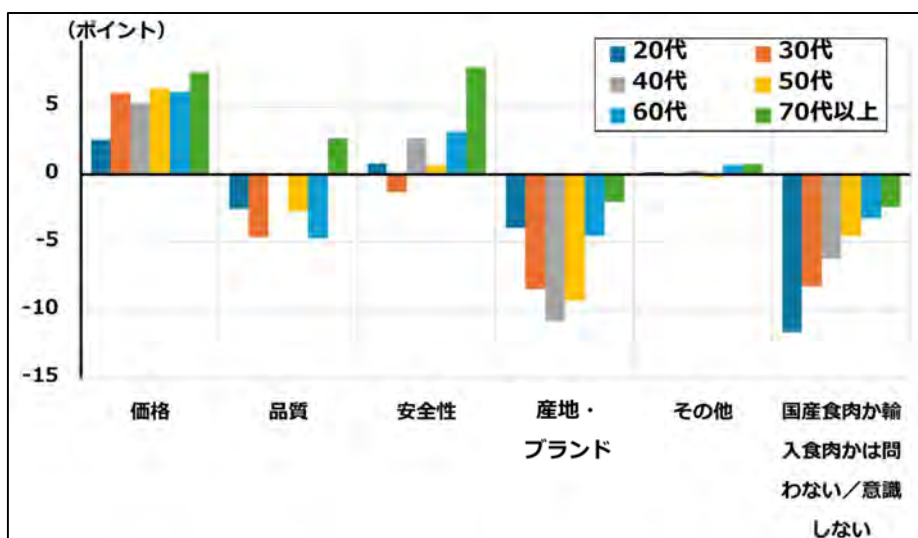
年代別の傾向を牛肉について見てみると、「価格」については 30-50 代の子供がいる年代ほど選択率が高く、いろいろと出費がかさむ年代であることから、より価格が意識されている状況がうかがえる(図 2-2-3)。一方、「品質」や「安全性」「産地・ブランド」は高齢層ほど選択率が高く、若年層ほど低い傾向であった。

図 2-2-3:【年代別】牛肉の「国産食肉」「輸入食肉」の選択要因



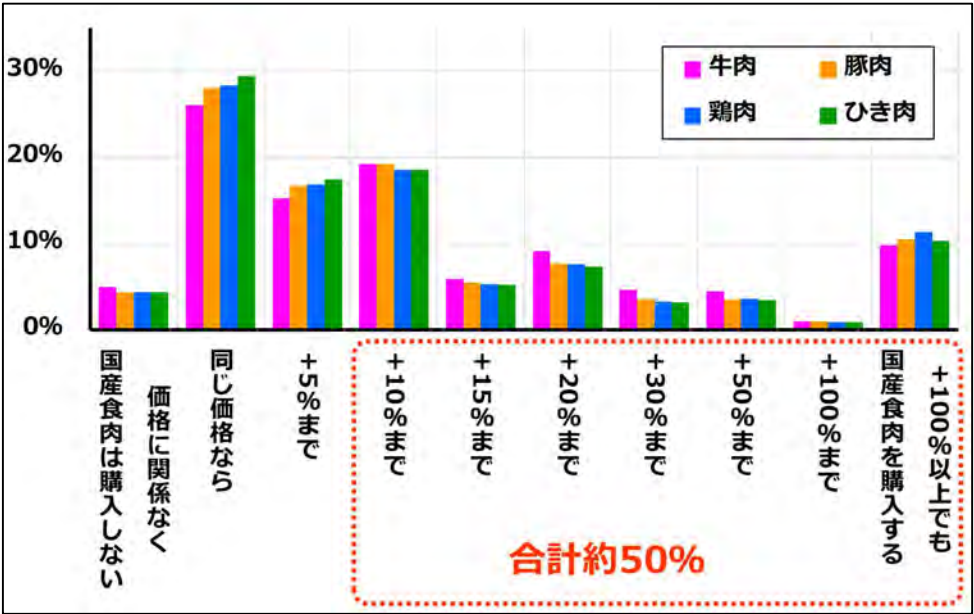
前年と比較すると、「価格」や「安全性」をより重視するようになっているが、「価格」はすべての年代で選択率が増加したのに対し、「安全性」は 70 代以上で特に増加していた(図 2-2-4)。減少した項目については、子育て世代の 30-50 代で特に「産地・ブランド」を重視しなくなっており、また、前年は「国産・輸入は問わない」との回答が多かった若年層でその選択率が大きく減少するといった変化が見られた。

図 2-2-4:【前年差】【年代別】牛肉の「国産食肉」「輸入食肉」の選択要因(複数回答)



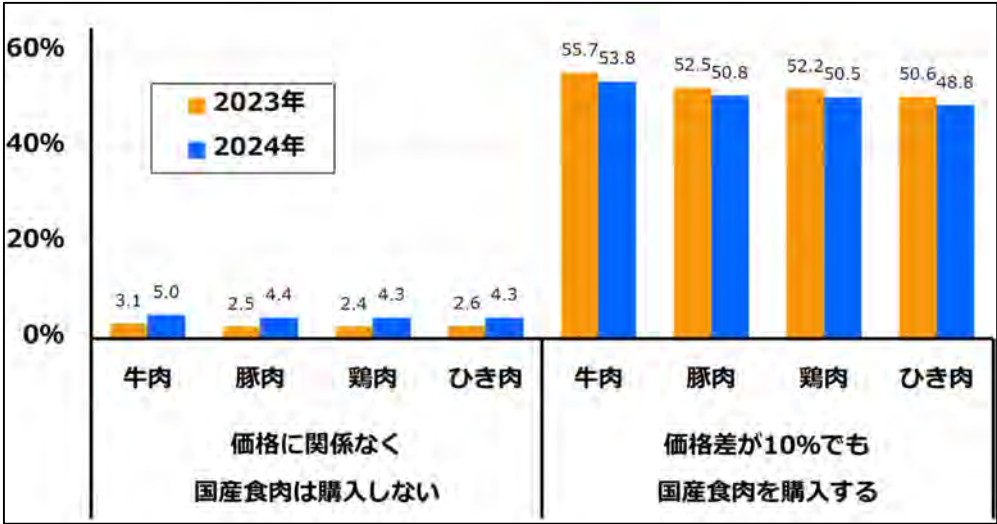
(イ) Q13 国産食肉と輸入食肉とを比べて、どれくらいの価格差までであれば国産食肉を購入するかという設問では、いずれの食肉も「同じ価格なら」購入するが 25～30％と最も多く選択されており、次いで「+10％まで」が約 20％となっていた(図 2-2-5)。価格差が大きくなるほど選択率は低下する傾向であったが、「+100％以上でも国産食肉を購入する」も約 1 割選択されていた。また、いずれの食肉についても、約 5 割の人が国産食肉の 10％の価格差を許容していた。ちなみに、後述するが、年代別ではいずれの食肉でも若年層ほど価格許容度が低い傾向であった。

図 2-2-5: 国産食肉を選ぶ際の価格差許容度



前年と比較すると、いずれの食肉も「価格に関係なく国産食肉は購入しない」という人が約 2 ポイント増加しており、「10％の価格差でも国産食肉を購入する」とした人は約 2 ポイント減少していた(図 2-2-6)。国産食肉が値上がりする中で、消費者が国産食肉の価格にややシビアになっていることがうかがえる。

図 2-2-6: 食肉別の価格差許容度



(3) 食肉価格の許容度

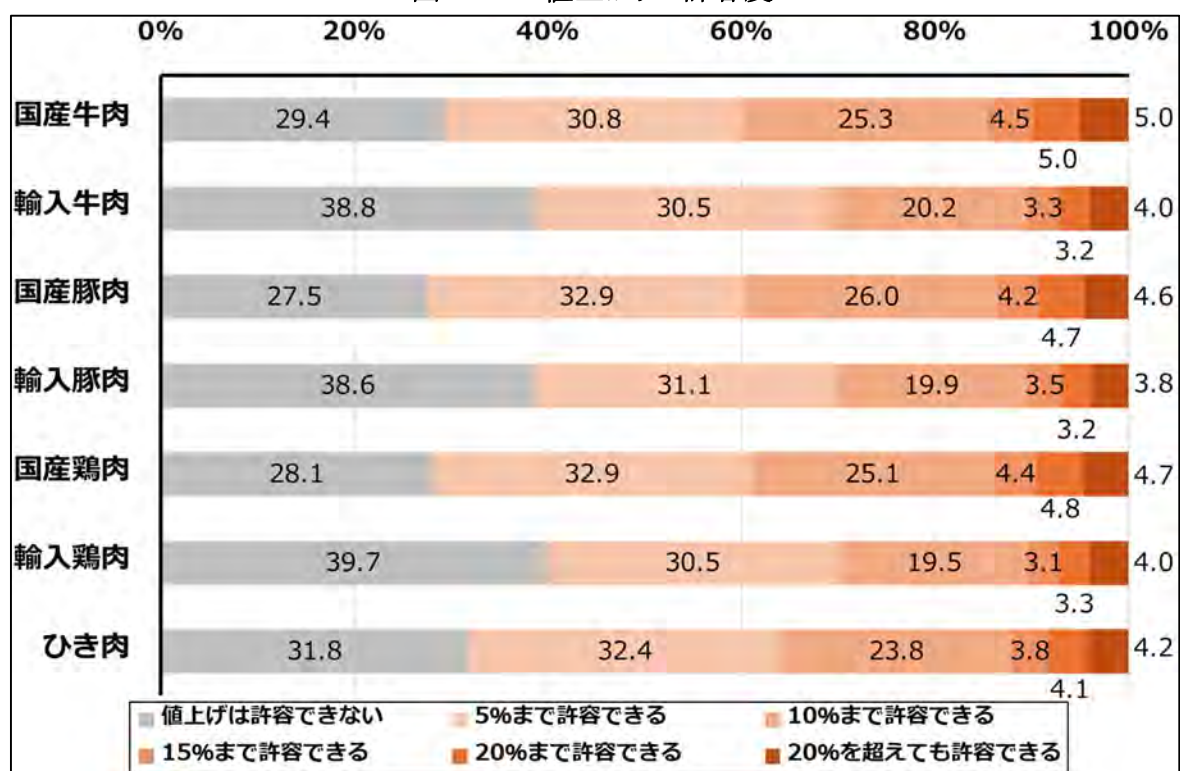
値上げの許容度は国産食肉・輸入食肉で異なり、年代差も大きい

- 輸入食肉よりも国産食肉の方が許容度が高い
- 高齢層ほど許容度が高い傾向
- 特産品購入者は農村との関わりがない人に比べ許容度が大きい

(ア) Q14 食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できるかを尋ねた設問では、国産食肉と輸入食肉とで傾向が大きく異なった。国産食肉ではいずれの食肉も「5%まで許容できる」が3割強と最も多く、次いで「値上げは許容できない」が3割弱であった(図 2-3-1)。輸入食肉ではいずれの食肉も「値上げは許容できない」が4割弱と最も多く、次いで「5%まで許容できる」が約3割であった。

国産食肉と輸入食肉を比較すると、いずれの食肉も国産食肉の方が「値上げは許容できない」が約10ポイント低く、逆に「10%まで許容できる」は約5ポイント高くなっており、国産食肉の方が値上がりの許容度が高い傾向であった。

図 2-3-1: 値上がりの許容度



前年の調査は国産食肉と輸入食肉を分けないで行ったが、前年データとの傾向が近かった国産食肉の価格許容度を前年のそれとを比較すると、選択率が最も高かった「5%まで許容できる」がいずれの食肉も約4ポイント減少した一方で、「10%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」がいずれの食肉も前年よりも増えていた(図2-3-2)。「値上げは許容できない」の選択率も増えており、値上がりを許容できない人はやや増えているものの、許容できる人にとっては値上がりの許容度は前年よりも増していることがわかる。

図2-3-2:【前年差】値上がりの許容範囲

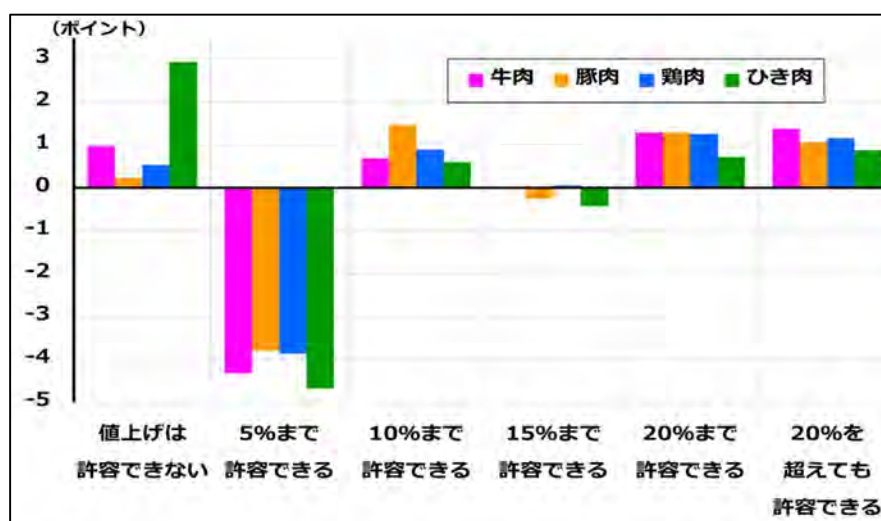
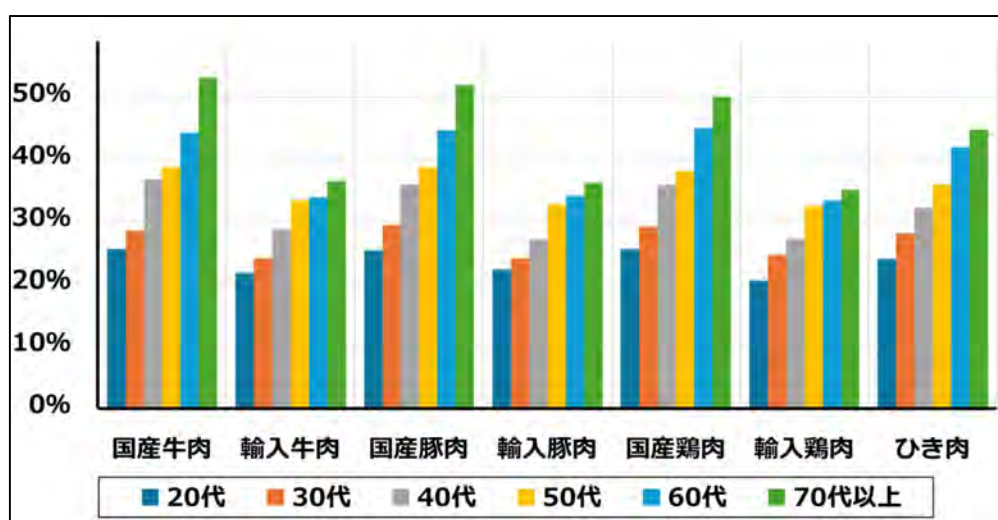


図2-3-3は、「10%の値上げを許容できる(※)」人を年代別×食肉の種類別で示したものである。値上げへの許容度は、年代に比例して高齢層ほど高くなり、国産食肉と輸入食肉の差も大きくなる傾向であった。

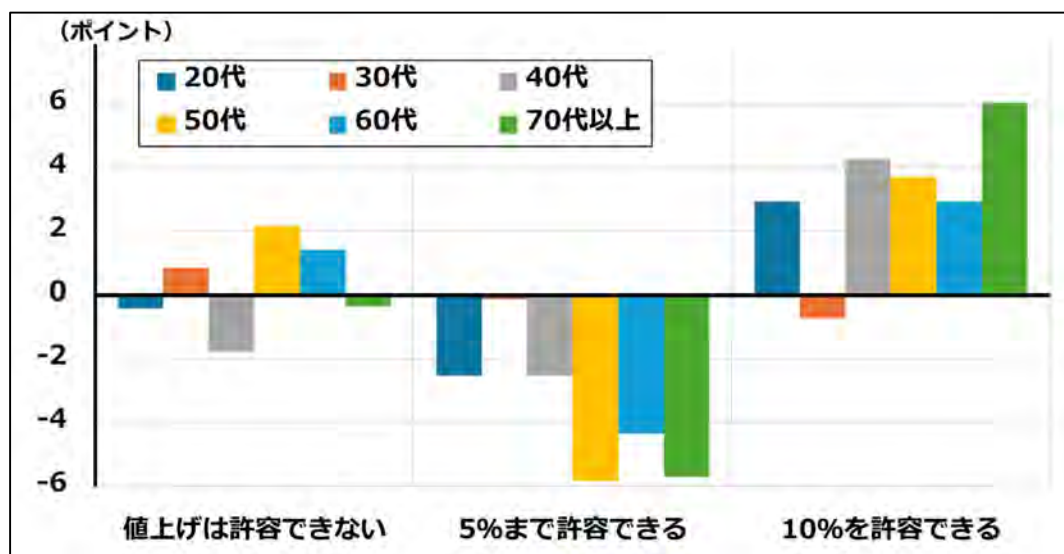
(※)「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合算値

図2-3-3:【年代別】10%の値上げを許容できる人の割合



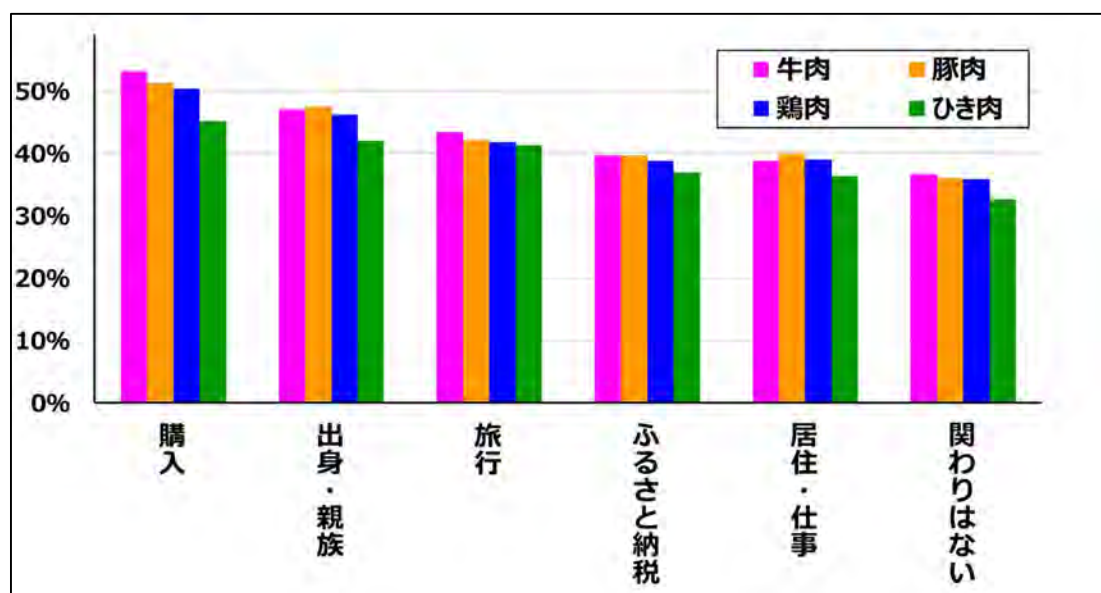
また、消費の多い国産豚肉について年代別の選択率を前年と比較すると、「10%の値上がりを許容できる」人は、30代を除いていずれの年代も前年よりも増加しており、特に70代以上は前年よりも6ポイント増えていた(図2-3-4)。急速な円安の進行等により、様々なモノの値段が上がる状況にあることから、前年よりも許容度が上がったものと思われる。

図2-3-4:【前年差】【年代別】豚肉の価格許容度



農村との関係別に国産食肉について「10%の値上がりを許容できる」との選択率とをクロス分析したのが図2-3-5である。「関わりはない」と比べ、関わりのある人の方が許容度が高い傾向で、特に「直接・ECなどで農村地域の特産品を購入している」人は他よりも許容度が高かった。日頃、農村地域の特産品を購入している消費者は農業や農畜産物への関心が高く、値上がりに対する理解も他より高いものと推察される。

図2-3-5:【農村との関係別】国産食肉の10%の値上がりを許容できる選択率



3. 供給リスクへの消費者意識

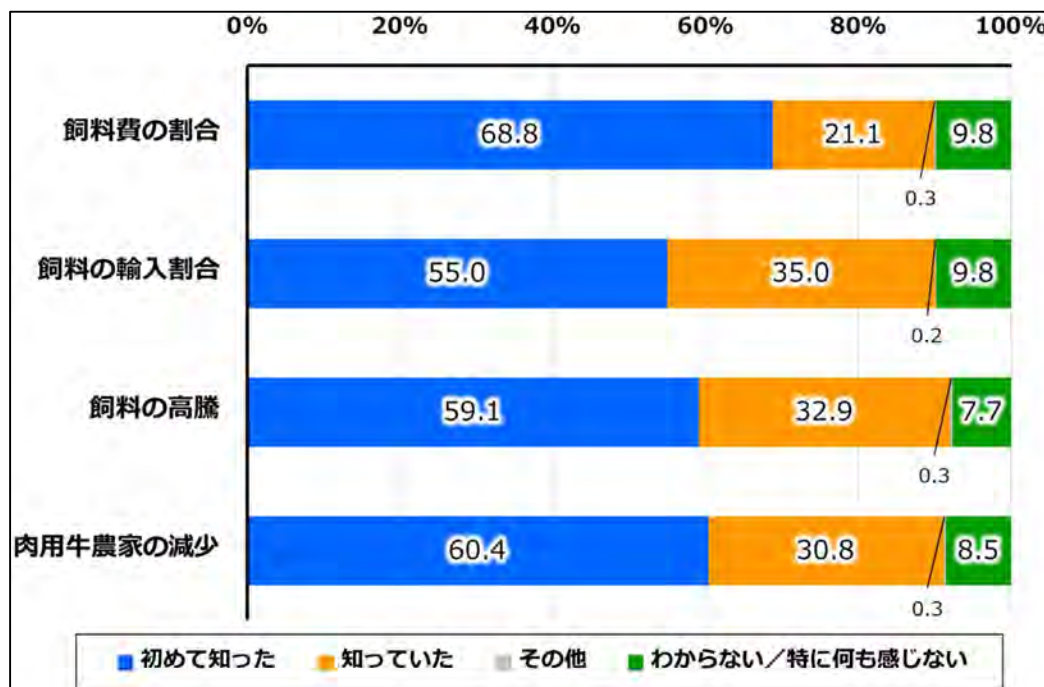
(1) 畜産業の現状に対する認識

認知と感想に年代間の格差

- 畜産業の現状については、過半数が知らない状況
- 高齢層ほど畜産業の現状への認知度が高く、現状を心配する傾向が強い
- 農村地域で居住・仕事をしている人は認知度が低い

(ア) 畜産業の現状に対する認知と現状に対する感想に関する設問(「Q15 生産にかかる飼料費の割合」「Q17 飼料の輸入割合」「Q19 近年の飼料高騰」「Q21 肉用牛農家の減少」)に対する回答を比較してみると、初めて知った人の割合が多かったのは「生産にかかる飼料費の割合」で 68.8%、次いで「肉用牛農家の減少」(60.4%)、「近年の飼料高騰」(59.1%)となった(図 3-1-1)。今回選択肢として新設した「わからない/特に何も感じない」はいずれの設問にも約 1 割ほどの回答があった。

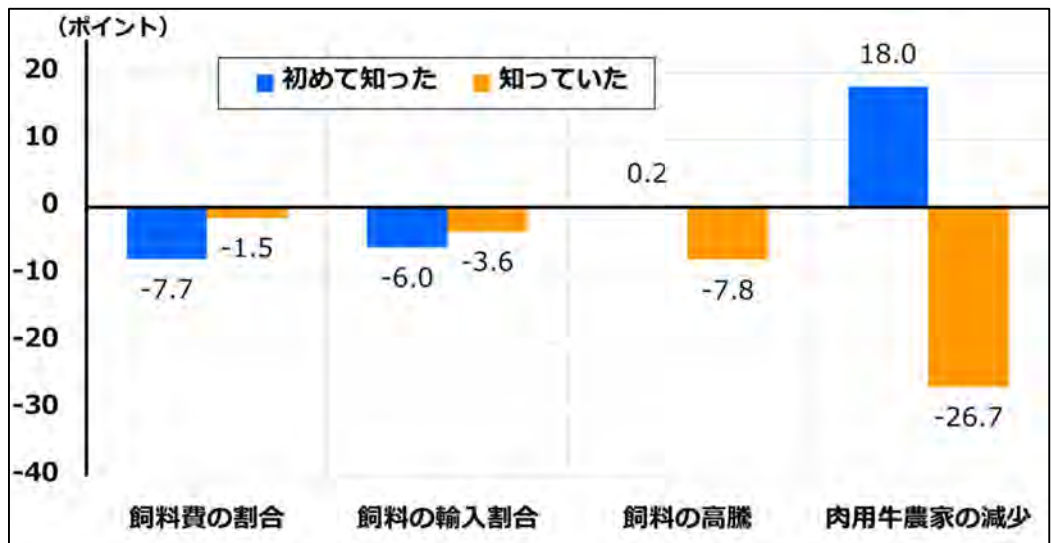
図 3-1-1: 畜産業の現状に対する認知



畜産業の現状に対する認知について前年と比較すると、選択肢を新設した影響もあるが、「知っていた」と回答した人の割合はいずれの設問でも減少した(図 3-1-2)。「初めて知った」との回答は「Q15 生産にかかる飼料費の割合」と「Q17 飼料の輸入割合」で減少、「Q19 近年の飼料高騰」と「Q21 肉用牛農家の減少」で増加していた。

特に、「Q21 肉用牛農家の減少」は、前年の調査では「知っていた」人が 57.5%と最も認知度が高い設問であったが、今回は 30.8%と 26.7 ポイントも減少していた。また、様々なモノの高騰が叫ばれる中ではあるが、「Q19 近年の飼料高騰」についても「初めて知った」人は前年よりわずかではあるが増加し、「知っていた」人は 7.8 ポイント減少していた。

図 3-1-2:【前年差】畜産業の現状に対する認知



それぞれの現状に対する感想について比較すると、「高い(高騰、深刻)」との回答が中心であったが、特に「飼料の高騰」で 82.7%と最も多かった(表 3-1-1)。また、「飼料費の割合」については「妥当」が 14.8%と他の設問と比較すると多かった。

表 3-1-1: 畜産業の現状に対する感想

(単位: %)

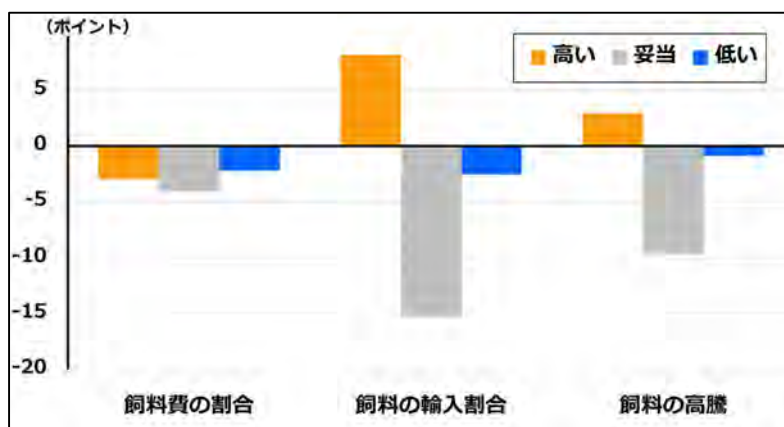
	初めて知った			知っていた			その他	わからない/ 特に何も感じない	初めて知った	知っていた	高い	妥当	低い
	高い	妥当	低い	高い	妥当	低い							
飼料費の割合	54.5	11.8	2.5	17.4	3.0	0.7	0.3	9.8	68.8	21.1	71.9	14.8	3.3
飼料の輸入割合	44.7	8.0	2.3	31.8	2.6	0.6	0.2	9.8	55.0	35.0	76.6	10.5	2.9
飼料の高騰	51.5	4.7	2.9	31.1	1.3	0.5	0.3	7.7	59.1	32.9	82.7	5.9	3.4
肉用牛農家の減少	51.9	5.8	2.7	27.9	2.4	0.5	0.3	8.5	60.4	30.8	79.8	8.2	3.2

畜産業の現状に対する感想についても前年と比較すると、選択肢を新設したり表現を若干変更(※)したため単純には比較しづらいが、全体的に「妥当」や「低い」とする回答は減少し、「高い」とする回答が増加していた(図 3-1-3)。特に「飼料の輸入割合」については、「妥当」とする回答が前年は 25.7%あったのに対し、今回は 10.5%と 15.2 ポイントも減少していた。

(※) 今回「見聞きした事があるが、改めて〇〇は妥当だと感じた」

前年「見聞きした事があり、〇〇は思っていた通りだった」

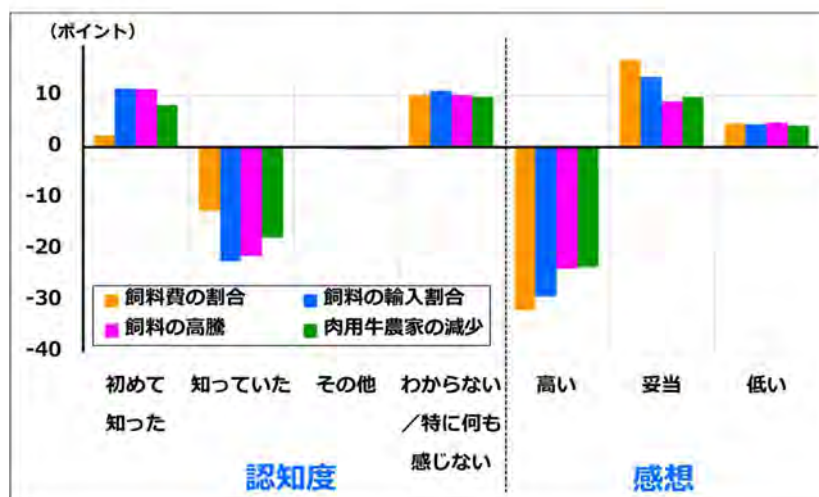
図 3-1-3:【前年差】畜産業の現状についての認知と感想



各設問に対する詳細は後述するが、年代別の傾向としては前年と同様で、全設問において若年層の畜産業の現状に対する認知度の低さ・関心のなさが際立つ結果になった。また、現状に対する感想にも年代間格差が見られた。

各設問の認知度と感想についての年代別選択率の差を比較したのが図 3-1-4 である。20-30 代の平均選択率と 60-70 代以上のそれを算出し、20-30 代から 60-70 代以上を差し引いたものであり、値が高いほど若年層の選択率が高いことを示す。これを見ると、畜産業の現状に対する認知度については「初めて知った」や「わからない」は若年層の選択率が高くなっている。また、現状に対する感想については「高い」は高齢層の選択率が、「妥当」や「低い」は若年層の選択率が高かった。

図 3-1-4:【前年差】畜産業の現状についての認知と感想(若年層-高齢層)



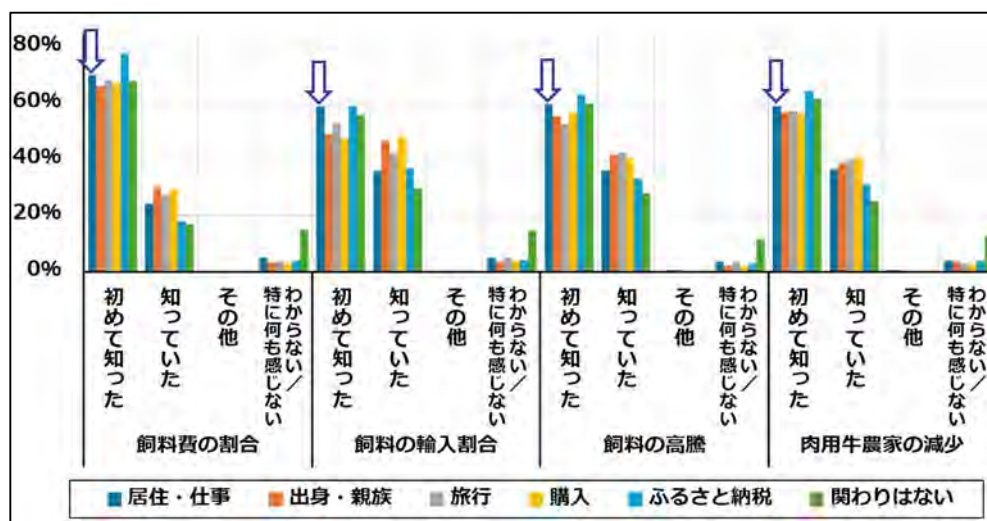
認知度で若年層と高齢層の差が比較的小さかった「飼料費の割合」であるが、感想については「高い」や「妥当」で差が大きかった。この「飼料費の割合」の例は、現状を認知する程度に年代による差はなくても、それに対する感想は異なっているケースがあることを示しており、年代による感想や考え方の違いを把握して情報を伝えていくことの必要性を示唆している。

また、農村との関係による違いを認知度と感想に分け、設問を横断して比較してみた。

まず、畜産業の現状に対する認知度について見ると、農村と「関わりはない」人はいずれの設問でも「わからない/特に何も感じない」の選択率が他よりも 10 ポイント近く高く、「知っていた」も他より選択率が低く、関心の薄さが見られる予想どおりの結果であった(図 3-1-5)。

「初めて知った」に着目すると、「ふるさと納税」や「関わりはない」人、そして意外にも「居住・仕事」の人の選択率が他より高かった。なお、「ふるさと納税」の人は、「関わりはない」人と比べ、「わからない/特に何も感じない」の選択率は低いことから、“関心がないわけではなく、ただ認知していなかった”と考えられる。

図 3-1-5:【農村との関係別】畜産業の現状についての認知



現状に対する感想についても意外な結果であった。いずれの属性も「高い」との感想が 7 割を超えるほど圧倒的な選択率ではあったが、「居住・仕事」の人は「高い」との感想が他の属性よりも少なく、「妥当」「低い」とする感想は他よりも多かった。

「居住・仕事」の人のこうした認知度や感想は、農村地域の混住化の進展や畜産農家の偏在化も影響しているのではないかと考えられる。

図 3-1-6:【農村との関係別】畜産業の現状についての感想

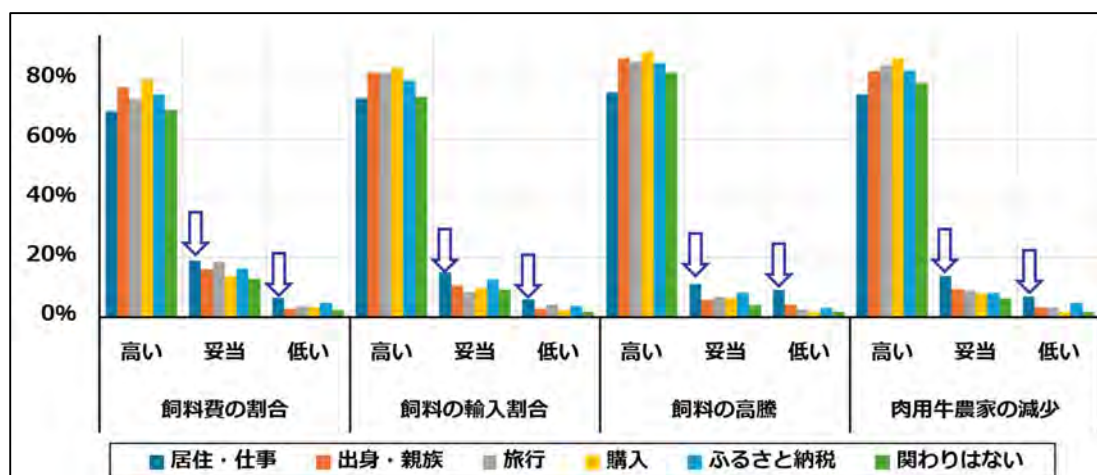
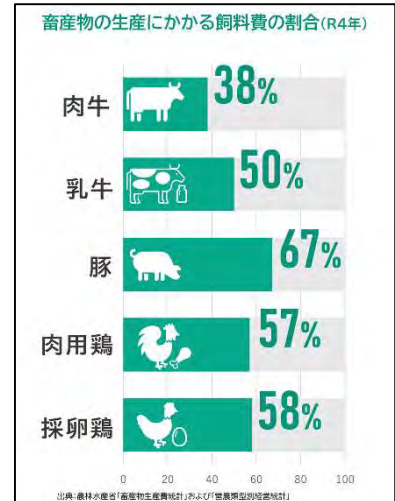


図 3-1-7:飼料費の割合



(イ)図 3-1-7 を示した上で、食肉の Q15 生産にかかる飼料費の割合についての感想を尋ねた設問では、「初めて知ったが、飼料費の割合が高いと感じた」が 54.5%で最も多く、次いで「見聞きした事があるが、改めて飼料費の割合が高いと感じた」が 17.4%であった(図 3-1-8)。認知度については「初めて知った」が 68.8%、感想については飼料費の割合が「高いと感じた」が 71.9%であった。

選択肢に「わからない/特に何も感じない」が新設されたため、単純には前年と比較しづらいが、多くの選択肢で選択率が下がる中、「見聞きした事があるが、高いと感じた」はほぼ前年並みであった。

図 3-1-8:生産にかかる飼料費の割合について

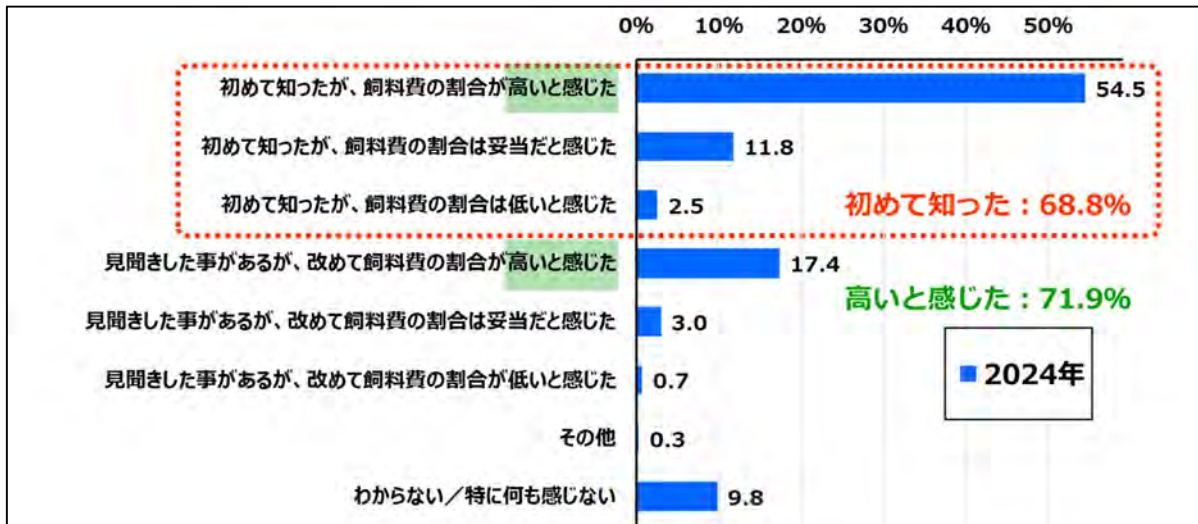
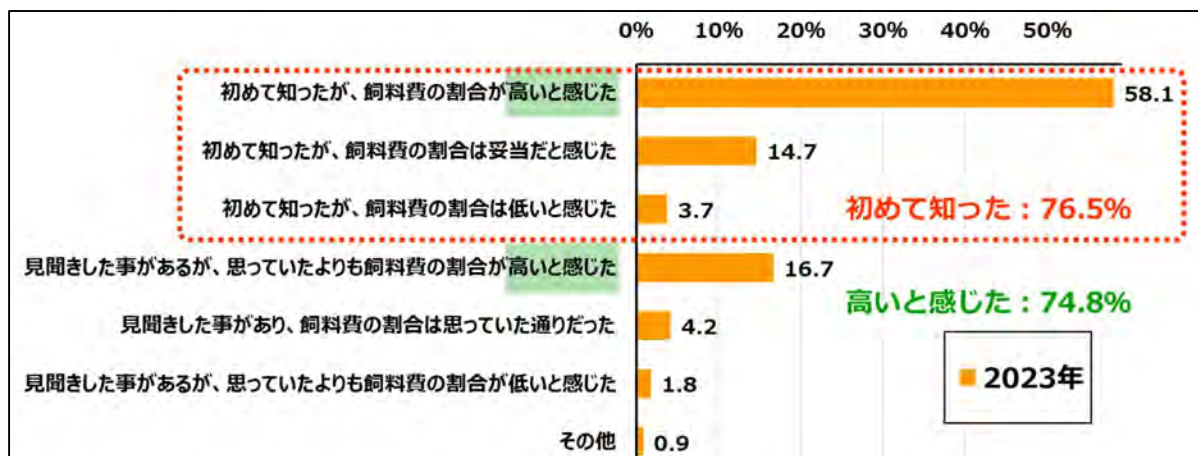
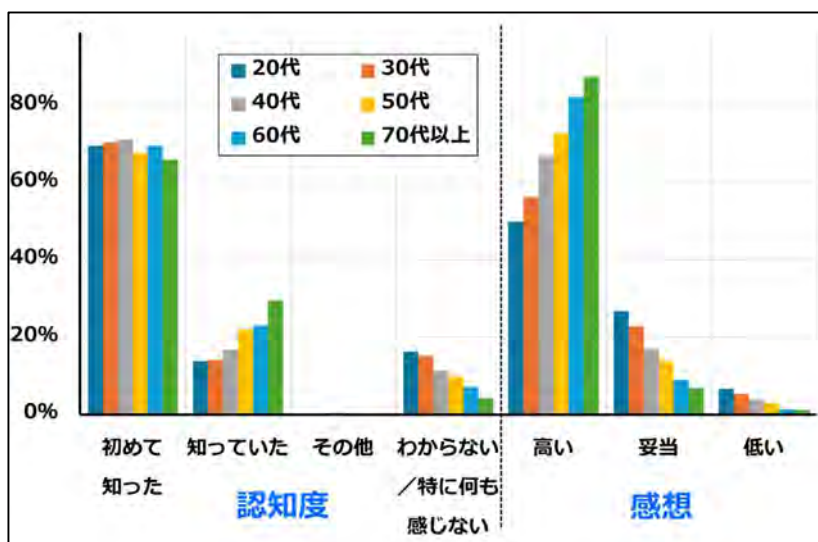


図 3-1-9:【前年】生産にかかる飼料費の割合について



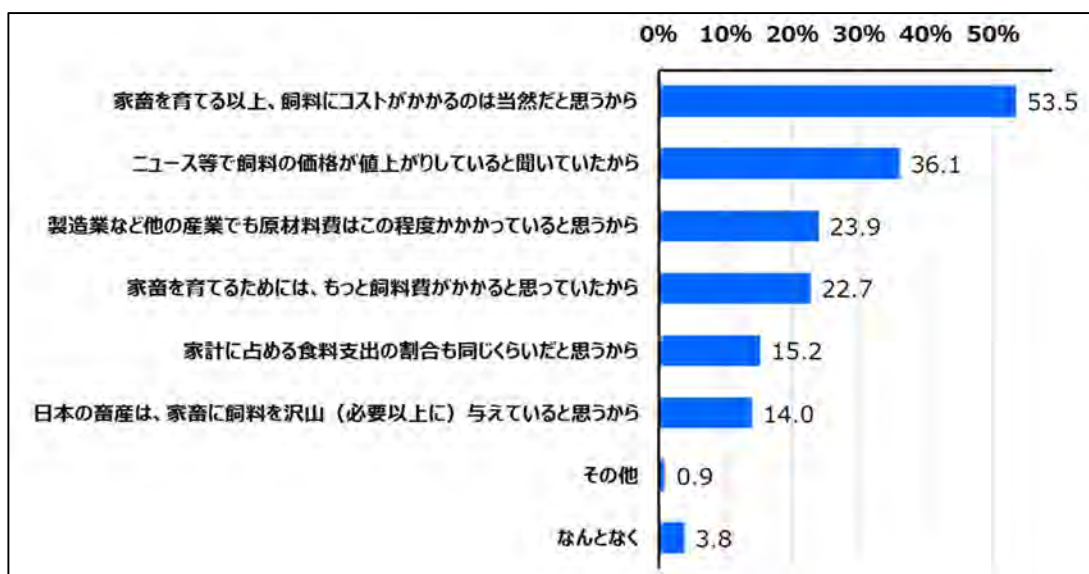
年代別で見ると、生産にかかる飼料費の割合に対する認知度や感想が年代により異なっていた（図 3-1-10）。認知度については若年層ほど「わからない/特に何も感じない」の選択率が高く、飼料費の割合が「高いと感じた」の選択率は低かった。しかし、後述する他の設問と比べると、「初めて知った」の年代差は選択率が最も高い 40 代と最も低い 70 代以上でも 5.3 ポイントと、他の設問での差が 10 ポイント以上であったのに比べて小さかった。

図 3-1-10:【年代別】生産にかかる飼料費の割合について



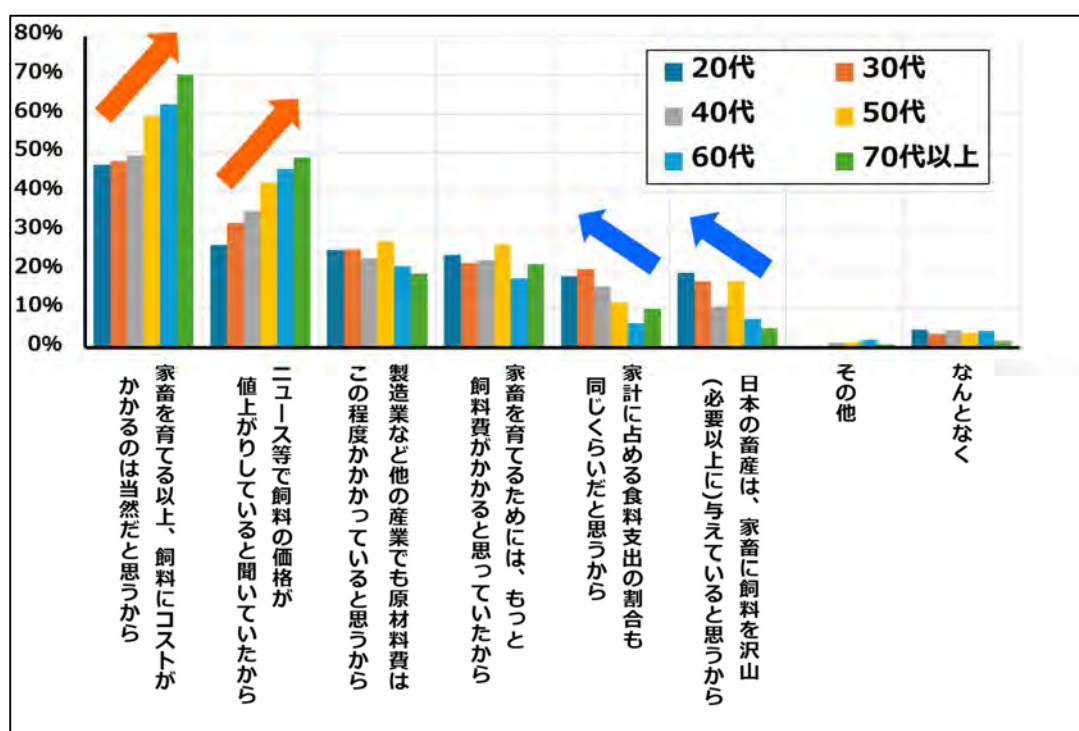
Q16 前問で畜産物の生産にかかる飼料費の割合が妥当または低いと回答した人にその理由を尋ねたところ、「家畜を育てる以上、飼料にコストがかかるのは当然だと思うから」が 53.5%と最も多く、次いで「ニュース等で飼料の価格が値上がりしていると聞いていたから」が 36.1%であった（図 3-1-11）。

図 3-1-11: 生産にかかる飼料費の割合が「妥当」「低い」と回答した理由（複数回答）



年代別で見ると、回答の多かった上位2つの選択肢は高齢層ほど選択率が高い傾向であった（図3-1-12）。一方で、それ以外の選択肢（特に「家計に占める食料支出の割合も同じくらいだと思ふから」や「日本の畜産は、家畜に飼料を沢山（必要以上に）与えていると思ふから」）では若年層の方が高齢層よりも選択率が高い傾向が見られた。高齢層が特に上位2つの選択肢に回答が集中しているのに対し、若年層は2位以下の選択率に大きな差が見られなかった。若年層は様々な情報に触れることが多いことからこのように回答が分散する結果になっているのではないと思われる。畜産業の現状は様々な要因による結果であることも事実だが、どの要因が最もポイントとなっており、どこを優先して解決する必要があるのかを端的に伝え、理解を深めていく工夫が必要かもしれない。

図3-1-12:【年代別】生産にかかる飼料費の割合が「妥当」「低い」と回答した理由（複数回答）



Q16、Q17の「その他」の自由回答を見ると、「飼料は輸入品が多いと思うので」「飼料は殆どが輸入に頼っているので円安のせいで飼料費が高騰するのは当たり前」という“飼料が輸入品であるため”との意見が多かった。また、「業務として畜産をしているのであれば、利益を考えての価格設定をしていると考えるため」「コストに応じた価格になっていると思ふから」という“ビジネスとしての合理的判断の結果であるから”との意見もあった。

後者の意見については、ビジネスとして利益が出るように原材料費・経費を設定するのは当然のことではあるが、畜産業においては生産コストの価格転嫁が思うようには進まず、赤字経営という状況が多々発生している現状があり、そうした現状を知らない消費者との意識の乖離が見られた。

補足データ

生産物の生産にかかる飼料費の割合が「妥当」または「低い」と回答した理由として、「家畜を育てる以上、飼料にコストがかかるのは当然だと思うから」との回答が最も多かった。とはいえ、昨今は身近に家畜がないため、消費者は身近な動物であるペットの食費と比較している可能性が考えられる。ちなみに表 3-1-2 は犬と猫の 1 か月あたりの支出全体と食料費(エサ代)、支出に占める食料費の割合を比較したグラフである。犬が 36%、猫が 55%という結果で、肉牛の 38%や肉用鶏の 57%と同じくらいであった。

表 3-1-2: 支出に占める食料費の割合

1か月あたりの支出			
	犬	猫	人間
全体	16,156	10,171	293,997
食料	5,847	5,633	86,554
主食	3,964	3,748	-
おやつ	1,883	1,885	-
食料費の割合	36%	55%	29%

出所：一般社団法人ペットフード協会「令和5年（2023年）全国犬猫飼育実態調査」より
総務省「家計調査（2023年）」（二人以上世帯、品目分類）より

(ウ) Q17 日本の飼料の輸入割合が約 75%であることについて感じるところを尋ねた設問では、「初めて知ったが、飼料の輸入割合が高いと感じた」が 44.7%で最も多く、次いで「見聞きした事があるが、改めて飼料の輸入割合が高いと感じた」が 31.8%であった(図 3-1-13)。認知度については「初めて知った」が 55.0%、感想については輸入割合が「高いと感じた」が 76.6%であった。

選択肢に「わからない/特に何も感じない」が新設されたため、単純には前年と比較しづらいが、「見聞きした事があり、妥当と感じた」人は大きく減少(▲11.9 ポイント)し、「見聞きした事があり、改めて高いと感じた」が大きく増加した(+9.7 ポイント)。

図 3-1-13: 飼料の輸入割合について

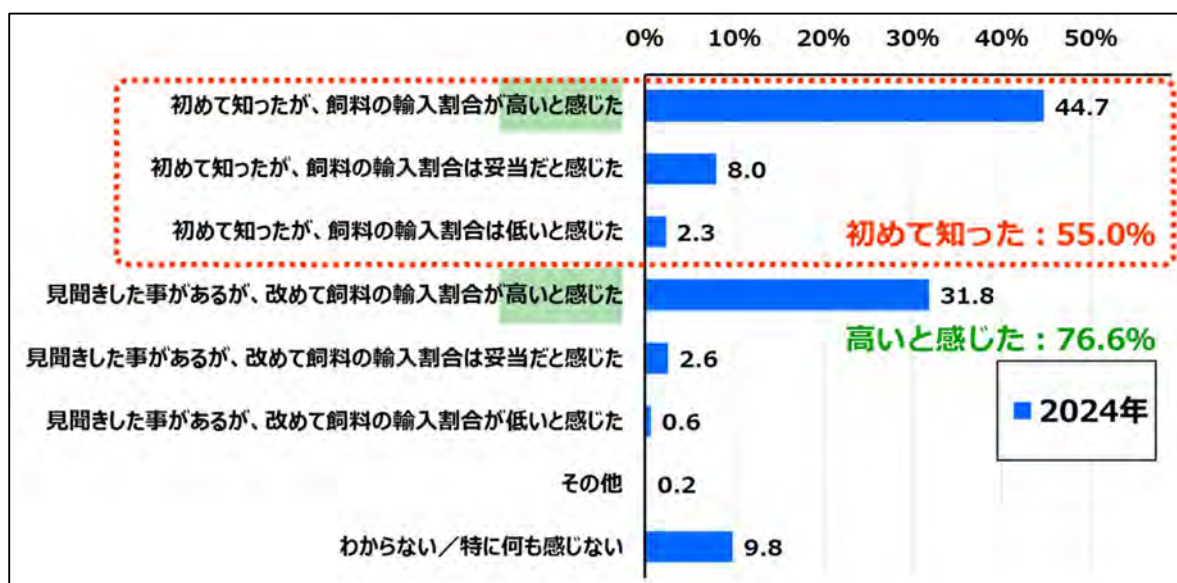
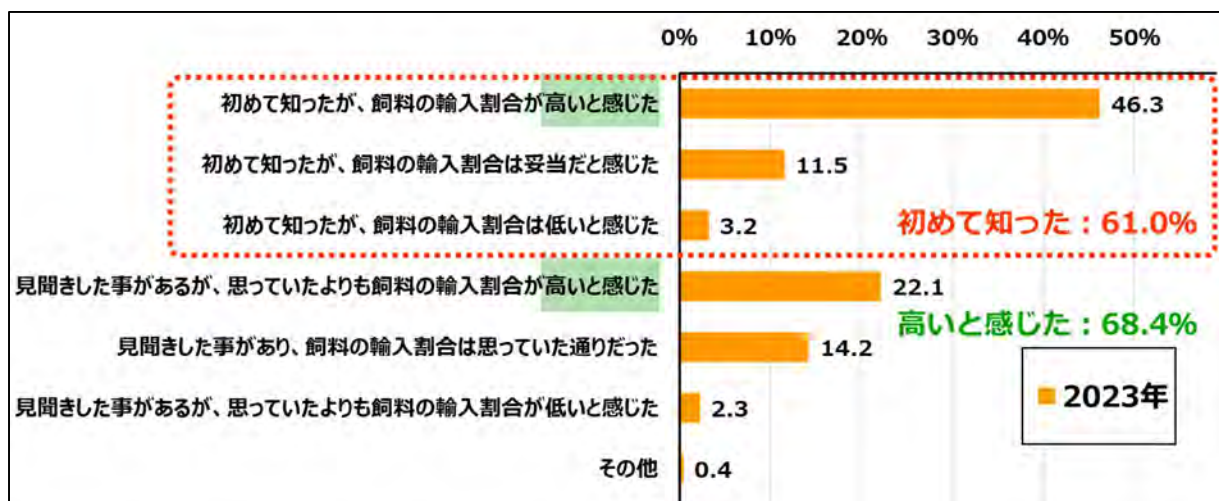
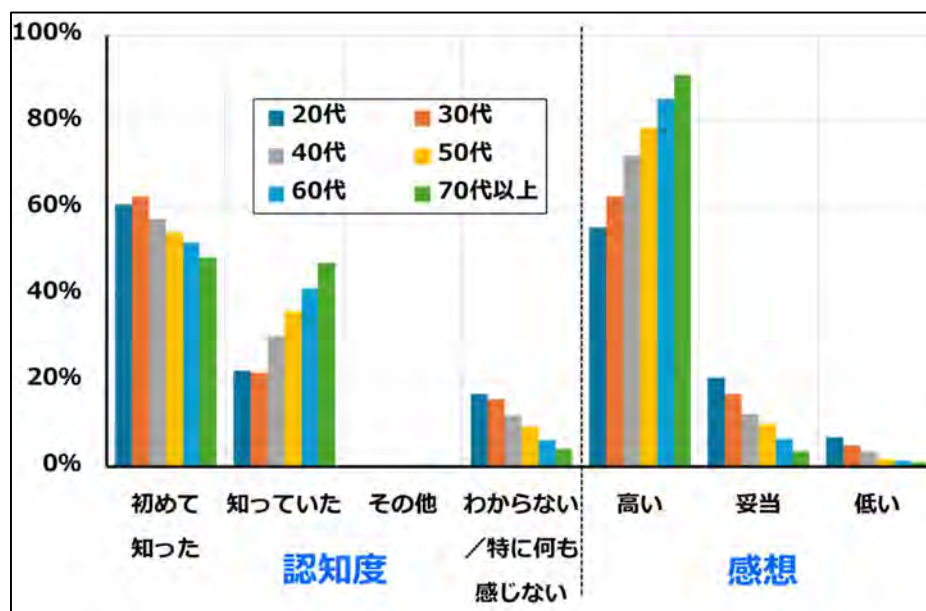


図 3-1-14: 【前年】飼料の輸入割合について



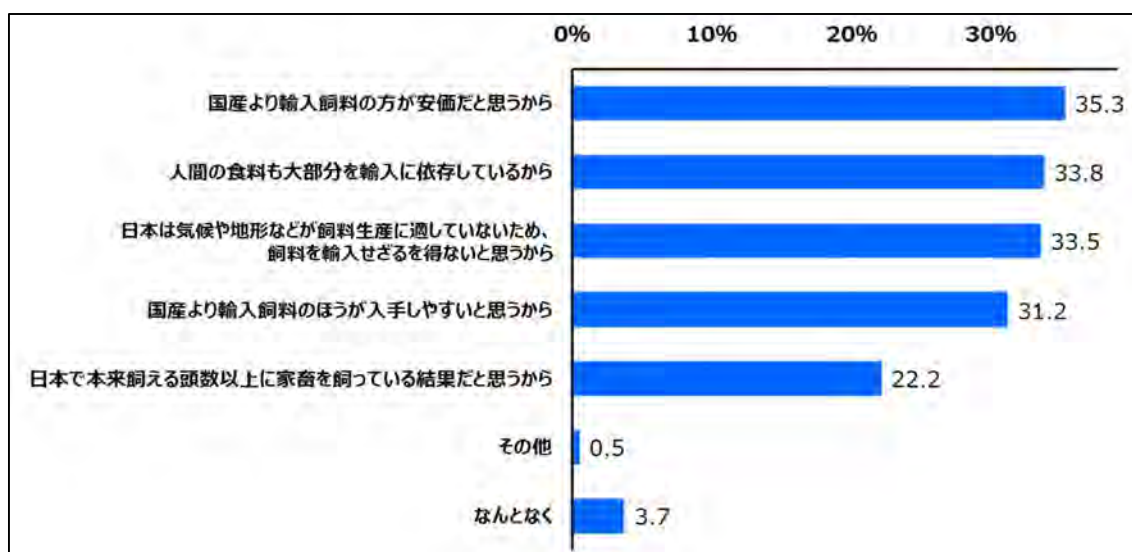
年代別では「Q15 飼料費の割合」とほぼ同様の傾向であり、飼料の輸入割合に対する認知度については若年層ほど「初めて知った」や「わからない/特に何も感じない」の選択率が高く、飼料の輸入割合を「高いと感じた」の選択率は低かった(図 3-1-15)。また、「初めて知った」の年代差は、選択率が最も高い 30 代と最も低い 70 代以上とで 14.0 ポイントであった。

図 3-1-15:【年代別】飼料の輸入割合について



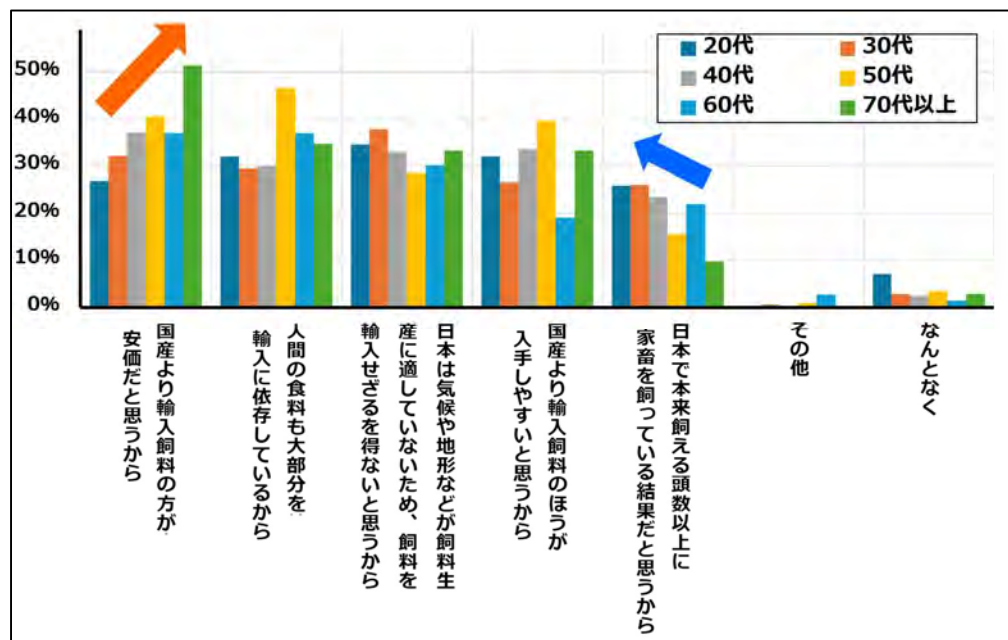
Q18 前問で日本の飼料の輸入割合が妥当または低いと回答した人にその理由を尋ねたところ、「国産より輸入飼料の方が安価だと思うから」が 35.3%と最も多く、次いで「人間の食料も大部分を輸入に依存しているから」が 33.8%であった(図 3-1-16)。上位 4 項目はいずれも 30% 台前半であり、突出して選択率の高い選択肢はなかった。

図 3-1-16: 日本の飼料の輸入割合が「妥当」「低い」と回答した理由(複数回答)



年代別に見ると、「国産より安価だから」は高齢層ほど、「飼える以上の家畜を飼っているから」や「なんとなく」は若年層ほど選択率が高い傾向で、その他の選択肢の選択率は年代によって様々であった(図 3-1-17)。

図 3-1-17:【年代別】飼料の輸入割合が「妥当」「低い」と回答した理由(複数回答)



Q17 や Q18 の「その他」の自由回答を見ると、Q17 では飼料の輸入割合が高いとの感想を持った人が多かった中、「以前から割合が高過ぎることを問題に思っている」「いつまで輸入に頼るのか？国は何らかの検討を始めるべき」と飼料の輸入割合が高いことに問題意識を持っている意見があった。一方で Q18 では「家畜用の飼料生産を農家があまり積極的にしないから。要はもうからないから」と飼料の国内生産が増えないから飼料の輸入割合を「妥当」「低い」と考える理由として挙げている意見が見られた。

(エ) 図 3-1-18 の飼料価格の年月別推移グラフを示した上で、Q19 トン当たり10万円近くになっている近年の飼料価格について感じるところを尋ねた設問では、「初めて知ったが、飼料価格が高騰していると感じた」が51.5%で最も多く、次いで「見聞きした事があるが、改めて飼料価格は高騰していると感じた」が31.1%であった(図 3-1-19)。認知度については「初めて知った」が 59.1%、感想については「高騰していると感じた」が 82.7%であった。

この設問も 選択肢に「わからない/特に何も感じない」が新設されたため、単純には前年と比較しづらいが、「見聞きした事があり、妥当と感じた」の選択率が前年よりも 8.7 ポイント減少していた。

図 3-1-18:飼料価格の推移



図 3-1-19: 近年の飼料価格の高騰について

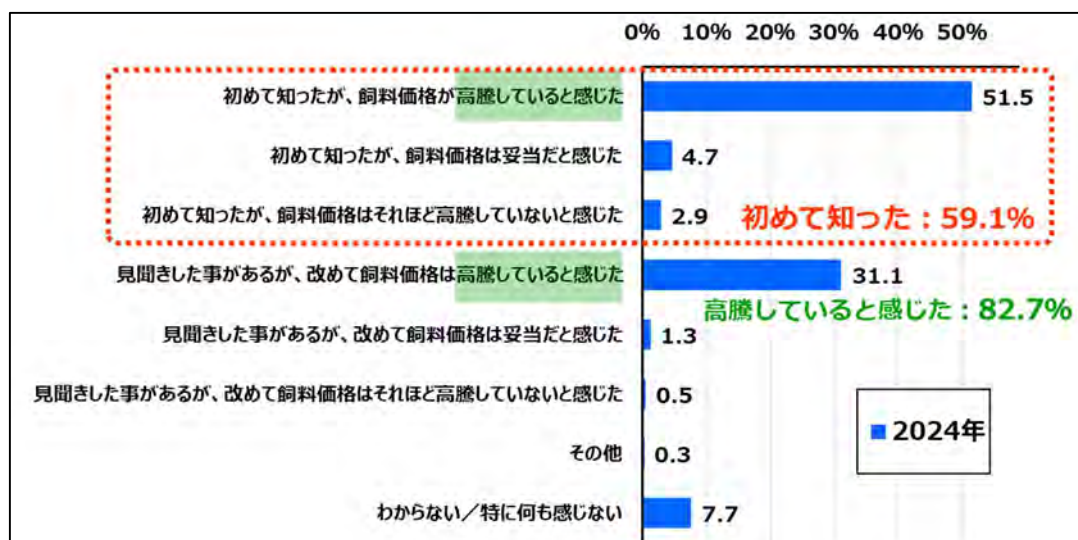
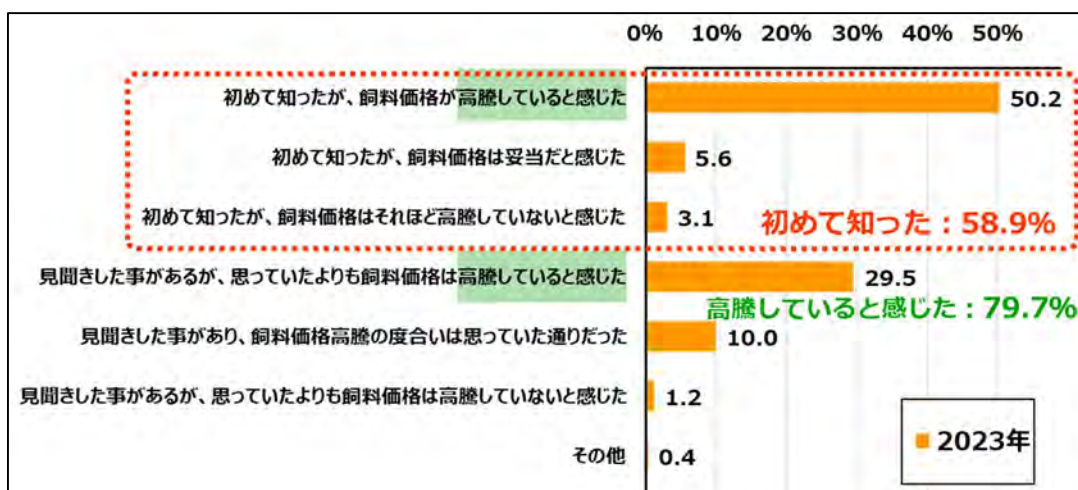
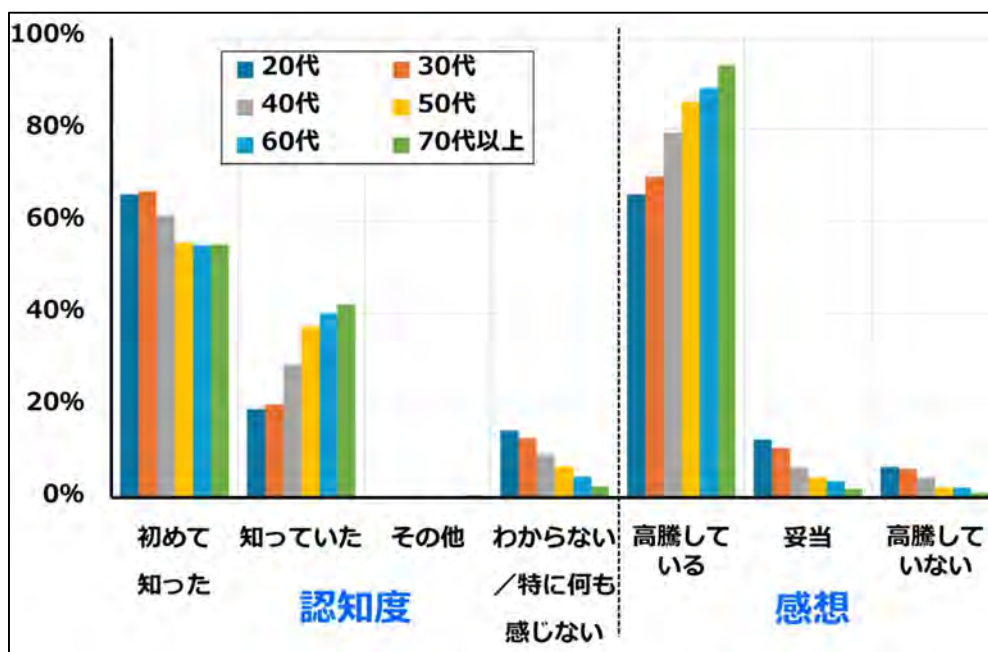


図 3-1-20:【前年】近年の飼料価格の高騰について



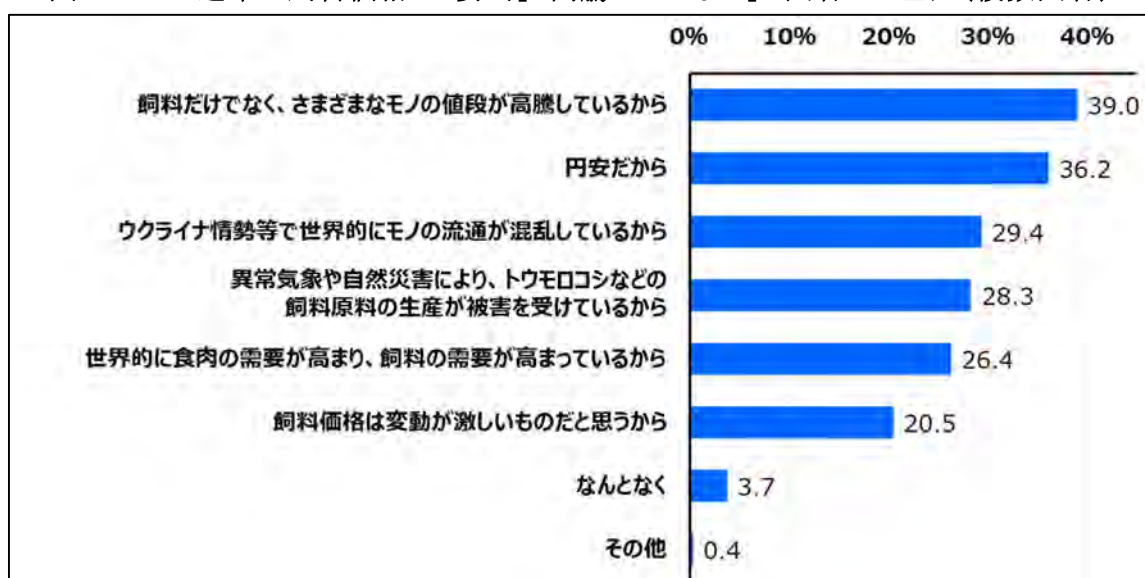
年代別では「Q15 飼料費の割合」「Q17 飼料の輸入割合」とほぼ同様の傾向で、飼料価格の高騰に対する認知度については若年層ほど「初めて知った」や「わからない/特に何も感じない」の選択率が高く、飼料価格が「高騰している」の選択率は低かった(図 3-1-21)。また、「初めて知った」の年代差は、選択率が最も高い 30 代と最も低い 60 代とで 11.7 ポイントであった。

図 3-1-21:【年代別】近年の飼料価格の高騰について



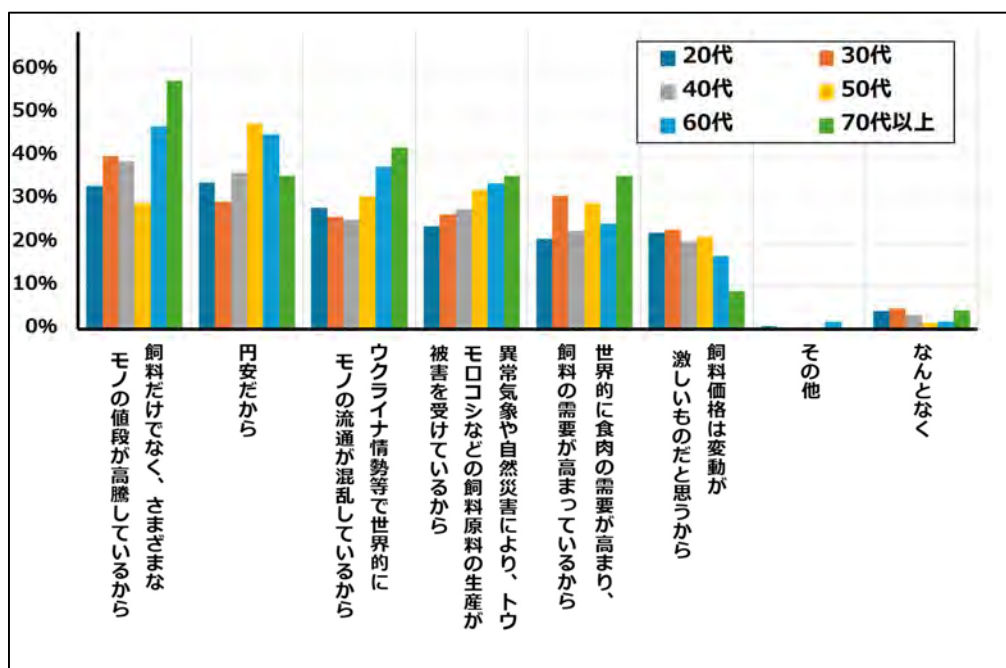
Q20 前問で近年の飼料価格が妥当または高騰していないと回答した人にその理由を尋ねたところ、「飼料だけでなく、さまざまなモノの値段が高騰しているから」が 39.0%と最も多く、次いで「円安だから」が 36.2%であった。

図 3-1-22: 近年の飼料価格が「妥当」「高騰していない」と回答した理由(複数回答)



年代別に見ると、ほぼいずれの選択肢も高齢層ほど選択率が高い傾向で、若年層ほど高いものは「飼料価格は変動が激しいものだから」や「なんとなく」の選択肢であった(図 3-1-23)。

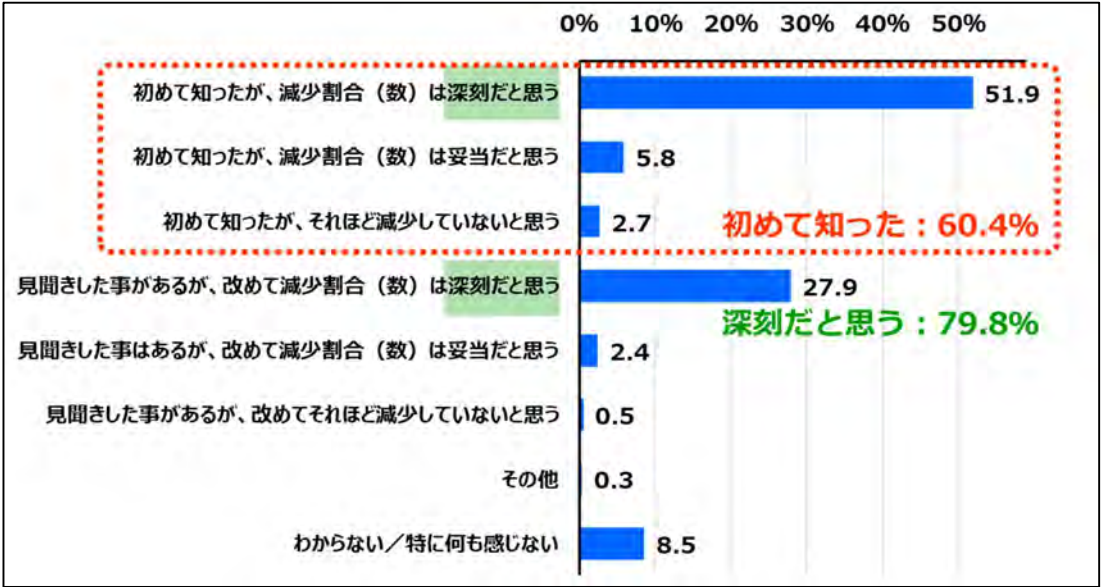
図 3-1-23:【年代別】近年の飼料価格が「妥当」「高騰していない」と回答した理由(複数回答)



Q19 や Q20 の「その他」の自由回答を見ると、「円安なのでしょうがない」「円安が大きいがもう少し高騰していると思った」「為替の関係もあると思う」というクールな意見が目立った。また、輸入割合が多いことで円安などの影響を強く受けることから、「国内産を使うべきだ」「輸入飼料を減らすべきだと思う」という意見も見られた。この質問に対する意見や感想としては妥当なものであるが、飼料価格の高騰が肉用牛農家にどのように影響するかを想像させるには、数字だけではなく、ストーリーのある説明をしていかないと、肉用牛農家の窮状について理解を得るには難しいと思われる。

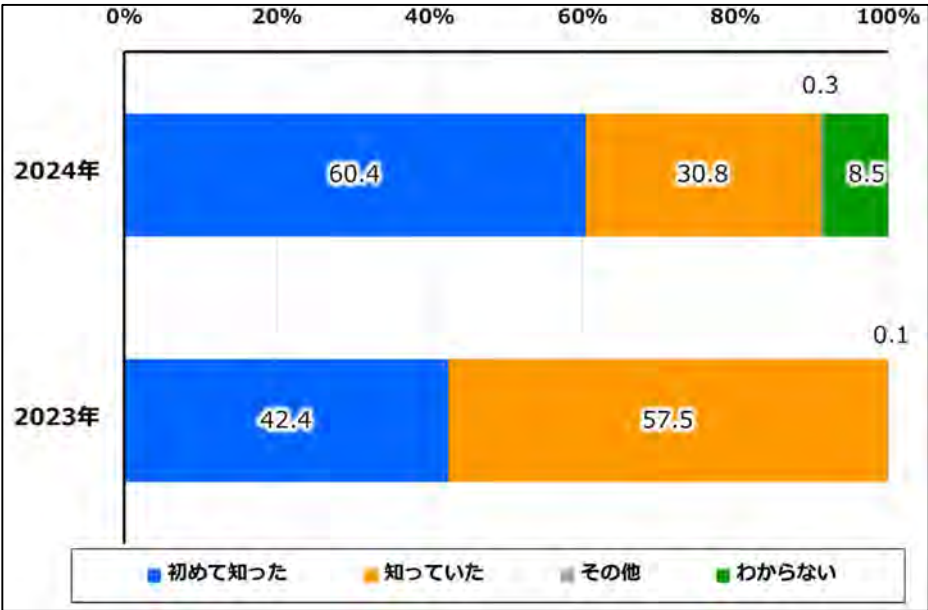
(オ) Q21 国内の肉用牛農家がこの10年間で約40%減少していることについて感じるところを尋ねた設問では、「初めて知ったが、減少割合(数)は深刻だと思う」との回答が51.9%と最も多く、次いで「見聞きした事があるが、改めて減少割合(数)は深刻だと思う」が27.9%であった(図3-1-24)。認知度については「初めて知った」が60.4%、感想については「深刻だと思う」が79.8%であった。

図 3-1-24: 肉用牛農家の減少について



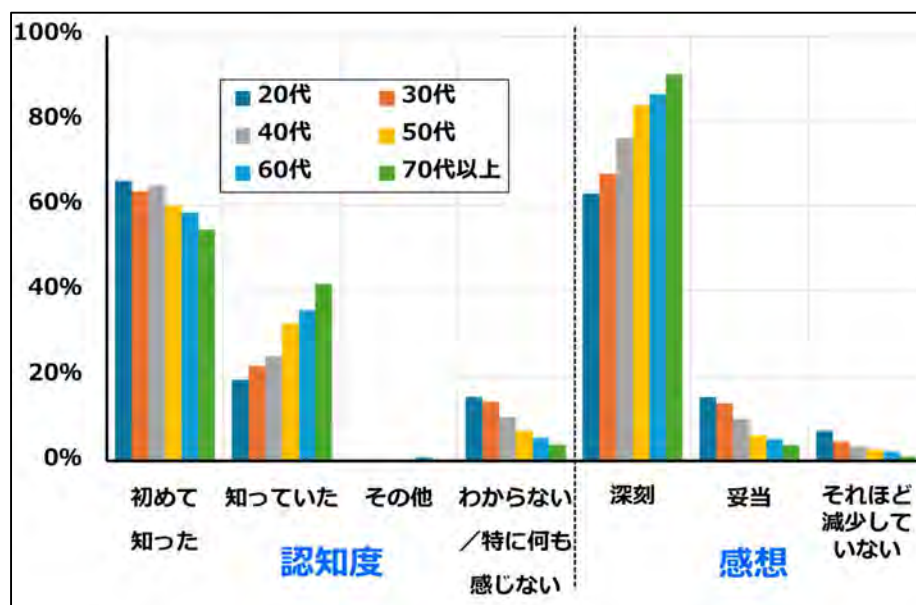
前年の調査では「知っていた」との回答が57.5%であり、認知度は他の設問のどれよりも高かったのだが、今回は「知っていた」が30.8%となっており、前年よりも認知度が大幅に低下していた(図3-1-25)。

図 3-1-25: 肉用牛農家の減少についての認知度



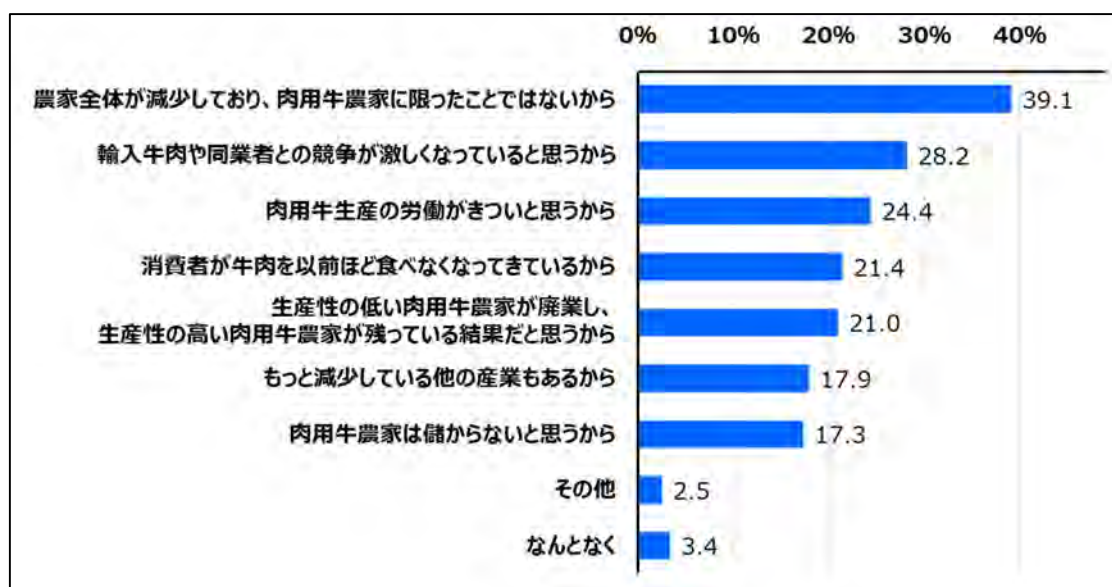
年代別に見ると、他の設問と同様、認知度については若年層ほど「初めて知った」や「わからない/特に何も感じない」の選択率が高く、肉用牛農家の減少を「深刻だと思う」との感想は低かった（図 3-1-26）。また、「初めて知った」の年代差は、選択率が最も高い 20 代と最も低い 70 代以上とで 11.4 ポイントであった。

表 3-1-26:【年代別】肉用牛農家の減少について



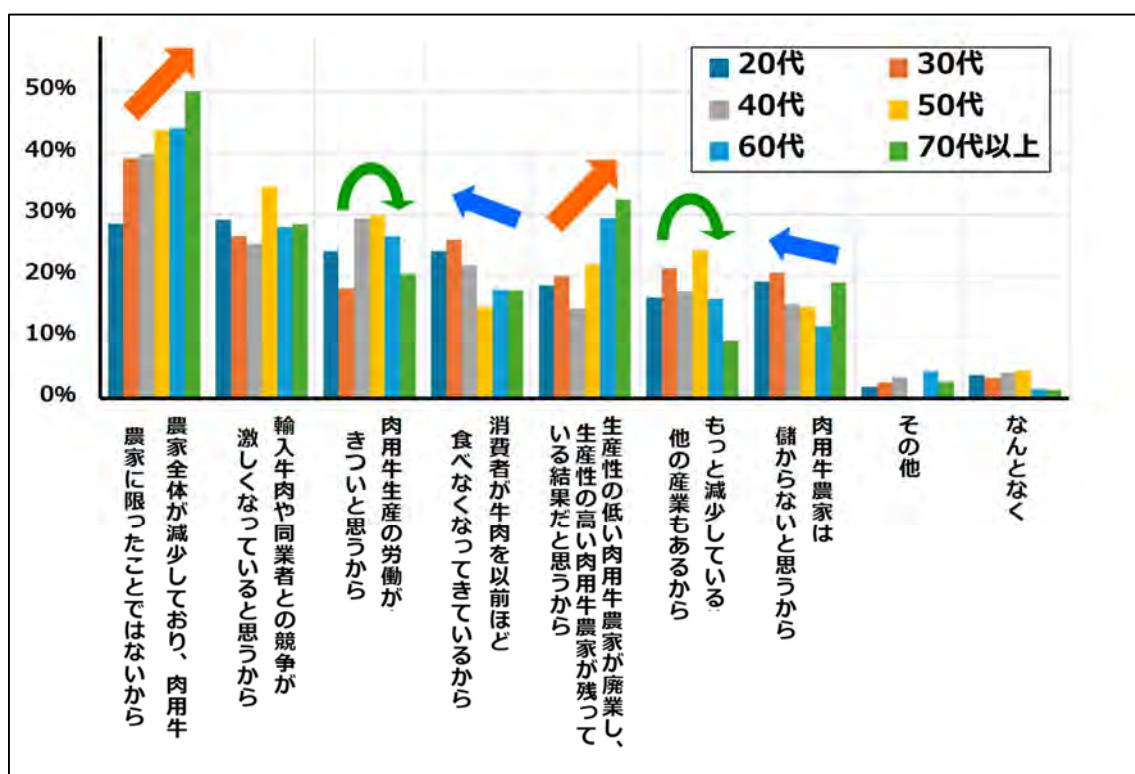
Q22 前問で国内の肉用牛農家が減少していることについて妥当またはそれほど減少していないと回答した人にその理由を尋ねたところ、「農家全体が減少しており、肉用牛農家に限ったことではないから」が 39.1%と最も多く、次いで「輸入牛肉や同業者との競争が激しくなっていると思うから」が 28.2%であった（図 3-1-27）。過半数を超える回答はなく、回答者によって様々な考えがあることがうかがえる。

図 3-1-27: 肉用牛農家が減少していることについて
「妥当」「それほど減少していない」と回答した理由（複数回答）



年代別に見ると、年代によって選択する理由の傾向が異なっていた(図 3-1-28)。「肉用牛農家に限ったことではないから」や「生産性の高い肉用牛農家が残ったから」は高齢層ほど高く、「牛肉を食べなくなっているから」や「儲からないから」は若年層ほど、「労働がきついから」「もっと減少している業態もあるから」は中年層で高い傾向が見られた。

図 3-1-28: 肉用牛農家が減少していることについて
「妥当」「それほど減少していない」と回答した理由(複数回答)



Q21 や Q22 の「その他」の自由回答を見ると、肉用牛農家が減少していることを妥当・低いとした理由としては、「そもそも人口自体が減ってるのだから当然だろうと思った」との意見が多かった。また、「高齢化や厳しい状況で新しい成り手がいないのでは」「業者の高齢化による廃業はやむを得ないと思っている。また業者の企業化の促進が急務だと思っている」という意見や「ブランド牛以外の肉牛はもう食べたくないの、減らしていくべきだと思う」という完全な嗜好品としての牛肉しか必要ないという意見も見られた。

なお、設問について、「戸数だけはわからない。規模や企業化も含めて提示願う」「単なる減少だけでは 大規模合理化なども考慮しなければわからない」という戸数だけでなく生産頭数や従業員数を考慮する必要があるという意見が見られた。

(2) 食肉価格への転嫁についての認識

半数が価格転嫁に理解 既に価格転嫁されているとの認識も半数

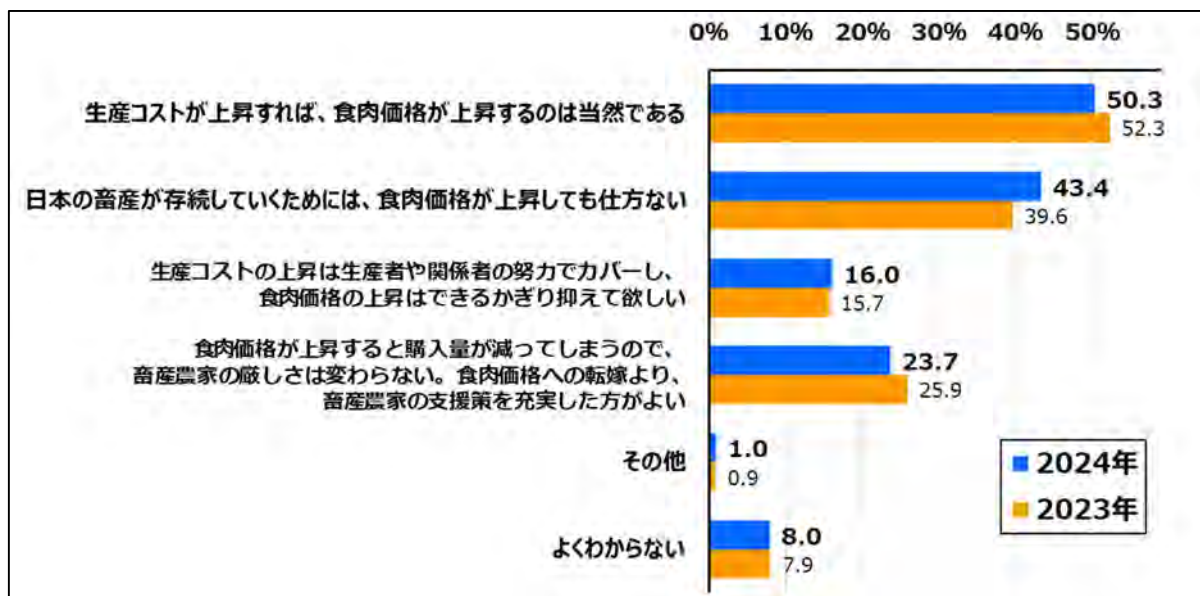
- 5割強が「生産コストに応じた価格上昇」に理解
- 約半数が既に生産コスト上昇分は価格転嫁されていると認識
- 価格許容度の高い高齢層でも既に価格転嫁されているとの認識が増加

(ア) Q23 飼料価格の高騰等による食肉の生産コスト上昇の中、生産コスト上昇分を食肉価格(小売価格)に転嫁することについての考えを尋ねた設問の結果が図 3-2-1 である。

「生産コストが上昇すれば、食肉価格が上昇するのは当然である」が 50.3% (前年比 ▲2.0 ポイント) で最も多く、消費者は生産コストと食肉価格の関係を理解し、半数以上が価格上昇を当然のことと考えているようであった。次いで「日本の畜産が存続していくためには、食肉価格が上昇しても仕方ない」が 43.4% で、前年と比較すると 3.8 ポイント増加している。これら上位 2 つの選択肢は生産コスト上昇分の価格転嫁を受け入れる点では共通しているが、その選択率の合計は前年とほぼ同じであり、価格転嫁についての理解には大きな変化は見られなかった。

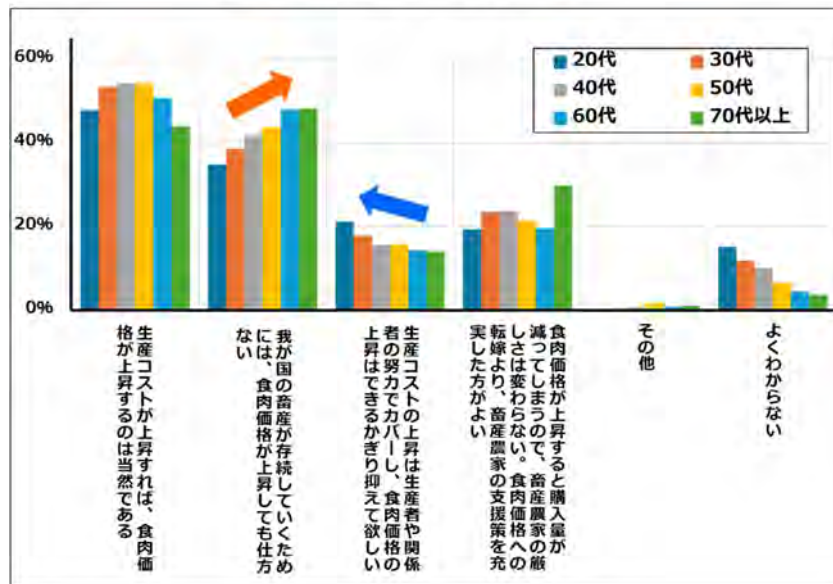
一方で、「食肉価格が上昇すると購入量が減ってしまうので、畜産農家の厳しさは変わらない。食肉価格への転嫁より、畜産農家の支援策を充実した方がよい」は 23.7% (同 ▲2.2 ポイント)、「生産コストの上昇は関係者の努力でカバーし、食肉価格の上昇はできるかぎり抑えて欲しい」は 16.0% (同 +0.3 ポイント) となっており、様々なモノの値段が上がる中、食肉価格の上昇を抑えることを望んでいる人も一定数存在していた。

図 3-2-1: 生産コスト上昇分の食肉価格への転嫁について(複数回答)



年代別で見ると、「生産コストが上がれば、食肉価格が上昇するのは当然」との認識は70代以上を除いてどの年代においても高い状況であったが、40代、50代では54.3%、54.2%と特に高かった(図3-2-2)。次いで選択率が高かった「我が国の畜産が存続していくためには、食肉価格が上昇しても仕方ない」は高齢層で選択率が高く、若年層で低い傾向であった。一方で、「生産コストの上昇は生産者や関係者の努力でカバーし、食肉価格の上昇はできるかぎり抑えて欲しい」は全体

図3-2-2:【年代別】生産コスト上昇分の食肉価格への転嫁について(複数回答)

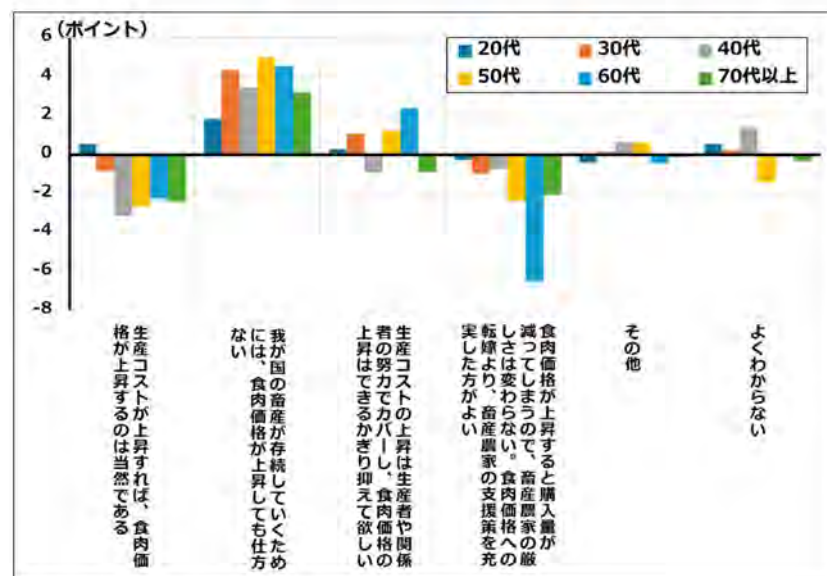


では16.0%であるのに対し、20代は21.3%と高く、若年層ほど選択率が高い傾向であった。

こうした年代別傾向からは、飼料費が畜産経営に占める割合や飼料価格の上昇などの現状を知っている高齢層は、そうした現状をあまり知らない若年層に比べ、日本の畜産業や農家を支援しようとする意向が強いことがうかがえる。一方で、価格に敏感な若年層では食肉価格の上昇を望まない回答が多かった。

前年と比較して見ると、年代による変化が見られた(図3-2-3)。「生産コストが上がれば食肉価格が上昇するのは当然」については、ほとんどの年代で減少する中で、20代は増加していた。逆に、「我が国の畜産が存続していくためには、食肉価格が上昇しても仕方ない」はいずれの年代も

図3-2-3:【前年差】【年代別】生産コスト上昇分の食肉価格への転嫁について(複数回答)



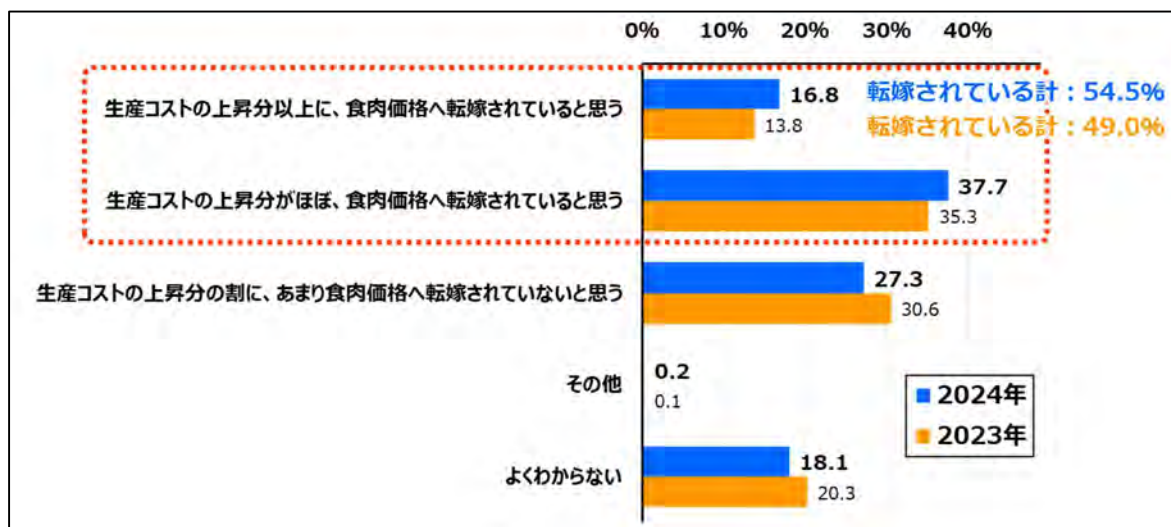
増加しており、様々なモノの価格が上昇する中、食肉価格の上昇は「当然」との積極的な選択から「仕方ない」との消極的な選択に意識が変化していることがうかがえる。一方で「生産コストの上昇は生産者や関係者の努力でカバーし、食肉価格の上昇はできるかぎり抑えて欲しい」では60代が他の年代以上に増加しており、価格許容度が高い60代においても価格転嫁を抑えて欲しいという意向が強まっていた。

(イ) Q24 食肉の生産コストの上昇分が食肉価格(小売価格)に転嫁されているかどうかについて尋ねた設問の結果が図 3-2-4 である。

「生産コストの上昇分がほぼ、食肉価格へ転嫁されていると思う」が 37.7% (前年比+2.4 ポイント)と最も多く、次いで「生産コストの上昇分の割に、あまり食肉価格へ転嫁されていないと思う」が 27.3% (同▲3.3 ポイント)となっていた。「生産コストの上昇分以上に、食肉価格へ転嫁されていると思う」(16.8%、同+3.0 ポイント)を合わせた「転嫁されている」の合計は 54.5% (同+5.5 ポイント)であり、回答者の過半数が「食肉価格に転嫁されている」という回答であった。

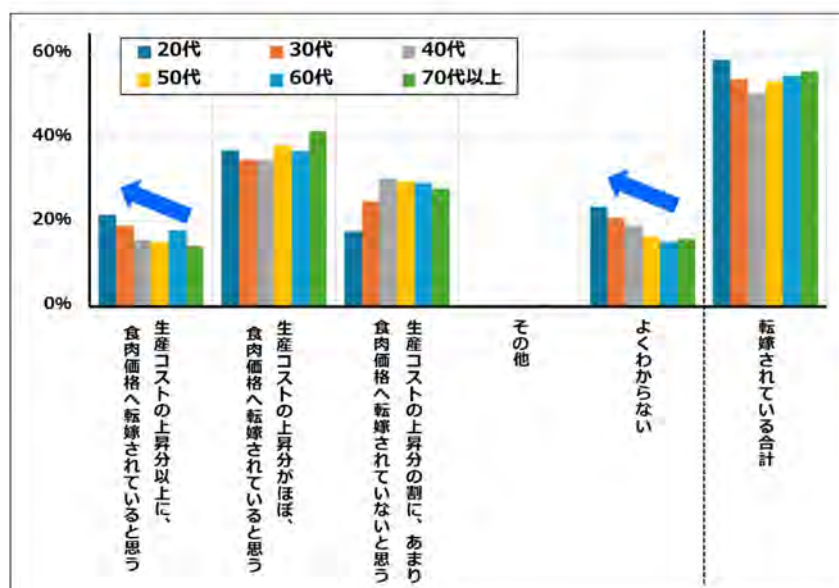
前年と比較すると、「食肉価格に転嫁されている」が増加し、「転嫁されていない」は減少する結果となった。

図 3-2-4: 生産コスト上昇分の食肉価格への転嫁について



年代別に見ると、前年と傾向は似ており、「転嫁されている」の選択率は 20 代が約 6 割と特に高く、とりわけ「生産コストの上昇分以上に、食肉価格へ転嫁されていると思う」は若年層ほど選択率

図 3-2-5: 【年代別】生産コスト上昇分の食肉価格への転嫁について

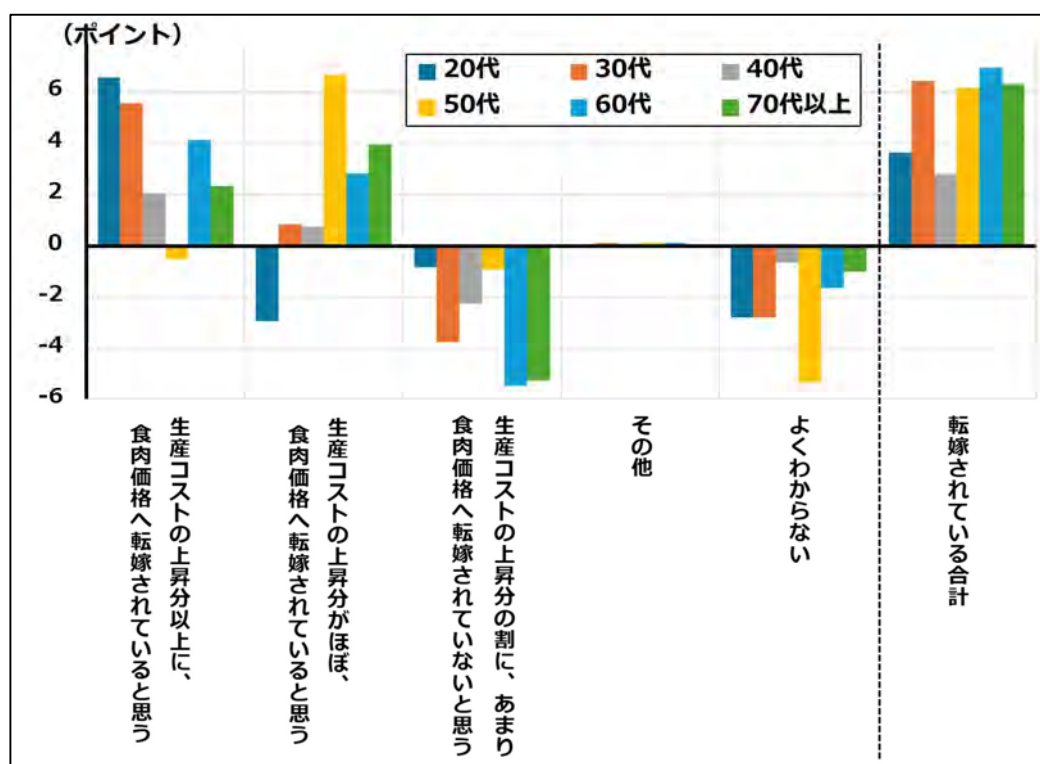


が高い傾向であった(図 3-2-5)。また、「よくわからない」についても若年層ほど選択率が高かった。しかし、「生産コストの上昇分の割に、あまり食肉価格へ転嫁されていないと思う」は、前年の調査では高齢層ほど選択率が高く、畜産業への理解度と関連していたが、今回の調査では 20-40 代では同様の傾向が見られるものの、それ以上の年代では選択率はほぼ同じであった。

前年との差を示したのが図 3-2-6 であるが、「転嫁されている」の選択率はいずれの年代も増加しており、特に 50 代以上で大きく増加していた。Q14 食肉価格の値上げについての許容度についての質問で、高齢層は 10%の値上がりは許容しており、その選択率は前年よりも増加していたことを考えると、「価格の上昇は許容するけれども、生産コストの上昇分はもう価格に転嫁されているのではないか？」という理解であると考えられる。

食肉の小売価格が継続的に上昇している状況において、消費者の過半数は価格転嫁がほぼなされたと認識している。しかしながら、実際には小売価格の上昇を上回る生産費の増加が発生しており、消費者はそのことについて十分な認識を持ち合わせていないことがわかる。また、小売価格の上昇が長く続いていることで、畜産業への理解があるはずの高齢層においても価格転嫁への理解・寛容さが低下してきていることがうかがえる。

図 3-2-6:【前年差】【年代別】生産コスト上昇分の食肉価格への転嫁について

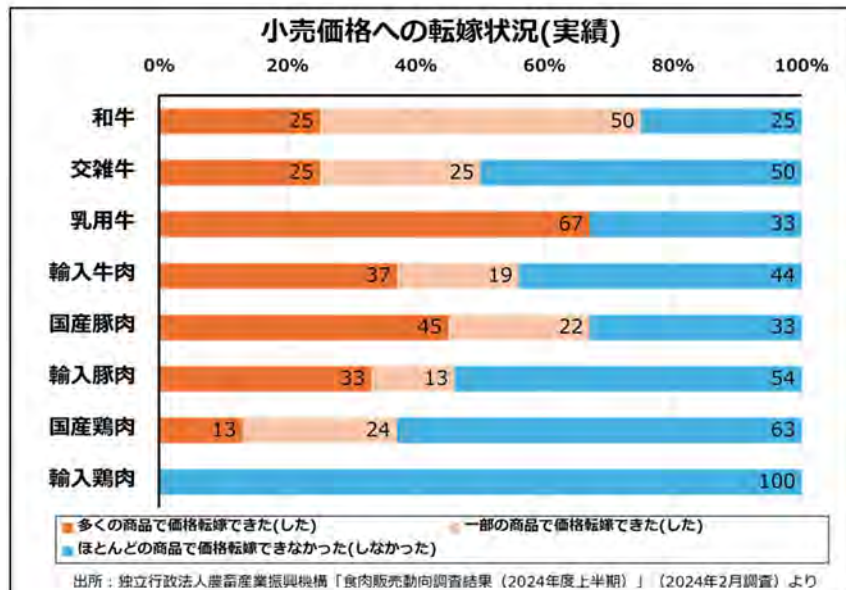


補足データ

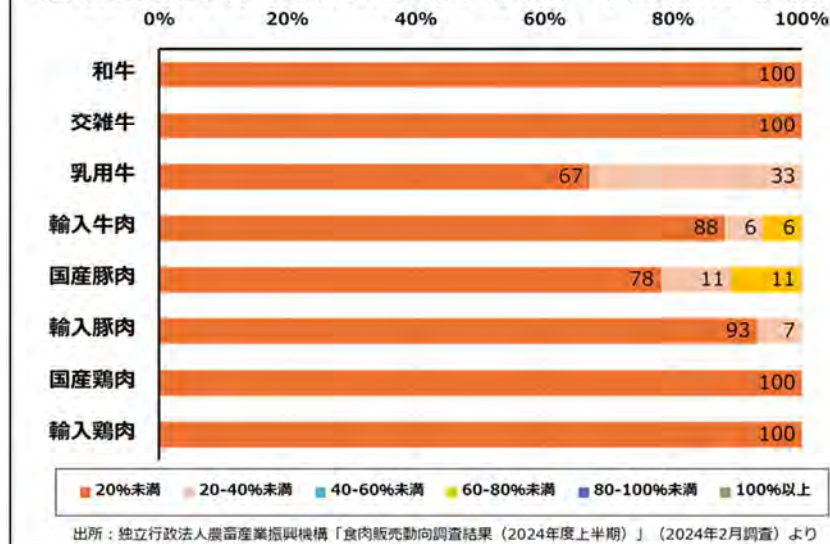
実際に食肉小売店での価格転嫁の状況はどうなっているのでしょうか？

独立行政法人農畜産業振興機構(ALIC)の「食肉販売動向調査結果(2024年度上半期)」(2024年2月調査)によると、量販店(スーパーなど)での価格転嫁程度は牛肉や国産豚肉では「多くの商品で価格転嫁できた(した)」と「一部の商品で価格転嫁できた(した)」の合計が半数や

図 3-2-5: 食肉の小売価格への転嫁状況(量販店)



仕入価格等コストの上昇に対する小売価格への転嫁割合(実績)



過半数を占めた一方、輸入豚肉と鶏肉では「ほとんどの商品で価格転嫁できなかった(しなかった)」が半数以上を占めた(図 3-2-5 上図)。また、仕入価格などコストの上昇に対する小売価格の転嫁割合については、すべての区分で「20%未満」がおおむね7割以上を占めた(図 3-2-5 下図)。

2023年2月・8月、2024年2月と半年ごとに3回実施されたこの調査では上記のような結果が継続して出ており、たびたび起こる仕入価格の上昇に対して十分には価格転嫁できずにいるところに再び仕入価格が上昇し、またもや転嫁できず、という繰り返しにより利益が削られてしまっている状況を読み取ることができる。

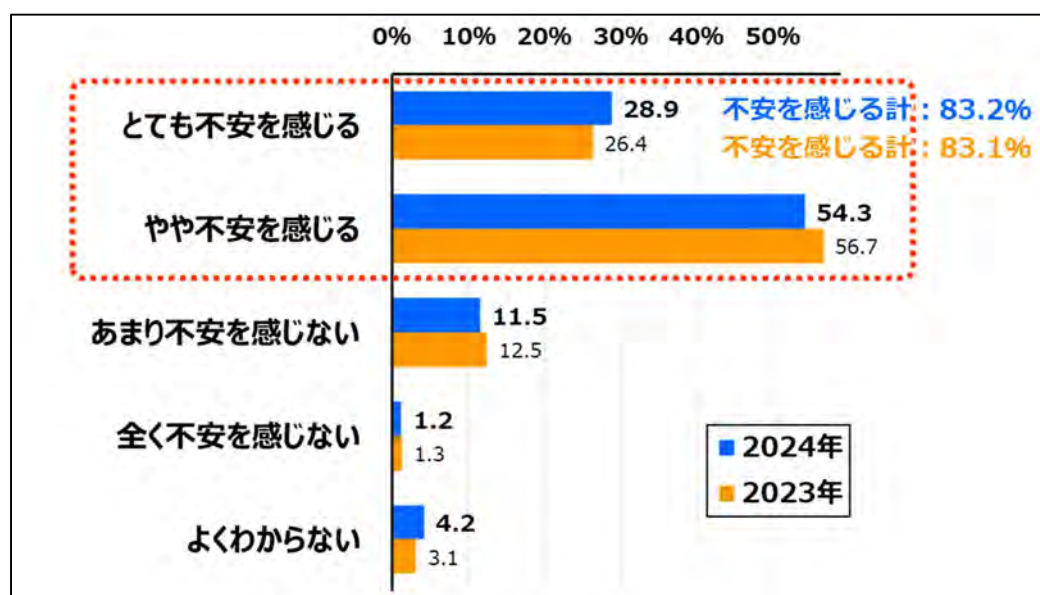
(3) 今後の食料・食肉の供給についての不安

食品の更なる価格上昇に対して不安を感じている人が多い

- 今後の「食料」「食肉」の供給について 8 割以上が不安感
- 不安感の理由は「価格上昇」が最多も、様々な不安が増加
- 高齢層は「安全」「食料自給率」、若年層は「質」「選択肢」の低下を危惧

(ア) Q25 今後の食料・食肉の供給についての不安感を尋ねた設問では、「やや不安を感じる」が 54.3% (前年比▲2.4 ポイント)、次いで「とても不安を感じる」が 28.9% (同+2.5 ポイント) で、合計 83.2% (同+0.1 ポイント) が不安を感じていた (図 3-3-1)。前年と比較すると不安を感じている割合には変化はないものの、不安感はやや強まっていた。

図 3-3-1: 今後の食料・食肉の供給についての不安感

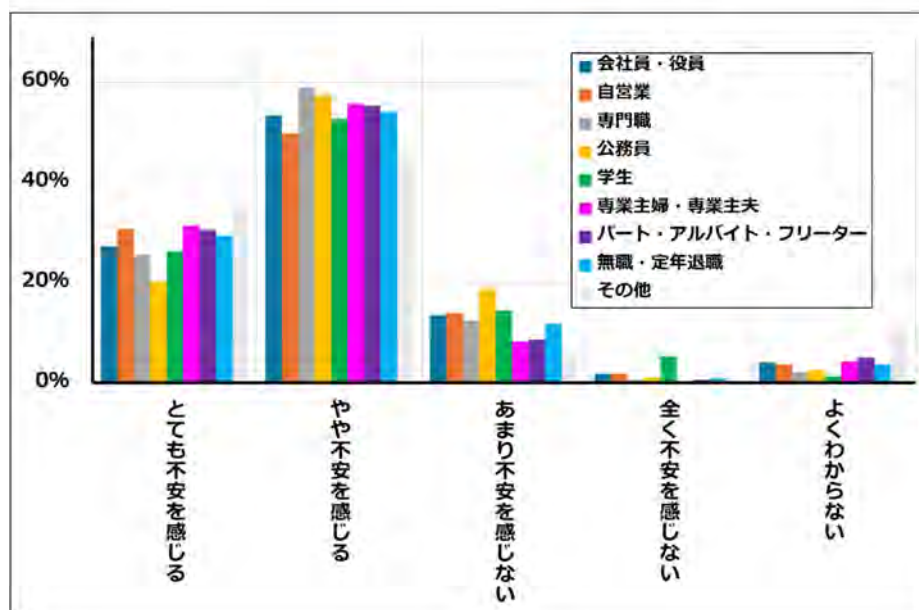


性別・年代別では「不安を感じる」は高齢層ほど高く、また、性別では男性よりも女性の方がより不安を感じているようであった。前年と比べ、特徴的な変化は見られなかった。

年収別で見ると、年収の低い人ほど不安を感じている一方、1000 万～2000 万円未満は「不安を感じていない」との回答が多くなっており、年収状況が今後の食料・食肉供給についての不安感に影響を与えていることが見られた。

職業別に見ると、「とても不安を感じる」との回答が多かった職業は、その他を除き専業主婦（主夫）（31.3%）や自営業（30.8%）であった（図 3-3-2）。家計を預かり、日々の食料の値段に敏感な

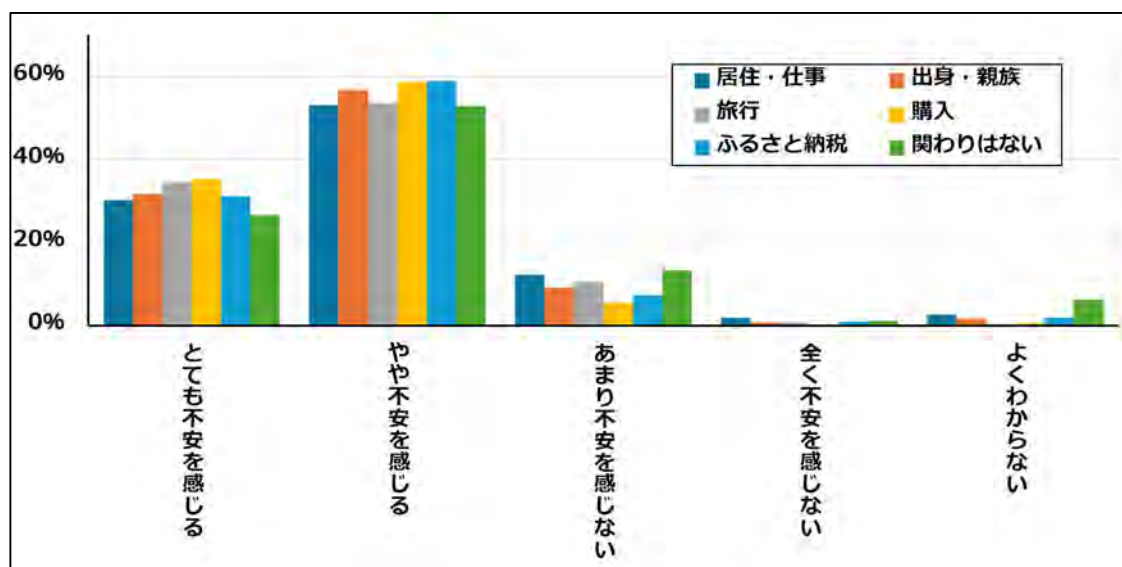
図 3-3-2:【職業別】今後の食料・食肉の供給についての不安感



立場や経営主の立場にることから生じる不安感なのであらうと思われる。しかし、「とても不安を感じる」と「やや不安を感じる」を合計した「不安を感じる」はいずれの職業も約 8 割であり、特徴的な差異は見られなかった。

農村との関係別に見ると、「関わりはない」人で「あまり不安を感じない」「よくわからない」の選択率が他よりも高かった。また、「居住・仕事」の人についても「関わりはない」人に次いで不安が少ないようであった。一方、「旅行」「購入」「ふるさと納税」の人は不安感が強い結果であった。

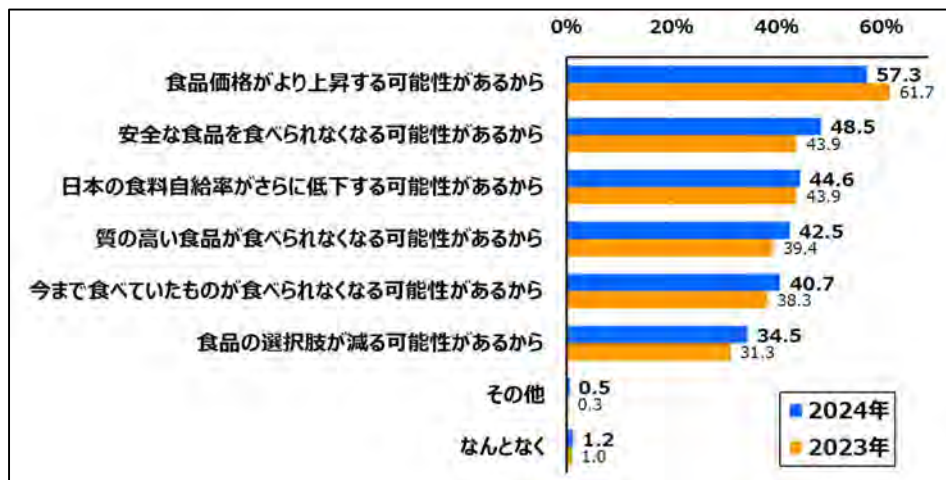
図 3-3-3:【農村関係別】今後の食料・食肉の供給についての不安感



(イ) Q26 今後の食料・食肉の供給について「不安を感じる」と答えた人について、その理由を尋ねた設問では、「食品価格がより上昇する可能性があるから」が 57.3% (前年比▲4.4 ポイント)と最も多く、他の選択肢と比べて 10 ポイントほど高かった(図 3-3-4)。次いで「安全な食品を食べられなくなる可能性があるから」が 48.5% (同+4.6 ポイント)であった。最も選択率が低かった「食品の選択肢が減る可能性があるから」でも 30%台半ばの選択率であり、消費者は様々な理由から不安を感じていることがわかる。

また、前年と比較すると、最も選択率の高かった価格的な理由は選択率が減少する一方、それ以外の理由の選択率は増加しており、価格以外の安全性や生活の豊かさに関する不安感が増していた。

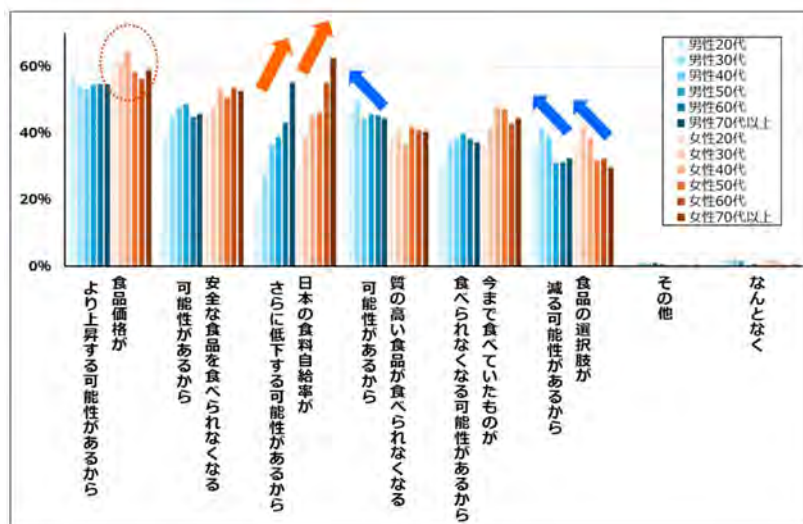
図 3-3-4: 今後の食料・食肉の供給についての不安理由(複数回答)



性年代別に見ると、選択率が最も高い「食品価格がより上昇する」は男性では年代による差があまりないが、女性においては若年層の方が高い結果であった(図 3-3-5)。また、「安全な食品を食べられなくなる」については男性より女性の選択率が高く、また、高齢層ほど高い傾向であった。

「日本の食料自給率がさらに低下する」は高齢層ほど選択率が高いだけでなく、年代による差も大

図 3-3-5:【性年代別】今後の食料・食肉の供給についての不安理由(複数回答)



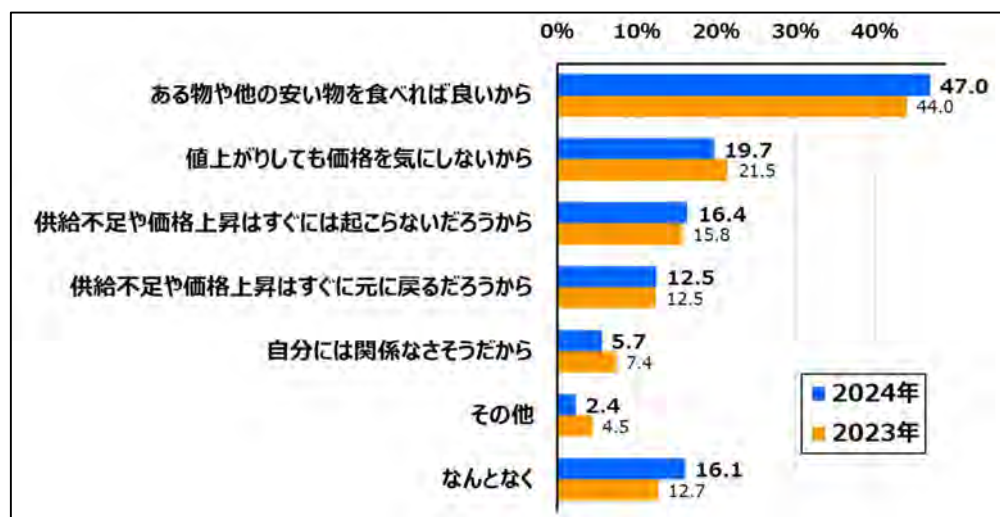
きく、男女とも 70 代以上と 20 代の選択率には 2 倍以上もの開きが見られた。

高齢層よりも若年層で高い選択率を示したのは「食品の選択肢が減る」や「質の高い食品が食べられなくなる」であった。近年は SNS などを通して海外の食品が若年層の間で流行することも多く、また、様々なユニークな食品があふれている現状が変わってしまうことに対する不安がうかがえる。

(ウ) Q27 今後の食料・食肉の供給について「不安を感じない」と答えた人について、その理由を聞くと、「ある物や他の安い物を食べれば良いから」が 47.0% (前年比 +3.0 ポイント) と最も多く、次いで「値上がりしても価格を気にしないから」が 19.7% (同▲1.8 ポイント) となっていた (図 3-3-6)。

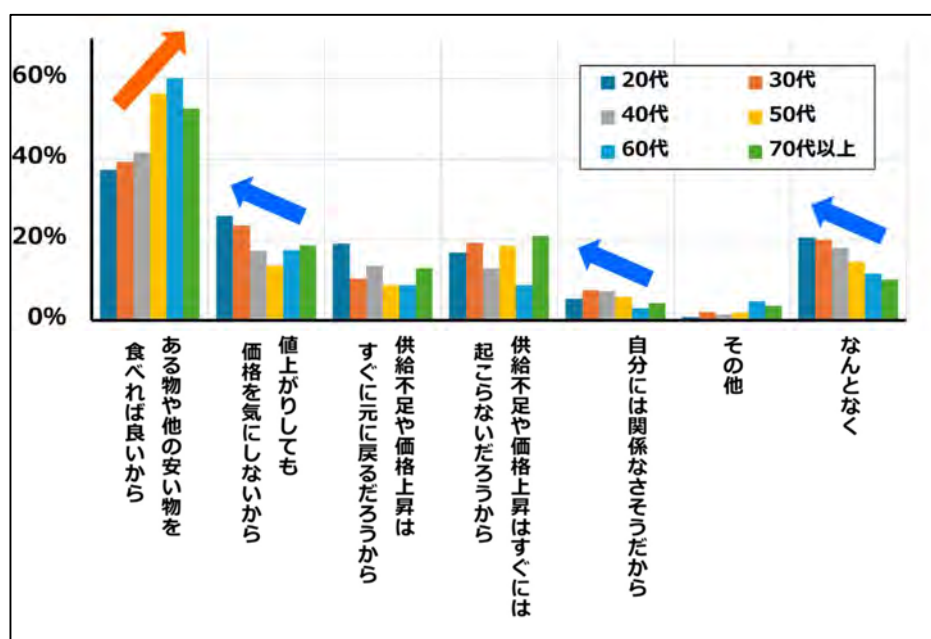
前年と比較すると、「価格を気にしない」や「自分には関係なさそうだから」の選択率が減少していることから、不安を感じない人であっても価格上昇で前年よりも価格を気にするようになったり、食料・食肉の供給について身近な問題として考えるようになってきている様子が見えてくる。

図 3-3-6: 今後の食料・食肉の供給について不安を感じない理由 (複数回答)



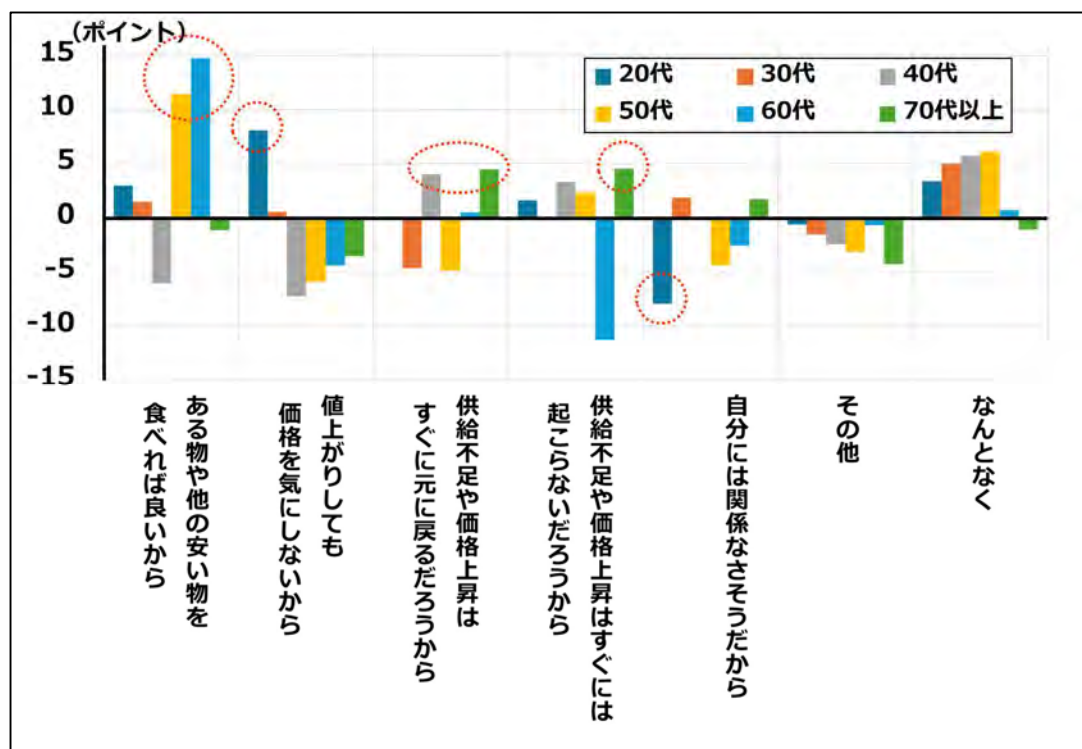
年代別では、「ある物や他の安い物を食べれば良いから」は高齢層の選択率が高く、「価格を気にしない」や「自分には関係なさそうだから」「なんとなく」は若年層の方が選択率が高い傾向であった (図 3-3-7)。

図 3-3-7: 【年代別】今後の食料・食肉の供給について不安を感じない理由 (複数回答)



前年の結果と比較したグラフが図 3-3-8 である。「ある物や安い物を食べれば良い」は 50-60 代で、「価格を気にしない」は 20 代で大きく増加していた。40 代や 70 代以上では「供給不足や価格上昇はすぐには起こらない」「すぐに元に戻るだろう」という見通しをする人が増加していた。また、若年層ほど選択率が高かった「自分には関係なさそうだから」であるが、20 代では前年から大きく減少していた。

図 3-3-8:【前年差】【年代別】今後の食料・食肉の供給について
不安を感じない理由(複数回答)



(4) 食料供給リスクに対する意識

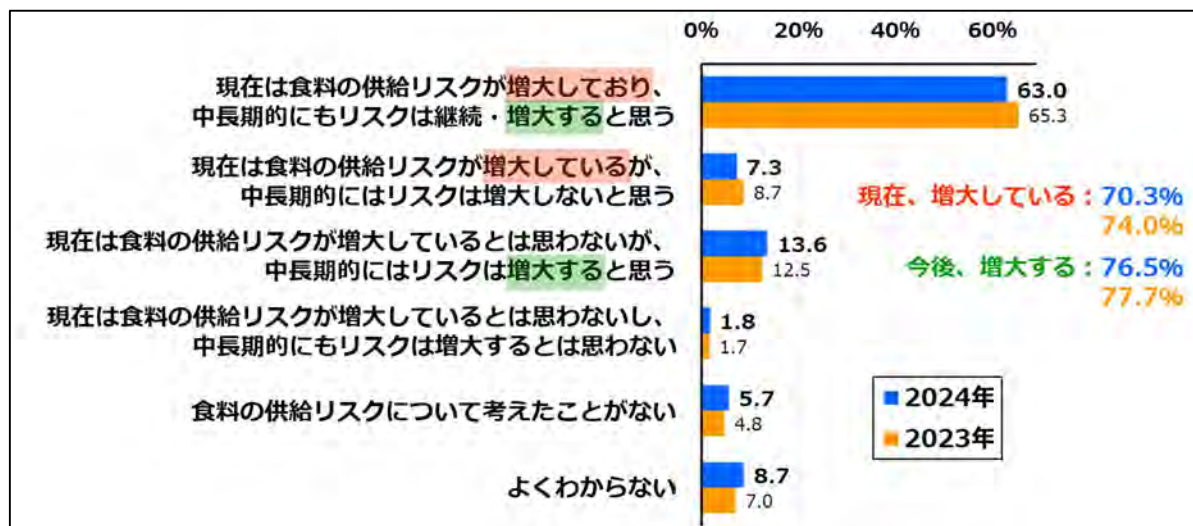
食料需要の増大や気候変動などにより現在・今後の供給リスク増大を意識

- 3/4 以上が今後の世界的な食料供給リスクを感じている
- 年代が上がるほど供給リスクに強い危機感
- 前年よりも温暖化や人口増加への懸念が増大

(ア) Q28 世界的な食料供給リスクについて、現在と今後の認識をたずねた設問では、「現在は食料の供給リスクが増大しており、中長期的にもリスクは継続・増大すると思う」が 63.0% (前年比 ▲2.3 ポイント) と最も多く、次いで「現在は食料の供給リスクが増大しているとは思わないが、中長期的にはリスクは増大すると思う」が 13.6% (同 +1.1 ポイント) であった (図 3-4-1)。

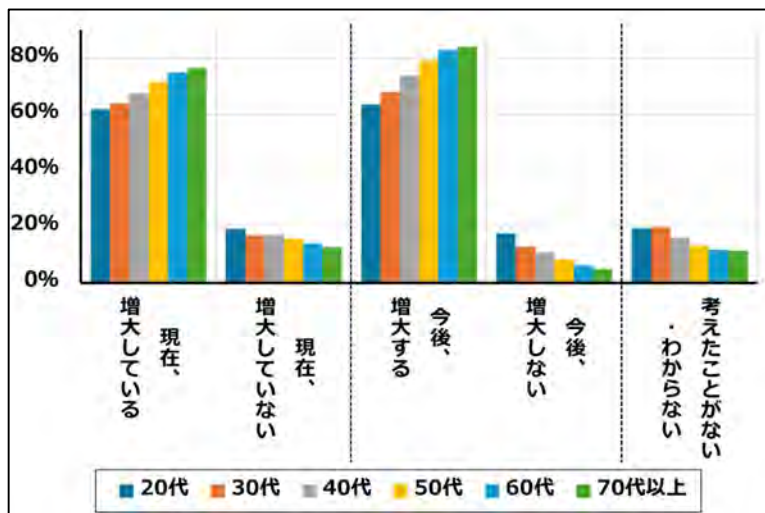
「現在、増大している」と思うのは 70.3% (同 ▲3.7 ポイント)、「今後、増大する」と思うのは 76.5% (同 ▲1.2 ポイント) とであり、前年と比較するとどちらも減少していた。また、「今後、増大しない」は 9.1% (同 ▲1.3 ポイント) と前年より減少している一方、「現在、増大しているとは思わない」は 15.3% (同 +1.1 ポイント) や「考えたことがない」(5.7%、同 +0.9 ポイント)、「よくわからない」(8.7%、同 +1.7 ポイント) が増加していた。

図 3-4-1: 食料供給リスクについての認識



年代別で見ると、「現在、増大している」「今後、増大する」は高齢層ほど選択率が高く、一方、「現在、増大していない」「今後、増大しない」「考えたことがない・わからない」は若年層ほど選択率が高い傾向が見られた(図 3-4-2)。

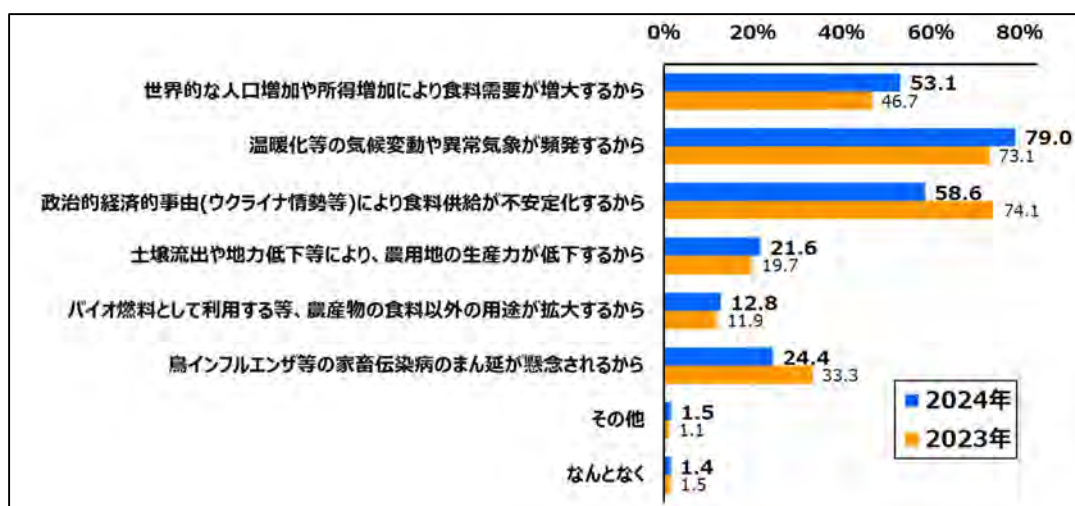
図 3-4-2:【年代別】食料供給リスクについての認識



(イ) Q29 世界的な食料供給リスクについて「今後、増大する」と答えた人にその理由を尋ねると、「温暖化等の気候変動や異常気象が頻発するから」が 79.0% (前年比 +5.9 ポイント) と最も多く、次いで「政治的経済的事由(ウクライナ情勢等)により食料供給が不安定化するから」が 58.6% (同 ▲15.5 ポイント) であった(図 3-4-3)。

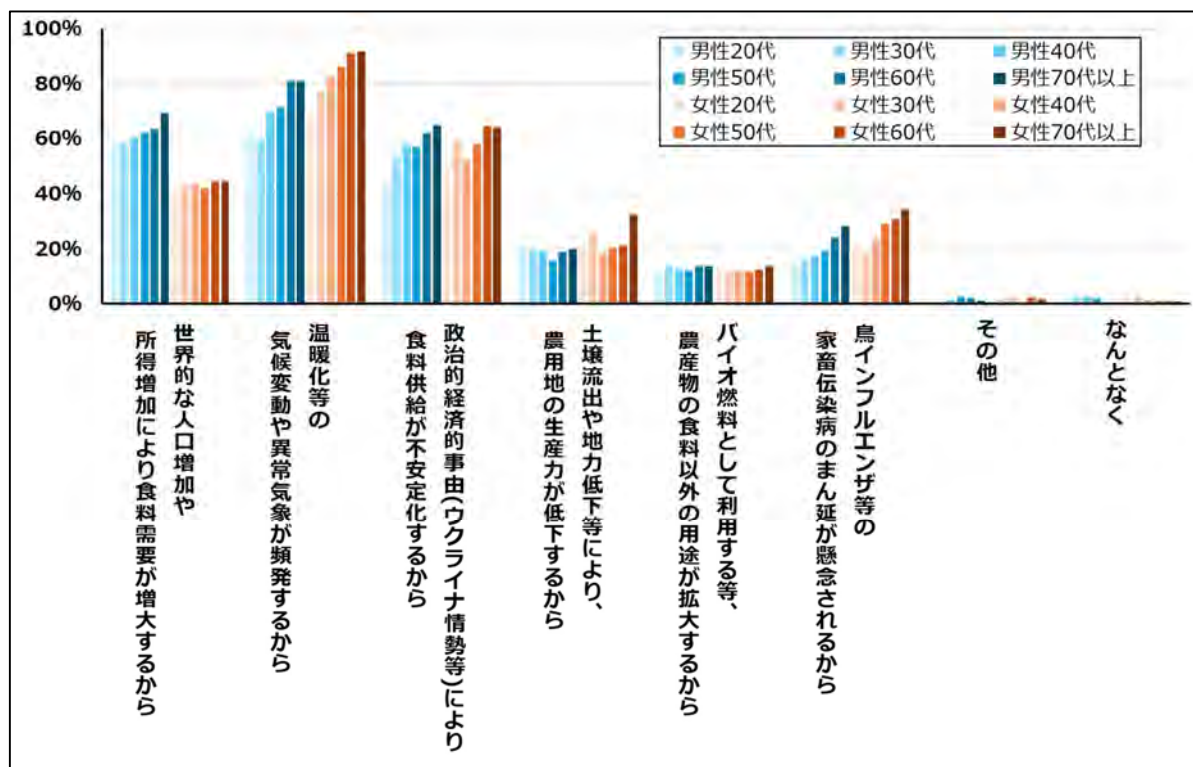
前年と比べて「政治的経済的事由」は最も選択率が減少した選択肢であったが、2022 年 2 月に開始されたウクライナ侵攻は長期化し、以前よりも危機感や緊迫感が薄れたためと推察される。一方で、「世界的な食料需要の増大」や「気候変動や異常気象の頻発」の選択率が約 +6 ポイントであり、これらは日本でも豪雨や洪水の被害が発生したことを意識しての結果と考えられる。「鳥インフルエンザ等の家畜伝染病のまん延が懸念されるから」については前年より ▲8.9 ポイントと減少し、24.4% であった。

図 3-4-3: リスクが今後増大すると考える理由(複数回答)



性年代別に見ると、基本的にどの選択肢も高齢層ほど選択率が高く、男女別では女性の方が選択率が高い傾向であったが、「世界的な人口増加や所得増加により食料需要が増大するから」についてはすべての年代において男性の方が女性よりも20ポイントほど高くなっていた(図3-4-4)。これらの傾向は前年の調査でも同じであった。

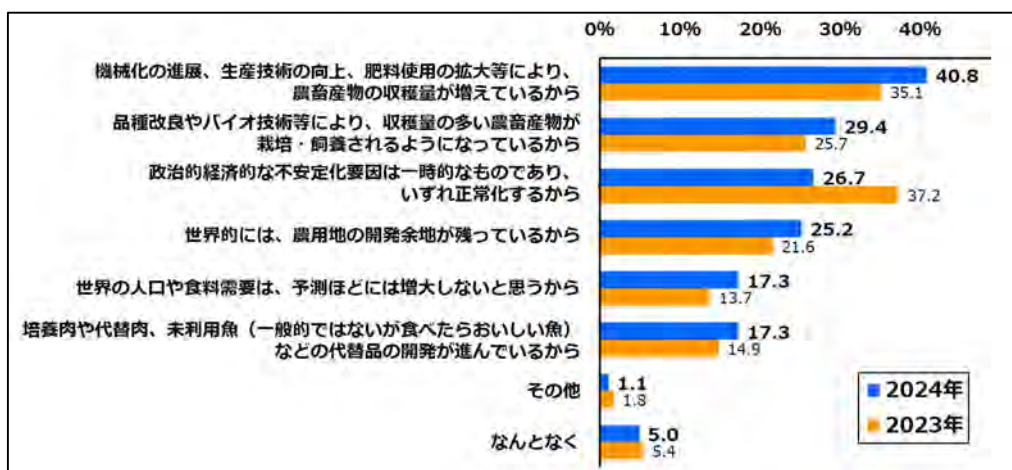
図3-4-4:【性年代別】リスクが今後増大すると考える理由(複数回答)



(ウ)一方で、Q30「今後、増大しない」と答えた人の理由としては、「機械化の進展、生産技術の向上、肥料使用の拡大等により、農畜産物の収穫量が増えているから」が40.8%（前年と比べ▲5.7ポイント）と最も多く、次いで「品種改良やバイオ技術等により、収穫量の多い農畜産物が栽培・飼養されるようになってきているから」が29.4%（同+3.7ポイント）であった（図3-4-5）。

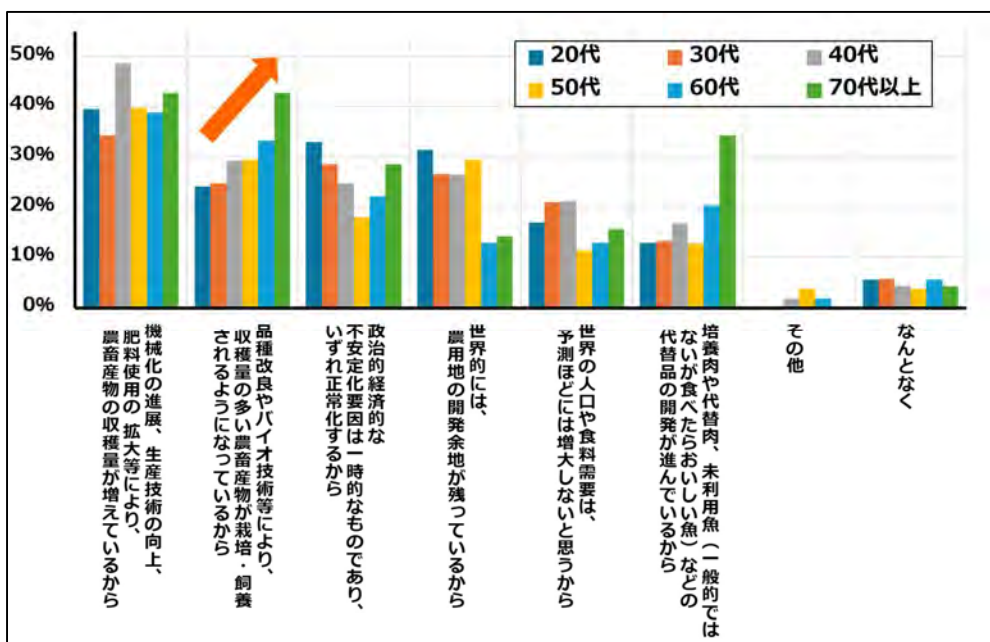
前年の調査では「政治的経済的な不安定化要因は一時的なものであり、いずれ正常化する」の選択率が最も高かったが、前年と比較すると▲10.5ポイントと大きく減少し、26.7%であった。ウクライナやガザの状況がすぐに収束せずに長期化しており、政治的経済的な不安定化要因は一時的ではない現状を意識した結果と思われる。

図3-4-5:リスクが今後増大しないと考える理由（複数回答）



年代別では「品種改良やバイオ技術」では高齢層ほど選択率が高く、また、「培養肉や代替肉など」については70代以上で、「不安定化要因は一時的なもの」については若年層で選択率が特徴的に高かった（図3-4-6）。

図3-4-6:【年代別】リスクが今後増大しないと考える理由（複数回答）



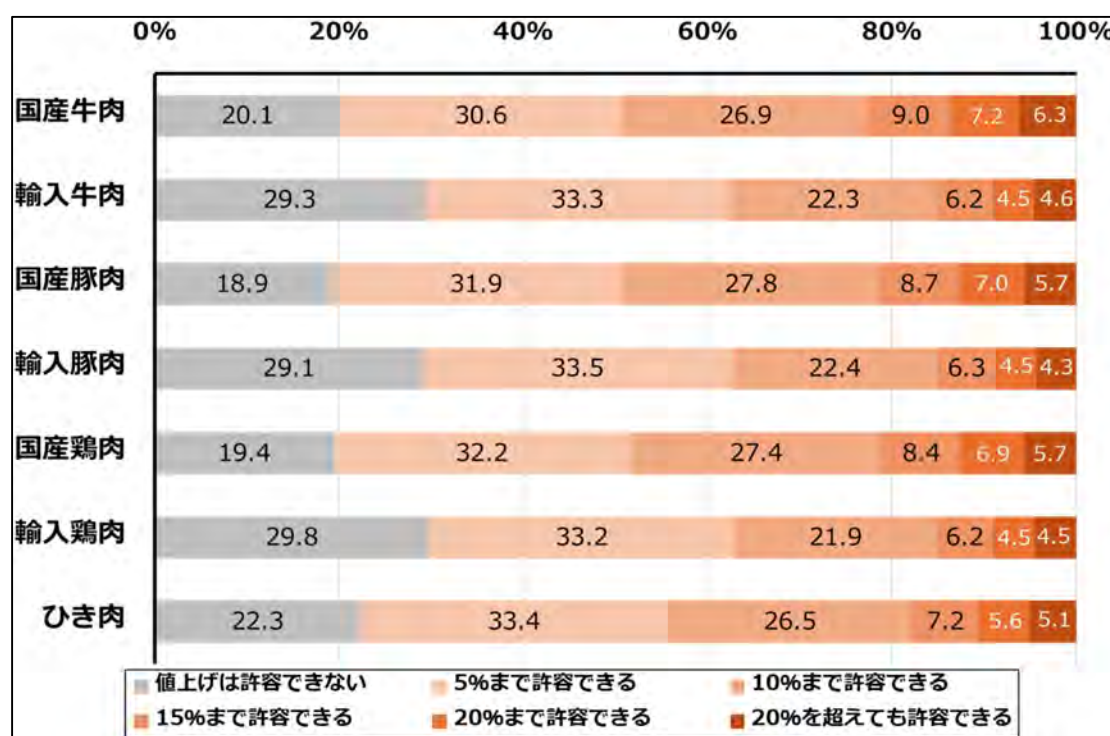
(5) 現状を知ったことによる価格許容度の変化

現状を知ったことで価格許容度は上昇

- 国産食肉・輸入食肉ともに「値上げは許容できない」が減少
- 輸入食肉よりも国産食肉の方が許容度が上昇
- 男性よりも女性で許容度が上昇

(ア) Q14 でした質問であるが、Q15～30 で畜産業の現状や食料の供給リスクを知ったことで「食肉価格の値上げについての許容度」がどのように変化するかを確認するため、Q31 ここまで回答を進めた上で、改めて食肉価格の値上げについてどれくらいまで許容できるかを尋ねた結果が、図 3-5-1 のグラフである。

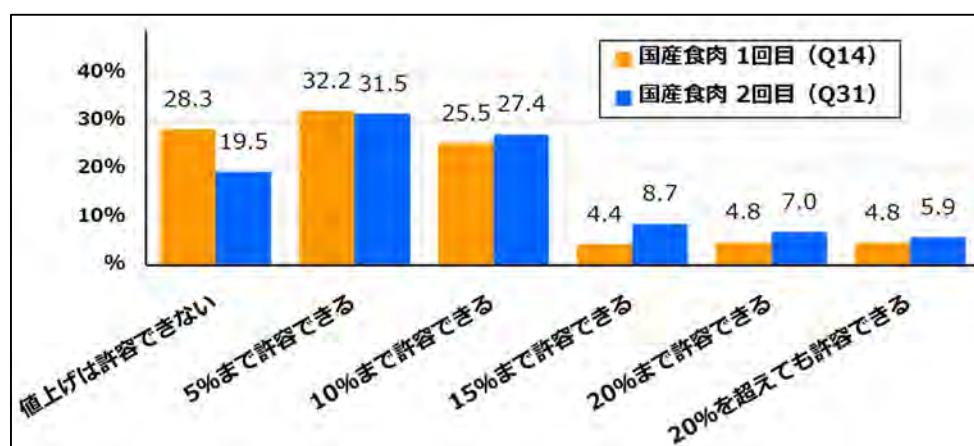
図 3-5-1: 食肉価格の値上げについての許容度 (2 回目)



この回答状況を畜産業の現状や食料供給リスクに関する質問をする前の Q14 と比較してみたい。内容を整理するために、傾向が似ていた国産牛肉、国産豚肉、国産鶏肉の平均値を「国産食肉」として、また、輸入牛肉、輸入豚肉、輸入鶏肉についても同様にその平均値を「輸入食肉」としてまとめ、Q31 と Q14 の選択率を比較したのが図 3-5-2 と図 3-5-3 である。

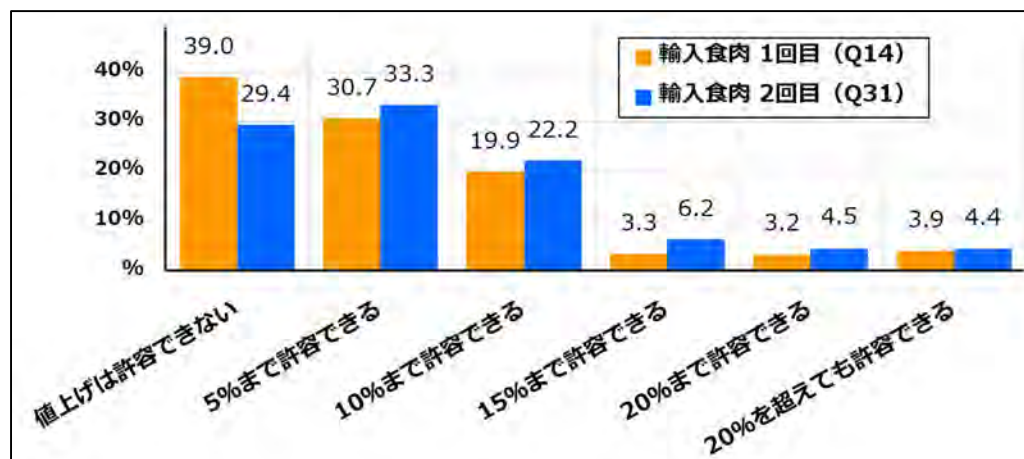
国産食肉について見ると、畜産業の現状や食料供給リスクに関する質問をする前の第 1 回目の段階では、「5%まで許容できる」が 32.2%で最も選択率が高く、次いで「値上げは許容できない」が 28.3%であった(図 3-5-2)。しかし、現状を知った後の第 2 回目では「5%まで許容できる」は 31.5%と 0.7 ポイント減少し、「値上げは許容できない」も 19.5%と 8.8 ポイント減少した。一方、「10%まで許容できる」は+1.9 ポイントの 27.4%に増加し、それ以上の値上げについても選択率が増加していた。畜産業の現状や食料供給リスクに関する質問を経て現状を認識したことで、価格許容度が高まったと考えられる。

図 3-5-2:【国産食肉】1 回目と 2 回目の価格許容度



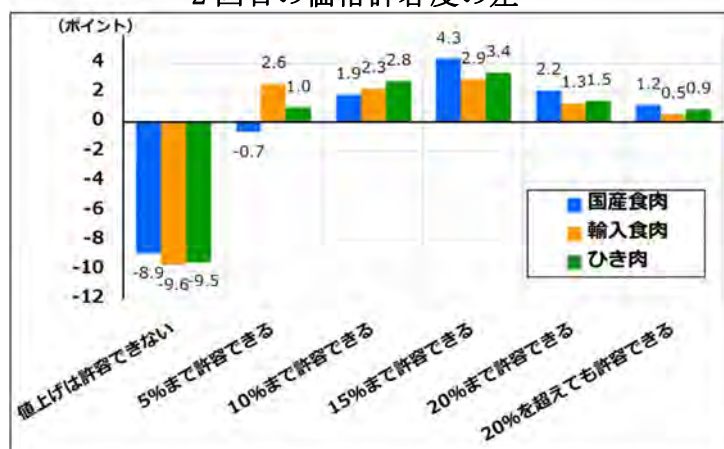
同様に輸入食肉についても、第1回目の段階では、「値上げは許容できない」が 39.0%で最も選択率が高く、次いで「5%まで許容できる」が 30.7%であった(図 3-5-3)。しかし、第 2 回目では、「値上げを許容できない」は 29.4%と約 10 ポイント減少する一方、「5%まで許容できる」「10%まで許容できる」はそれぞれ 33.3%、22.2%に増加し、それ以上の値上げについても選択率が増加していた。国産食肉と同様、輸入食肉についても畜産業の現状や食料供給リスクを知ったことで価格許容度が高まったことがわかる。

図 3-5-3:【輸入食肉】1 回目と 2 回目の価格許容度



国産食肉と輸入食肉、さらにひき肉についての価格許容度の変化をまとめたグラフが図 3-5-4

図 3-5-4: 国産食肉・輸入食肉の 1 回目と 2 回目の価格許容度の差



である。いずれの食肉も「値上げは許容できない」は減少し、「値上げを許容できる」は増加した。また、国産食肉は「15%まで許容できる」が、また、輸入食肉は「5%まで許容できる」や「15%まで許容できる」が特に増加していた。輸入食肉よりも国産食肉の方が高い許容度の選択率が増えており、一連の質問によって我が国畜産業の現状や供給リスクを知ったことで国産食肉への理解が増したと思われる。

性別・年代別での変化を国産食肉について見ると、性別では女性ほど、また、年齢別では高齢層ほど「値上げは許容できない」が減少して「値上げを許容できる」が増加しており、価格許容度が高まっていた(図 3-5-5)。

図 3-5-5: 【性別・年代別】国産食肉の 1 回目と 2 回目の価格許容度の差

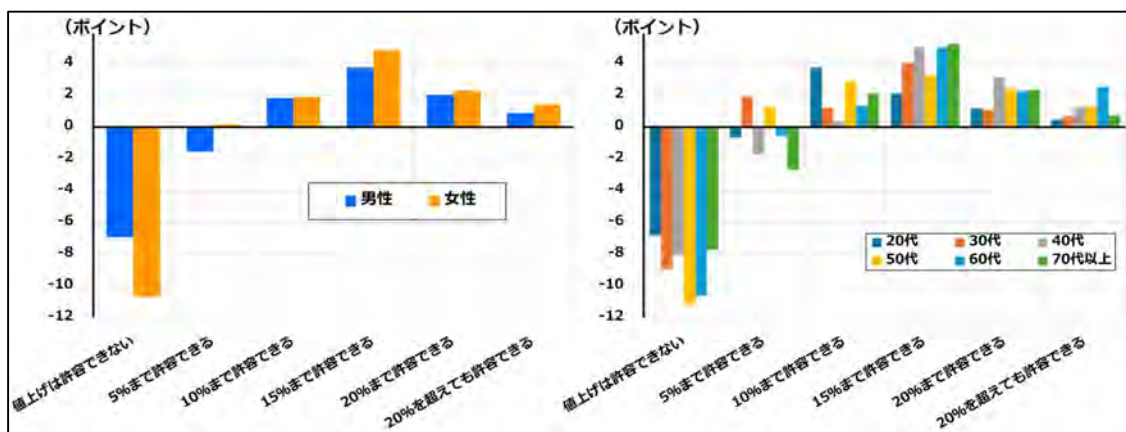
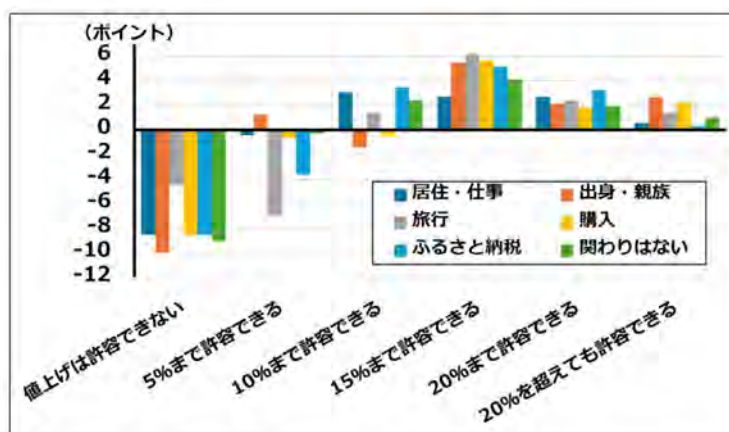


図 3-5-6: 【農村との関係別】国産食肉の 1 回目と 2 回目価格許容度の差

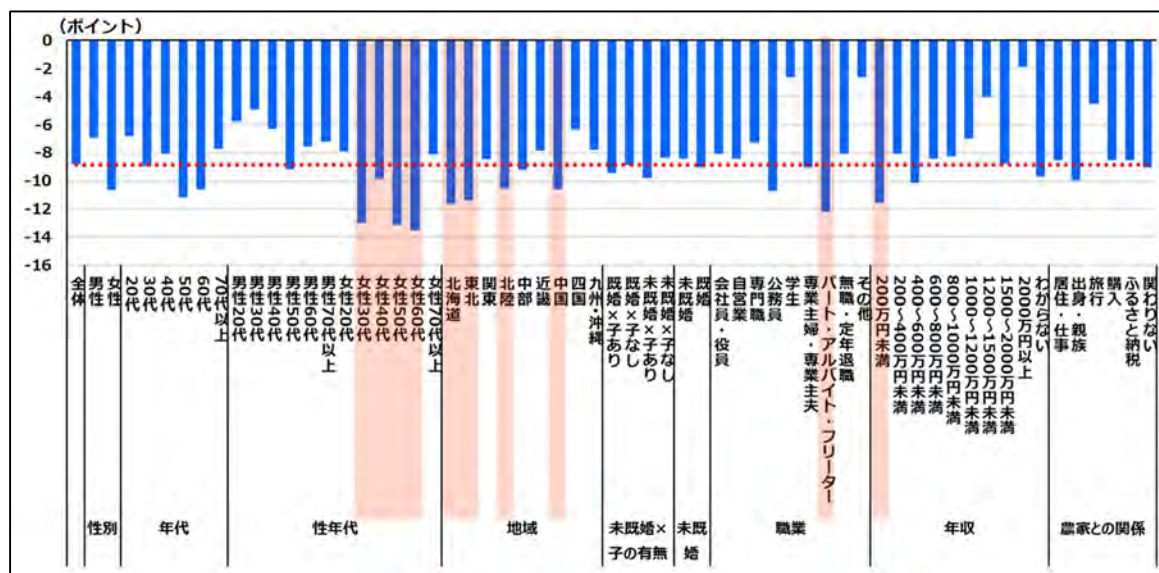


農村との関係別に見ると、「居住・仕事」の人は現状を知ったことによる変化が小さい傾向が見られた(図 3-5-6)。「関わりはない」人でも「15%まで許容できる」を大きく伸ばしていたが、「居住・仕事」の人が最も伸ばしたのは「10%まで許容できる」であった。

ちなみに、牛肉・豚肉・鶏肉による違いはほとんどなかったが、牛肉が比較的許容度が高まっている傾向であった(巻末クロス集計表 P 付 86～92 参照)。

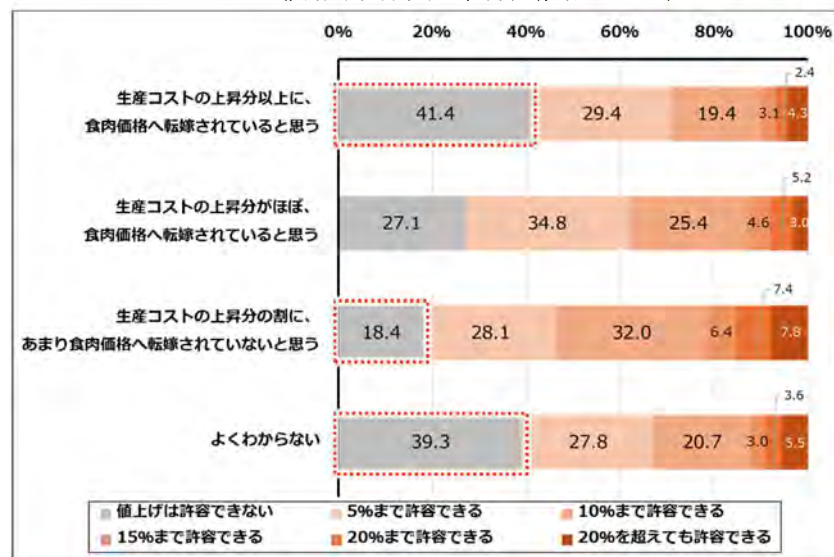
畜産業の現状や食料供給リスク等を知ったことによって価格許容度が上昇したのはどのような属性なのであろうか。Q31とQ14の「値上げは許容できない」の回答率の差を属性別に見たグラフが図3-5-7である。大きく下がっている属性ほど価格許容度が上昇したと言えるが、全体平均を基準に見てみると、「女性30～60代」、「北海道・東北・北陸・中国」や「パート・アルバイト」、「年収の低い層」でそのような傾向が強かった。

図3-5-7:【属性別】Q31とQ14の「値上げは許容できない」の回答率の差



(イ) 前年の調査でも行った、Q24 価格転嫁の程度についての認識の違いによって Q14・Q31 値

図3-5-8:生産コスト転嫁状況の認識と
価格許容度の関係(国産牛肉)



上げの許容度がどう変わるのか、クロス分析を今回も行ってみた。まず、Q24とQ14(1回目)のクロス分析を国産牛肉について示したのが図3-5-8である。前年と傾向はほぼ同じで、「コストの上昇分以上に転嫁されている」と回答した人は「値上げは許容できない」の選択率が最も高く、逆に「コストの上昇分の割に転嫁されていない」を選択した人の価格許容度は他よりも高い結果であった。

「コストの上昇分以上に転嫁されている」と回答した人は、畜産業の現状等をよく知らないまま『食肉の値上げは、昨今の様々なモノの値上げの便乗値上げではないか』という思い込みをしている可能性があり、また、「よくわからない」と回答した人は「値上げは許容できない」の選択率が高くなっていた。以上の結果は、消費者の畜産業の現状等についての理解が進むことで、値上げに対する理解を得ることができる可能性を示唆している。

そこで今回の調査では、Q14 で値上げの許容度を回答後、畜産業の現状についての認知と感想に関する設問(Q15～Q22)や食料供給リスクに関する設問(Q25～Q30)について尋ねた上で、改めて価格許容度について Q31 で回答してもらいその変化を見た。その結果が図 3-5-9 であり、差を見たものが図 3-5-10 である。

図 3-5-9:価格許容度の変化(国産牛肉)

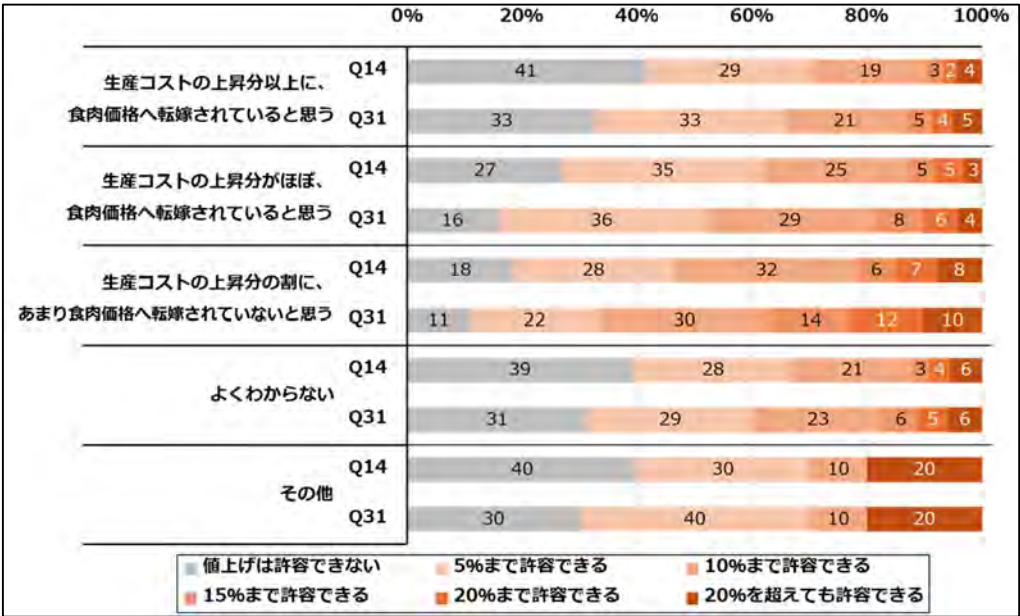
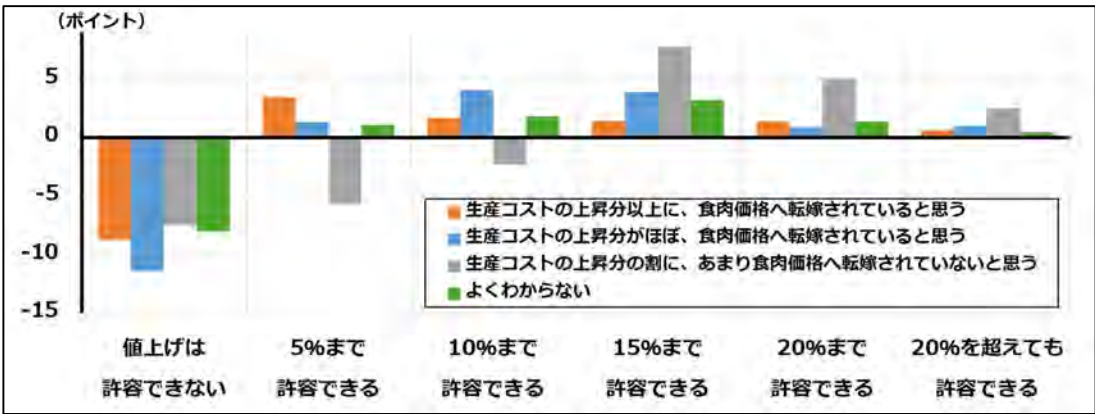


図 3-5-10 を見るとわかるように、畜産業の現状や食料供給リスクに関する質問をする前(1 回目)とした後(2 回目)では、「値上げは許容できない」との回答が価格転嫁の程度についての認識の違いにかかわらず 10 ポイント弱下がっており、畜産業の現状等を知ったことで価格許容度が上昇したことがわかる。

しかし、価格許容度の上昇度は価格転嫁の程度についての認識の違いによって異なっており、15%以上の高い価格許容度については「あまり転嫁されていない」「ほぼ転嫁されている」「上昇分以上に転嫁されている」の順に大きかった。このことから、畜産業の現状等について丁寧な説明を継続して広めていくことで値上げに対する理解を得る可能性は大いにあると思われる。

図 3-5-10:【1 回目との差】生産コスト転嫁状況の認識と食肉価格許容度の関係(国産牛肉)



(6) 今後取り組むべきことは

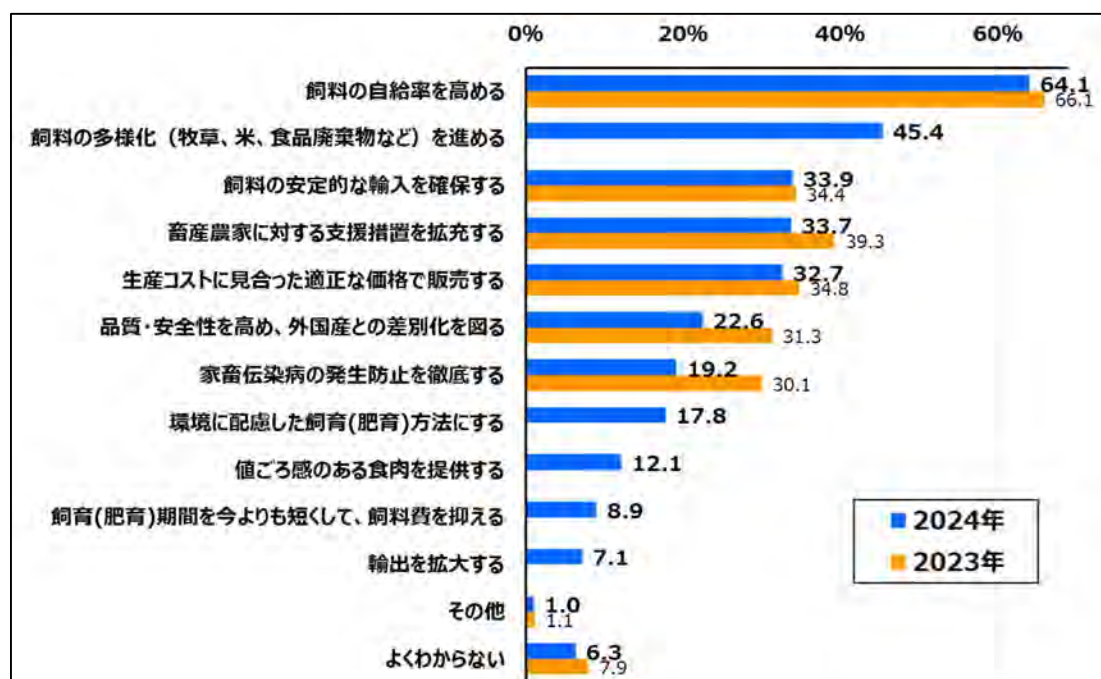
飼料自給率の向上が必要 消費者は食品ロスを意識

- 食肉の安定供給のために「飼料の自給率を高めること」「飼料の多様化」が必要
- 消費者は全年代で「食品ロスを減らすこと」に関心
- 農村特産品の購入者は安定供給への意識が高い傾向

(ア) Q32 食肉の安定供給のために、日本の畜産業にとって必要であると考えることを選択してもらった設問では、「飼料の自給率を高める」が64.1%（前年比▲2.0ポイント）と最も多く、次いで「飼料の多様化（牧草、米、食品廃棄物など）を進める」が45.4%（初出）であった（図 3-6-1）。飼料に関する設問や状況説明が続いた後の設問のせいか、飼料に関する選択肢がトップ3を占めた。価格に敏感になっている現状において「値ごろ感のある食肉を提供する」は選択率が高くなると予想したが、選択率は12.1%と、それほど高くなかった。

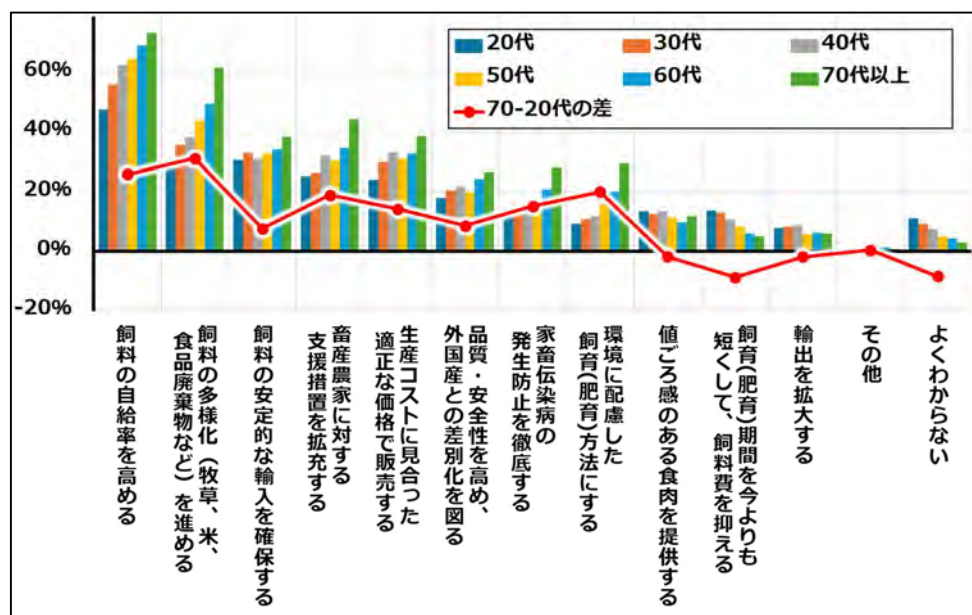
前年と比較すると、新しい選択肢が増えたことで全体的に項目ごとの選択率は減少したが、特に「品質・安全性を高め、外国産との差別化を図る」は22.6%（同▲8.7ポイント）、「家畜伝染病の発生防止を徹底する」は19.2%（同▲10.9ポイント）と大きく減少した。

図 3-6-1: 安定供給のために必要であること(複数回答)



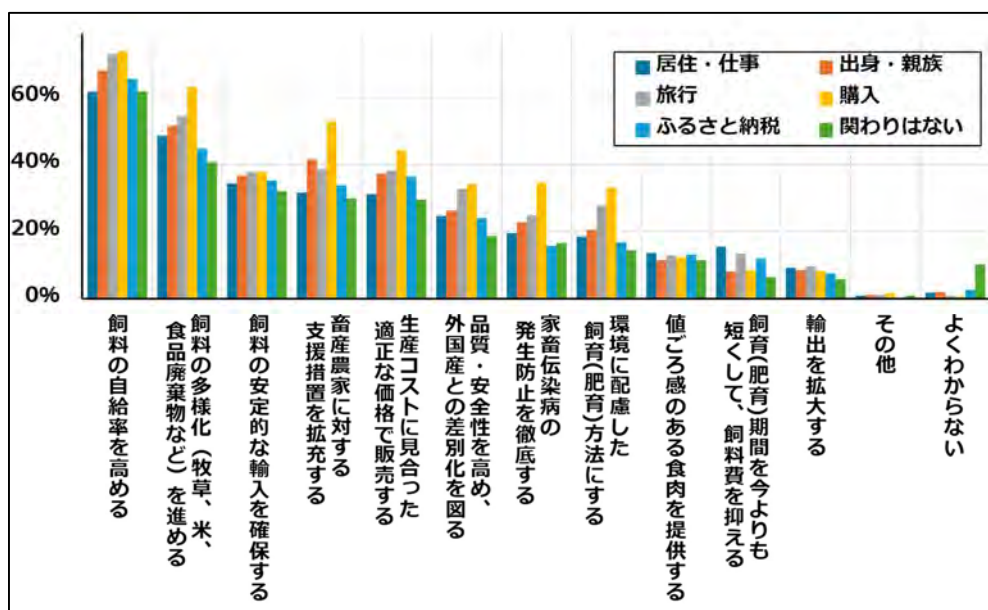
年代別では、多くの項目で高齢層ほど選択率が高く、高齢層の関心の高さがうかがえた(図 3-6-2)。20 代と 70 代以上を比較した場合、特に選択率の差(折れ線)が大きかった項目は「飼料の多様化」で、31.2 ポイントの開きがあった。逆に若年層の方が選択率が高く、差が大きかったのは、「飼育(肥育)期間を今よりも短くして、飼料費を抑える」(8.6 ポイント差)であった。選択率の高い上位 5 項目の中で年代の差が小さかったのは「飼料の安定的な輸入を確保する」であったが、この傾向は前年も同様であった。

図 3-6-2:【年代別】安定供給のために必要であると考えること(複数回答)



農村との関係性別に見ると、「農村地域の特産品を購入している」人は多くの項目について最も選択率が高く、様々な取組みに対して関心が高いことがうかがえた。次いで「旅行などで農村地域を訪れている」人が様々な取組みに対して高い関心を示していた(図 3-6-3)。

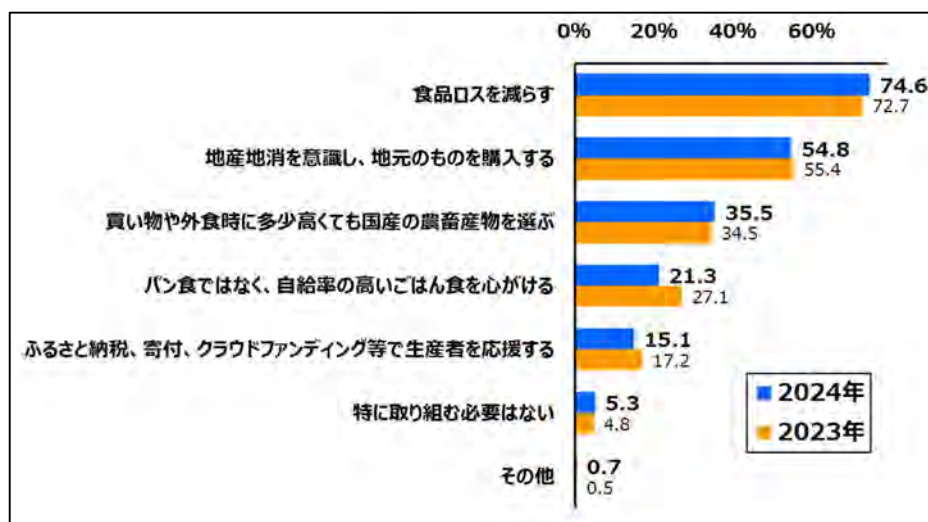
図 3-6-3:【農村との関係】安定供給のために必要であると考えること



(イ) Q33 食料・食肉の安定供給のために、消費者が取り組むべきと考えることを選択してもらった設問では、「食品ロスを減らす」が 74.6% (前年比 +1.9 ポイント) と最も多く、次いで「地産地消を意識し、地元のものを購入する」が 54.8% (同▲0.6 ポイント) であった(図 3-6-4)。

前年と比較すると、各項目とも選択率に大きな変動はなかった中で、「パン食ではなく、自給率の高いごはん食を心がける」が 21.3% で前年より▲5.8 ポイントと減少幅が大きかった。これは、最近の「令和の米騒動」で米が品薄になり、供給が滞ってしまったことが影響したと考えられる。

図 3-6-4: 安定供給のための取り組むべきと考えること(複数回答)



年代別に選択率を比較すると、上位 3 つの選択肢については高齢層の選択率が高く、それ以外の選択肢は若年層の方が高い傾向であった(図 3-6-5)。20 代と 70 代以上を比較して特に選択率の差が大きかった項目は「地産地消を意識し、地元のものを購入する」の 33.4 ポイントで、これは前年の調査でも同じ傾向であった。

図 3-6-5: 【年代別】安定供給のために取り組むべきと考えること(複数回答)

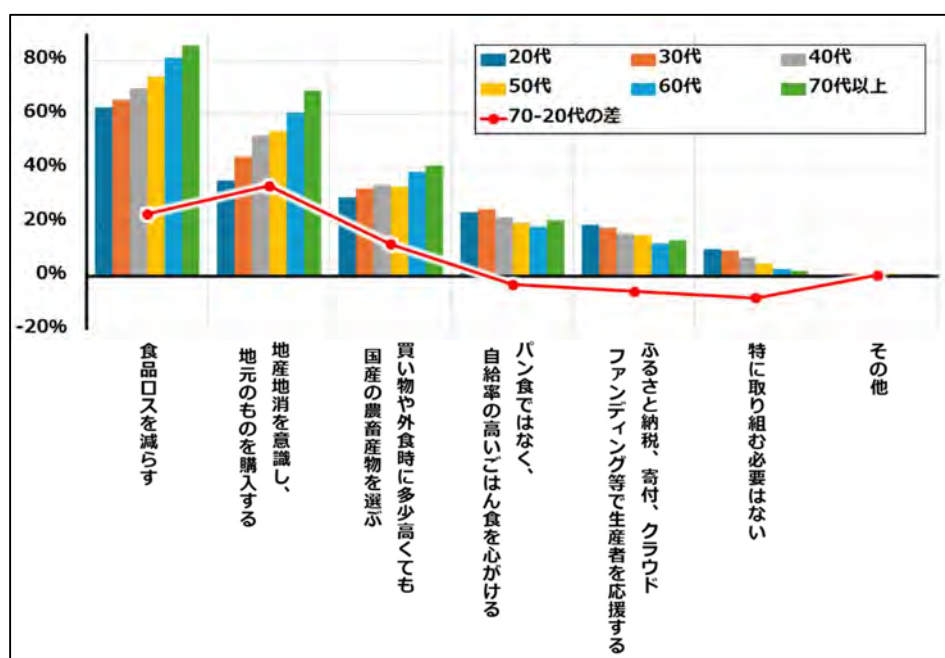
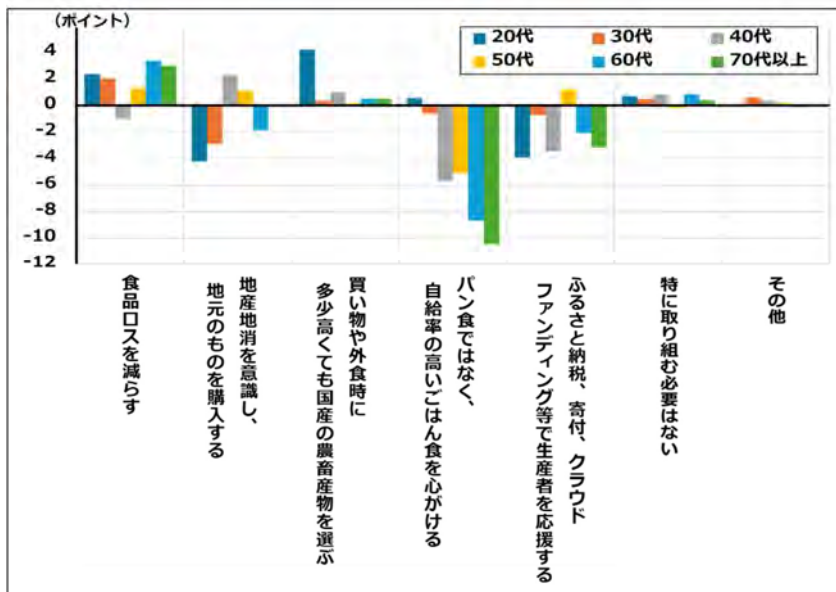


図 3-6-6:【前年差】【年代別】安定供給のために
取り組むべきと考えること(複数回答)

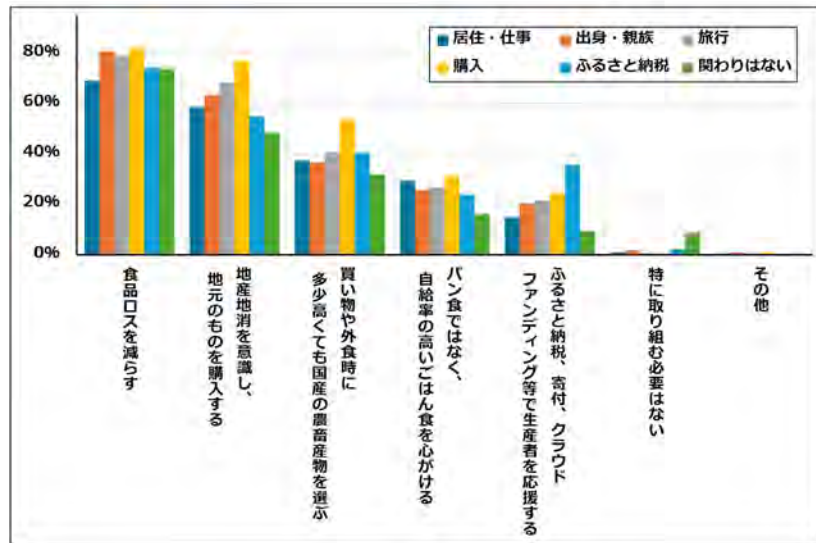


40代を除いていずれの年代も増加していた。これは今すぐにできる行動であることも一因であろうが、Q29 世界的な食料供給リスクの増大について尋ねた設問で「世界的な食料需要の増大」や「気候変動や異常気象の頻発」の選択率が増えていたことを考えあわせると、限りある食料を無駄にしない意識が醸成されてきたとも考えられる。

国産か輸入かの意識が薄い 20 代だが、「国産の農畜産物を選ぶ」が大きく増加した一方で、「地産地消」については同じくらい減少していた。

農村との関係別に見ると、「農村地域の特産品を購入している」人は消費者側の取組に関心が高く、他の属性と比べ「地元のものを購入する」や「国産の農畜産物を選ぶ」で特に選択率が高か

図 3-6-7:【農村との関係別】安定供給のために
取り組むべきと考えること(複数回答)



年代別に前年との選択率の差を見ると、「パン食ではなく、自給率の高いごはん食を心がける」は、20代はプラスであったのに対して、高齢層ほど選択率が大きく減少し、年代によって選択率の増減の差が大きかった(図 3-6-6)。

また、前年の調査で若年層ほど選択率が高かった「寄付やクラウドファンディングで応援」は、20代を始め多くの年代で減少していた。

さらに、最も選択率が高かった「食品ロスを減らす」は、

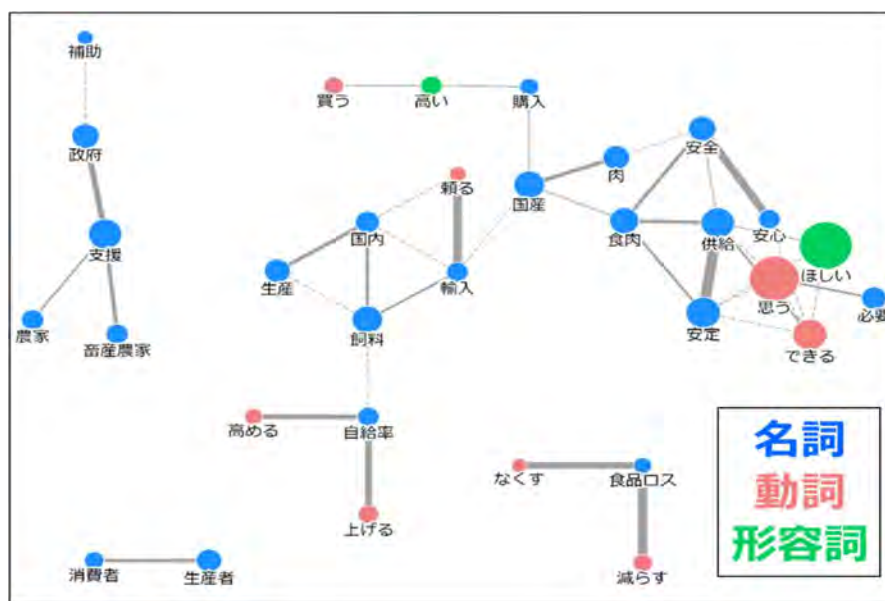
った。普段から特産品を購入している人は購入して応援することに理解があることがわかる。

一方で「農村地域との関わりはない」人は、「食品ロスを減らす」は全体と同程度の選択率であったが、それ以外は他の属性よりも低く、逆に「特に取り組む必要はない」の選択率が他の属性より高かった。また、「ふるさと納税」を行っている人は「生産者の応援のため」と考えて取り組んでいる様子が回答結果からうかがえる。

(ウ) Q34 食肉の安定的な供給について、あなたが期待／希望することを自由記述で回答してもらった。

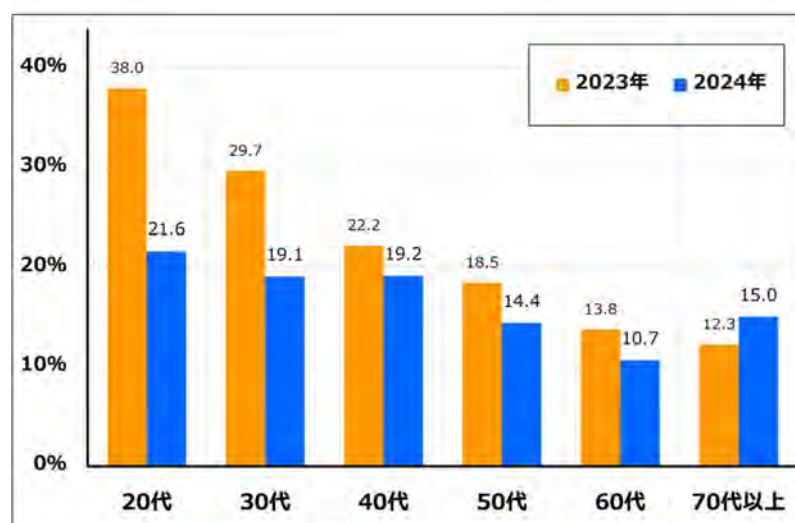
具体的な回答について、テキストマイニングの手法で関係(共起)するワードを線で結んだグラフが図 3-6-8 である。出現数が多い語ほど円が大きく、また関係(共起)の程度は強い方から順に太い実線 > 細い実線 > 破線で描画されている。このグラフを見ると、「政府による畜産農家への支援・補助」「飼料を輸入に頼らない」「国産食肉を安定した価格で購入したい」「安心安全な食肉の生産」「食品ロスを減らす」などが多いことがわかる。

図 3-6-8: 自由回答で出現頻度の多かった単語



「特になし」「わからない」「思いつかない」など特に意見のないコメントが約 1,300 件と 2 割強を占めた中で、年代別にその出現割合を見ると、若年層ほど多い結果ではあったが、前年と比較すると、年代の差が小さくなっていた(図 3-6-9)。特に若年層ほど出現割合は大きく減少し、20 代では 16 ポイントも減少しており、この設問からは前年よりも若年層で関心が高まっていることがうかがえた。一方で、70 代以上については前年よりも 3 ポイント増加して 15%が意見のないコメントであった。とは言え、食肉価格の許容度が高く、様々な設問で関心の高さがうかがえた高齢層であるだけに、その出現割合は他の年代並みかそれ以下であった。

図 3-6-9: 「特に意見のないコメント」の年代別構成比



年代並みかそれ以下であった。

補足データ

具体的な回答について、年代別の傾向を AI (ChatGPT-4o、OpenAI 社、2024 年 11 月時点) を用いて要約したものが以下の内容である。

20 代の回答者は、生産コスト削減や規模拡大に関心がある傾向が見られました。例えば、「AI などを活用して人件費を削減する」といった技術の活用に対する意見や、農家の規模拡大に対する期待が挙げられています。また、食品廃棄物を飼料に利用することで、コスト削減につながるといった意識も示されており、効率的な生産体制の構築に関心があることがうかがえます。

30 代の回答者からは、農業の持続可能性や地元農産物の利用拡大への関心が多く見られました。特に環境問題に関心を寄せている回答が多く、リサイクルや地産地消の促進といった具体的な希望が示されています。こうした回答から、30 代はサステナビリティに対する意識が高いことが推測されます。

40 代の回答者は、農産物の安定供給と価格の安定に対する意見が目立ちました。特に、価格の変動が生活に与える影響を懸念する声が多く、安定した供給体制の確立に対する期待が強いことがわかります。また、消費者目線での意見が多く、農産物が家計に与える影響についての関心が深いことがうかがえます。

50 代では、農業の未来や若手農業者の支援に関する意見が多く見られました。高齢化が進む農業分野において、次世代の育成や新規参入者の支援が重要だとする意見が目立ち、農業の継承に関する課題意識が強いと考えられます。また、地域コミュニティとのつながりを重視する意見もあり、地元の活性化に対する期待がうかがえます。

60 代以上の回答者は、農産物の安全性や品質に関心が高く、特に自分たちが消費する食品の安全性について強い意識を持っていることがわかります。農薬の使用削減や有機農法の推進など、健康面での配慮を求める声が多く、安心・安全な食生活を望む姿勢が顕著です。

以上のように、各年代によって関心のあるテーマが異なり、それぞれの年代が抱く意識や期待の違いが見られます。若い世代ほど効率化やコスト削減に関心があり、中高年層になるにつれて持続可能性や安全性への関心が高まる傾向があるようです。これにより、年代ごとに異なるアプローチが必要であることが示唆されます。

総括

1. 食料・食肉価格の上昇と購入行動の変化

本調査によると、97.8%の人が1年前と比べて食品価格の上昇を感じており、特に「米」の値上げが最も強く認識されていた。食肉の中では、牛肉の購入を控える動きが前年以上に顕著になっていた。一方で「価格上昇で購入量を減らした食品はない」が45.2%と最も多く、選択率も前年とほぼ同じであった。

食品全体の買い物頻度は「週に2～3回」が49.9%で最多であるが、食肉については週1～3回の購入が約9割を占めており（「週に1回」46.8%、「週に2～3回」45.0%）、前年と比較すると、「週に1回」の層が増加していた。

食肉の中で最も購入量が多いのは豚肉であり、次いで鶏肉、牛肉、ひき肉の順となっていた。また、牛肉と豚肉の購入量は減少傾向にある一方で、鶏肉の購入量は増加しており、ほとんどの年代で増加が見られたが、北陸や四国、北海道では減少しており、地域ごとに傾向が異なっていた。

牛肉の中で最も購入量の多いものは「和牛以外の国産牛肉」と「輸入牛肉」で、同程度の選択率を示した（28.9%、27.3%）。「和牛」の購入は高齢層が多く、若年層では少ない傾向があった。牛肉を購入しない理由としては、「価格が高いから（コストパフォーマンスが悪いから）」が最も多く（69.0%）、次いで「豚肉や鶏肉の方が好きだから」（37.0%）が挙げられた。

また、牛肉は豚肉・鶏肉と比較して外食での消費が多く、外食での消費割合は豚肉・鶏肉の約5倍となっていた。外食での消費は若年層が多く、逆に内食での消費は高齢層が多かった。

7～8割の回答者が食肉の値上がりを実感しており、特に「牛肉」の値上がりが強く認識されていた。また、国産・輸入の別では「国産食肉」の値上がりがより意識されていた。

2. 食肉の購入行動と理由

食肉購入の際には、約7割の回答者が「価格」を最も重視しており、高齢層では「鮮度」「部位」「産地・ブランド」なども考慮する傾向が見られた。また、さらなる値上げが進んだ場合には、価格の優先度は上がる一方、それ以外の要素の優先度は低下していた。

国産食肉か輸入食肉かの選択要因については、約7割の人が「価格」と回答しており、前年よりも「価格」や「国産か輸入か」を意識する傾向は強まっていた。また、いずれの食肉も価格差が10%までならば、回答者の半数が国産食肉を選択すると回答していたが、その選択率は前年よりもやや減少していた。

食肉の値上がりに対する許容度は、一般に、国産食肉の方が輸入食肉よりも許容度が高く、高齢層ほどその傾向が顕著であった。前年と比べると値上がりを許容できない人はやや増えているものの、許容できる人にとっては値上がりの許容度は前年よりも増していた。また、農村特産品を購入する回答者は、農村との関わりがない人に比べて許容度が大きい傾向であった。

3. 供給リスクへの消費者意識

畜産業の現状（生産費に占める飼料費の割合、飼料の輸入割合、近年の飼料価格の高騰、肉用牛農家の減少）についての認知には年代間の格差が見られた。過半数の回答者が畜産業の現状を知らない状況である一方、高齢層ほどその認知度が高く、現状を心配する傾向が強かった。

生産コストの上昇分を食肉価格（小売価格）に転嫁することについては、回答者の半数以上（50.3%）が生産コストに応じた価格上昇を容認していたが、その割合は前年（52.3%）よりもやや減少していた。また、転嫁の状況については約半数（54.5%）はすでに価格転嫁が行われていると認識しており、現状とのギャップが見られた。理解がある高齢層でもその認識は強く、前年よりも増加していた。

今後の「食料」や「食肉」の供給に関しては、8割以上の回答者が不安を感じていた。その理由としては「価格上昇」が最多であるが、「安全性」や「食料自給率」などの選択率が前年より上昇しており、また、世代ごとに懸念の程度は異なっていた。

現在、世界的な供給リスクを感じている回答者は約7割に達しており、「今後、増大する」との選択率は3/4以上であった。年代では高齢層ほど供給リスクに強い危機感を抱いており、前年と比べて温暖化や人口増加への懸念の増加が見られた。

食肉への価格許容度について、畜産業の現状や食料供給リスクを認識した上で再び回答してもらったところ、価格許容度は上昇した。また、輸入食肉よりも国産食肉の方が許容度の上がり幅が大きかった。「値上げは許容できない」との回答はいずれの年代でも減少したが、特に女性の30～60代で大きな変化が見られた。こうした結果からは、畜産業の現状等について丁寧な説明を継続して広めていくことで値上げに対する理解を得る可能性が示唆された。

食肉の安定供給のためには、「飼料の自給率向上」や「飼料の多様化」が必要であるとの回答が多かった。また、消費者が取り組むべきと考えることとしては「食品ロスの削減」や「地産地消」が多かったが、特に高齢層ほど選択率が高い傾向であった。さらに、農村特産品の購入者は安定供給への意識が高い傾向が見られた。

まとめ

本調査を通じて、消費者の食肉消費行動の現状を把握するとともに、値上がりした食品や食肉の小売価格への対応、それにより感じる食料供給への不安や今後の展望などを明らかにした。また、継続調査項目からは、前年からの消費者の意識の変化も見られた。

食品価格の値上がりは前年からさらに進行している。本調査では「購入量を減らした」との回答は前年とほぼ同水準であるものの、買い物の頻度は減少しており、消費者の間で買い控えの動きが広がっていることがうかがえる。様々なモノの値段が上がる中で、食肉への価格許容度は前年よりも増したが、すでに生産コスト上昇分は小売価格に転嫁されているという認識も前年より強まっており、消費者の値上がり疲れが見てとれた。

畜産業の現状については、半数以上が「初めて知った」と回答しており、若年層ほどその回答率が高い結果も前年度とほぼ同様であり、認知が広がっていないことが明らかになった。一方、現状を知ることによって食肉の価格許容度が増すことが本調査により判明した。度重なる食肉の値上がりへの理解を得るためにも、これまで以上に畜産業の現状を伝えていくことが重要であると言える。

若年層を中心に「牛肉を購入しない」との回答も多かったが、その理由については、高齢層が「豚肉・鶏肉が好き」「牛肉が嫌い」という嗜好性を理由とするのに対し、若年層は多くが「価格・コストパフォーマンスの悪さ」を挙げていた。食肉家計分析では若年層の牛肉への支出増加も明らかとなっており、コストパフォーマンスに見合う適正な価格を通じて今後の牛肉消費を担う若年層の需要が一層喚起されることを期待したい。

単純集計表

F4. あなたは結婚していますか。

	回答数	%
結婚していない（離死別を含む）	2108	35.1
結婚している（事実婚を含む）	3892	64.9
合計	6000	100.0

F5. あなたの職業をお知らせください。

	回答数	%
会社員・役員	1996	33.3
自営業	328	5.5
専門職（医師、弁護士、美容師、デザイナー等）	183	3.1
公務員	193	3.2
学生	76	1.3
専業主婦・専業主夫	1209	20.2
パート・アルバイト・フリーター	923	15.4
無職・定年退職	1016	16.9
その他	76	1.3
合計	6000	100.0

**F6. 同居のご家族の人数を教えてください。またそのうち、
あなたの子どもの人数と、65歳以上の人数もそれぞれお知らせください。**

【何人でお住まいですか。あなたも含めた人数をお答えください。

※普段、最も過ごす時間が多い場所（ご自宅）での同居人数をお答えください。】

	回答数	%
1人	993	16.6
2人	2309	38.5
3人	1365	22.8
4人	950	15.8
5人	273	4.6
6人	84	1.4
7人	20	0.3
8人	6	0.1
合計	6000	100

【同居されている方のうち、未成年（20歳未満）のお子様は何人ですか。】

	回答数	%
0人	4687	78.1
1人	650	10.8
2人	519	8.7
3人	118	2.0
4人	24	0.4
5人	2	0.0
合計	6000	100

【同居されている方のうち、65歳以上の方は何人ですか。

※あなたご自身が65歳以上の場合は、あなたも含めた人数をお答えください。】

	回答数	%
0人	3187	53.1
1人	1067	17.8
2人	1672	27.9
3人	66	1.1
4人	7	0.1
5人	0	0.0
6人	1	0.0
合計	6000	100

F7. あなたの世帯年収をお知らせください。

	回答数	%
200万円未満	565	9.4
200～400万円未満	1342	22.4
400～600万円未満	1251	20.9
600～800万円未満	860	14.3
800～1000万円未満	561	9.4
1000～1200万円未満	292	4.9
1200～1500万円未満	215	3.6
1500～2000万円未満	99	1.7
2000万円以上	71	1.2
わからない	744	12.4
合計	6000	100.0

SQ1. あなたは、どれくらいの頻度で食品の買い物をしますか。

	回答数	%
毎日	607	10.1
週に4～6回	1376	22.9
週に2～3回	2992	49.9
週に1回	1025	17.1
月に2～3回	-	-
月に1回	-	-
それ以下	-	-
合計	6000	100.0

SQ2. あなたは、どれくらいの頻度で食肉を購入しますか。

	回答数	%
毎日	86	1.4
週に4～6回	412	6.9
週に2～3回	2697	45.0
週に1回	2805	46.8
月に2～3回	-	-
月に1回	-	-
それ以下	-	-
食肉は購入しない	-	-
合計	6000	100.0

Q1. 1年前と比べて、あなたが特に価格が上昇していると感じている食品は何ですか。3つまでお答えください。

	回答数	%
米	3463	57.7
パン	1449	24.2
麺類	584	9.7
野菜	2528	42.1
果物	1196	19.9
牛肉	914	15.2
豚肉	860	14.3
鶏肉	289	4.8
鶏卵	1217	20.3
牛乳	668	11.1
乳製品（チーズ/バター/ヨーグルト等）	1049	17.5
魚介類	672	11.2
食用油	1048	17.5
惣菜・冷凍食品	525	8.8
その他	39	0.7
価格が上昇していると感じている食品はない	133	2.2
合計	6000	100.0

Q2. 最近の価格上昇により、あなたが購入量を減らした食品は何ですか。3つまでお答えください。

	回答数	%
米	709	11.8
パン	620	10.3
麺類	266	4.4
野菜	553	9.2
果物	929	15.5
牛肉	869	14.5
豚肉	323	5.4
鶏肉	106	1.8
鶏卵	279	4.7
牛乳	205	3.4
乳製品（チーズ/バター/ヨーグルト等）	602	10.0
魚介類	486	8.1
食用油	381	6.4
惣菜・冷凍食品	512	8.5
その他	20	0.3
価格上昇で購入量を減らした食品はない	2712	45.2
合計	6000	100.0

Q3. 普段、購入する量が最も多い食肉は何ですか。

	回答数	%
牛肉	589	9.8
豚肉	3277	54.6
鶏肉	1994	33.2
ひき肉	140	2.3
無回答	-	-
合計	6000	100.0

Q4. 普段、牛肉の中で購入する量が最も多いものは何ですか。

	回答数	%
和牛	1209	20.2
和牛以外の国産牛	1733	28.9
輸入牛肉	1637	27.3
牛肉は購入しない	694	11.6
わからない（牛肉の種類は気にしない）	727	12.1
合計	6000	100.0

Q5. 牛肉を購入しない理由について、あてはまるものを全てお答えください。

	回答数	%
価格が高いから（コストパフォーマンスが悪いから）	479	69.0
豚肉や鶏肉の方が好きだから（豚肉・鶏肉で十分だから）	257	37.0
牛肉が好きではないから（美味しいと思わないから）	118	17.0
牛肉は食べない主義だから	45	6.5
外食で食べているから	42	6.1
脂質が多いから（健康、ダイエットで）	39	5.6
商品の当たり外れが大きいから	38	5.5
料理が苦手だから（美味しく作れないから）	35	5.0
環境に悪影響を与えるから（牛のゲップなど）	12	1.7
惣菜で食べているから	11	1.6
その他	8	1.2
合計	694	100.0

Q6. それぞれの食肉について、最もよく食べる場面をお答えください。

	合計	外食	中食	内食	この肉は 食べない
【牛肉】	6000	2443	400	2826	331
	100.0	40.7	6.7	47.1	5.5
【豚肉】	6000	462	868	4613	57
	100.0	7.7	14.5	76.9	1.0
【鶏肉】	6000	441	908	4501	150
	100.0	7.4	15.1	75.0	2.5

Q7. 1年前と比べて、あなたは最近の食肉価格をどのように感じていますか。それぞれの食肉についてお答えください。

	合計	とても 高くなった	やや 高くなった	ほとんど 変わらない	やや 安くなった	とても 安くなった	わからない /意識してい ない
【国産牛肉】	6000	1771	2496	799	47	6	881
	100.0	29.5	41.6	13.3	0.8	0.1	14.7
【輸入牛肉】	6000	1434	2432	729	32	12	1361
	100.0	23.9	40.5	12.2	0.5	0.2	22.7
【国産豚肉】	6000	1396	3020	972	29	16	567
	100.0	23.3	50.3	16.2	0.5	0.3	9.5
【輸入豚肉】	6000	1114	2444	1008	46	20	1368
	100.0	18.6	40.7	16.8	0.8	0.3	22.8
【国産鶏肉】	6000	1138	2784	1356	52	23	647
	100.0	19.0	46.4	22.6	0.9	0.4	10.8
【輸入鶏肉】	6000	951	2152	1280	54	22	1541
	100.0	15.9	35.9	21.3	0.9	0.4	25.7
【ひき肉】	6000	851	2642	1408	29	24	1046
	100.0	14.2	44.0	23.5	0.5	0.4	17.4

Q8. 以下の食肉を購入する頻度をそれぞれお答えください。

	合計	1日に 1回以上	2～3日に 1回程度	4～6日に 1回程度	1週間に 1回程度	2～3週間に 1回程度	1か月に 1回程度	それ未満	この肉は 購入しない
【国産牛肉】	6000	118	460	368	1056	861	831	1353	953
	100.0	2.0	7.7	6.1	17.6	14.4	13.9	22.6	15.9
【輸入牛肉】	6000	72	253	262	698	766	772	1218	1959
	100.0	1.2	4.2	4.4	11.6	12.8	12.9	20.3	32.7
【国産豚肉】	6000	153	1125	770	2176	891	361	314	210
	100.0	2.6	18.8	12.8	36.3	14.9	6.0	5.2	3.5
【輸入豚肉】	6000	92	470	422	1207	736	423	575	2075
	100.0	1.5	7.8	7.0	20.1	12.3	7.1	9.6	34.6
【国産鶏肉】	6000	135	944	787	2064	993	443	329	305
	100.0	2.3	15.7	13.1	34.4	16.6	7.4	5.5	5.1
【輸入鶏肉】	6000	79	366	363	968	622	368	620	2614
	100.0	1.3	6.1	6.1	16.1	10.4	6.1	10.3	43.6
【ひき肉】	6000	101	386	473	1423	1431	902	722	562
	100.0	1.7	6.4	7.9	23.7	23.9	15.0	12.0	9.4

Q9. 前問でお答えいただいた食肉を購入する頻度について、1年前と比べてどのように変化しましたか。それぞれの食肉についてお答えください。

	合計	購入頻度は とても増えた	購入頻度は やや増えた	購入頻度は ほとんど 変わらない	購入頻度は やや減った	購入頻度は とても減った
【国産牛肉】	5047	108	220	3295	945	479
	100.0	2.1	4.4	65.3	18.7	9.5
【輸入牛肉】	4041	79	159	2556	842	405
	100.0	2.0	3.9	63.3	20.8	10.0
【国産豚肉】	5790	86	355	4247	883	219
	100.0	1.5	6.1	73.4	15.3	3.8
【輸入豚肉】	3925	76	233	2746	668	202
	100.0	1.9	5.9	70.0	17.0	5.1
【国産鶏肉】	5695	136	452	4180	736	191
	100.0	2.4	7.9	73.4	12.9	3.4
【輸入鶏肉】	3386	94	224	2384	514	170
	100.0	2.8	6.6	70.4	15.2	5.0
【ひき肉】	5438	91	310	4027	773	237
	100.0	1.7	5.7	74.1	14.2	4.4

Q10. あなたが食肉を購入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全てお答えください。

	合計	価格	鮮度	賞味期間・日持ち	内容量	食肉の部位	食肉の形態 (ブロック、スライスなど)	産地・ブランド	霜降り の度合い・脂身の割合	ドリップ (赤い汁)の有無	調理にかかる 手間	味付けの有無	目新しさ	その他 1	その他 2	その他 3	その他 4
【牛肉】	5385	4061	2732	1633	2085	1799	1242	1732	1059	1317	196	209	76	25	2	2	3
	100.0	75.4	50.7	30.3	38.7	33.4	23.1	32.2	19.7	24.5	3.6	3.9	1.4	0.5	0.0	0.0	0.1
【豚肉】	5948	4298	3042	1881	2429	2015	1572	1728	714	1446	250	237	72	30	4	3	1
	100.0	72.3	51.1	31.6	40.8	33.9	26.4	29.1	12.0	24.3	4.2	4.0	1.2	0.5	0.1	0.1	0.0
【鶏肉】	5822	4126	2905	1820	2294	2052	1135	1630	289	1406	263	219	68	24	3	4	1
	100.0	70.9	49.9	31.3	39.4	35.2	19.5	28.0	5.0	24.1	4.5	3.8	1.2	0.4	0.1	0.1	0.0
【ひき肉】	5438	3782	2691	1696	2215	719	503	1066	319	1137	210	135	58	22	7	3	-
	100.0	69.5	49.5	31.2	40.7	13.2	9.2	19.6	5.9	20.9	3.9	2.5	1.1	0.4	0.1	0.1	-

Q11. 今後さらに食肉の価格が上昇した場合、食肉を購入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全てお答えください。

	合計	価格	鮮度	賞味期間・日持ち	内容量	食肉の部位	食肉の形態 (ブロック、スライスなど)	産地・ブランド	霜降り の度合い・脂身の割合	ドリップ (赤い汁)の有無	調理にかかる 手間	味付けの有無	目新しさ	その他 1	その他 2	その他 3	その他 4
【牛肉】	5385	4276	2060	1288	1673	1124	802	1246	665	872	145	129	47	25	1	1	1
	100.0	79.4	38.3	23.9	31.1	20.9	14.9	23.1	12.3	16.2	2.7	2.4	0.9	0.5	0.0	0.0	0.0
【豚肉】	5948	4601	2318	1446	1907	1214	959	1273	465	963	161	136	47	27	2	1	1
	100.0	77.4	39.0	24.3	32.1	20.4	16.1	21.4	7.8	16.2	2.7	2.3	0.8	0.5	0.0	0.0	0.0
【鶏肉】	5822	4455	2229	1414	1841	1205	693	1191	223	960	165	138	39	25	2	1	1
	100.0	76.5	38.3	24.3	31.6	20.7	11.9	20.5	3.8	16.5	2.8	2.4	0.7	0.4	0.0	0.0	0.0
【ひき肉】	5438	4098	2084	1284	1726	521	346	865	226	797	138	83	24	22	2	1	1
	100.0	75.4	38.3	23.6	31.7	9.6	6.4	15.9	4.2	14.7	2.5	1.5	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0

Q12. 国産食肉又は輸入食肉のいずれかを選ぶ際に意識することは何ですか。それぞれの食肉についてあてはまるものを全てお答えください。

	合計	価格	品質	安全性	産地・ブランド	その他 1	その他 2	国産食肉か輸入食肉かは問わない／意識しない
【牛肉】	5385	3841	2578	2066	1693	37	1	93
	100.0	71.3	47.9	38.4	31.4	0.7	0.0	1.7
【豚肉】	5948	4112	2859	2299	1722	37	2	113
	100.0	69.1	48.1	38.7	29.0	0.6	0.0	1.9
【鶏肉】	5822	3959	2730	2269	1645	31	3	117
	100.0	68.0	46.9	39.0	28.3	0.5	0.1	2.0
【ひき肉】	5438	3679	2488	1985	1261	29	3	124
	100.0	67.7	45.8	36.5	23.2	0.5	0.1	2.3

Q13. 国産食肉と輸入食肉とを比べて、どれくらいの価格差までであれば国産食肉を購入しますか。それぞれの食肉についてお答えください。

	合計	価格に関係なく国産食肉は購入しない	同じ価格なら	+5%まで	+10%まで	+15%まで	+20%まで	+30%まで	+50%まで	+100%まで	+100%以上でも国産食肉を購入する
【牛肉】	5385	267	1401	820	1034	316	489	246	237	50	525
	100.0	5.0	26.0	15.2	19.2	5.9	9.1	4.6	4.4	0.9	9.7
【豚肉】	5948	260	1672	992	1144	326	456	210	206	57	625
	100.0	4.4	28.1	16.7	19.2	5.5	7.7	3.5	3.5	1.0	10.5
【鶏肉】	5822	251	1647	983	1080	308	441	191	209	52	660
	100.0	4.3	28.3	16.9	18.6	5.3	7.6	3.3	3.6	0.9	11.3
【ひき肉】	5438	235	1601	949	1007	282	400	170	188	46	560
	100.0	4.3	29.4	17.5	18.5	5.2	7.4	3.1	3.5	0.8	10.3

Q14. あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

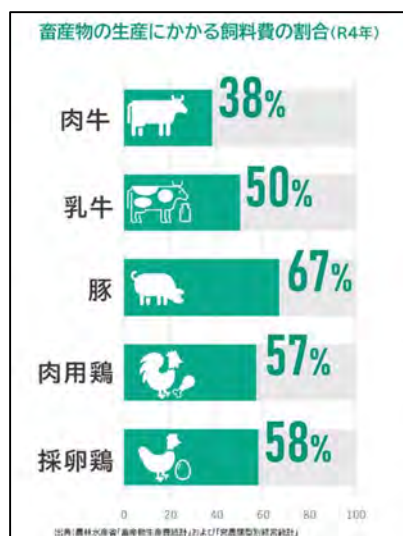
	合計	値上げは 許容できない	5%まで 許容できる	10%まで 許容できる	15%まで 許容できる	20%まで 許容できる	20%を超えて も許容できる
【国産牛肉】	6000	1762	1848	1518	271	301	300
	100.0	29.4	30.8	25.3	4.5	5.0	5.0
【輸入牛肉】	6000	2325	1831	1213	198	194	239
	100.0	38.8	30.5	20.2	3.3	3.2	4.0
【国産豚肉】	6000	1652	1974	1561	253	283	277
	100.0	27.5	32.9	26.0	4.2	4.7	4.6
【輸入豚肉】	6000	2315	1863	1196	207	191	228
	100.0	38.6	31.1	19.9	3.5	3.2	3.8
【国産鶏肉】	6000	1686	1973	1507	266	288	280
	100.0	28.1	32.9	25.1	4.4	4.8	4.7
【輸入鶏肉】	6000	2382	1829	1167	187	196	239
	100.0	39.7	30.5	19.5	3.1	3.3	4.0
【ひき肉】	6000	1906	1942	1425	230	246	251
	100.0	31.8	32.4	23.8	3.8	4.1	4.2

Q15. 畜産物を生産するためには様々な費用がかかっていますが、下記の図をご覧になって、
畜産物の生産にかかる飼料費(エサ代)の割合について、あなたはどのように感じましたか。次の中から最も近いものを1つお答えください。

	回答数	%
初めて知ったが、飼料費の割合が高いと感じた	3269	54.5
初めて知ったが、飼料費の割合は妥当だと感じた	707	11.8
初めて知ったが、飼料費の割合は低いと感じた	152	2.5
見聞きした事があるが、改めて飼料費の割合が高いと感じた	1044	17.4
見聞きした事があるが、改めて飼料費の割合は妥当だと感じた	180	3.0
見聞きした事があるが、改めて飼料費の割合が低いと感じた	43	0.7
その他	16	0.3
わからない／特に何も感じない	589	9.8
合計	6000	100.0

Q16. 畜産物の生産にかかる飼料費の割合が妥当または低いと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。

	回答数	%
家計に占める食料支出の割合も同じくらいだと思うから	164	15.2
家畜を育てるためには、もっと飼料費がかかると思っていたから	246	22.7
日本の畜産は、家畜に飼料を沢山（必要以上に）与えていると思うから	151	14.0
ニュース等で飼料の価格が値上がりしていると聞いていたから	391	36.1
製造業など他の産業でも原材料費はこの程度かかっていると思うから	259	23.9
家畜を育てる以上、飼料にコストがかかるのは当然だと思うから	579	53.5
その他	10	0.9
なんとなく	41	3.8
合計	1082	100.0



Q15 の図



Q19 の図

**Q17. 日本は飼料の約75%を海外から輸入しています。この輸入割合について、あなたはどのように感じますか。
次の中から最も近いものを1つお答えください。**

	回答数	%
初めて知ったが、飼料の輸入割合が高いと感じた	2684	44.7
初めて知ったが、飼料の輸入割合は妥当だと感じた	479	8.0
初めて知ったが、飼料の輸入割合は低いと感じた	139	2.3
見聞きした事があるが、改めて飼料の輸入割合が高いと感じた	1910	31.8
見聞きした事があるが、改めて飼料の輸入割合は妥当だと感じた	153	2.6
見聞きした事があるが、改めて飼料の輸入割合が低いと感じた	37	0.6
その他	10	0.2
わからない／特に何も感じない	588	9.8
合計	6000	100.0

Q18. 現在の飼料の輸入割合が妥当または低いと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。

	回答数	%
日本で本来飼える頭数以上に家畜を飼っている結果だと思うから	179	22.2
国産より輸入飼料のほうが入手しやすいと思うから	252	31.2
国産より輸入飼料の方が安価だと思うから	285	35.3
人間の食料も大部分を輸入に依存しているから	273	33.8
日本は気候や地形などが飼料生産に適していないため、飼料を輸入せざるを得ないと思うから	271	33.5
その他	4	0.5
なんとなく	30	3.7
合計	808	100.0

**Q19. 飼料の価格はトン当たり6～7万円で推移していましたが、最近では10万円前後になっています。
こうした飼料価格の動向について、あなたはどのように感じますか。次の中から最も近いものを1つお答えください。**

	回答数	%
初めて知ったが、飼料価格が高騰していると感じた	3091	51.5
初めて知ったが、飼料価格は妥当だと感じた	279	4.7
初めて知ったが、飼料価格はそれほど高騰していないと感じた	176	2.9
見聞きした事があるが、改めて飼料価格は高騰していると感じた	1868	31.1
見聞きした事があるが、改めて飼料価格は妥当だと感じた	77	1.3
見聞きした事があるが、改めて飼料価格はそれほど高騰していないと感じた	29	0.5
その他	20	0.3
わからない／特に何も感じない	460	7.7
合計	6000	100.0

Q20. 現在の飼料価格が妥当、またはそれほど高騰していないと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。

	回答数	%
飼料価格は変動が激しいものだと思うから	115	20.5
世界的に食肉の需要が高まり、飼料の需要が高まっているから	148	26.4
ウクライナ情勢等で世界的にモノの流通が混乱しているから	165	29.4
円安だから	203	36.2
飼料だけでなく、さまざまなモノの値段が高騰しているから	219	39.0
異常気象や自然災害により、トウモロコシなどの飼料原料の生産が被害を受けているから	159	28.3
その他	2	0.4
なんとなく	21	3.7
合計	561	100.0

Q21. 国内の肉用牛農家は、この10年間で57,500戸（2014年）から36,500戸（2024年）へと約40%減少しています。このように肉用牛農家が減少していることをあなたはどのように感じますか。次の中から最も近いものを1つお答えください。

	回答数	%
初めて知ったが、減少割合（数）は深刻だと思う	3114	51.9
初めて知ったが、減少割合（数）は妥当だと思う	348	5.8
初めて知ったが、それほど減少していないと思う	160	2.7
見聞きした事があるが、改めて減少割合（数）は深刻だと思う	1674	27.9
見聞きした事があるが、改めて減少割合（数）は妥当だと思う	144	2.4
見聞きした事があるが、改めてそれほど減少していないと思う	29	0.5
その他	20	0.3
わからない／特に何も感じない	511	8.5
合計	6000	100.0

Q22. 肉用牛農家の減少が妥当、またはそれほど減少していないと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。

	回答数	%
生産性の低い肉用牛農家が廃業し、生産性の高い肉用牛農家が残っている結果だと思うか	143	21.0
消費者が牛肉を以前ほど食べなくなってきたから	146	21.4
農家全体が減少しており、肉用牛農家に限ったことではないから	266	39.1
輸入牛肉や同業者との競争が激しくなっていると思うから	192	28.2
肉用牛農家は儲からないと思うから	118	17.3
もっと減少している他の産業もあるから	122	17.9
肉用牛生産の労働がきついと思うから	166	24.4
その他	17	2.5
なんとなく	23	3.4
合計	681	100.0

Q23. 飼料価格の高騰等により、食肉の生産コストが上昇していますが、生産コスト上昇分を食肉価格（小売価格）に転嫁することについて、あなたのお考えにあてはまるものを全てお答えください。

	回答数	%
生産コストが上昇すれば、食肉価格が上昇するのは当然である	3017	50.3
日本の畜産が存続していくためには、食肉価格が上昇しても仕方ない	2603	43.4
生産コストの上昇は生産者や関係者の努力でカバーし、食肉価格の上昇はできるかぎり抑えて欲しい	962	16.0
食肉価格が上昇すると購入量が減ってしまうので、畜産農家の厳しさは変わらない。	1422	23.7
食肉価格への転嫁より、畜産農家の支援策を充実した方がよい		
その他	57	1.0
よくわからない	477	8.0
合計	6000	100.0

Q24. 食肉の生産コストの上昇により食肉価格（小売価格）も上昇していますが、両者の関係について、あなたはどのように感じていますか。最も近いものを1つお答えください。

	回答数	%
生産コストの上昇分以上に、食肉価格へ転嫁されていると思う	1009	16.8
生産コストの上昇分がほぼ、食肉価格へ転嫁されていると思う	2259	37.7
生産コストの上昇分の割に、あまり食肉価格へ転嫁されていないと思う	1636	27.3
その他	10	0.2
よくわからない	1086	18.1
合計	6000	100.0

Q25. 今後の食料・食肉の供給についてあなたは不安を感じますか。

	回答数	%
とても不安を感じる	1736	28.9
やや不安を感じる	3255	54.3
あまり不安を感じない	691	11.5
全く不安を感じない	69	1.2
よくわからない	249	4.2
合計	6000	100.0

Q26. 今後の食料・食肉の供給に不安を感じる理由を、全てお答えください。

	回答数	%
安全な食品を食べられなくなる可能性があるから	2421	48.5
質の高い食品が食べられなくなる可能性があるから	2121	42.5
食品の選択肢が減る可能性があるから	1723	34.5
食品価格がより上昇する可能性があるから	2861	57.3
今まで食べていたものが食べられなくなる可能性があるから	2033	40.7
日本の食料自給率がさらに低下する可能性があるから	2224	44.6
その他	26	0.5
なんとなく	60	1.2
合計	4991	100.0

Q27. 今後の食料・食肉の供給に不安を感じない理由を、全てお答えください。

	回答数	%
供給不足や価格上昇はすぐには起こらないだろうから	125	16.4
ある物や他の安い物を食べれば良いから	357	47.0
値上がりしても価格を気にしないから	150	19.7
供給不足や価格上昇はすぐに元に戻るだろうから	95	12.5
自分には関係なさそうだから	43	5.7
その他	18	2.4
なんとなく	122	16.1
合計	760	100.0

食料需要の増加、気候変動、世界情勢の混迷等は、食肉をはじめとする食料の世界的な安定供給に影響を及ぼしています。
このような食料供給に影響を及ぼす可能性のある要因が供給リスクです。

Q28. 上記の文章を読んだうえで、世界的な食料供給リスクについて、あなたのお考えに最も近いものを1つお答えください。

	回答数	%
現在は食料の供給リスクが増大しており、中長期的にもリスクは継続・増大すると思う	3778	63.0
現在は食料の供給リスクが増大しているが、中長期的にはリスクは増大しないと思う	437	7.3
現在は食料の供給リスクが増大しているとは思わないが、中長期的にはリスクは増大すると思う	813	13.6
現在は食料の供給リスクが増大しているとは思わないし、中長期的にもリスクは増大するとは思わない	107	1.8
食料の供給リスクについて考えたことがない	342	5.7
よくわからない	523	8.7
合計	6000	100.0

Q29. 中長期的に、世界的な食料の供給リスクが継続・増大するとあなたがお考えになる理由を、全てお答えください。

	回答数	%
世界的な人口増加や所得増加により食料需要が増大するから	2440	53.1
温暖化等の気候変動や異常気象が頻発するから	3628	79.0
政治的経済的事由（ウクライナ情勢等）により食料供給が不安定化するから	2692	58.6
土壌流出や地力低下等により、農用地の生産力が低下するから	992	21.6
バイオ燃料として利用する等、農産物の食料以外の用途が拡大するから	586	12.8
鳥インフルエンザ等の家畜伝染病のまん延が懸念されるから	1122	24.4
その他	67	1.5
なんとなく	66	1.4
合計	4591	100.0

Q30. 中長期的に、世界的な食料の供給リスクが継続・増大しないとあなたがお考えになる理由を、全てお答えください。

	回答数	%
品種改良やバイオ技術等により、収穫量の多い農畜産物が栽培・飼養されるようになっているから	160	29.4
機械化の進展、生産技術の向上、肥料使用の拡大等により、農畜産物の収穫量が増えているから	222	40.8
世界的には、農用地の開発余地が残っているから	137	25.2
政治的経済的な不安定化要因は一時的なものであり、いずれ正常化するから	145	26.7
世界の人口や食料需要は、予測ほどには増大しないと思うから	94	17.3
培養肉や代替肉、未利用魚（一般的ではないが食べたらおいしい魚）などの代替品の開発が進んでいるから	94	17.3
その他	6	1.1
なんとなく	27	5.0
合計	544	100.0

Q31. ここで改めてお聞きしますが、あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

	合計	値上げは 許容できない	5%まで 許容できる	10%まで 許容できる	15%まで 許容できる	20%まで 許容できる	20%を超えて も許容できる
【国産牛肉】	6000	1207	1835	1611	537	433	377
	100.0	20.1	30.6	26.9	9.0	7.2	6.3
【輸入牛肉】	6000	1755	1995	1335	370	271	274
	100.0	29.3	33.3	22.3	6.2	4.5	4.6
【国産豚肉】	6000	1135	1913	1668	522	418	344
	100.0	18.9	31.9	27.8	8.7	7.0	5.7
【輸入豚肉】	6000	1747	2009	1341	376	271	256
	100.0	29.1	33.5	22.4	6.3	4.5	4.3
【国産鶏肉】	6000	1165	1929	1644	506	412	344
	100.0	19.4	32.2	27.4	8.4	6.9	5.7
【輸入鶏肉】	6000	1785	1992	1312	369	272	270
	100.0	29.8	33.2	21.9	6.2	4.5	4.5
【ひき肉】	6000	1338	2002	1591	432	334	303
	100.0	22.3	33.4	26.5	7.2	5.6	5.1

Q32. 食肉の安定供給のために、日本の畜産業にとって必要だとあなたが考えることを、全てお答えください。

	回答数	%
飼料の自給率を高める	3843	64.1
飼料の安定的な輸入を確保する	2036	33.9
飼育(肥育)期間を今よりも短くして、飼料費を抑える	536	8.9
飼料の多様化（牧草、米、食品廃棄物など）を進める	2723	45.4
品質・安全性を高め、外国産との差別化を図る	1354	22.6
生産コストに見合った適正な価格で販売する	1962	32.7
値ごろ感のある食肉を提供する	728	12.1
畜産農家に対する支援措置を拡充する	2024	33.7
輸出を拡大する	428	7.1
家畜伝染病の発生防止を徹底する	1150	19.2
環境に配慮した飼育(肥育)方法にする	1065	17.8
その他	61	1.0
よくわからない	378	6.3
合計	6000	100.0

Q33. 食料・食肉の安定供給のために、消費者が取り組むべきとあなたが考えることを、全てお答えください。

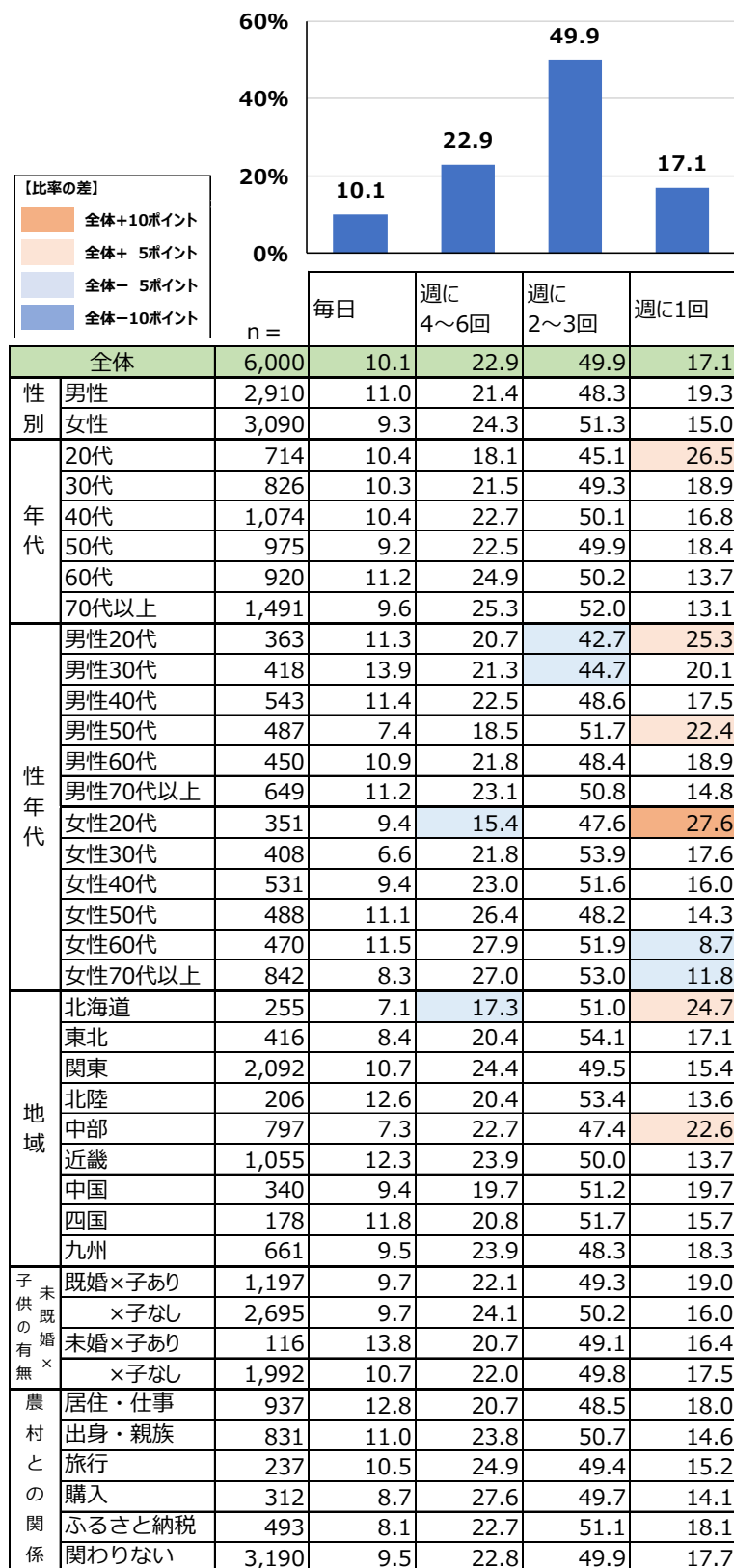
	回答数	%
買い物や外食時に多少高くても国産の農畜産物を選ぶ	2129	35.5
地産地消を意識し、地元のものを購入する	3288	54.8
食品ロスを減らす	4476	74.6
パン食ではなく、自給率の高いごはん食を心がける	1276	21.3
ふるさと納税、寄付、クラウドファンディング等で生産者を応援する	904	15.1
その他	41	0.7
特に取り組む必要はない	318	5.3
合計	6000	100.0

Q35. あなたは、現在、農村地域とどのような関わりを持っていますか。あてはまるものを全てお答えください。

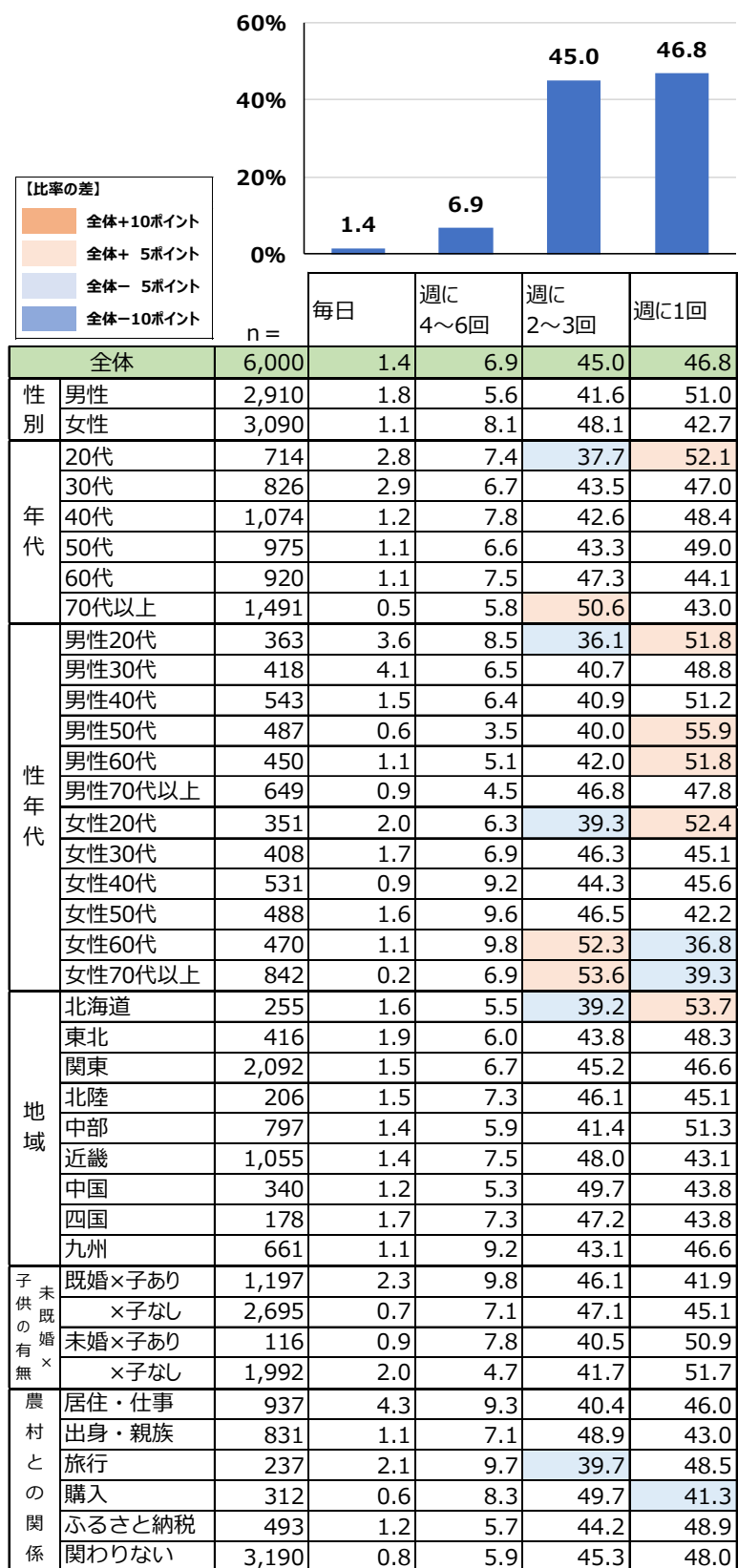
	回答数	%
農村地域に住んでいる	638	10.6
農村地域で仕事をしている	212	3.5
仕事上、農村地域と関わりがある	212	3.5
農村地域の出身である	639	10.7
農村地域に親族が住んでいる	754	12.6
旅行などで農村地域を訪れている	377	6.3
農村地域の特産品を購入している（直接、ECなどで）	652	10.9
ふるさと納税で農村地域を応援している	783	13.1
その他	60	1.0
農村地域と特段の関わりを持っていない	3188	53.1
合計	6000	100.0

クロス集計表

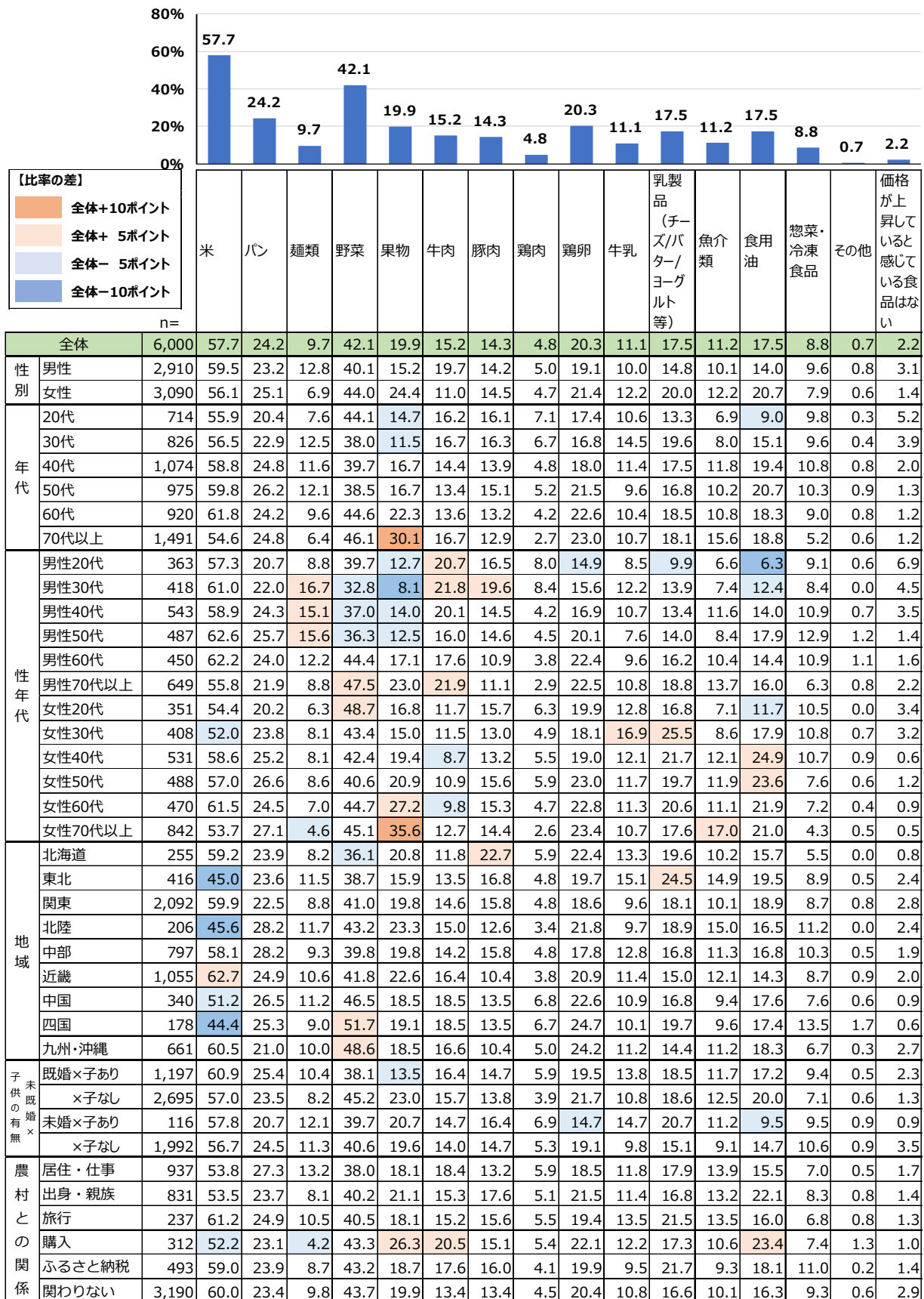
SQ1. どれくらいの頻度で食品の買い物をしますか。



SQ2. どれくらいの頻度で食肉を購入しますか。

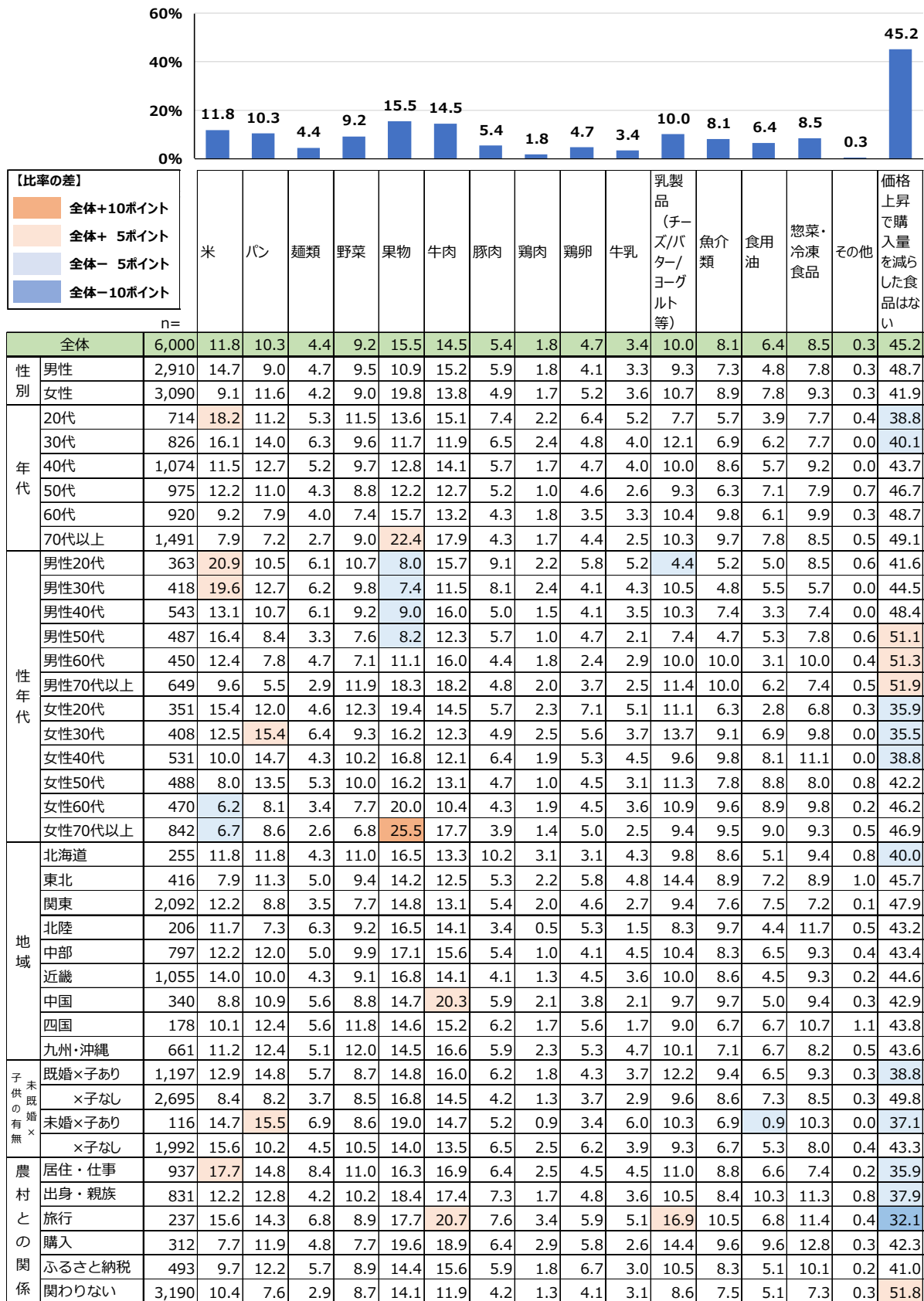


Q1 1年前と比べて、あなたが特に価格が上昇していると感じている食品は何ですか。
3つまでお答えください。

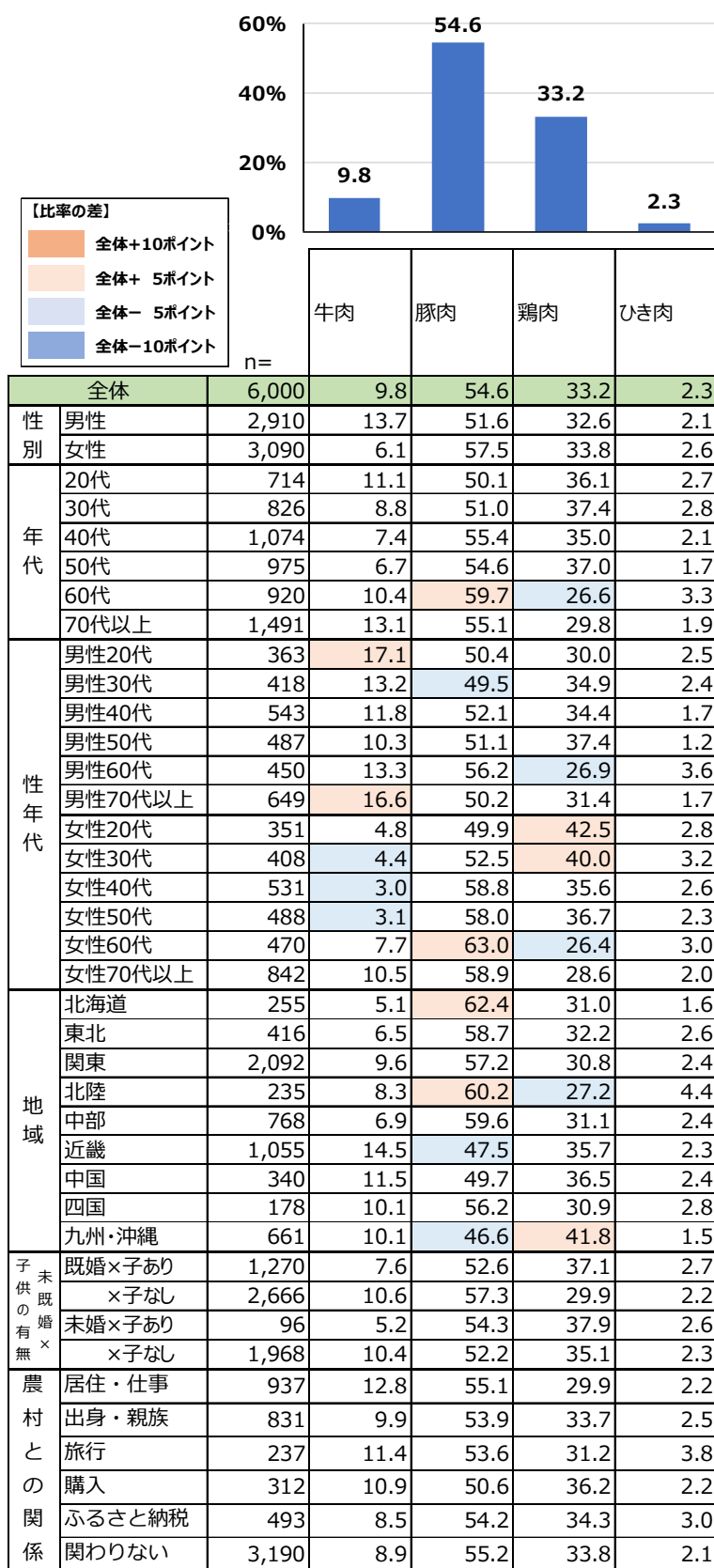


Q2 最近の価格上昇により、あなたが購入量を減らした食品は何ですか。

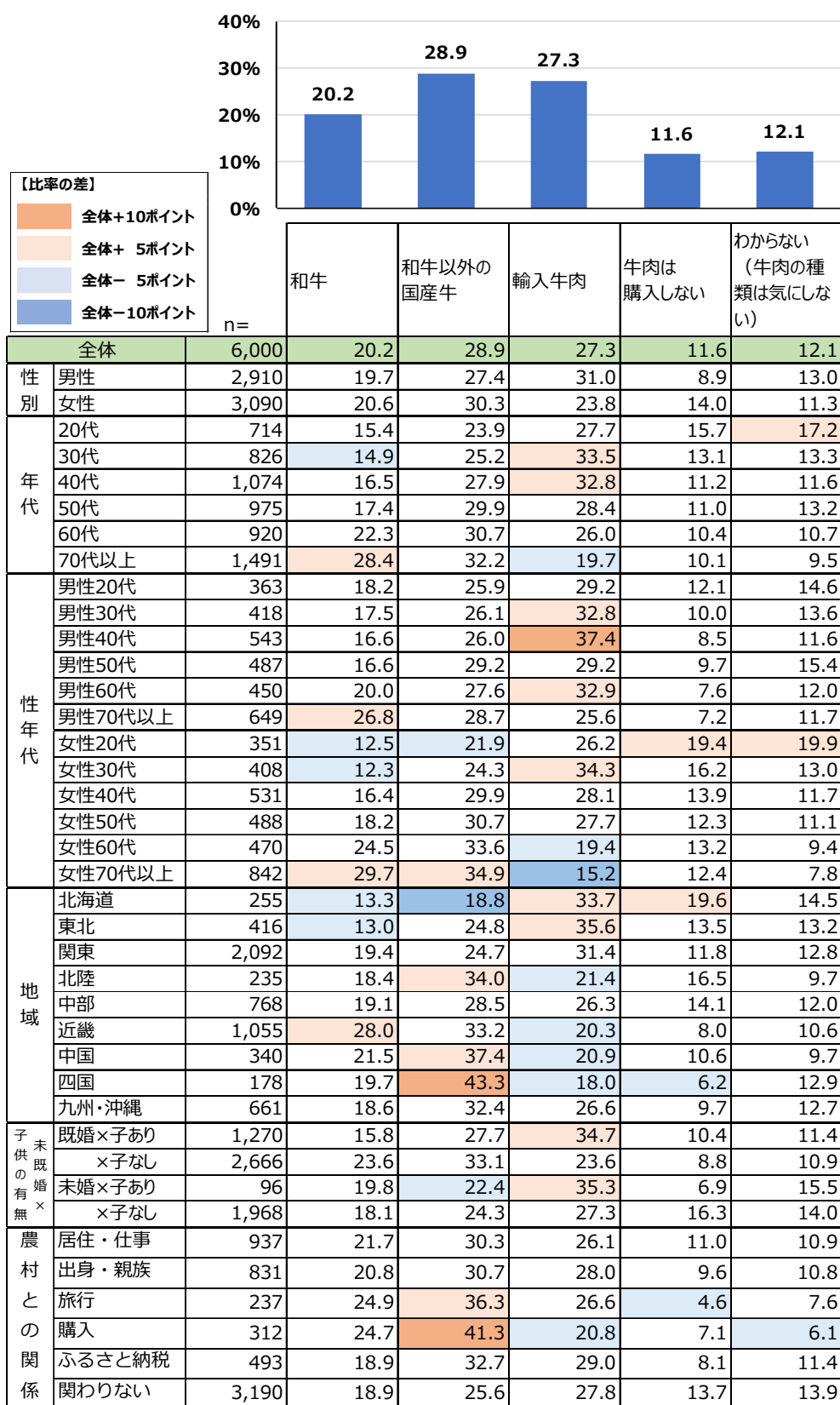
3 つまでお答えください。



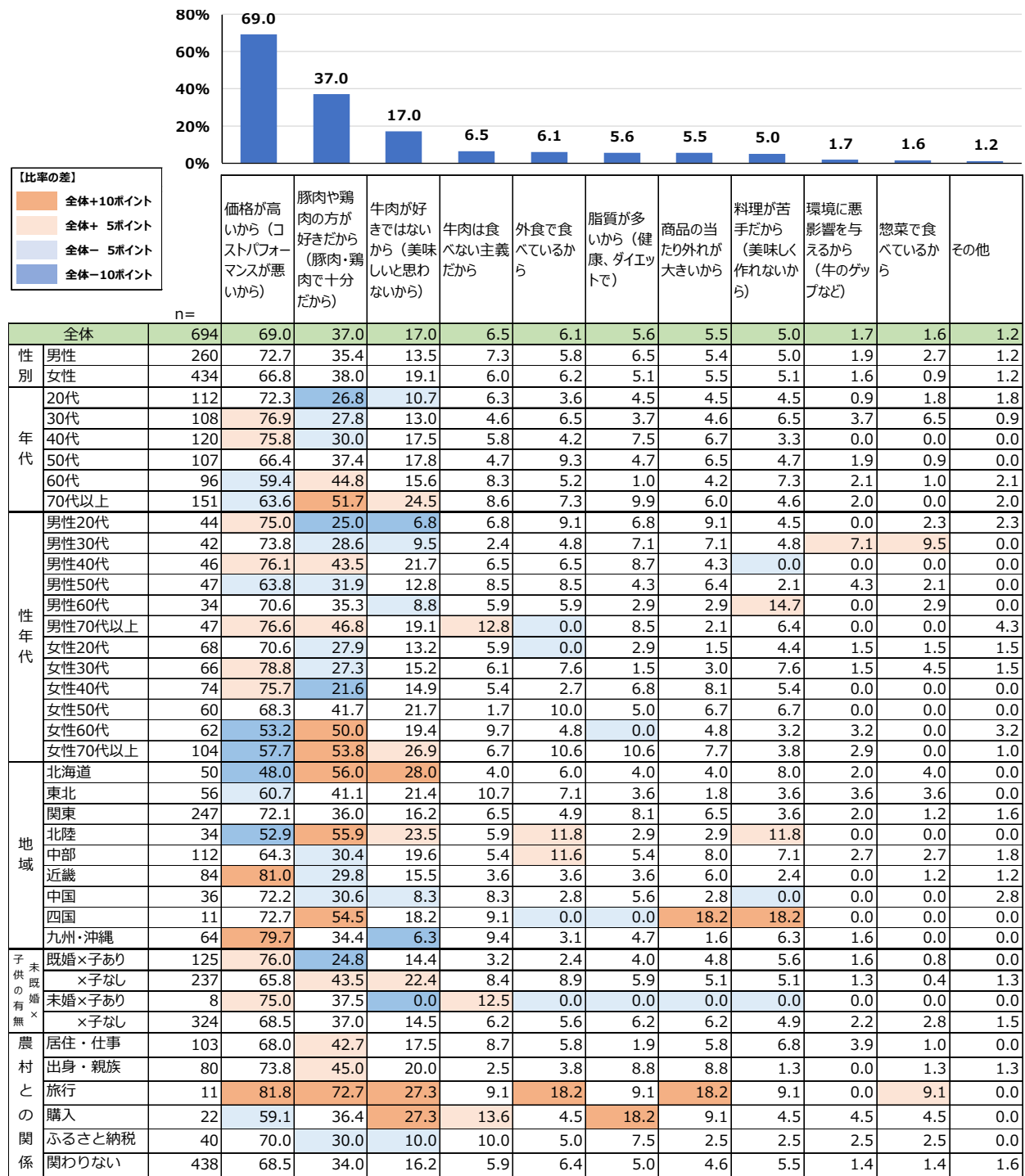
Q3. 普段、購入する量が最も多い食肉は何ですか。



Q4. 普段、牛肉の中で購入する量が最も多いものは何ですか

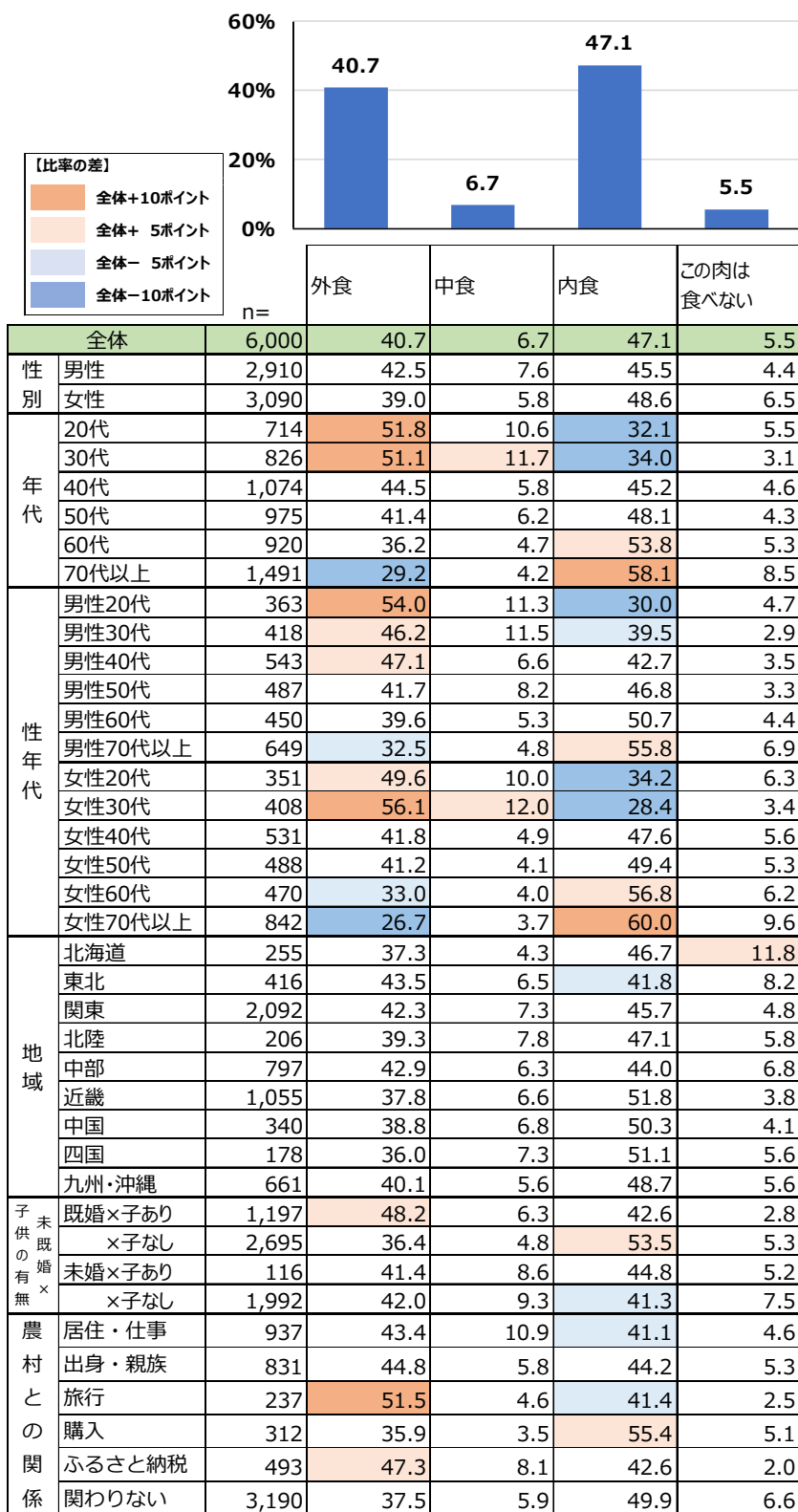


Q5. 牛肉を購入しない理由について、あてはまるものを全てお答えください。



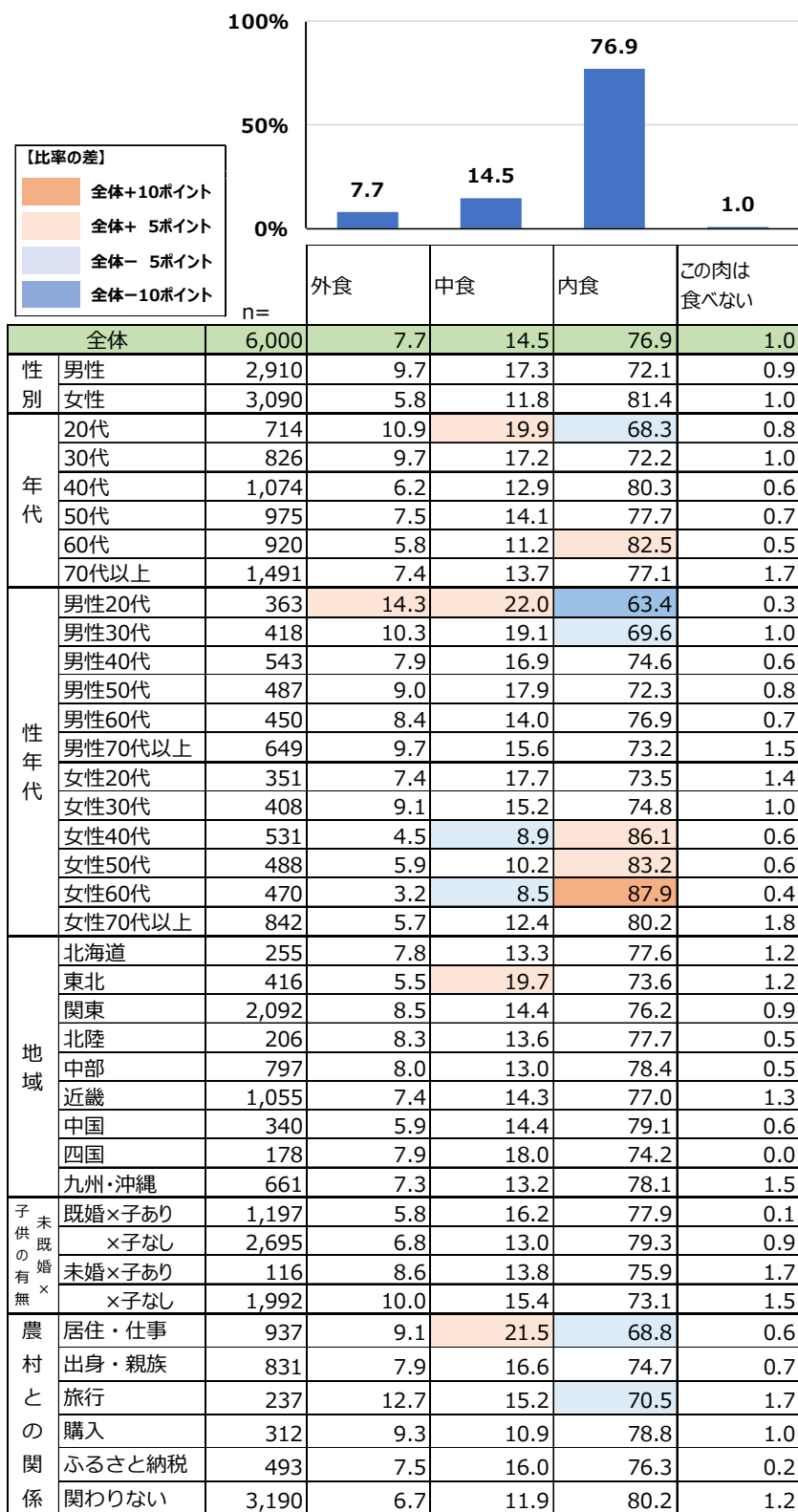
Q6-1. それぞれの食肉について、最もよく食べる場面をお答えください。

牛肉



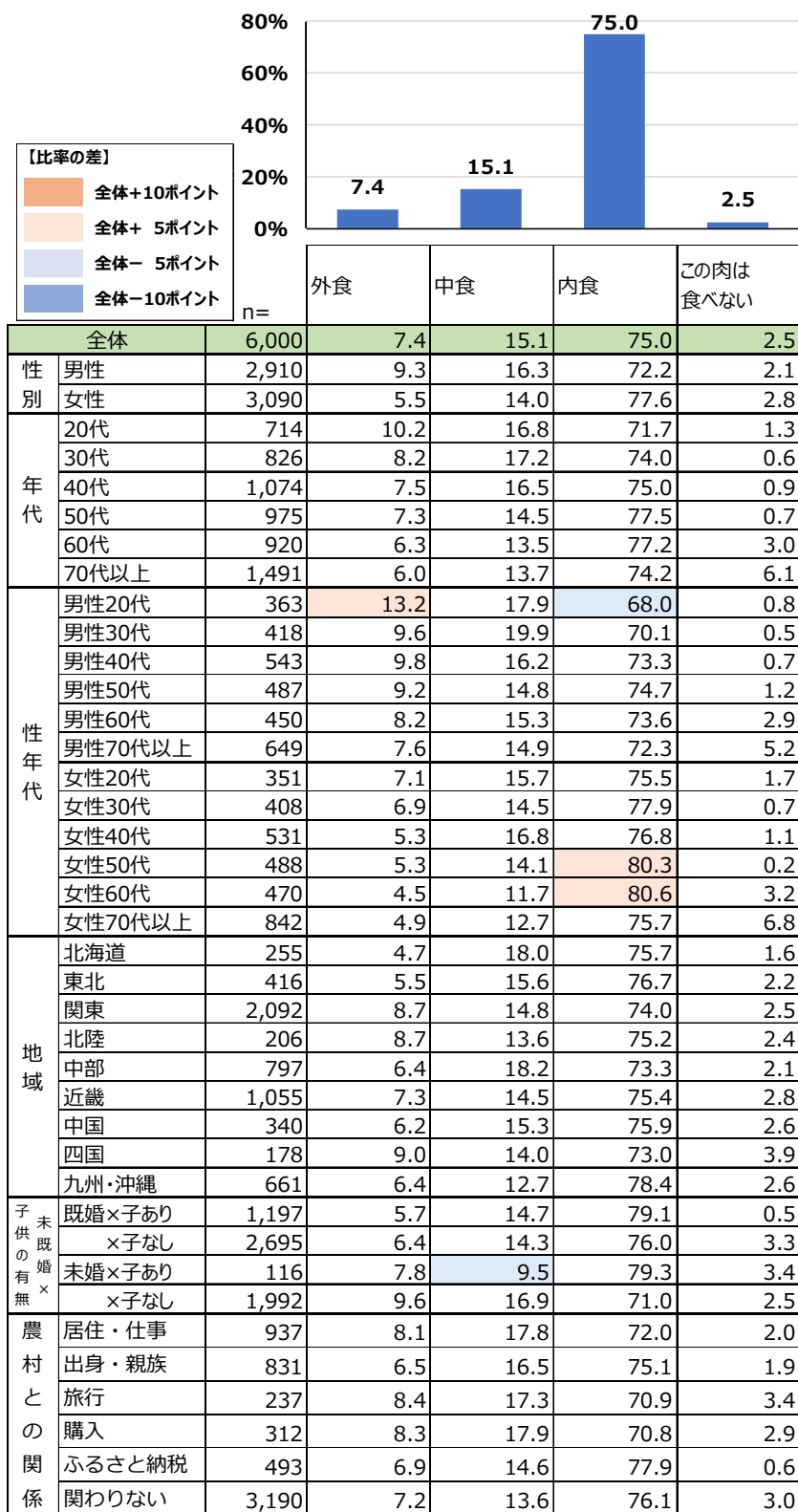
Q6-2. それぞれの食肉について、最もよく食べる場面をお答えください。

豚肉



Q6-3. それぞれの食肉について、最もよく食べる場面をお答えください。

鶏肉



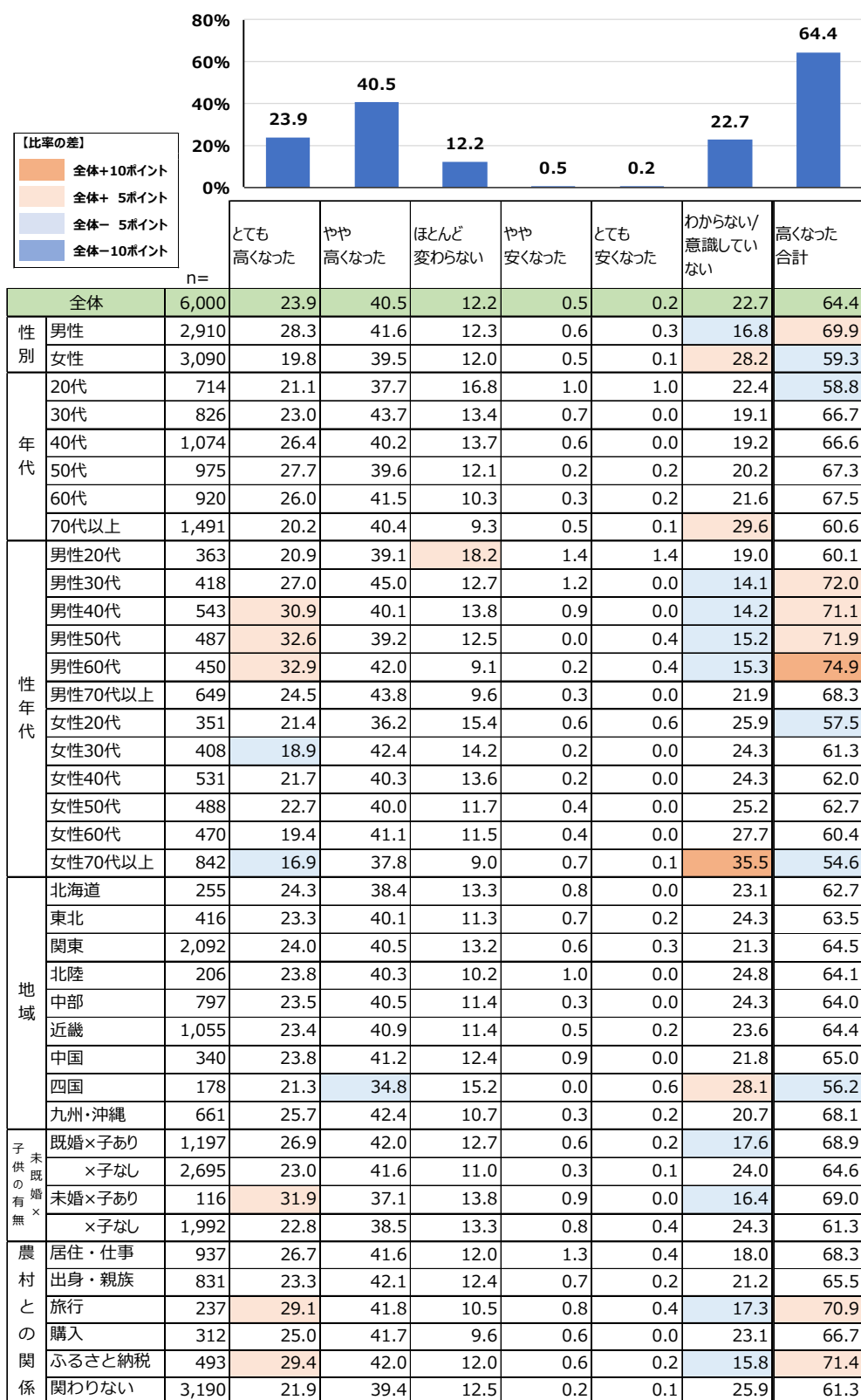
Q7-1. 1年前と比べて、あなたは最近の食肉価格をどのように感じていますか。それぞれの食肉についてお答えください。

国産牛肉



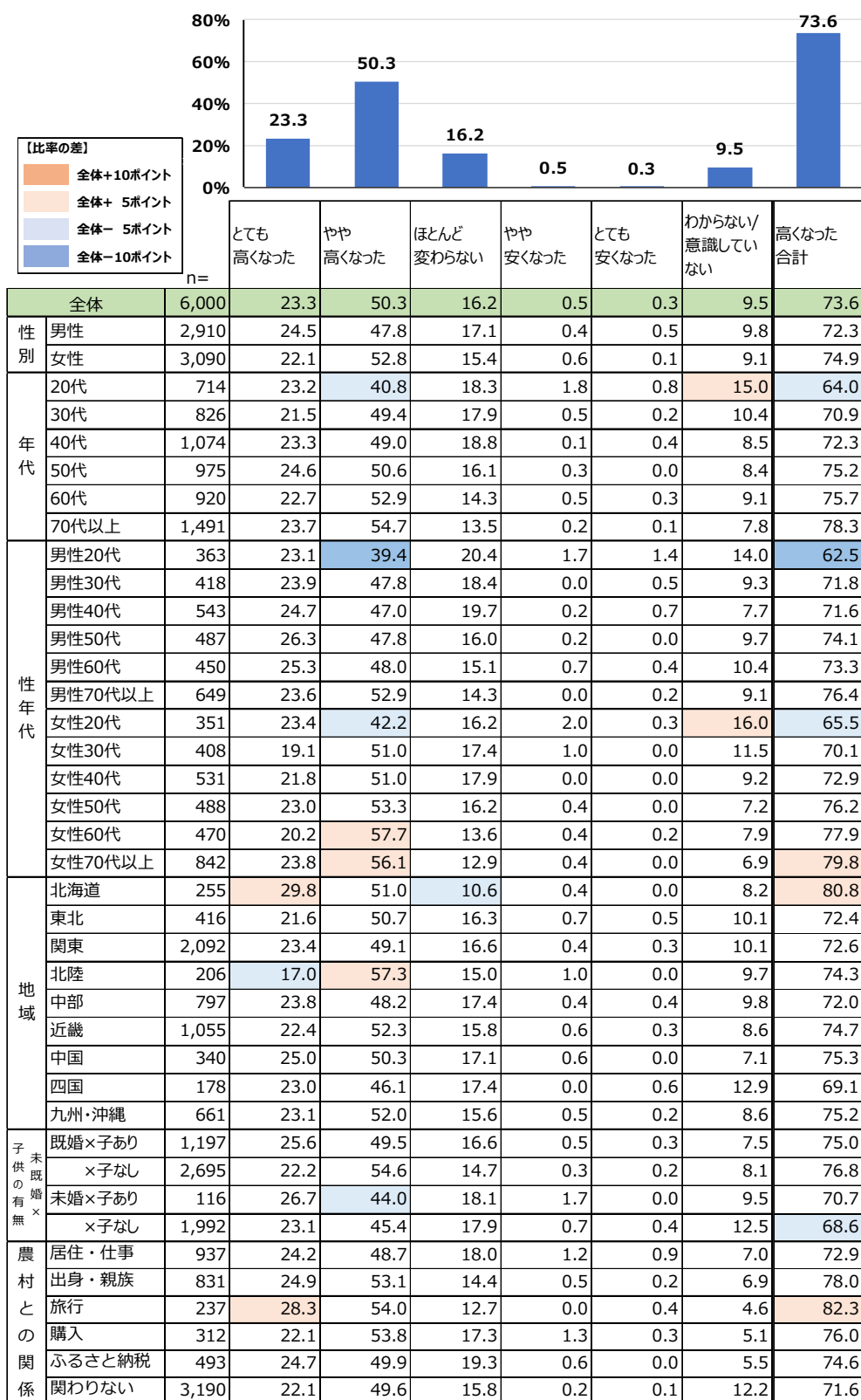
Q7-2. 1年前と比べて、あなたは最近の食肉価格をどのように感じていますか。それぞれの食肉についてお答えください。

輸入牛肉



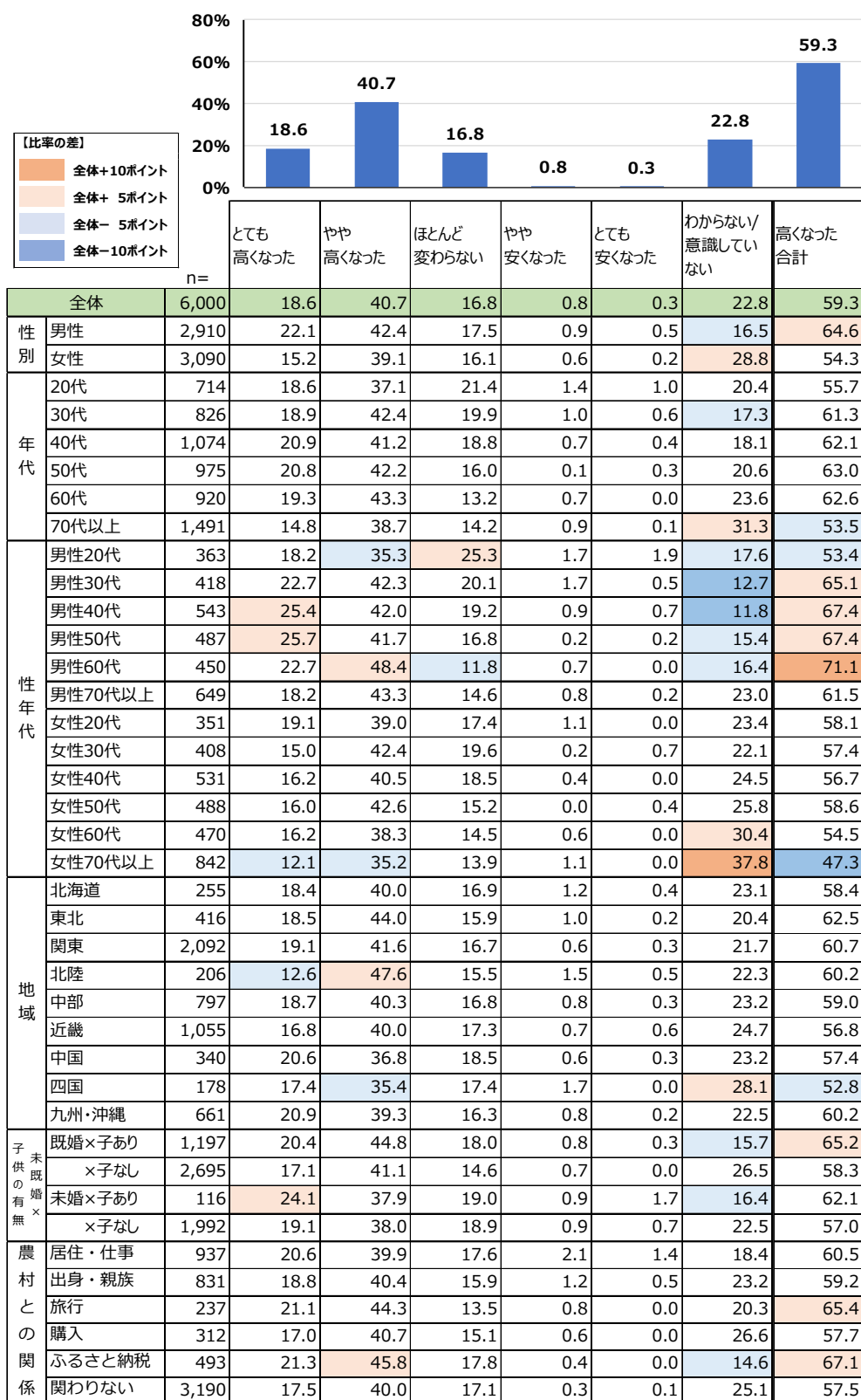
Q7-3. 1年前と比べて、あなたは最近の食肉価格をどのように感じていますか。それぞれの食肉についてお答えください。

国産豚肉



Q7-4. 1年前と比べて、あなたは最近の食肉価格をどのように感じていますか。それぞれの食肉についてお答えください。

輸入豚肉



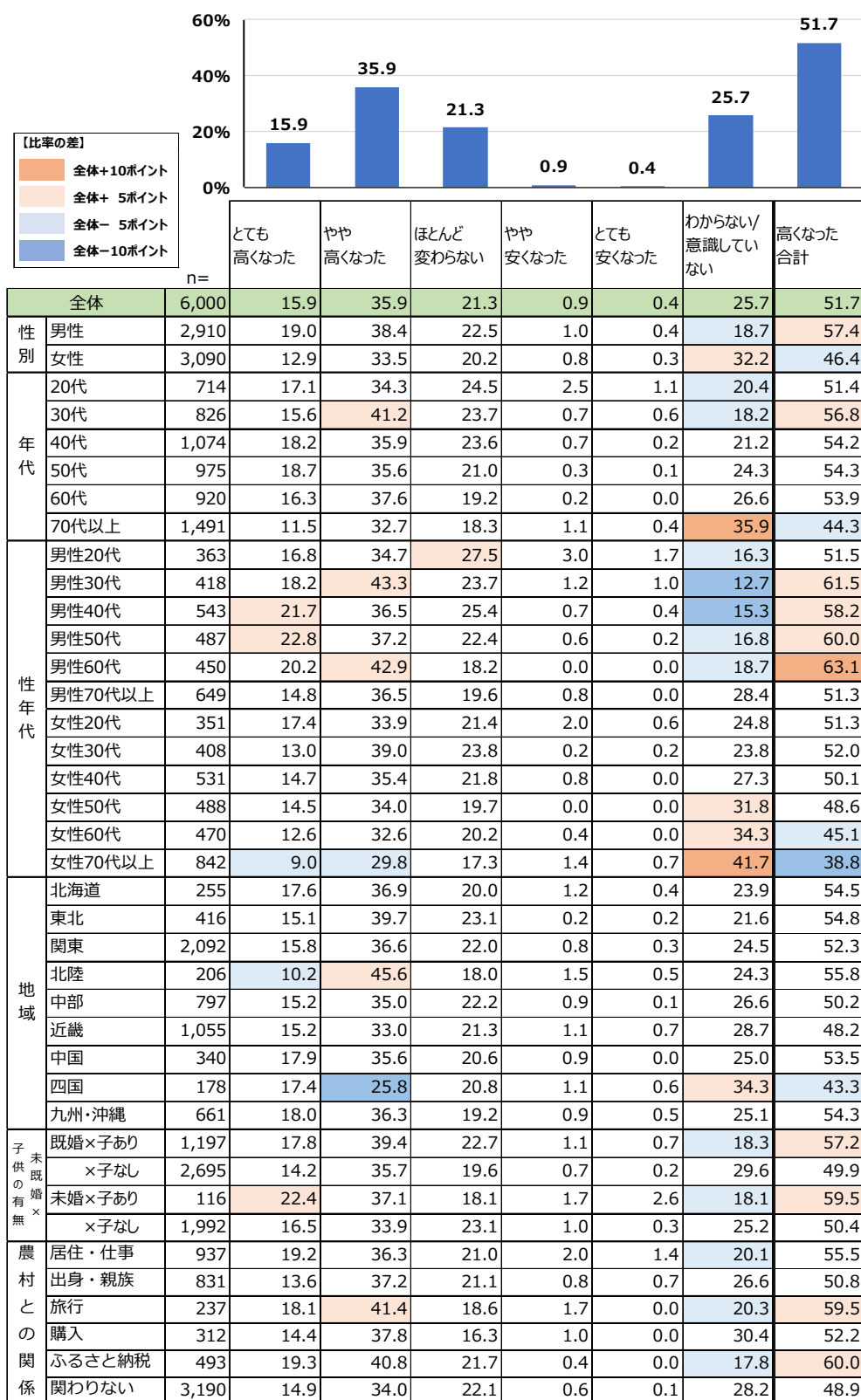
Q7-5. 1年前と比べて、あなたは最近の食肉価格をどのように感じていますか。それぞれの食肉についてお答えください。

国産鶏肉



Q7-6. 1年前と比べて、あなたは最近の食肉価格をどのように感じていますか。それぞれの食肉についてお答えください。

輸入鶏肉



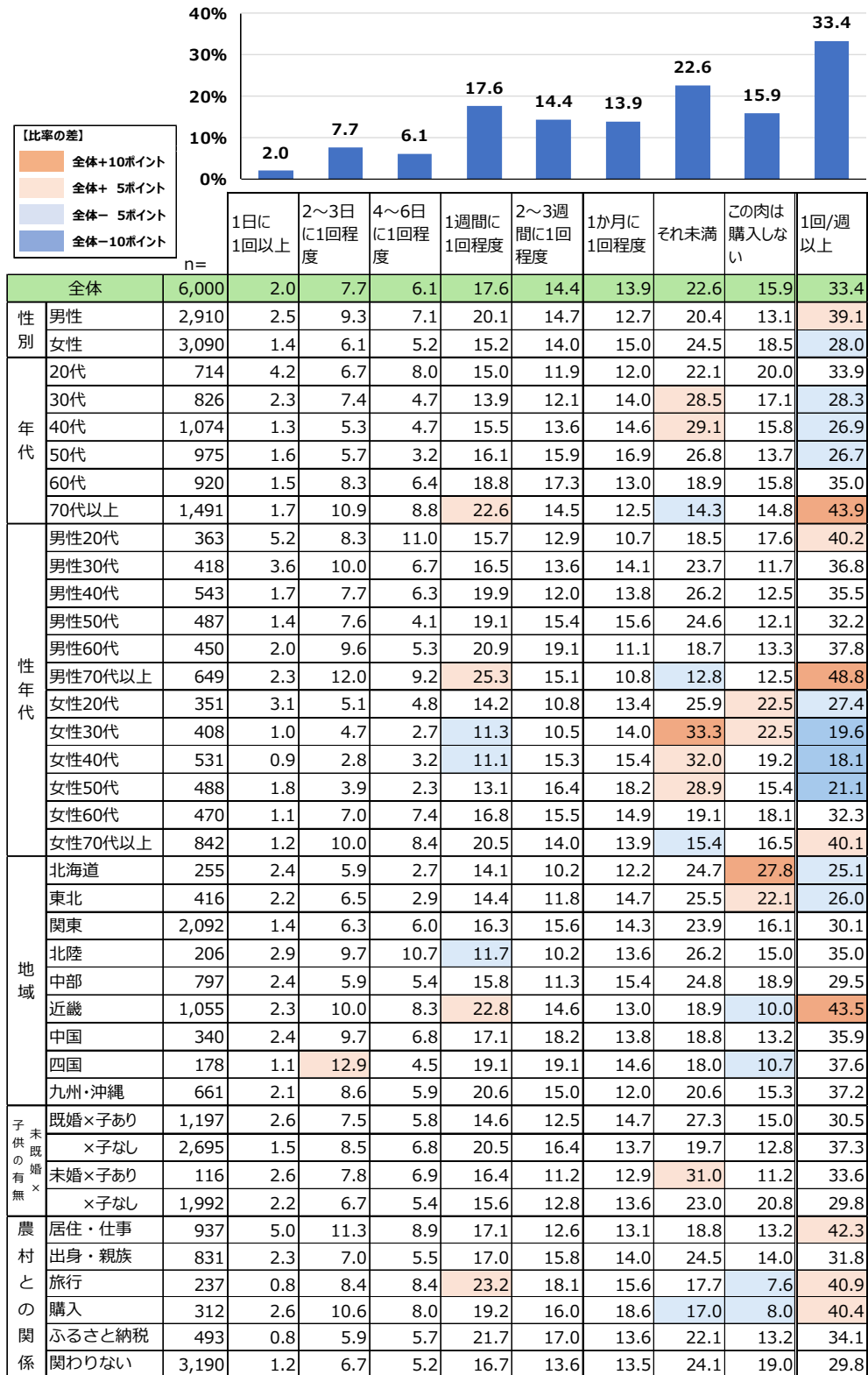
Q7-7. 1年前と比べて、あなたは最近の食肉価格をどのように感じていますか。それぞれの食肉についてお答えください。

ひき肉



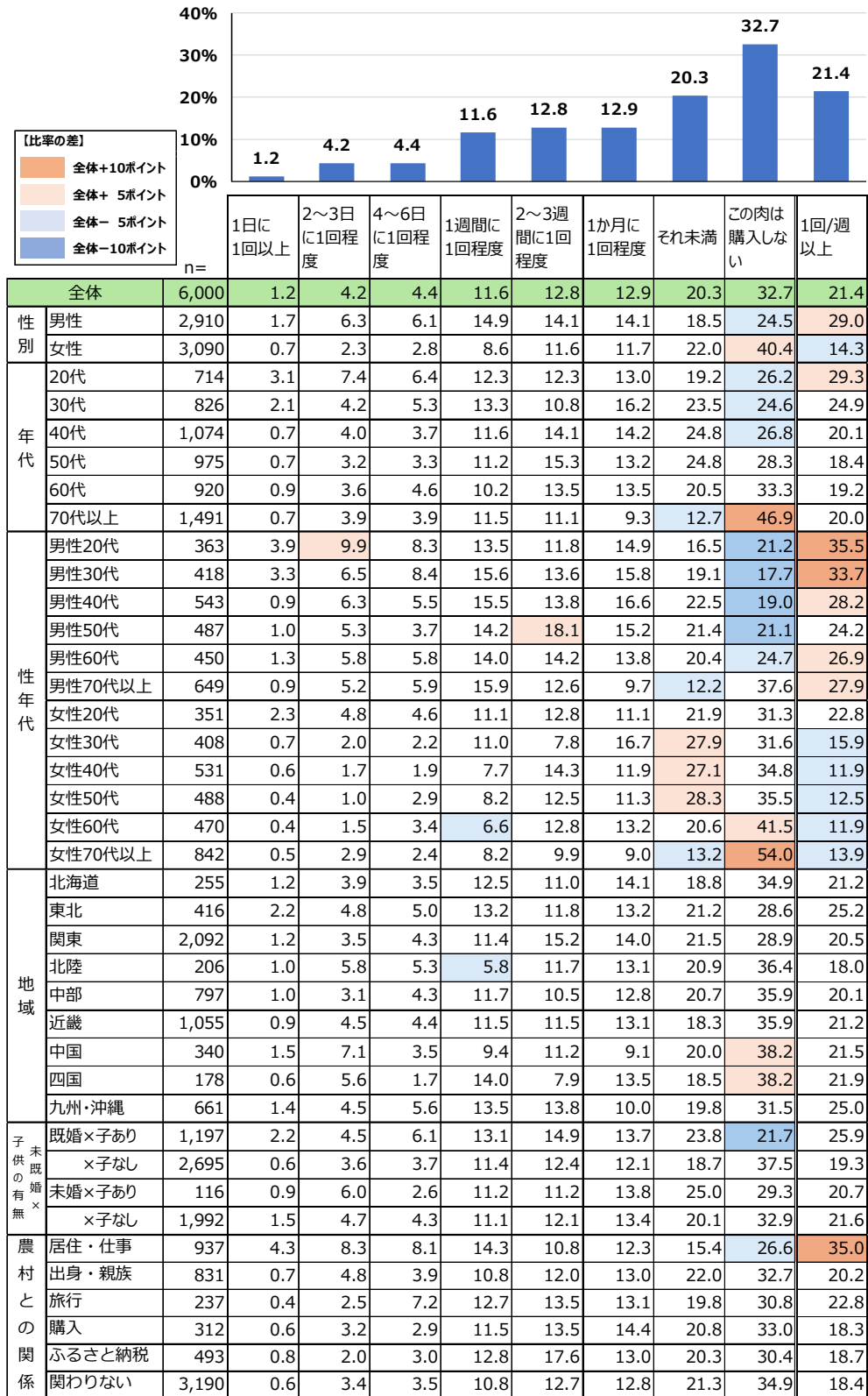
Q8-1. 以下の食肉を購入する頻度をそれぞれお答えください。

国産牛肉



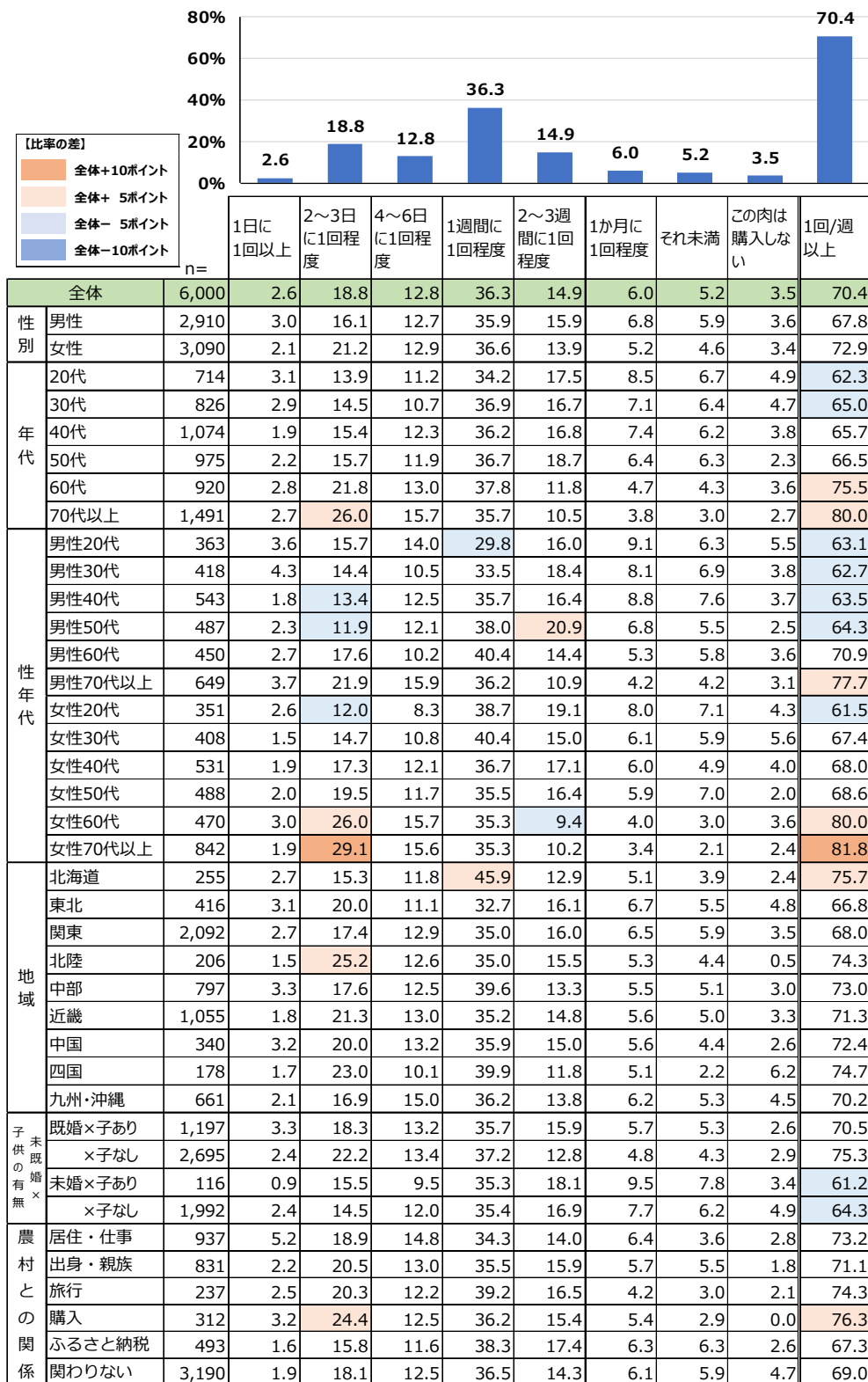
Q8-2. 以下の食肉を購入する頻度をそれぞれお答えください。

輸入牛肉



Q8-3. 以下の食肉を購入する頻度をそれぞれお答えください。

国産豚肉



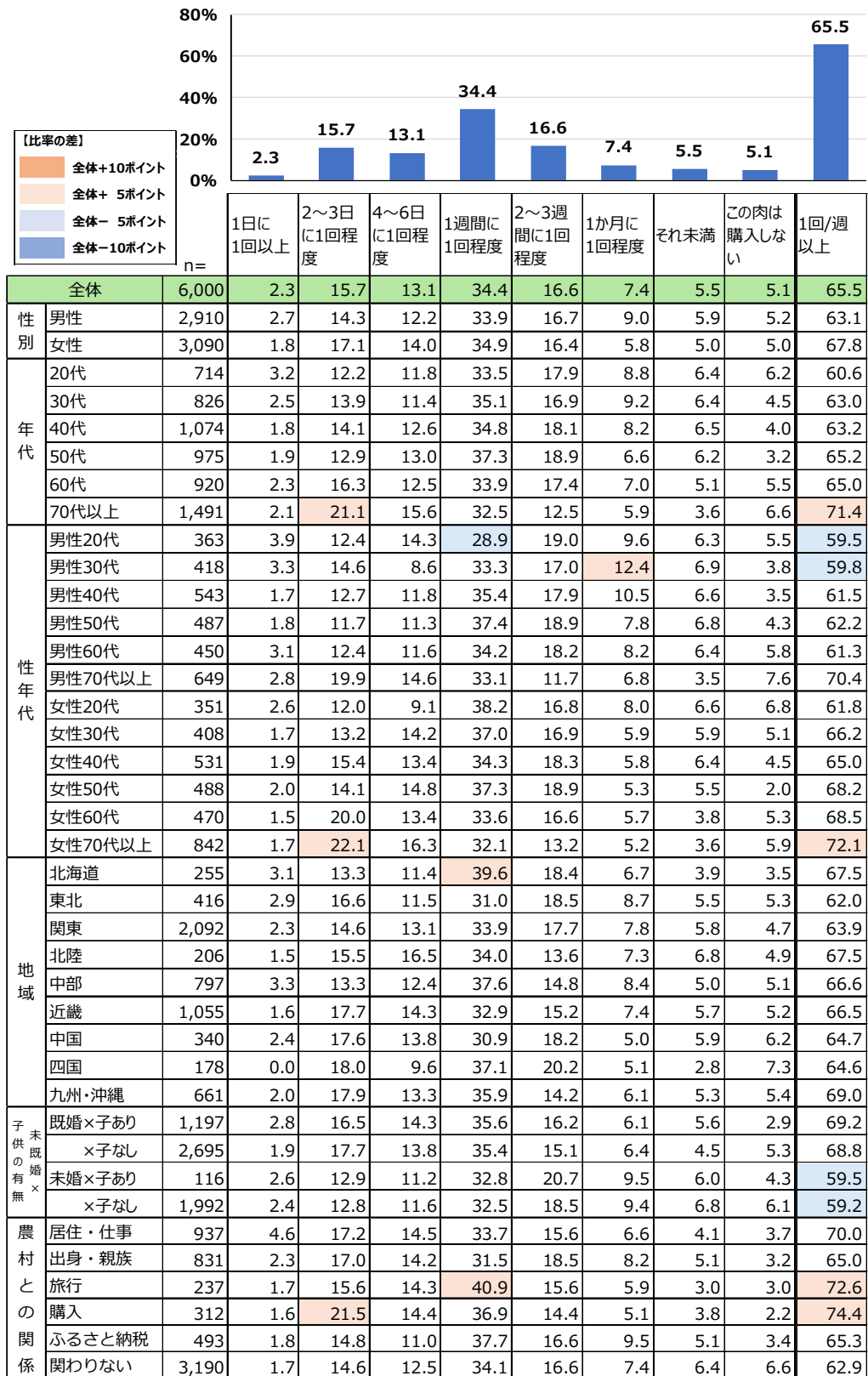
Q8-4. 以下の食肉を購入する頻度をそれぞれお答えください。

輸入豚肉



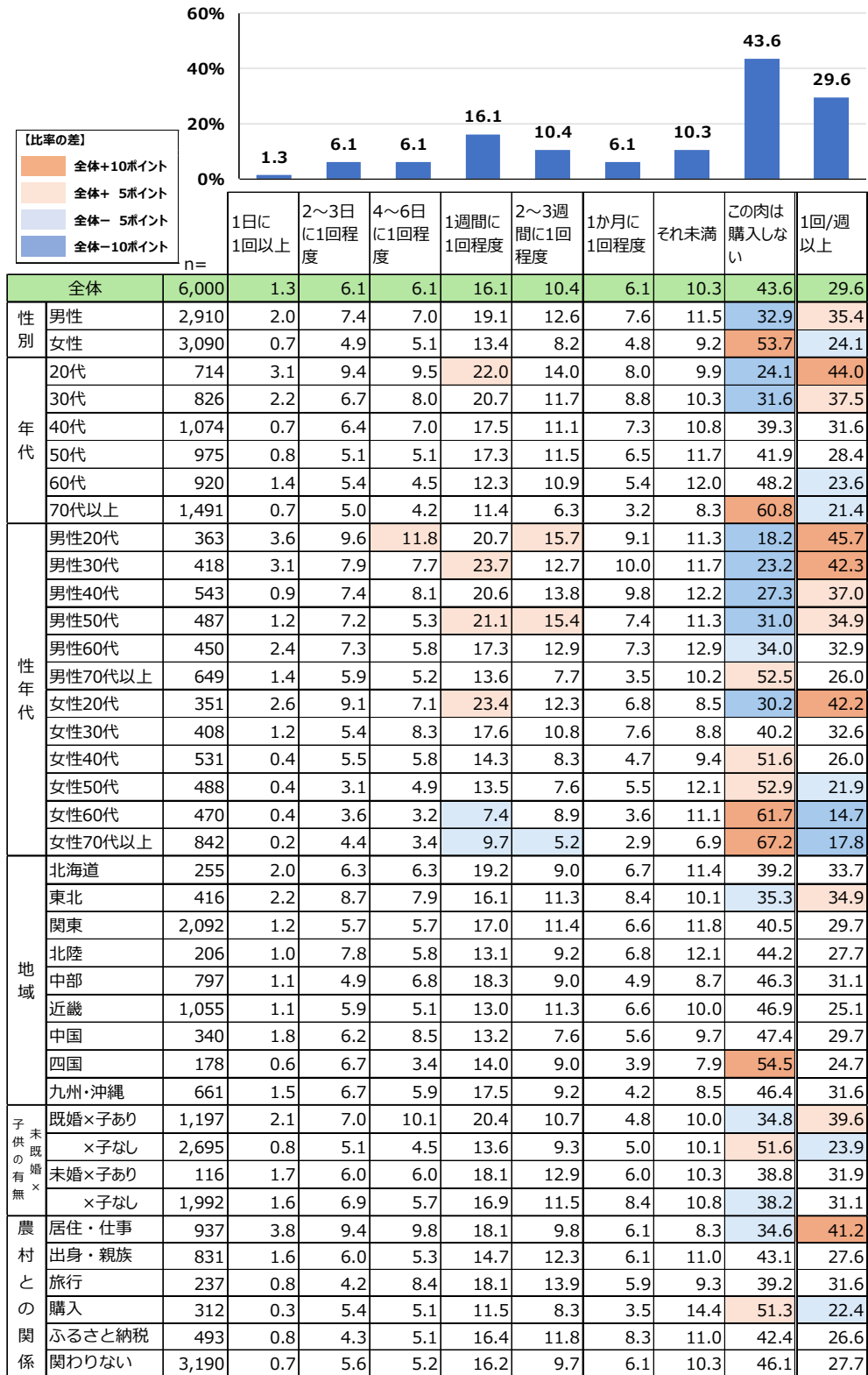
Q8-5. 以下の食肉を購入する頻度をそれぞれお答えください。

国産鶏肉



Q8-6. 以下の食肉を購入する頻度をそれぞれお答えください。

輸入鶏肉



Q8-7. 以下の食肉を購入する頻度をそれぞれお答えください。

ひき肉



Q9-1. 前問でお答えいただいた食肉を購入する頻度について、1年前と比べてどのように変化しましたか。それぞれの食肉についてお答えください。

国産牛肉



Q9-2. 前問でお答えいただいた食肉を購入する頻度について、1年前と比べてどのように変化しましたか。それぞれの食肉についてお答えください。

輸入牛肉



Q9-3. 前問でお答えいただいた食肉を購入する頻度について、1年前と比べてどのように変化しましたか。それぞれの食肉についてお答えください。

国産豚肉



Q9-4. 前問でお答えいただいた食肉を購入する頻度について、1年前と比べてどのように変化しましたか。それぞれの食肉についてお答えください。

輸入豚肉



Q9-5. 前問でお答えいただいた食肉を購入する頻度について、1年前と比べてどのように変化しましたか。それぞれの食肉についてお答えください。

国産鶏肉



Q9-6. 前問でお答えいただいた食肉を購入する頻度について、1年前と比べてどのように変化しましたか。それぞれの食肉についてお答えください。

輸入鶏肉



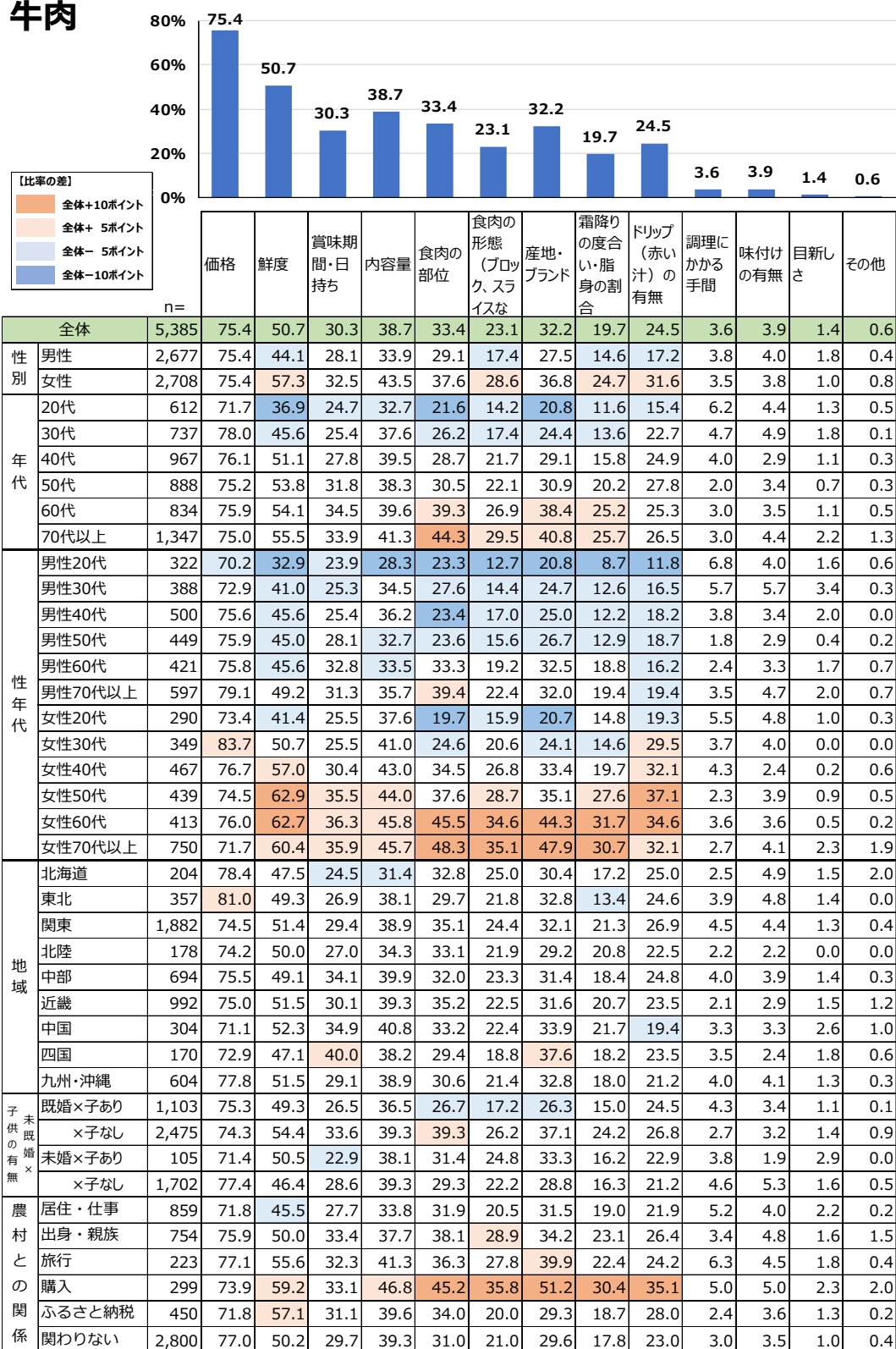
Q9-7. 前問でお答えいただいた食肉を購入する頻度について、1年前と比べてどのように変化しましたか。それぞれの食肉についてお答えください。

ひき肉



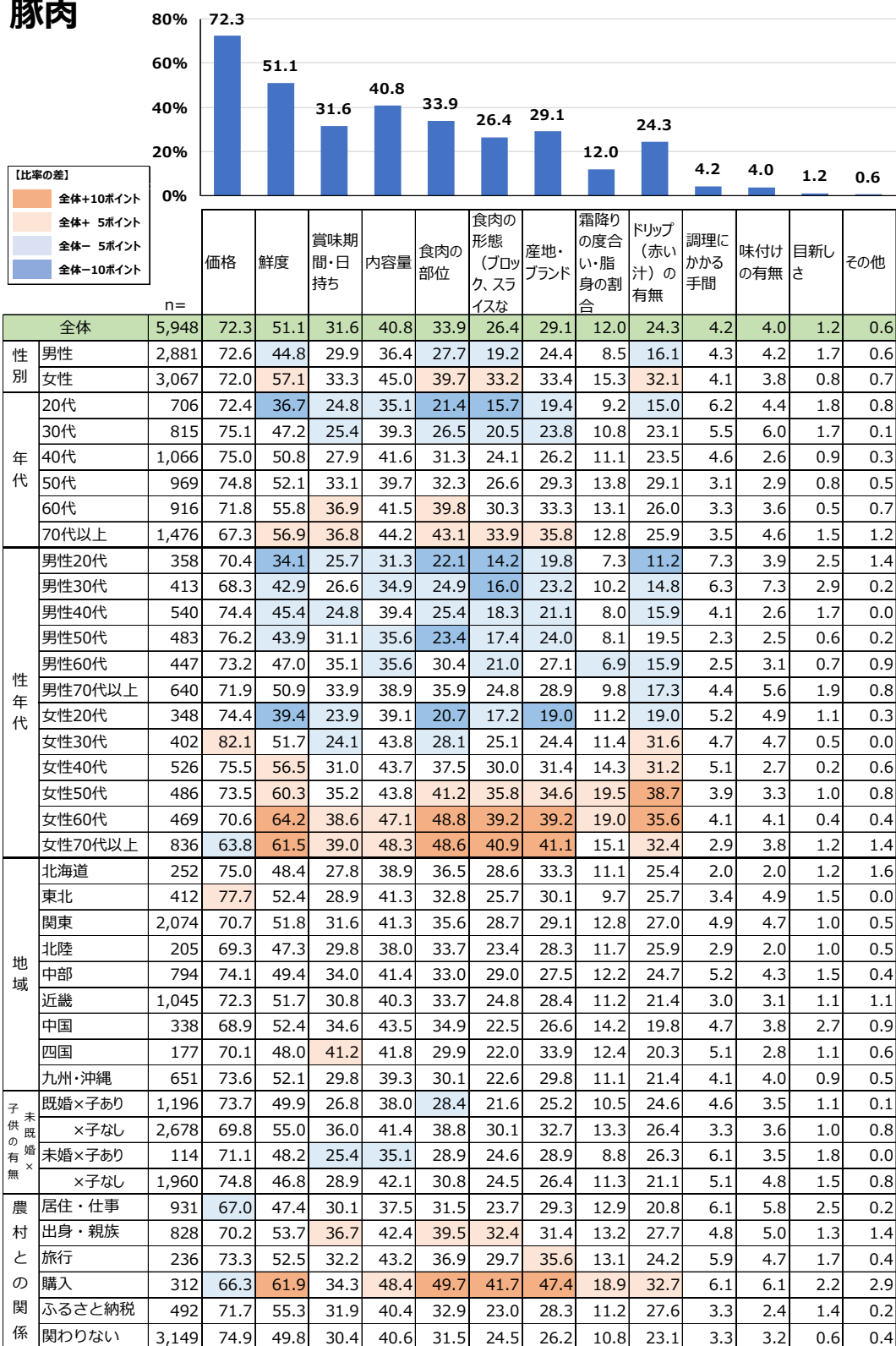
Q10-1. あなたが食肉を購入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全てお答えください。

牛肉



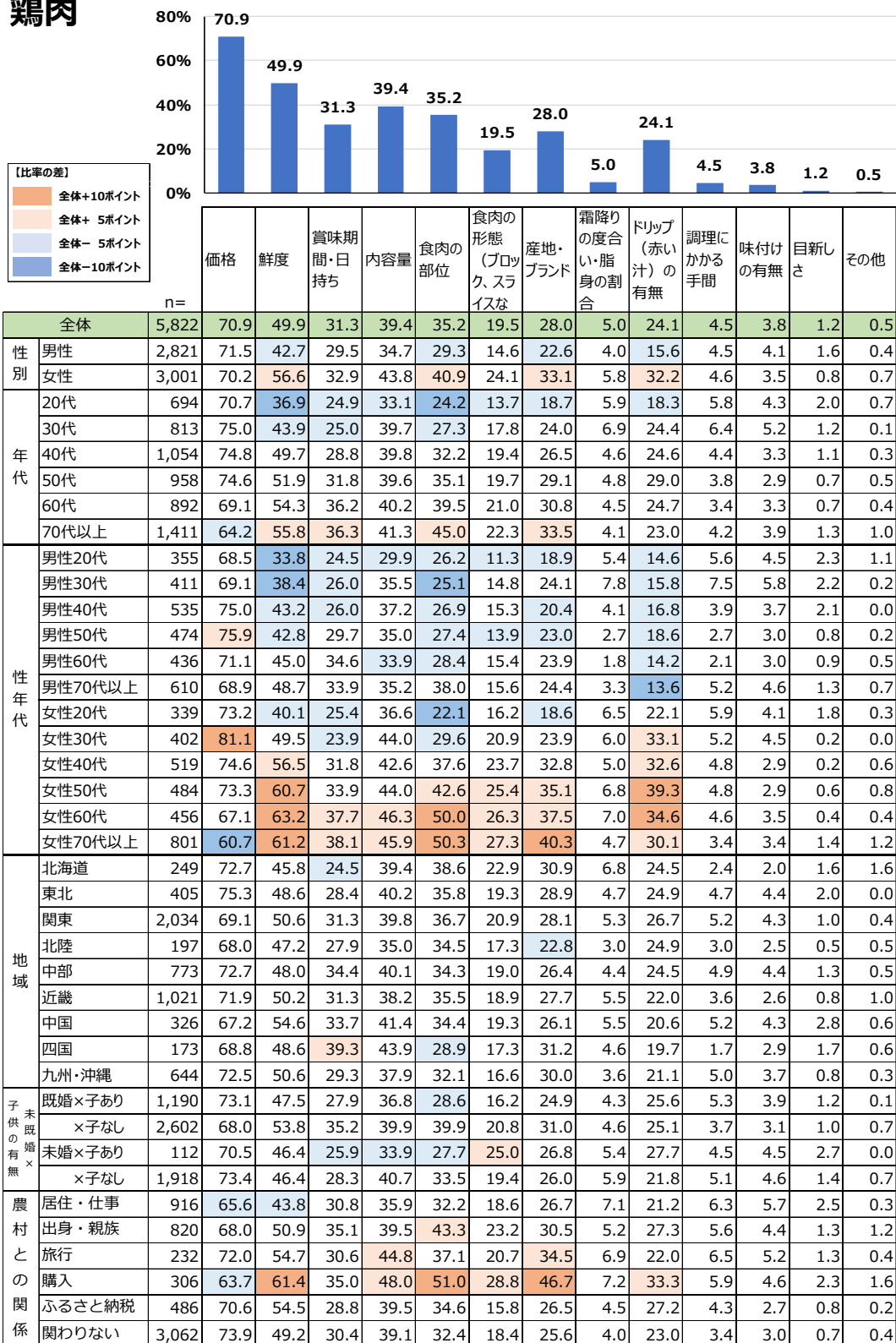
Q10-2. あなたが食肉を購入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全てお答えください。

豚肉



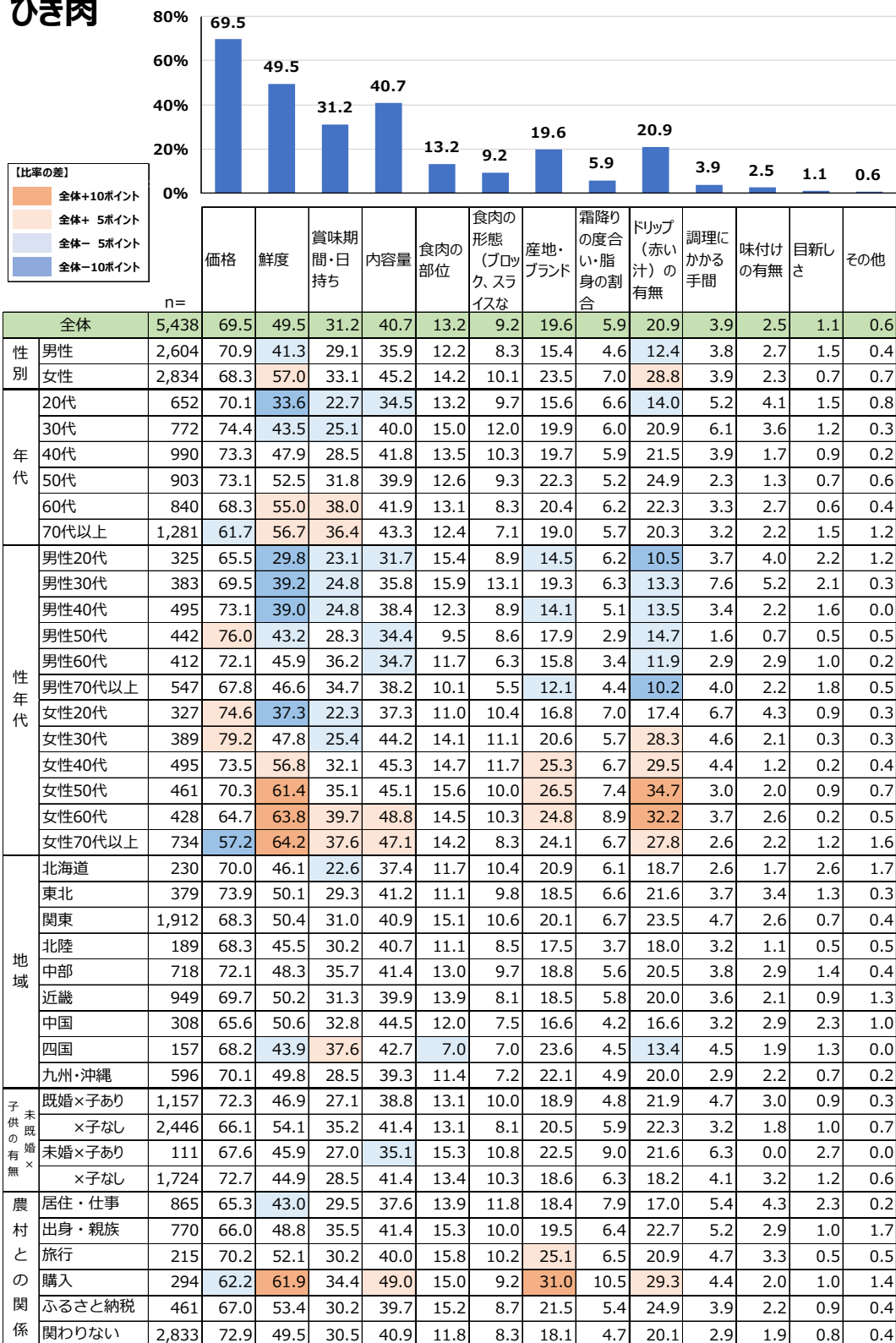
Q10-3. あなたが食肉を購入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全
てお答えください。

鶏肉



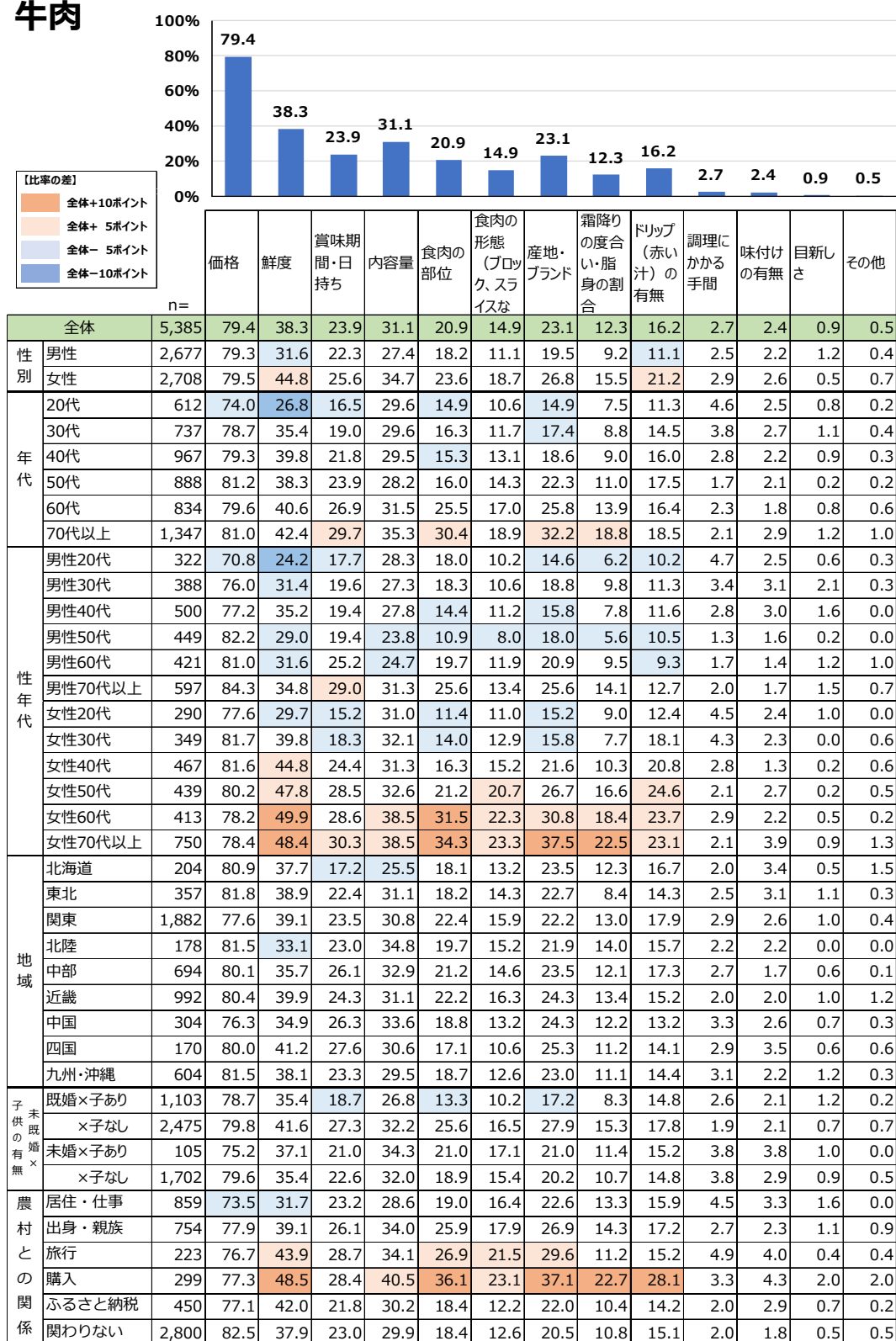
Q10-4. あなたが食肉を購入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全てお答えください。

ひき肉



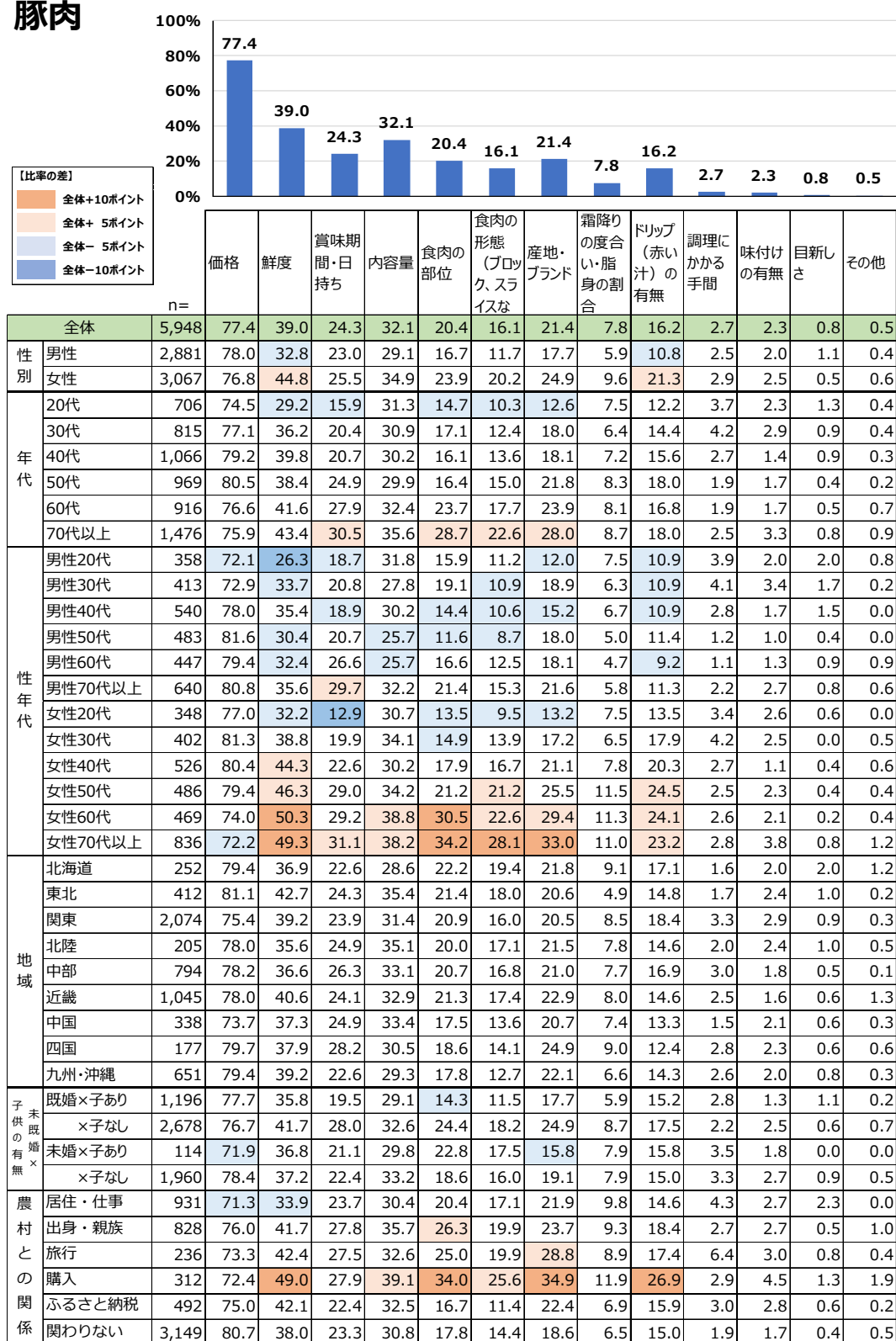
Q11-1. 今後さらに食肉の価格が上昇した場合、食肉を購入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全てお答えください。

牛肉



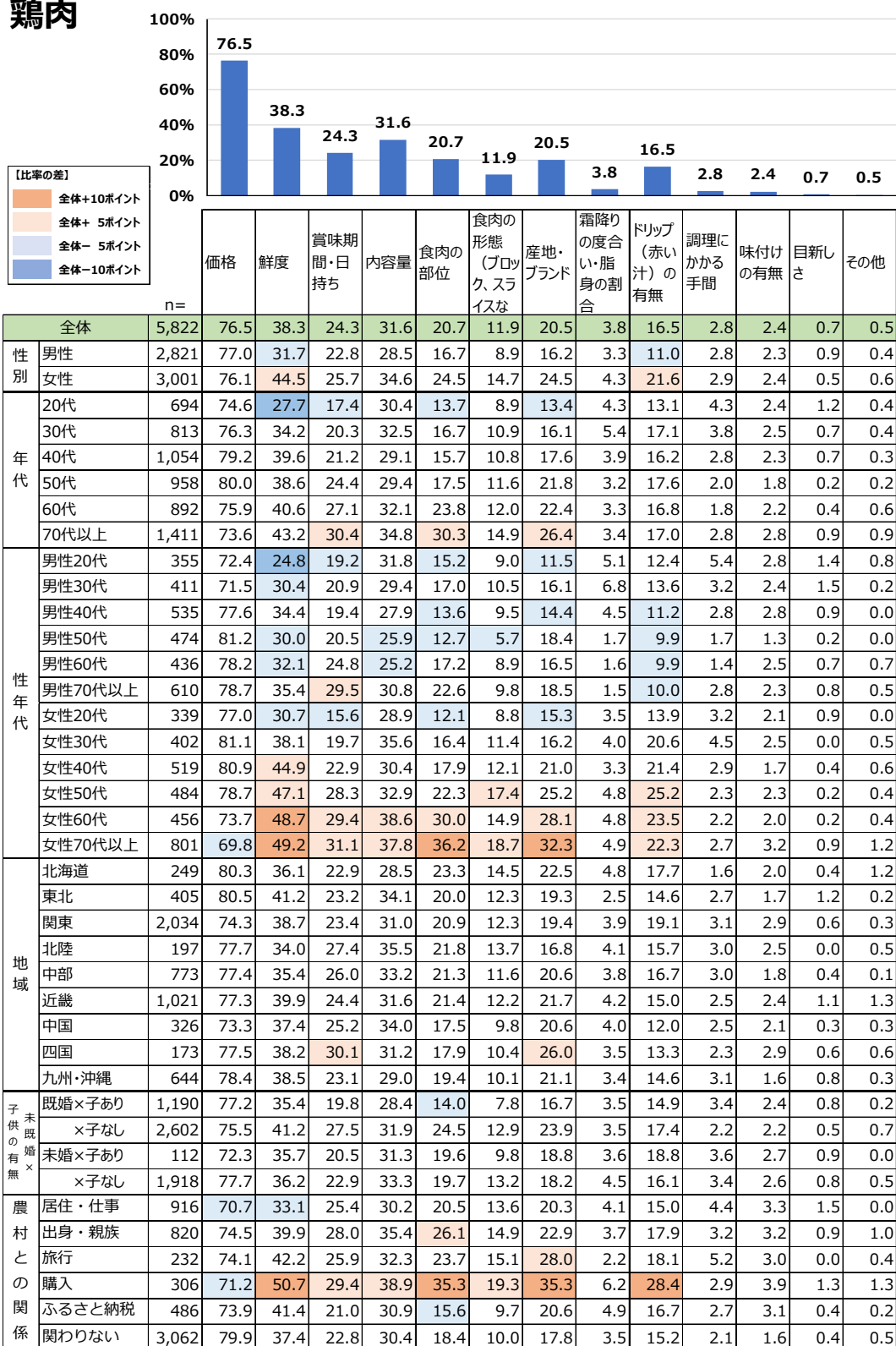
Q11-2. 今後さらに食肉の価格が上昇した場合、食肉を購入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全てお答えください。

豚肉



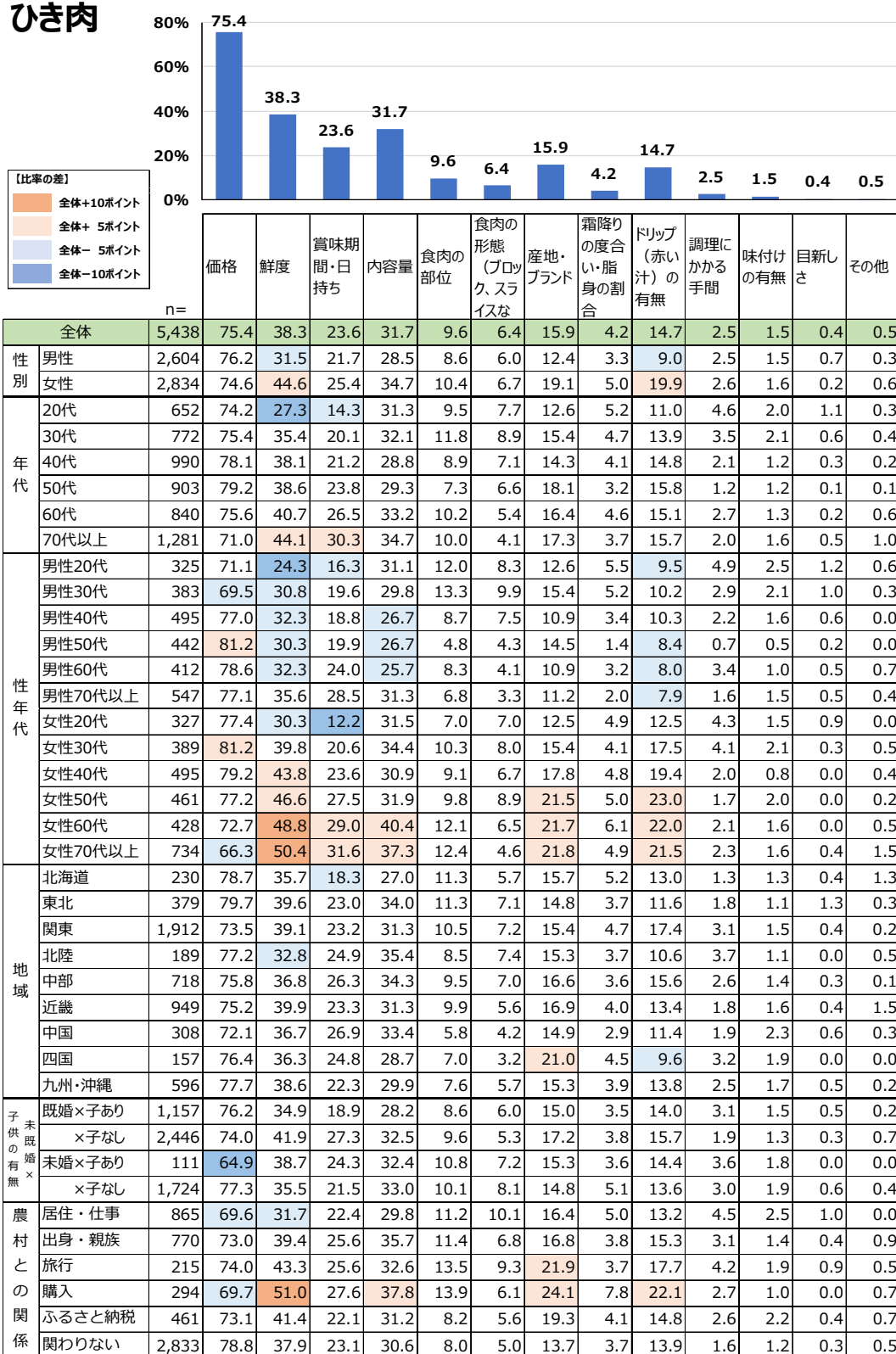
Q11-3. 今後さらに食肉の価格が上昇した場合、食肉を購入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全てお答えください。

鶏肉



Q11-4. 今後さらに食肉の価格が上昇した場合、食肉を購入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全てお答えください。

ひき肉



Q12-1. 国産食肉又は輸入食肉のいずれかを選ぶ際に意識することは何ですか。それぞれの食肉についてあてはまるものを全てお答えください。

牛肉



Q12-2. 国産食肉又は輸入食肉のいずれかを選ぶ際に意識することは何ですか。それぞれの食肉についてあてはまるものを全てお答えください。

豚肉



Q12-3. 国産食肉又は輸入食肉のいずれかを選ぶ際に意識することは何ですか。それぞれの食肉についてあてはまるものを全てお答えください。

鶏肉



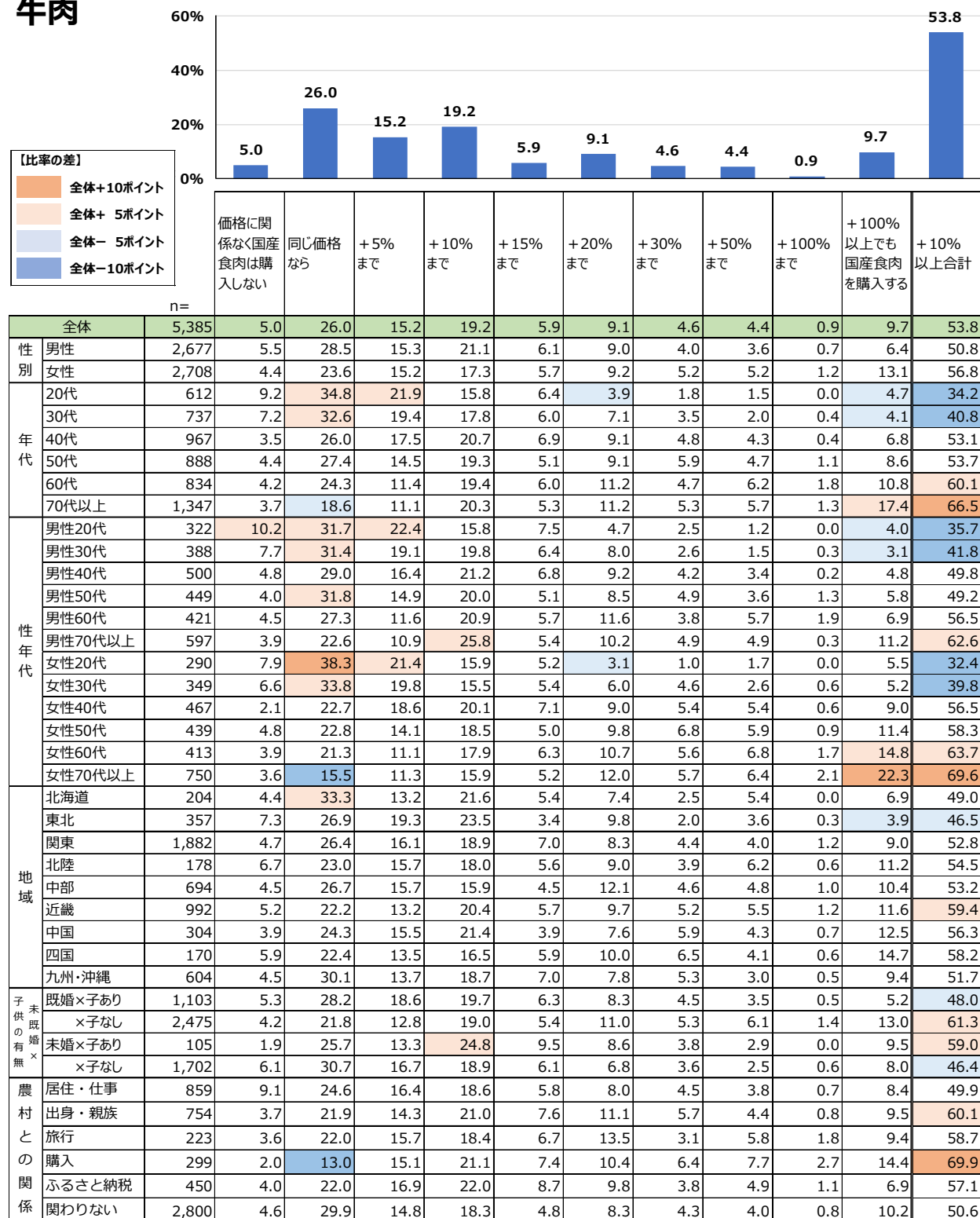
Q12-4. 国産食肉又は輸入食肉のいずれかを選ぶ際に意識することは何ですか。それぞれの食肉についてあてはまるものを全てお答えください。

ひき肉



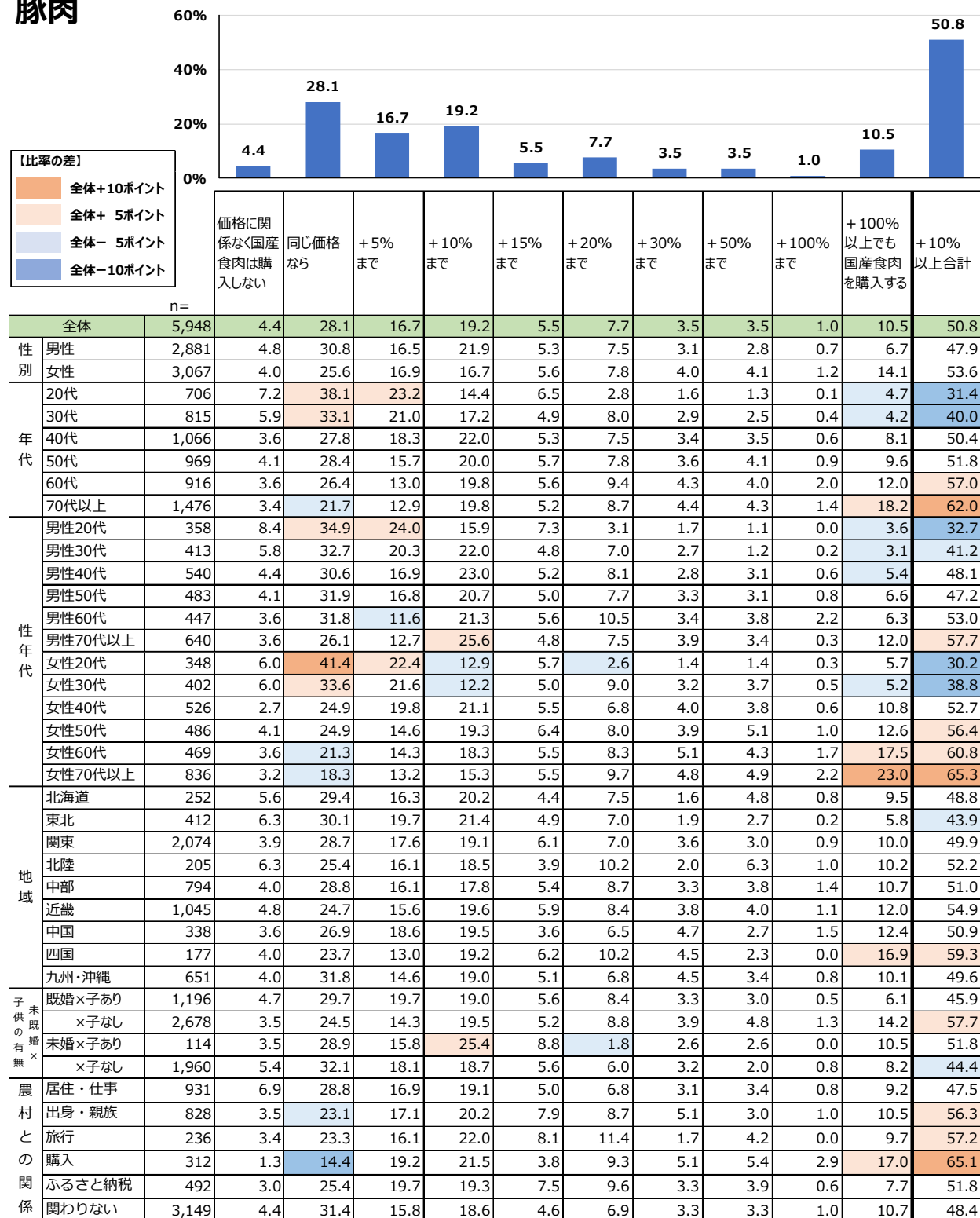
Q13-1. 国産食肉と輸入食肉とを比べて、どれくらいの価格差までであれば国産食肉を購入しますか。それぞれの食肉についてお答えください。

牛肉



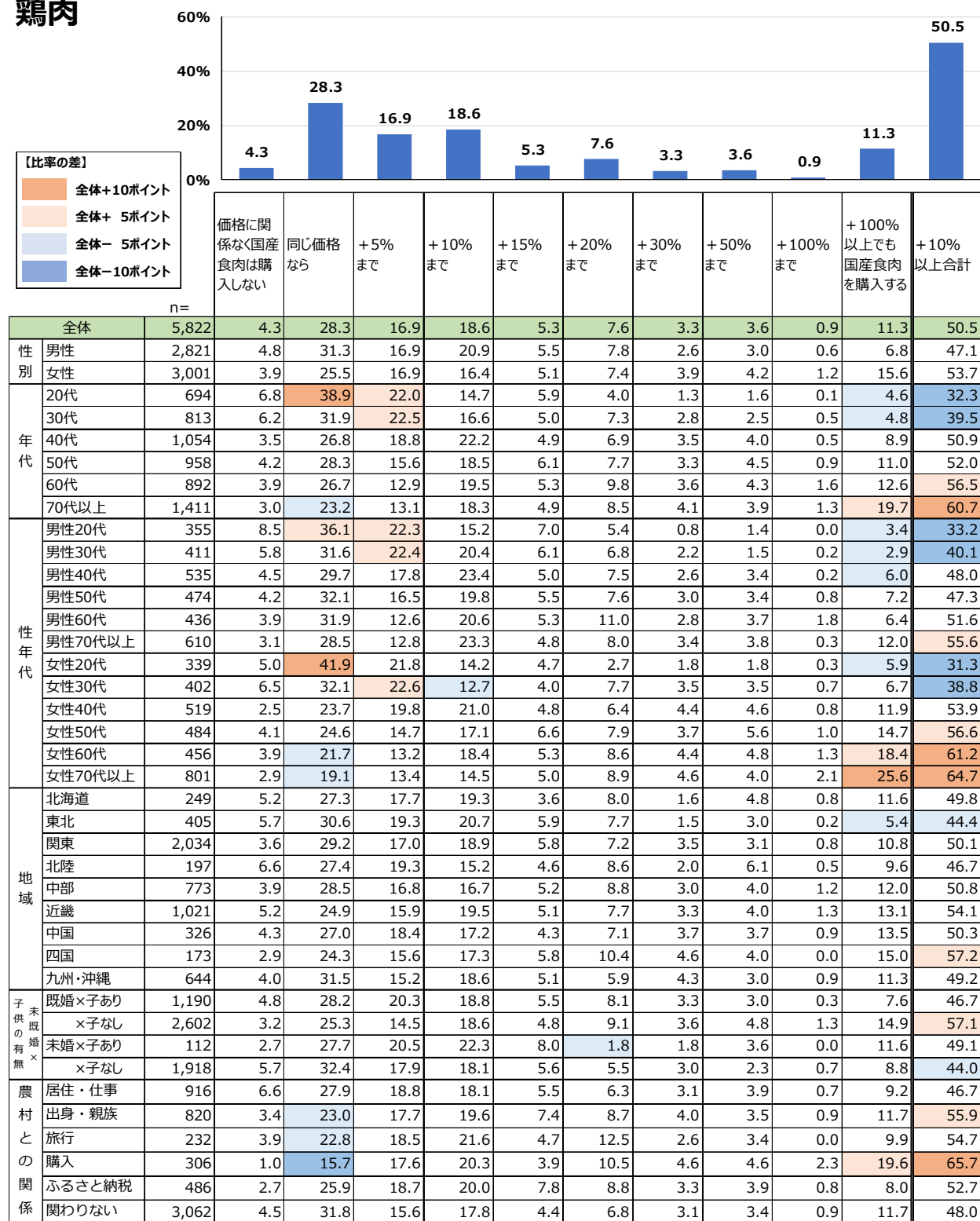
Q13-2. 国産食肉と輸入食肉とを比べて、どれくらいの価格差までであれば国産食肉を購入しますか。それぞれの食肉についてお答えください。

豚肉



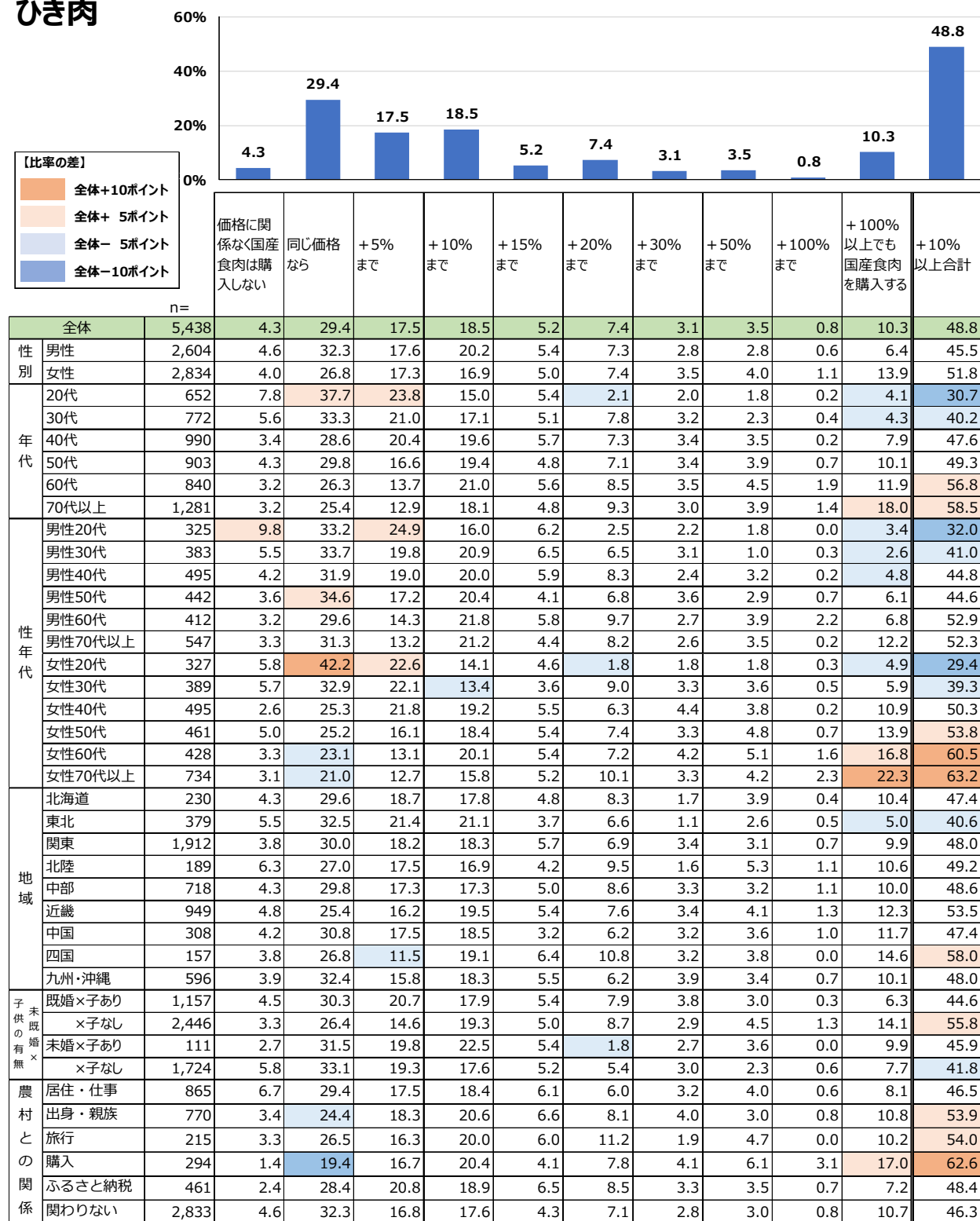
Q13-3. 国産食肉と輸入食肉とを比べて、どれくらいの価格差までであれば国産食肉を購入しますか。それぞれの食肉についてお答えください。

鶏肉



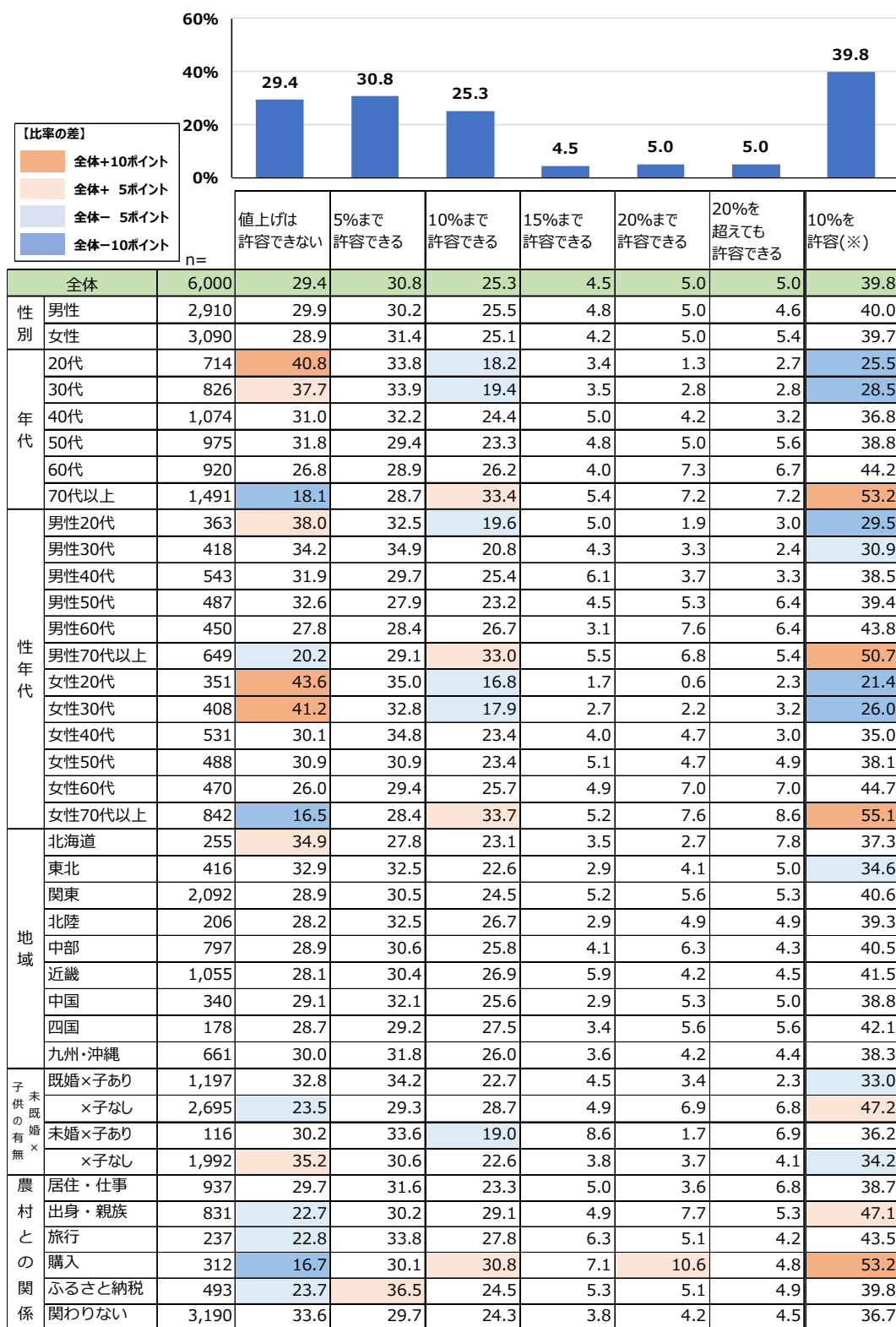
Q13-4. 国産食肉と輸入食肉とを比べて、どれくらいの価格差までであれば国産食肉を購入しますか。それぞれの食肉についてお答えください。

ひき肉



Q14-1. あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

国産牛肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

Q14-2. あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

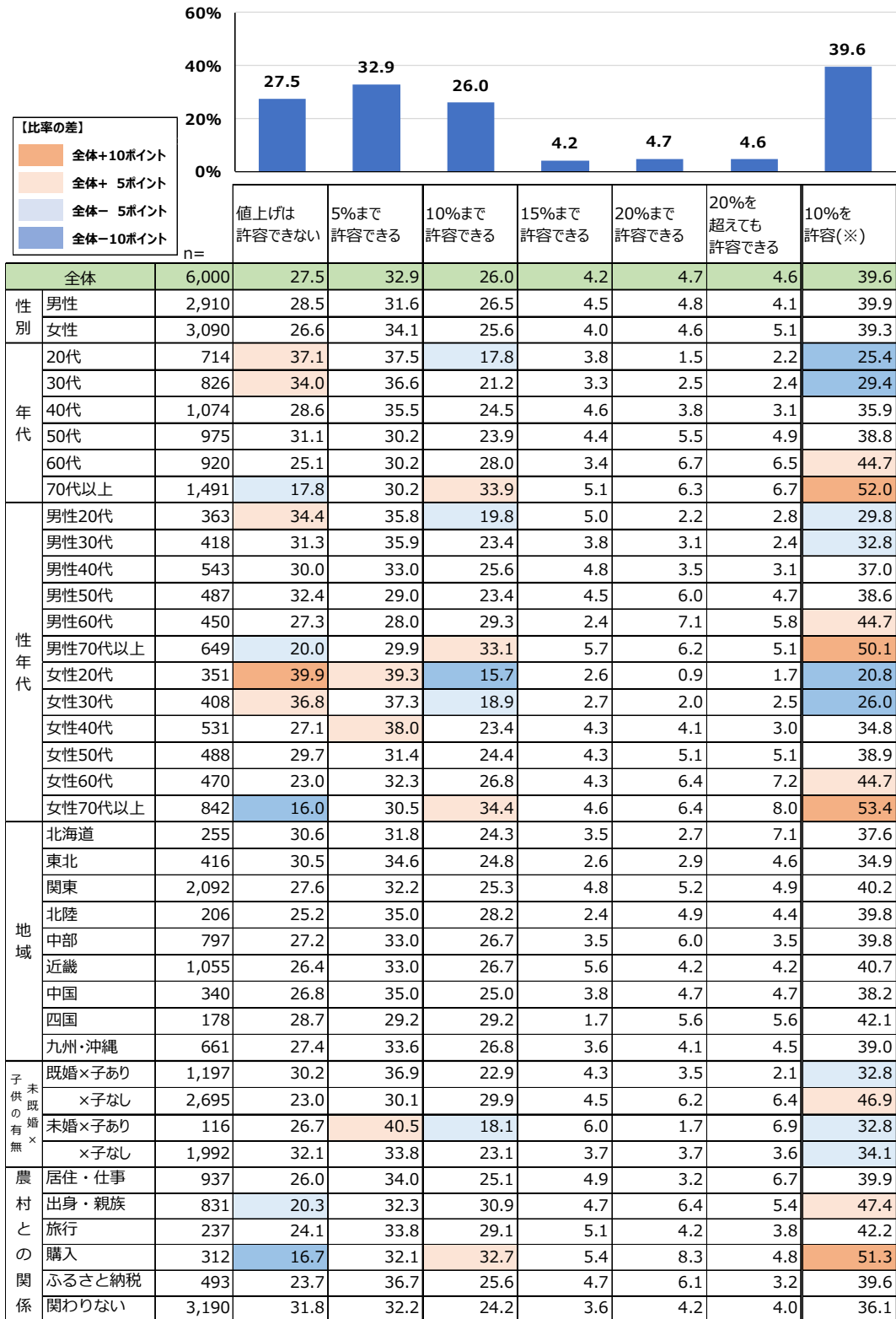
輸入牛肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

Q14-3. あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

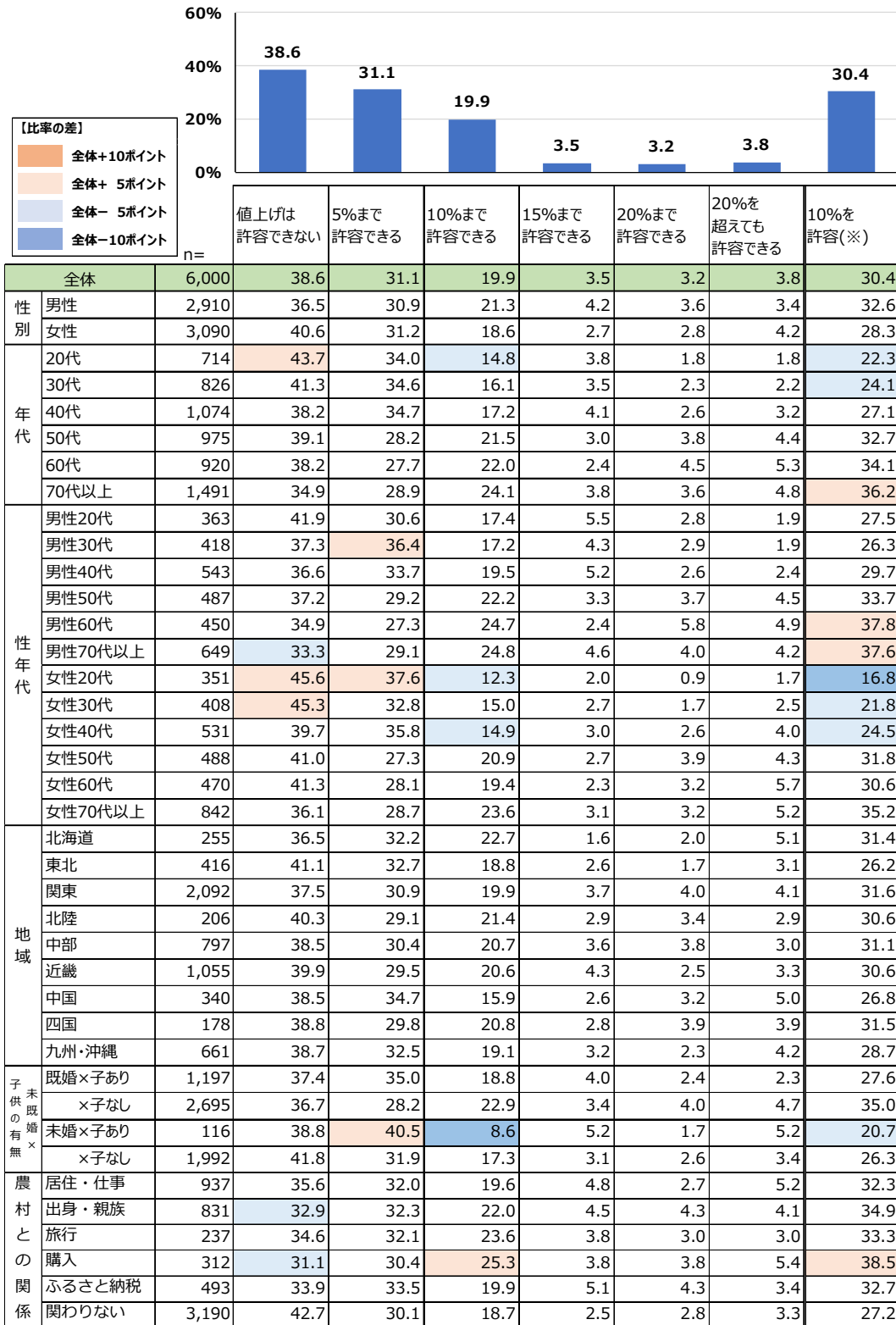
国産豚肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

Q14-4. あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

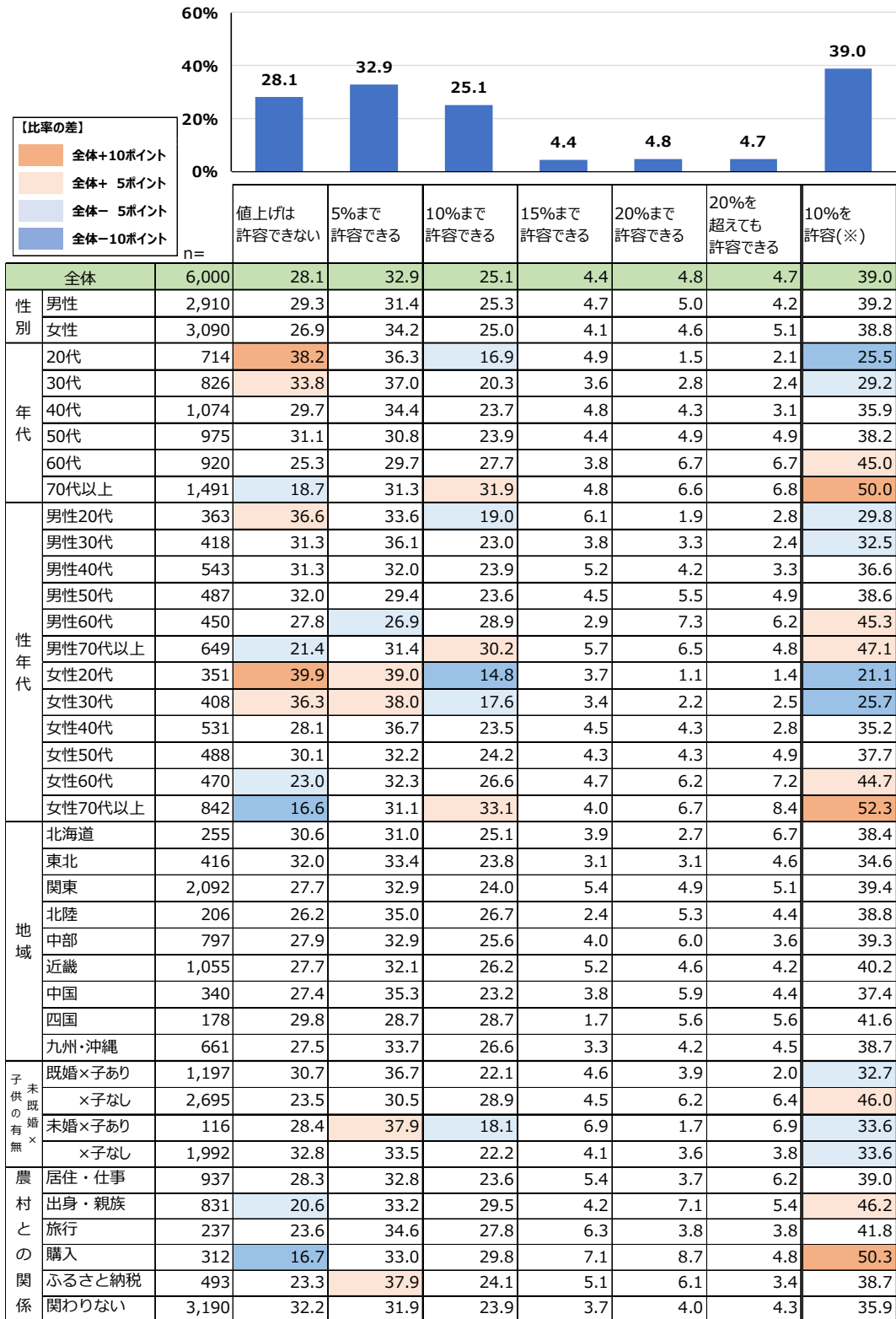
輸入豚肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

Q14-5. あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

国産鶏肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

Q14-6. あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

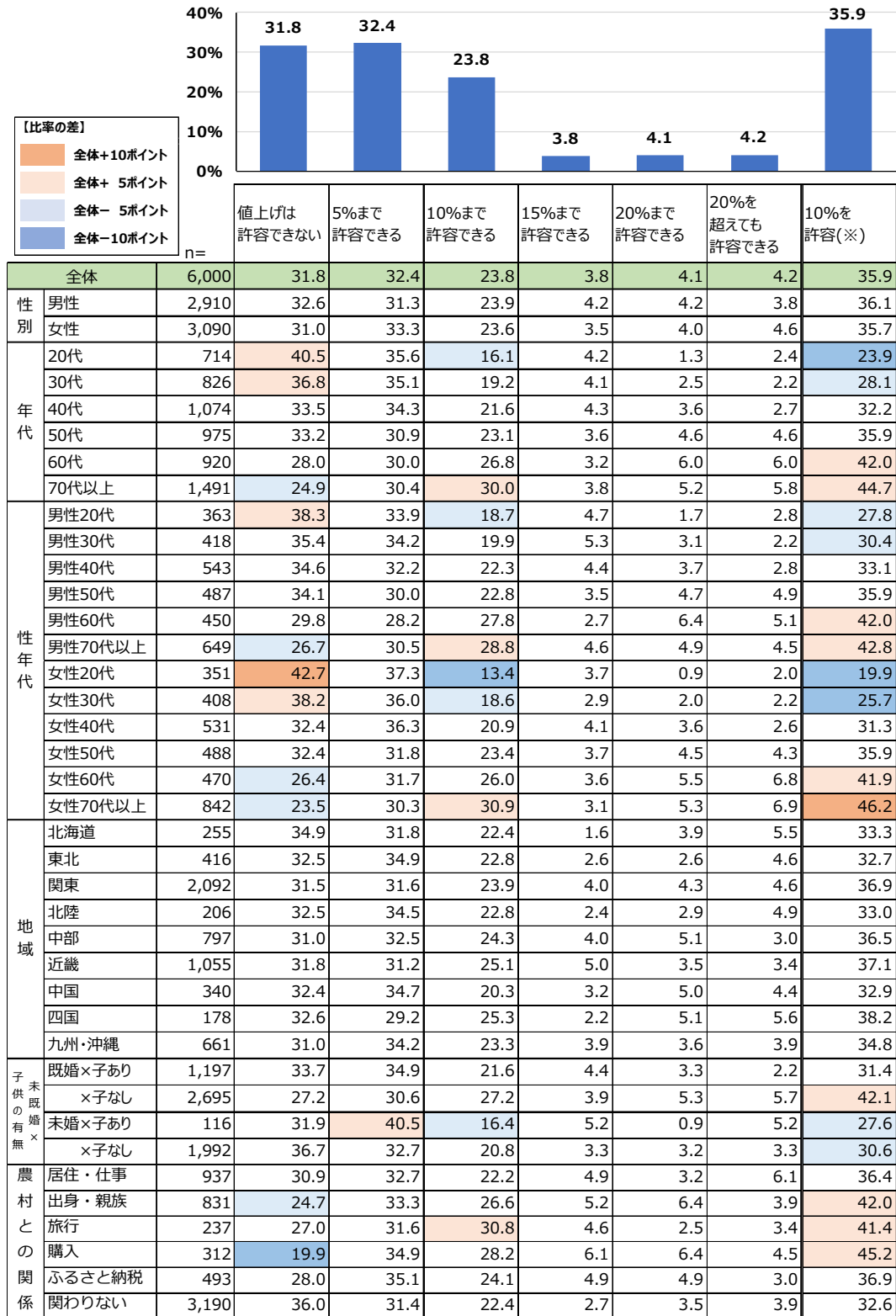
輸入鶏肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

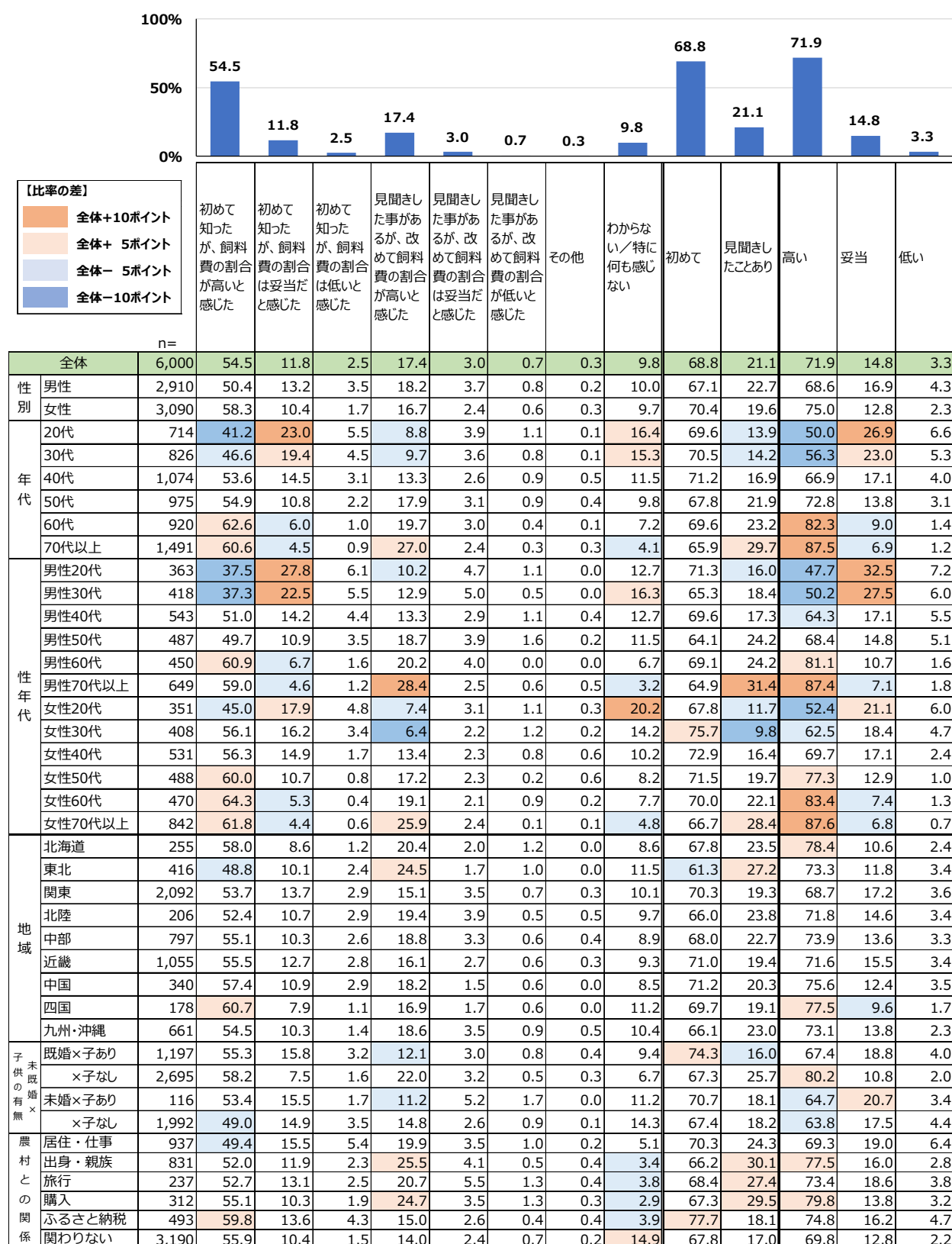
Q14-7. あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

ひき肉

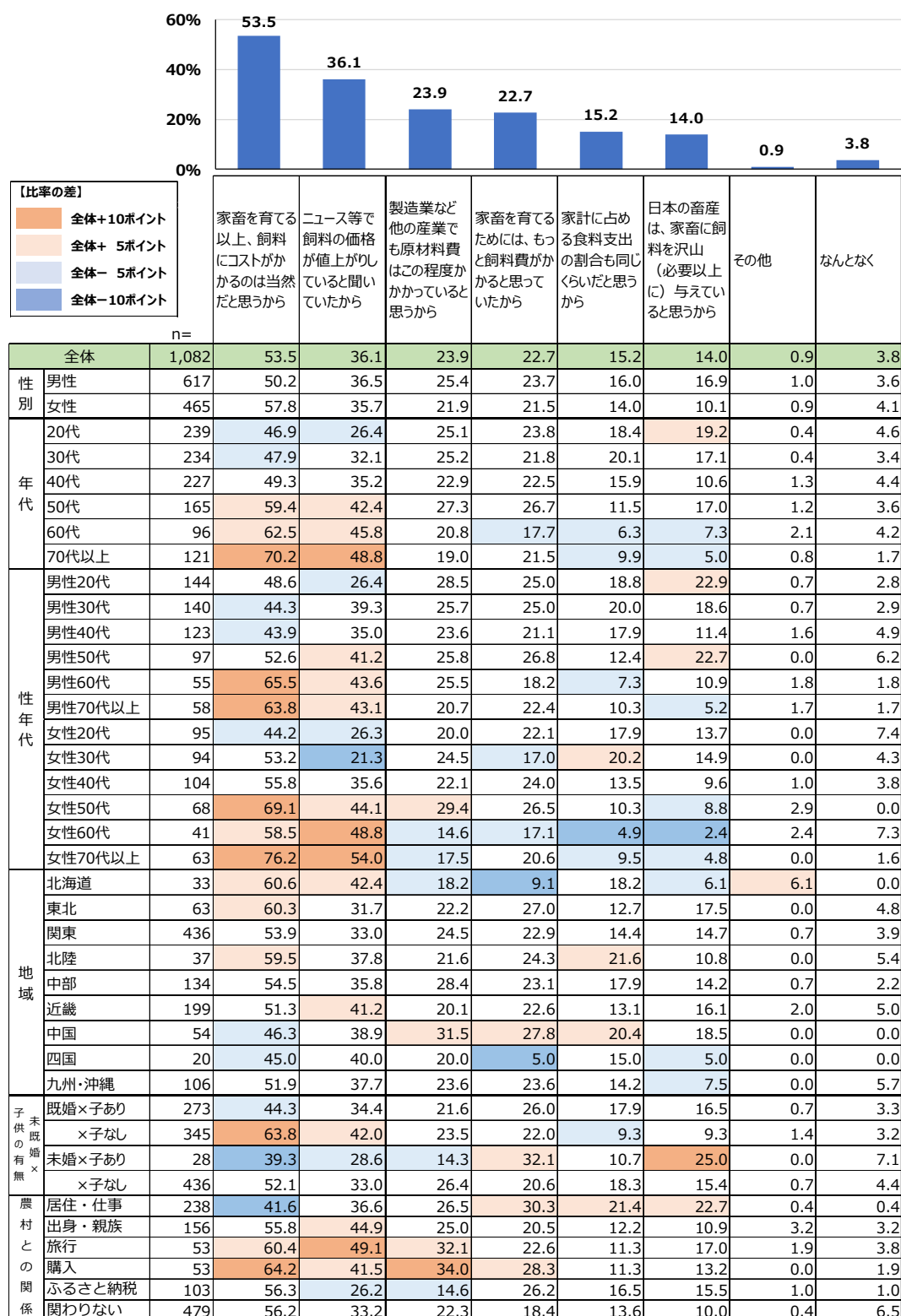


(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

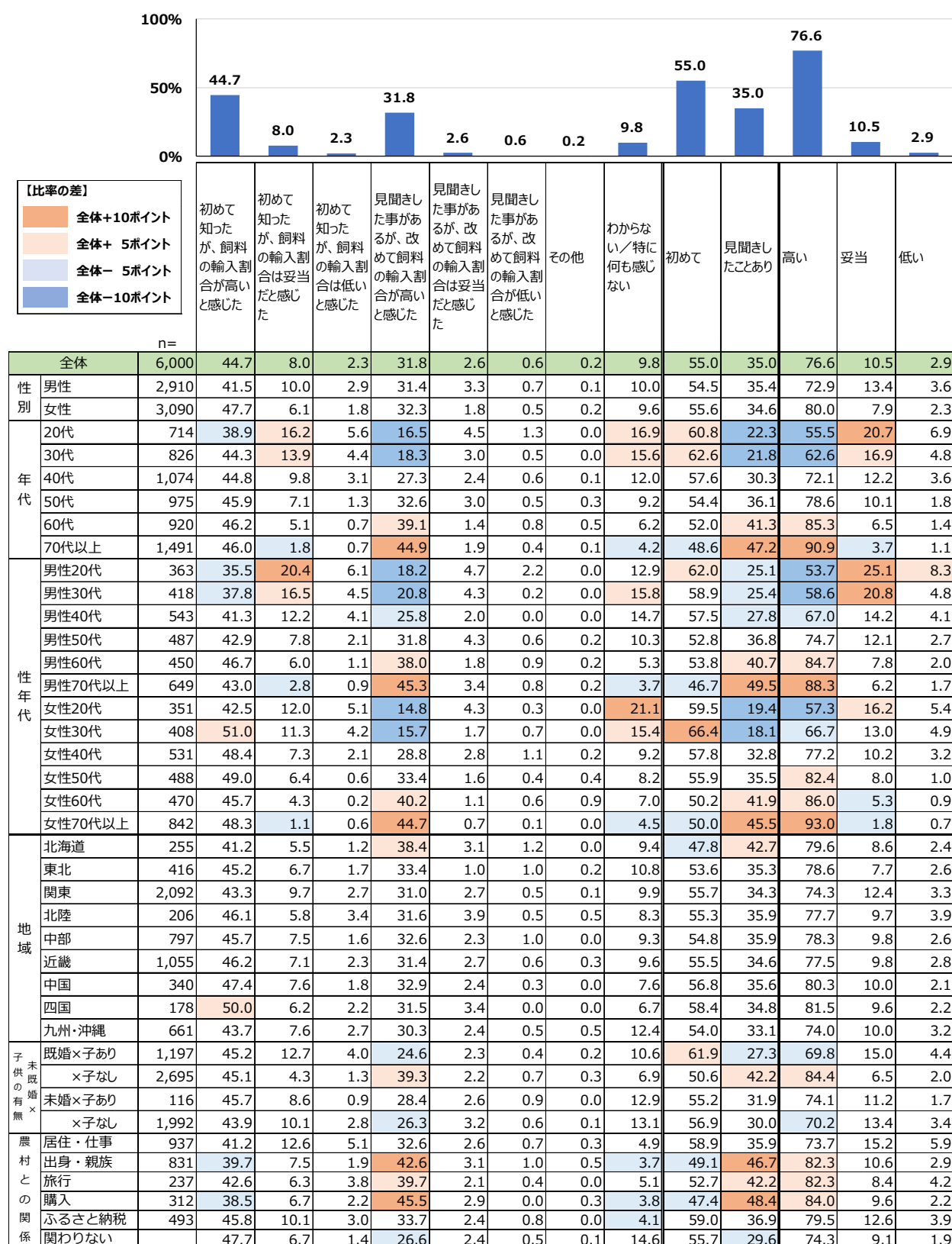
Q15. 畜産物を生産するためには様々な費用がかかっていますが、上記の図(P 付 8)をご覧ください。畜産物の生産にかかる飼料費(エサ代)の割合について、あなたはどのように感じましたか。次の中から最も近いものを1つお答えください。



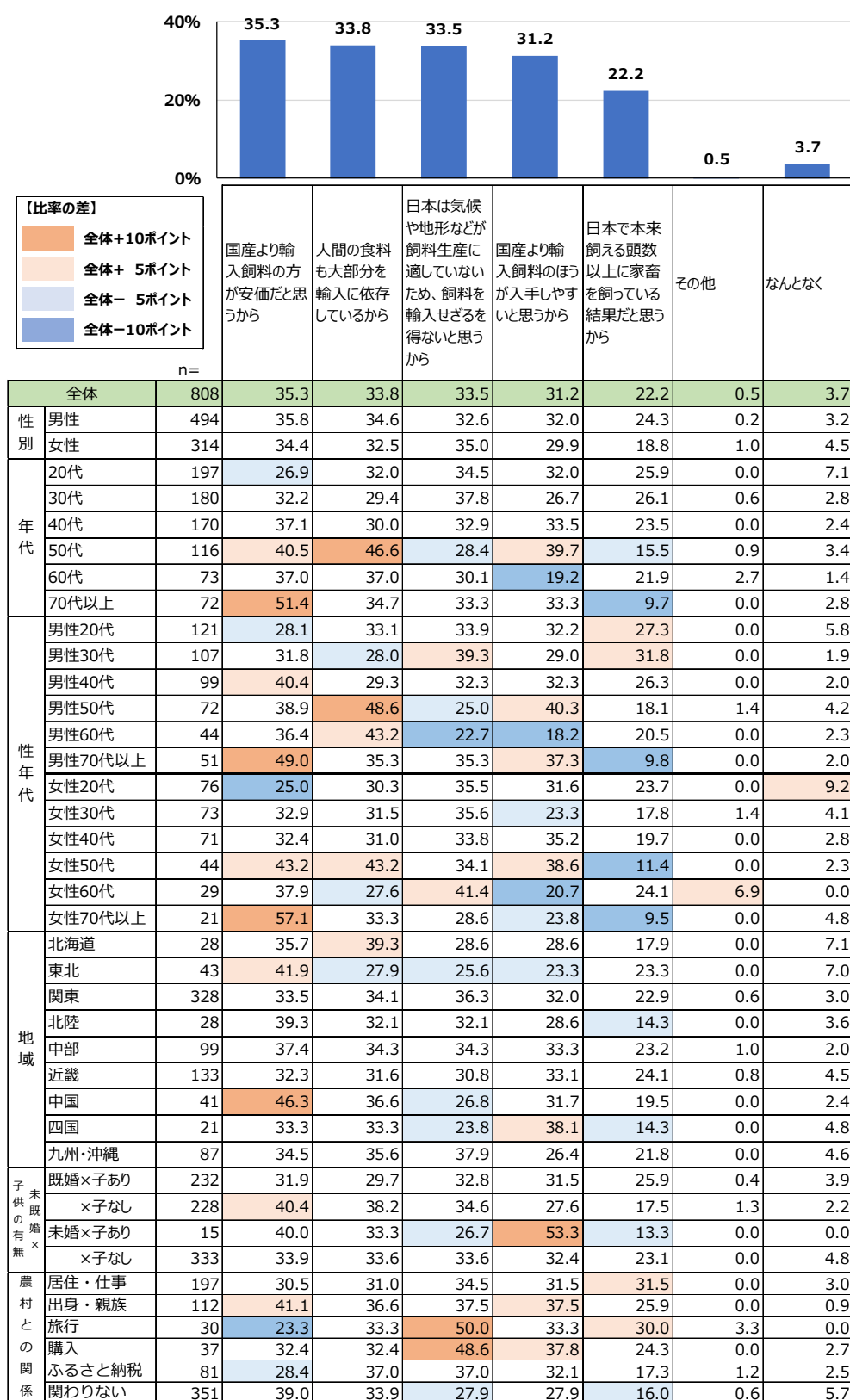
Q16. 畜産物の生産にかかる飼料費の割合が妥当または低いと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。



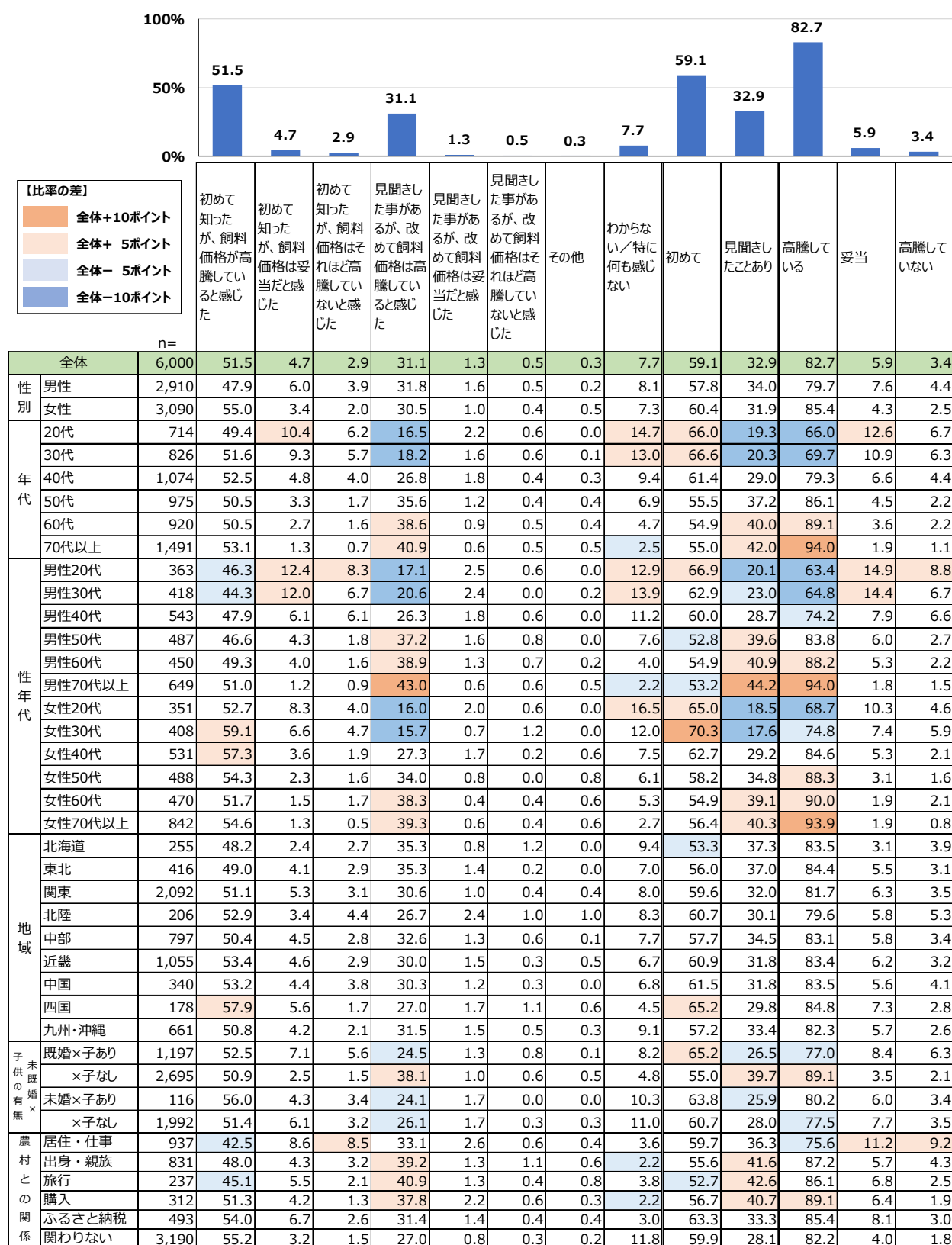
Q17. 日本は飼料の約 75%を海外から輸入しています。この輸入割合について、あなたはどのように感じますか。次の中から最も近いものを 1 つお答えください。



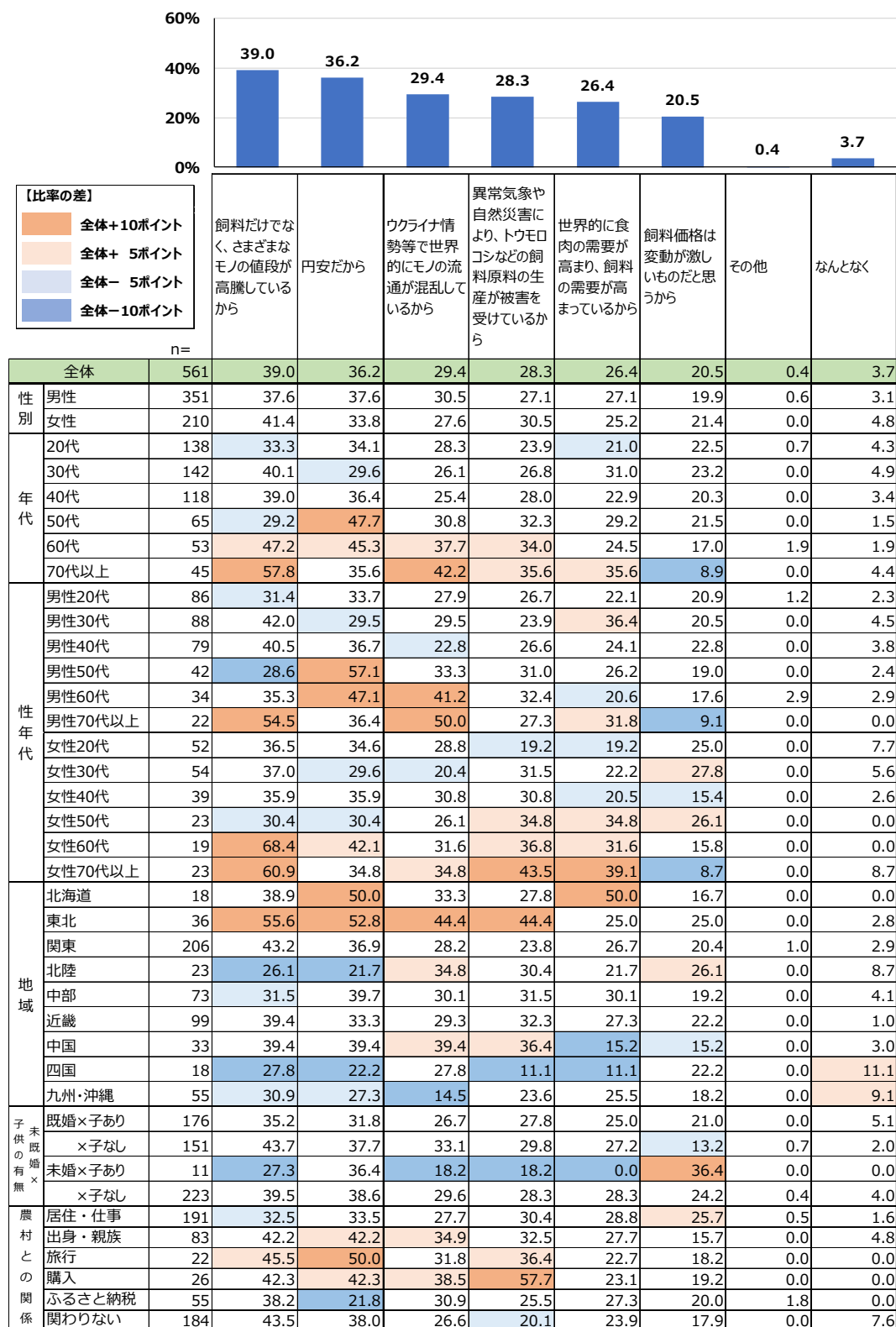
Q18. 現在の飼料の輸入割合が妥当または低いと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。



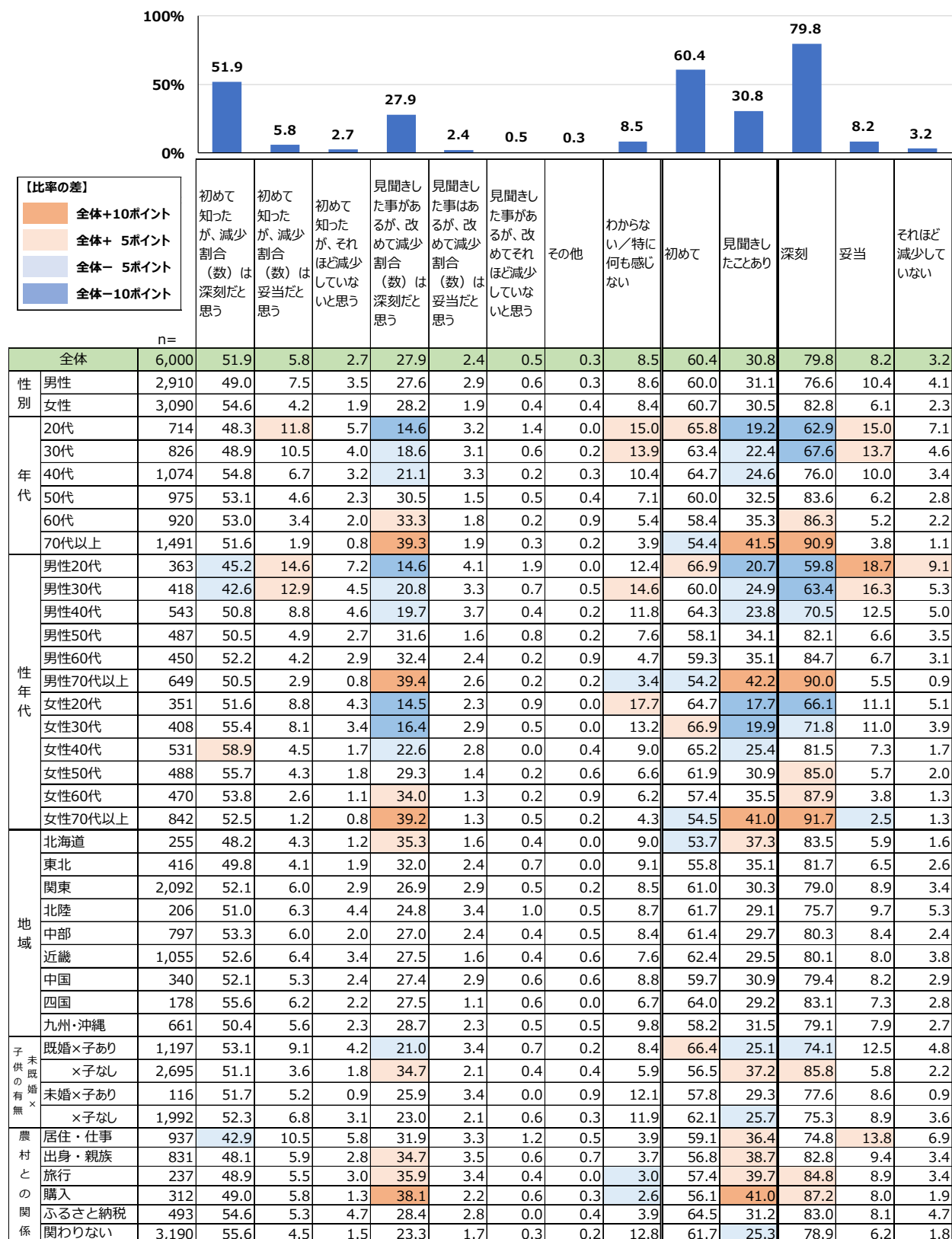
Q19. 飼料の価格はトン当たり6～7万円で推移していましたが、最近は10万円前後になっています。こうした飼料価格の動向について、あなたはどのように感じますか。次の中から最も近いものを1つお答えください。



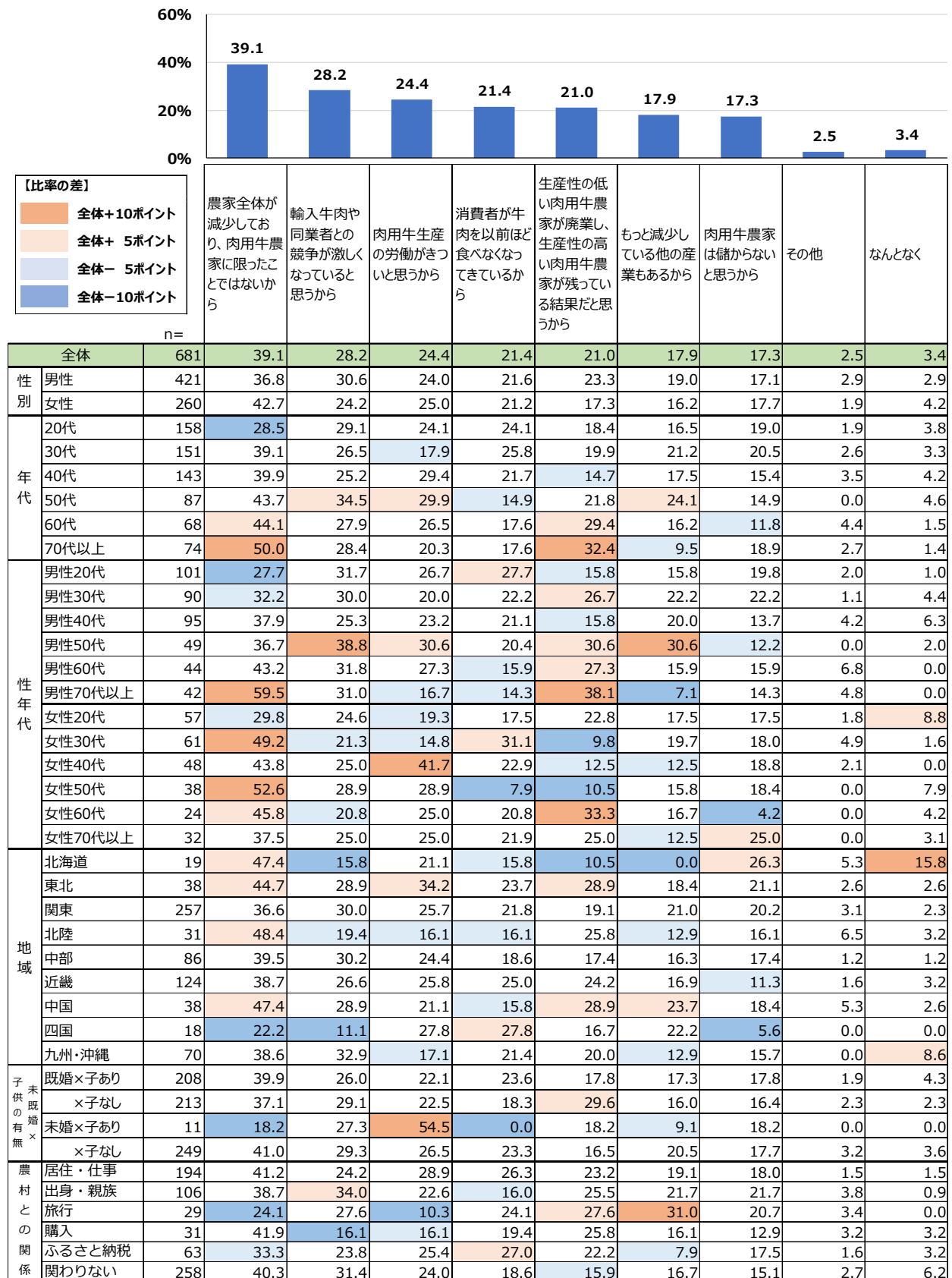
Q20. 現在の飼料価格が妥当、またはそれほど高騰していないと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。



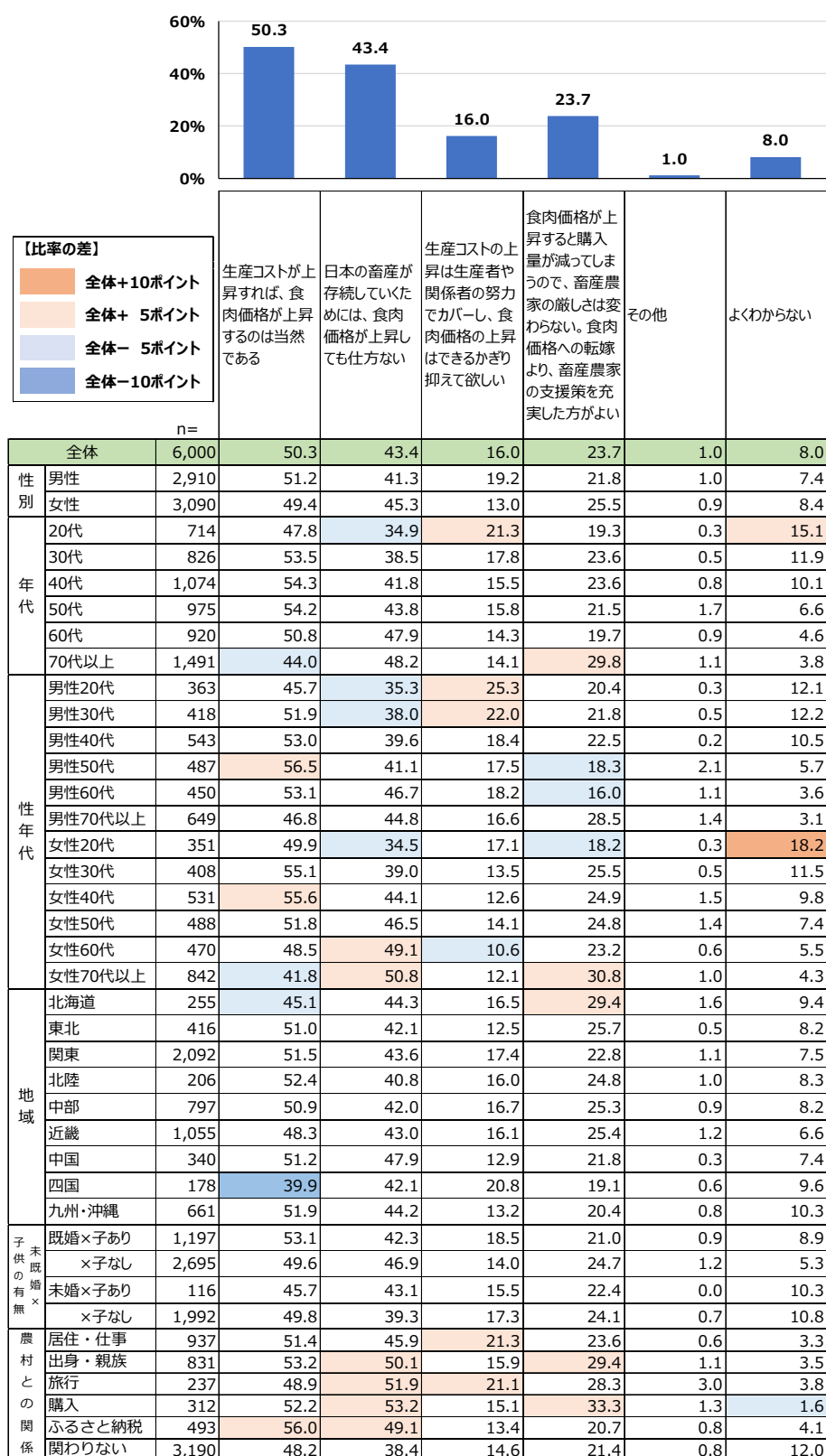
Q21. 国内の肉用牛農家は、この10年間で57,500戸(2014年)から36,500戸(2024年)へと約40%減少しています。このように肉用牛農家が減少していることをあなたはどのように感じますか。次の中から最も近いものを1つお答えください。



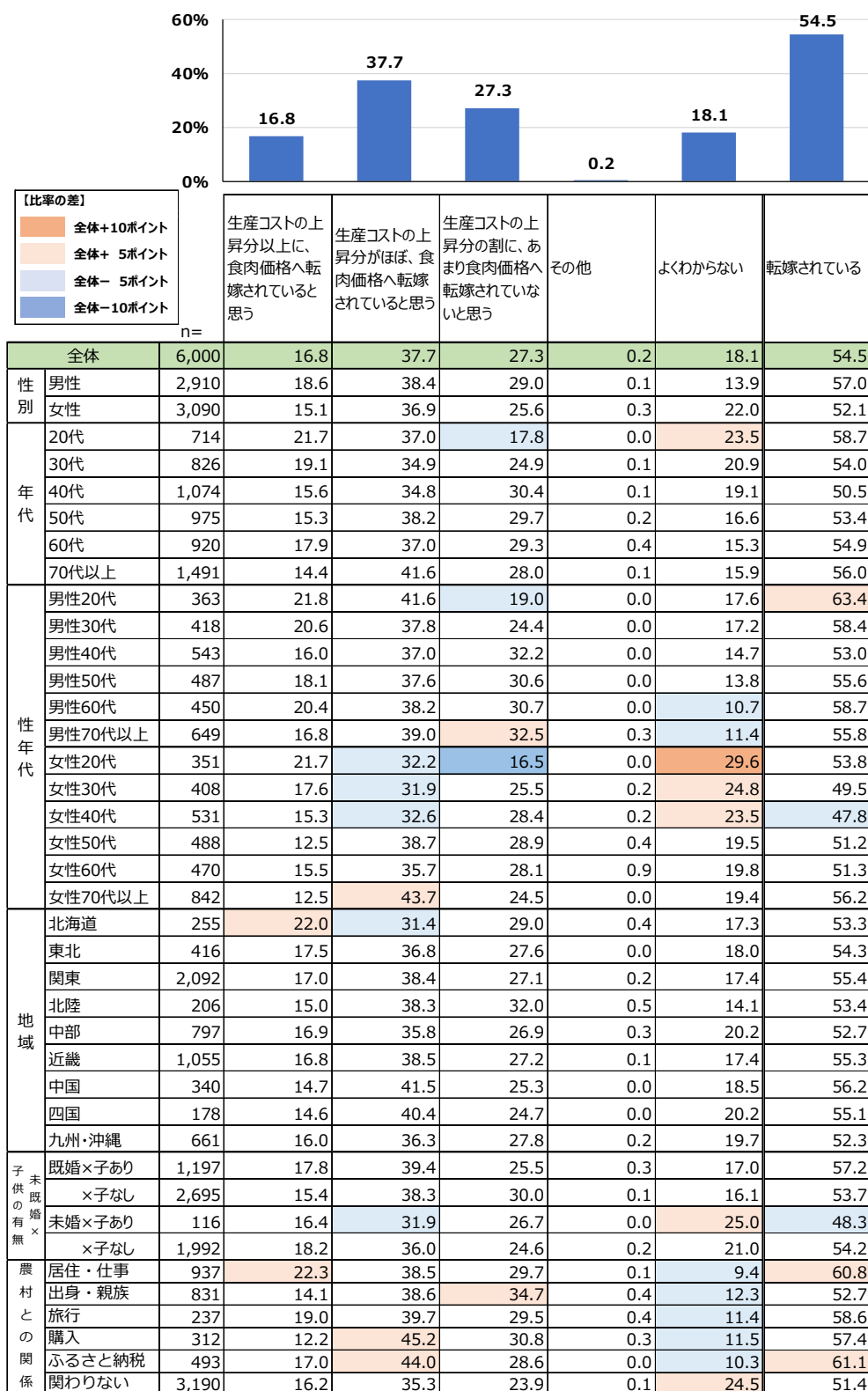
Q22. 肉用牛農家の減少が妥当、またはそれほど減少していないと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。



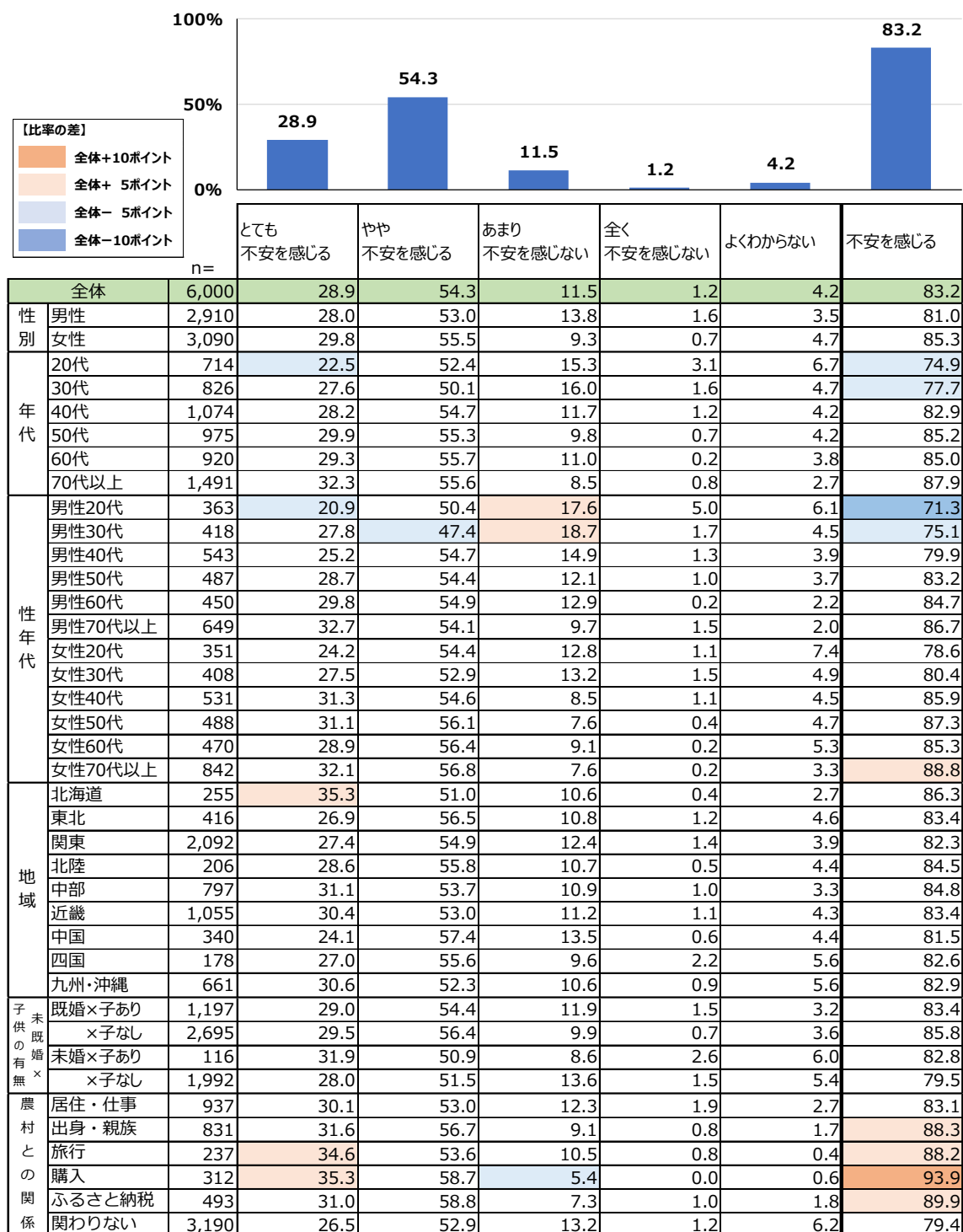
Q23. 飼料価格の高騰等により、食肉の生産コストが上昇していますが、生産コスト上昇分を食肉価格(小売価格)に転嫁することについて、あなたのお考えにあてはまるものを全てお答えください。



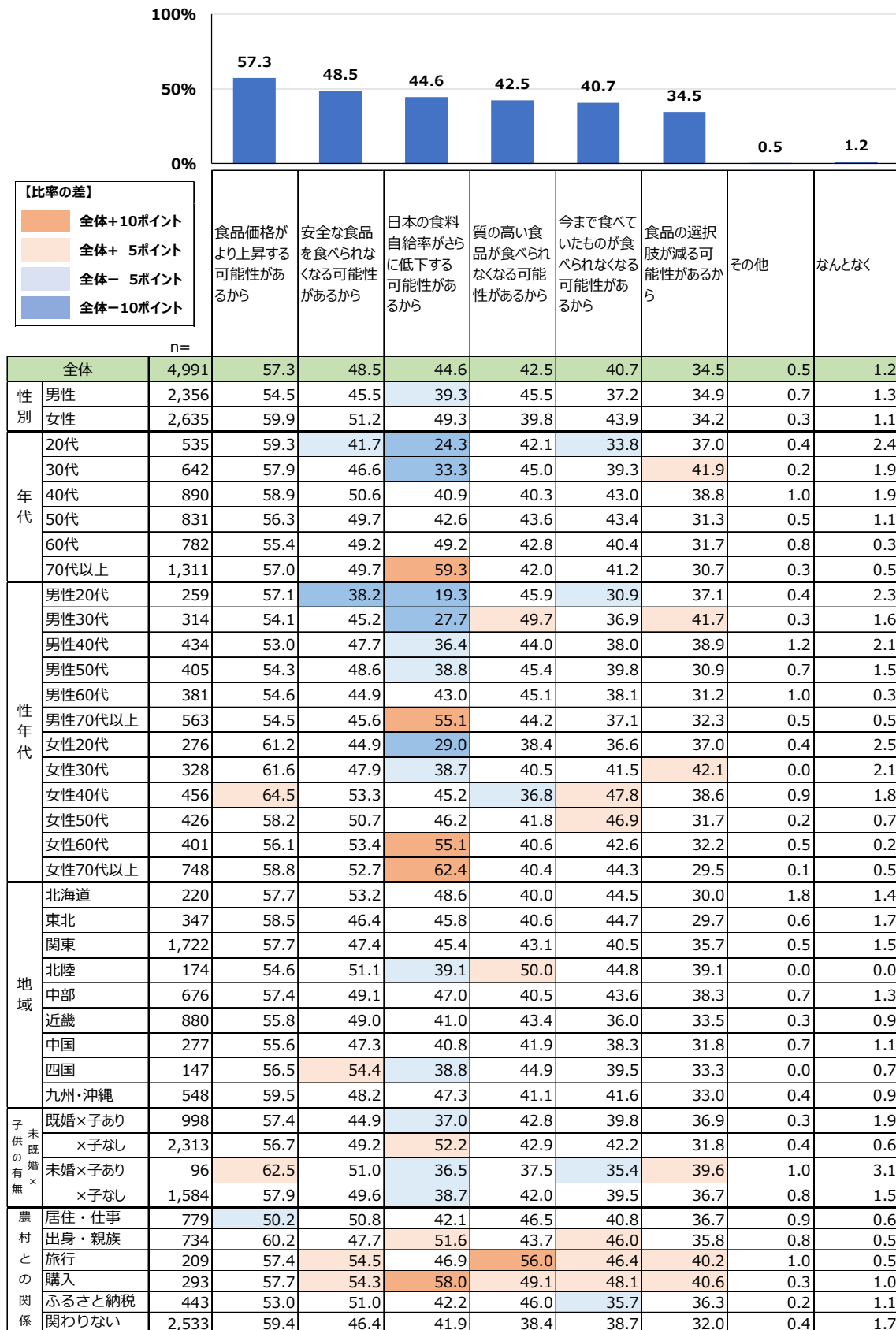
Q24. 食肉の生産コストの上昇により食肉価格(小売価格)も上昇していますが、両者の関係について、あなたはどのように感じていますか。最も近いものを1つお答えください。



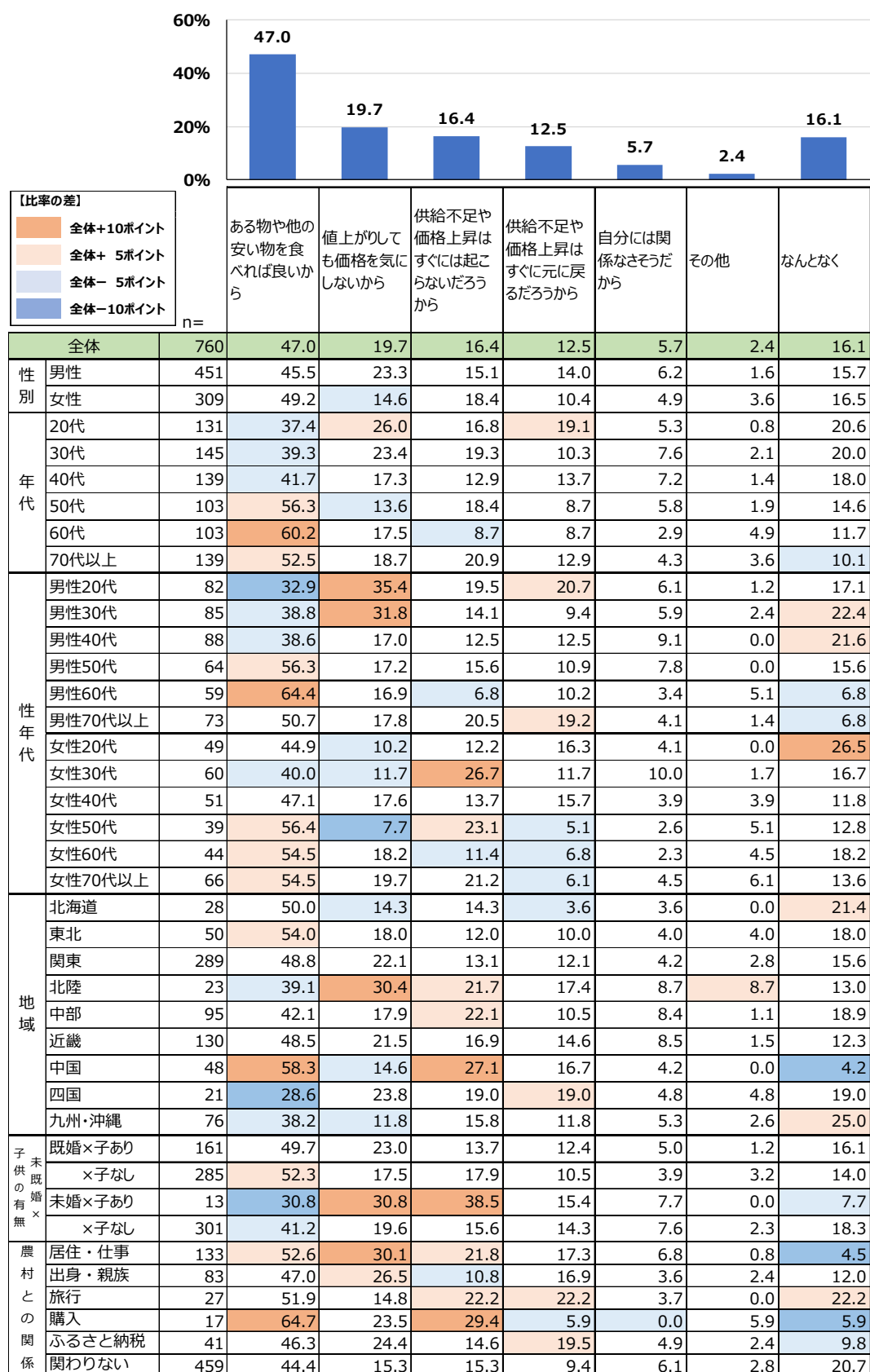
Q25. 今後の食料・食肉の供給についてあなたは不安を感じますか。

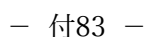


Q26. 今後の食料・食肉の供給に不安を感じる理由を、全てお答えください。

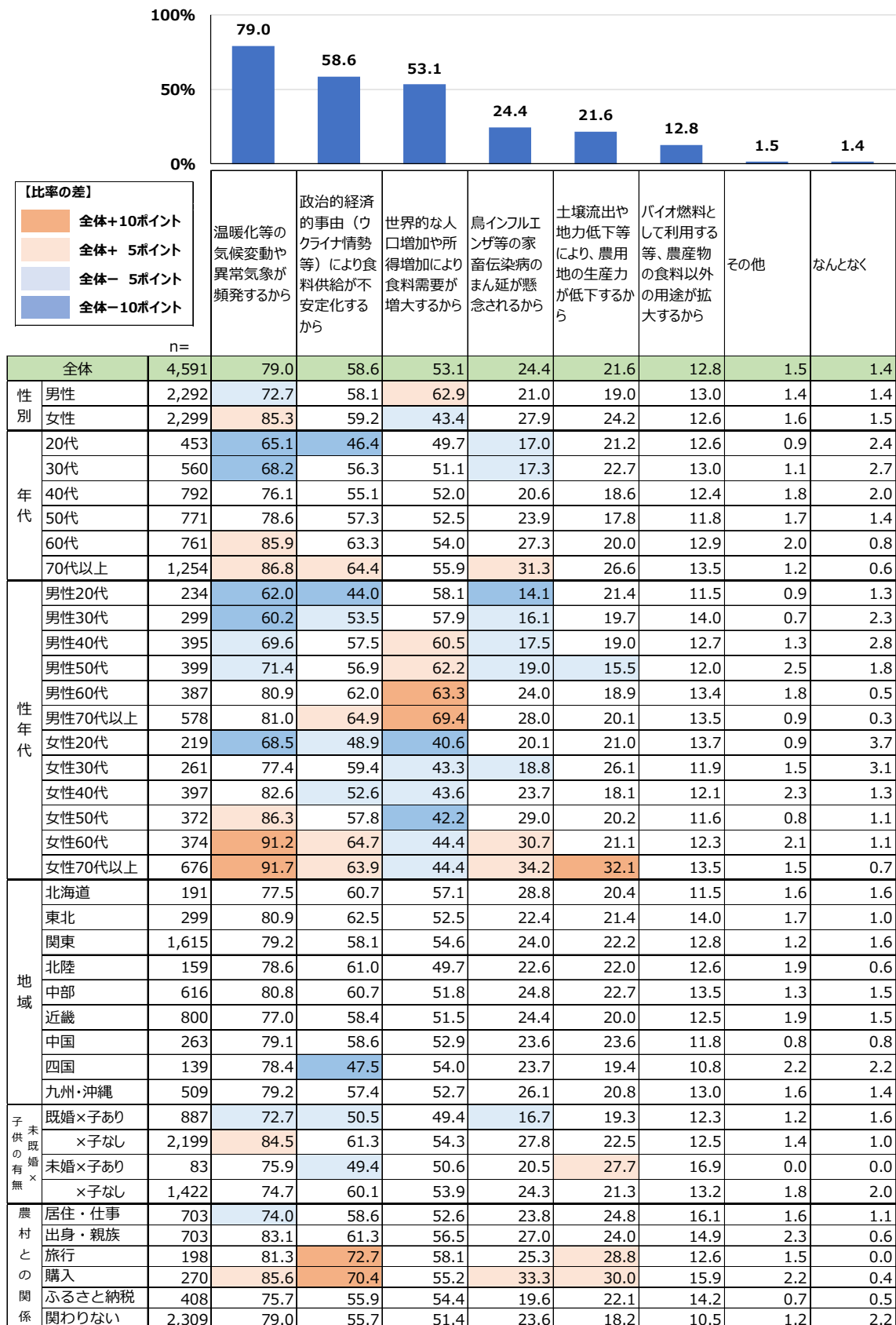


Q27. 今後の食料・食肉の供給に不安を感じない理由を、全てお答えください。

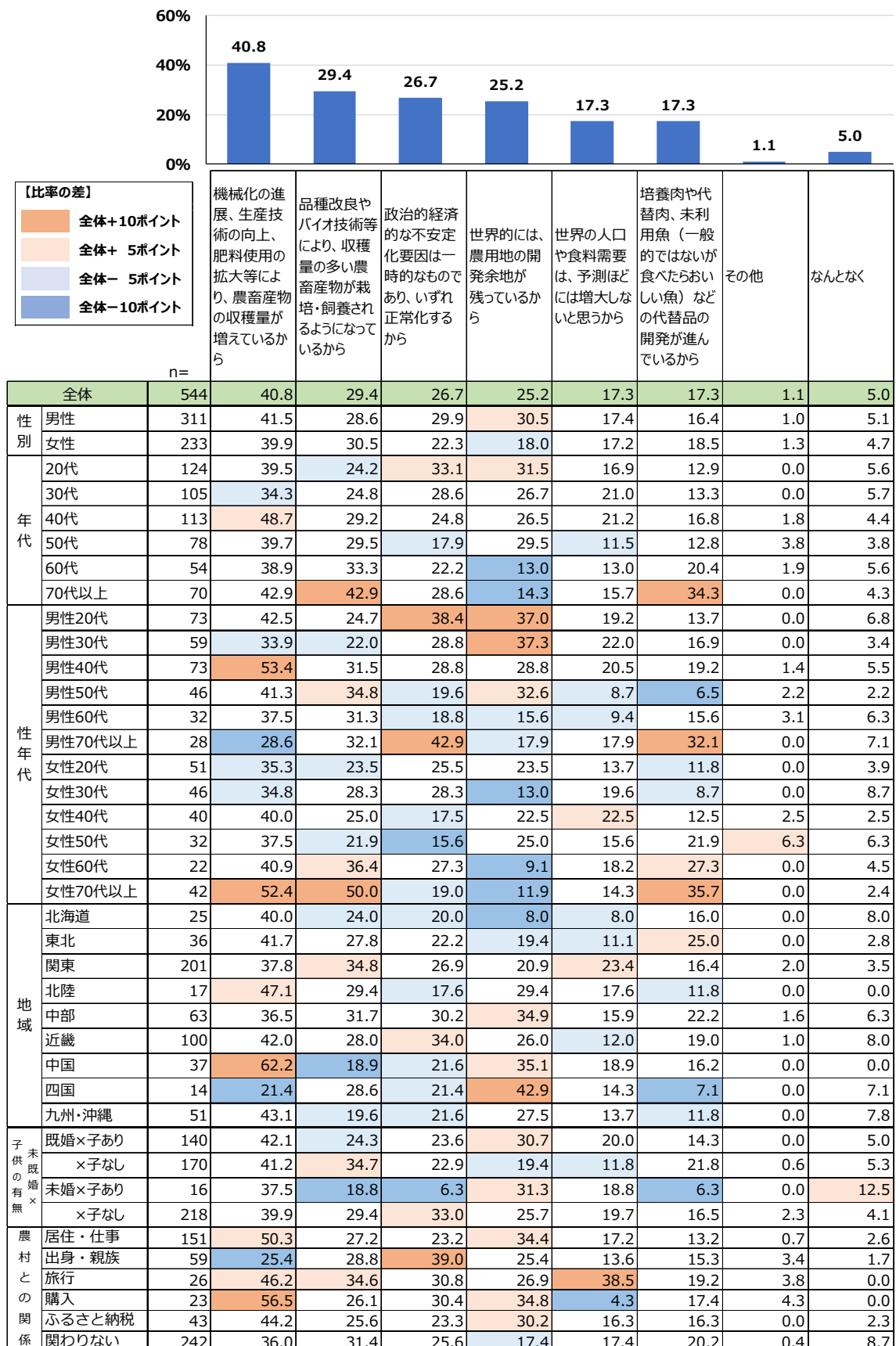




Q29. 中長期的に、世界的な食料の供給リスクが継続・増大するとあなたがお考えになる理由を、全てお答えください。

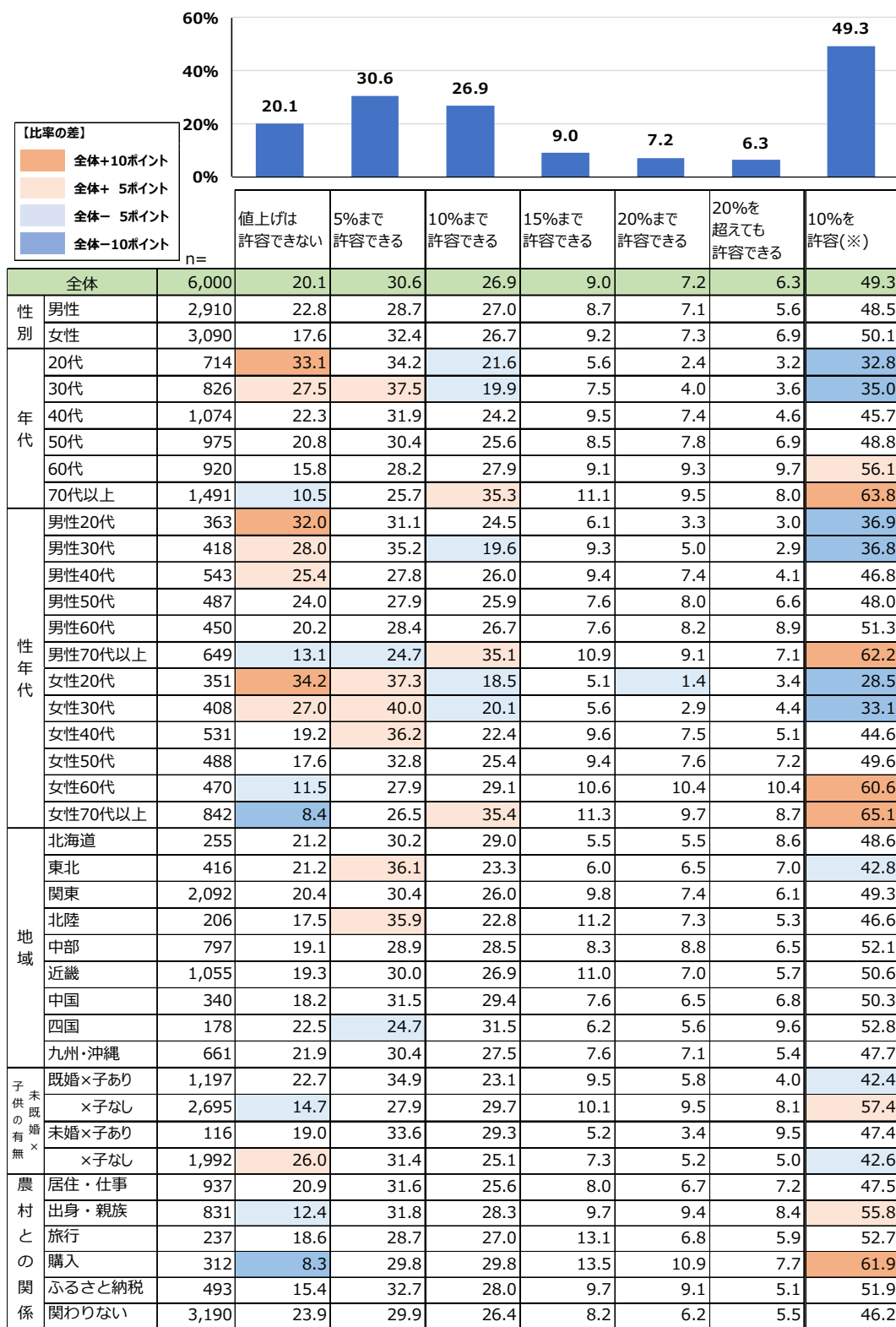


Q30. 中長期的に、世界的な食料の供給リスクが継続・増大しないとあなたがお考えになる理由を、全てお答えください。



Q31-1. ここで改めてお聞きますが、あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

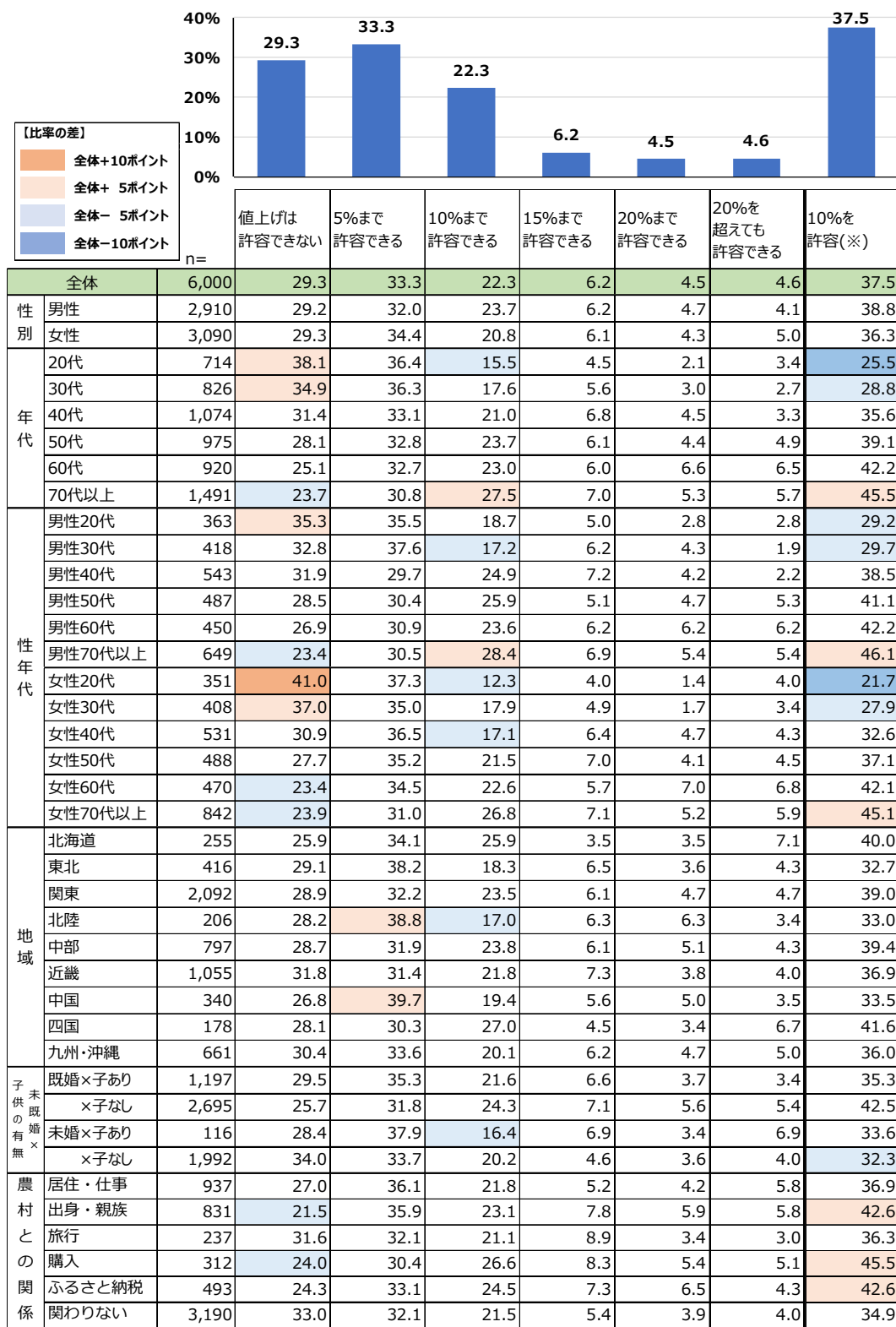
国産牛肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

Q31-2. ここで改めてお聞きますが、あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

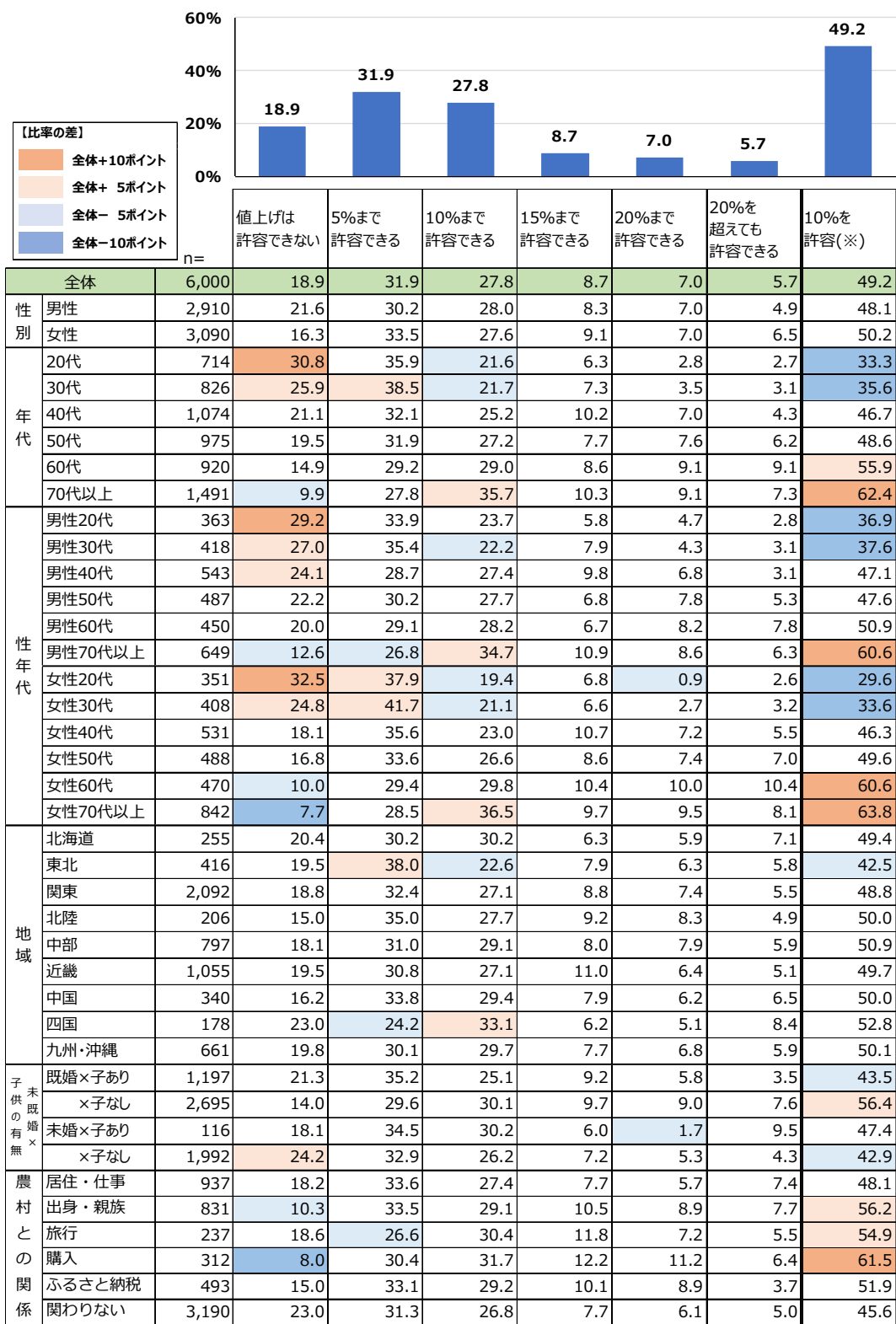
輸入牛肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

Q31-3. ここで改めてお聞きますが、あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

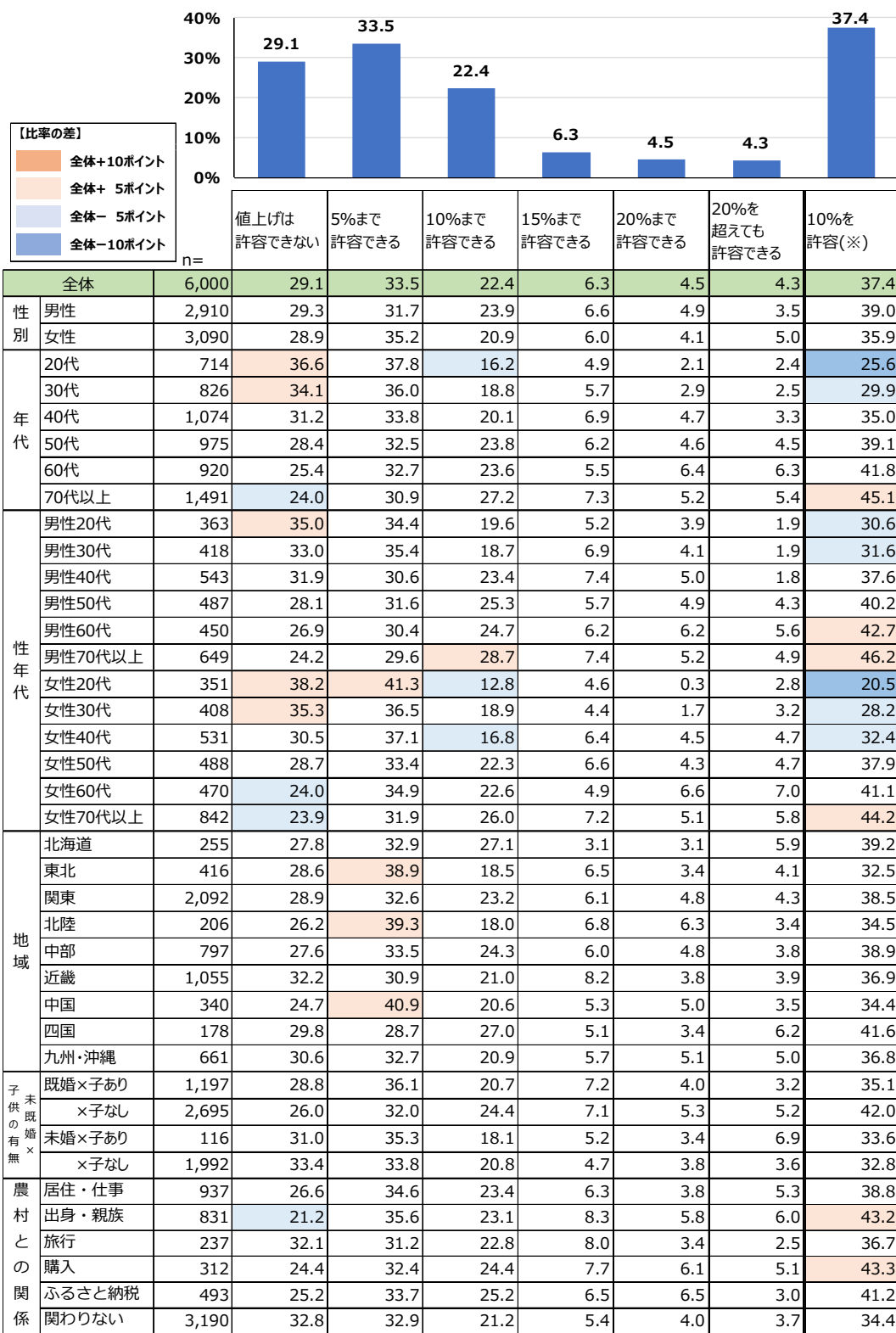
国産豚肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

Q31-4. ここで改めてお聞きますが、あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

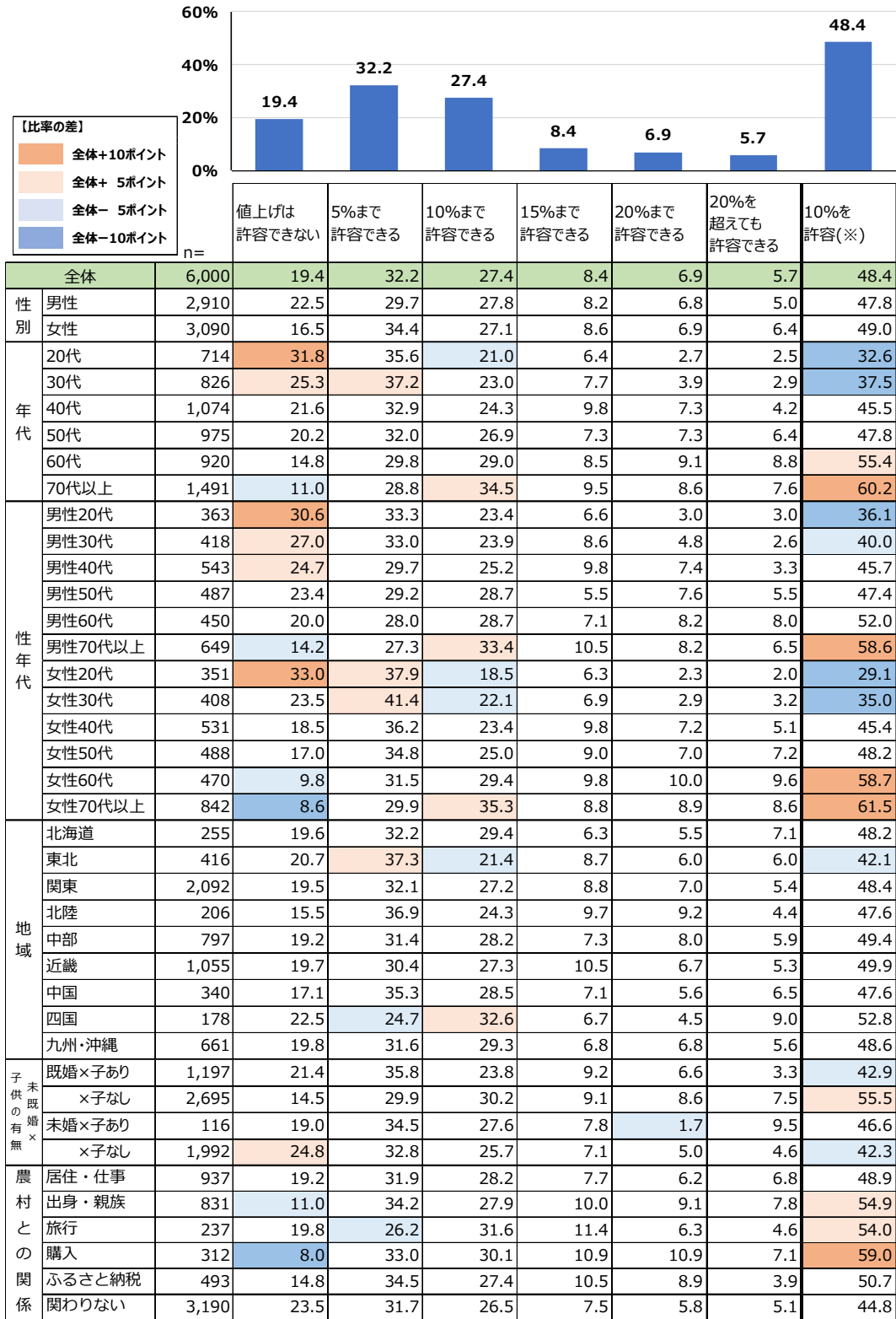
輸入豚肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

Q31-5. ここで改めてお聞きますが、あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

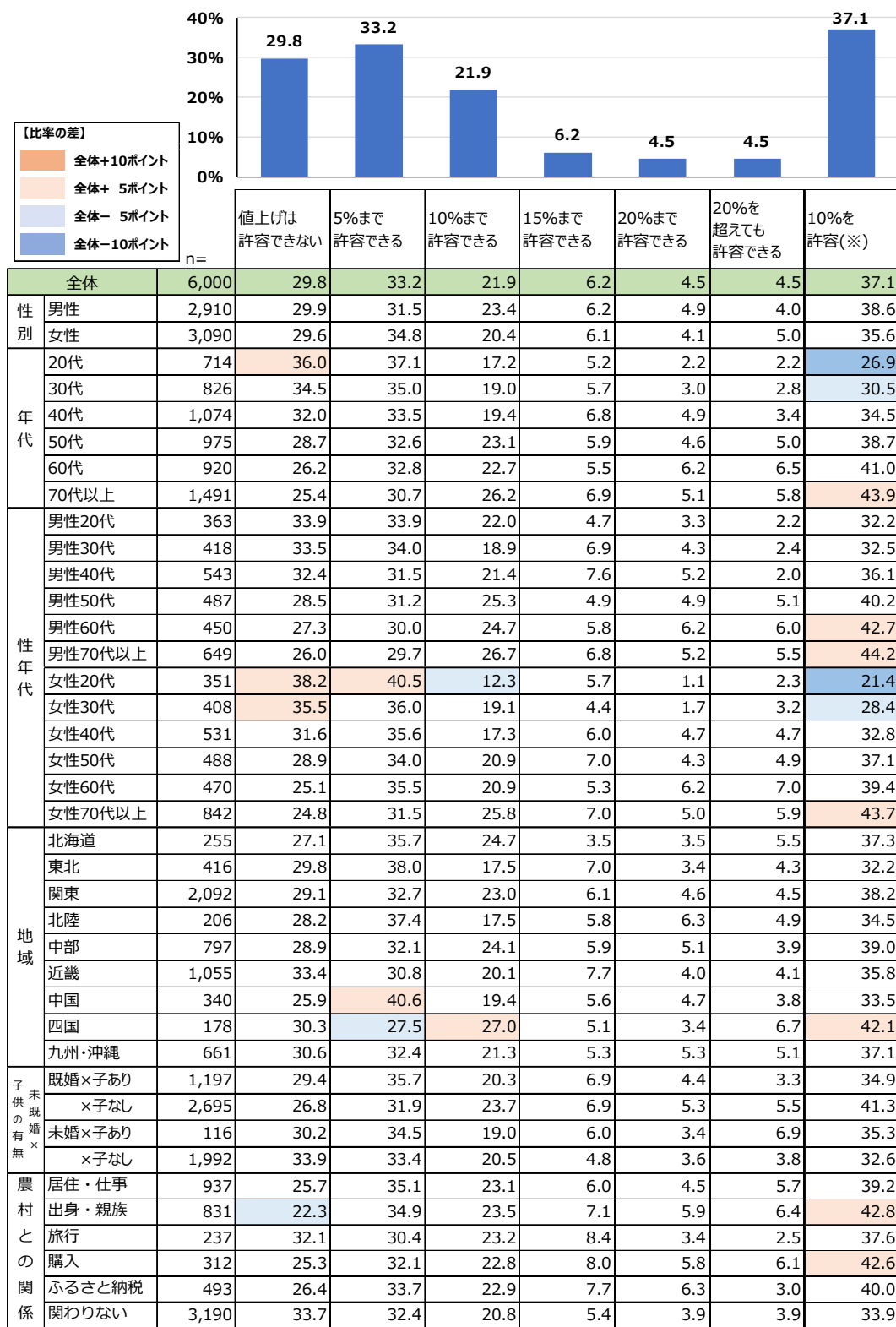
国産鶏肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

Q31-6. ここで改めてお聞きますが、あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

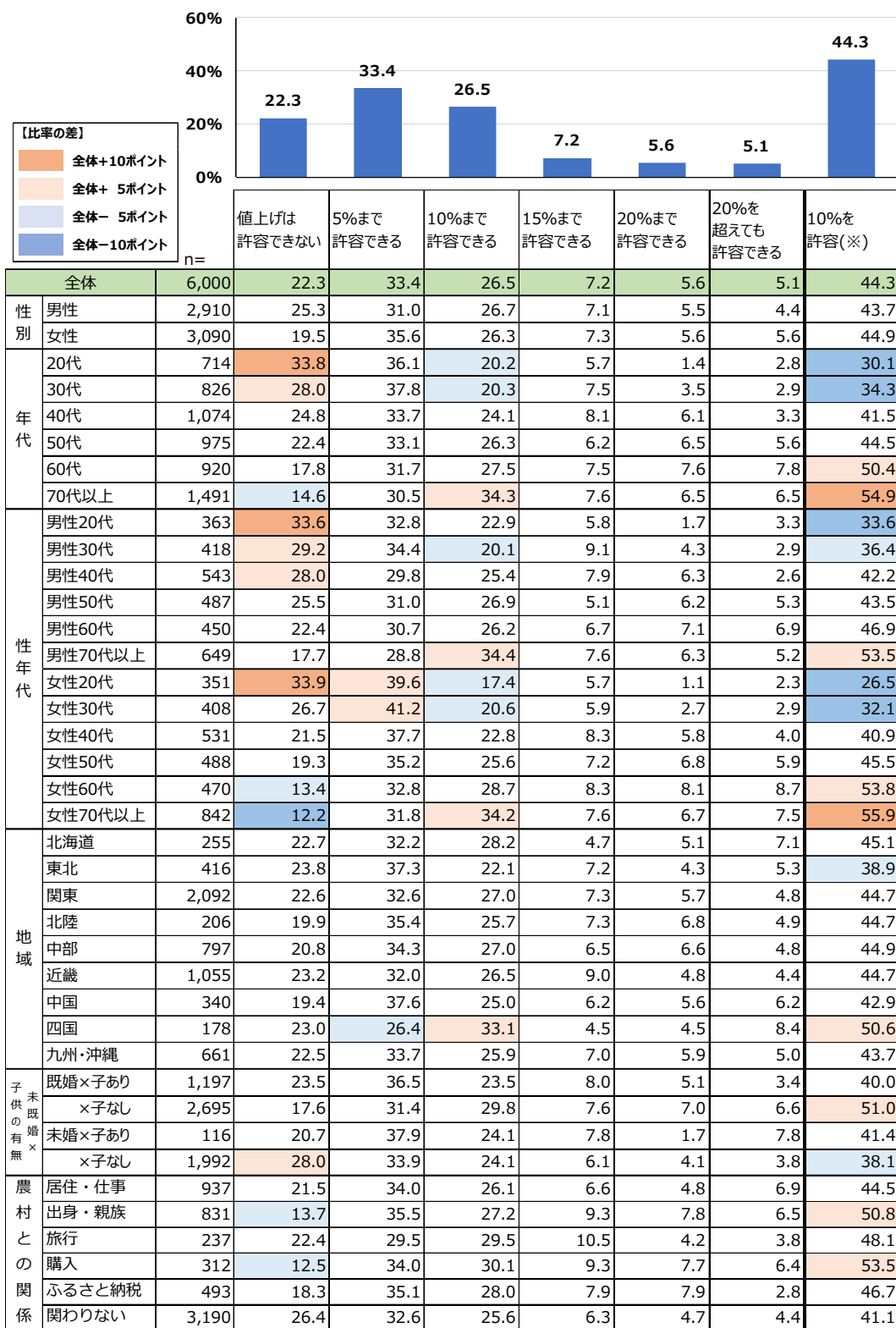
輸入鶏肉



(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

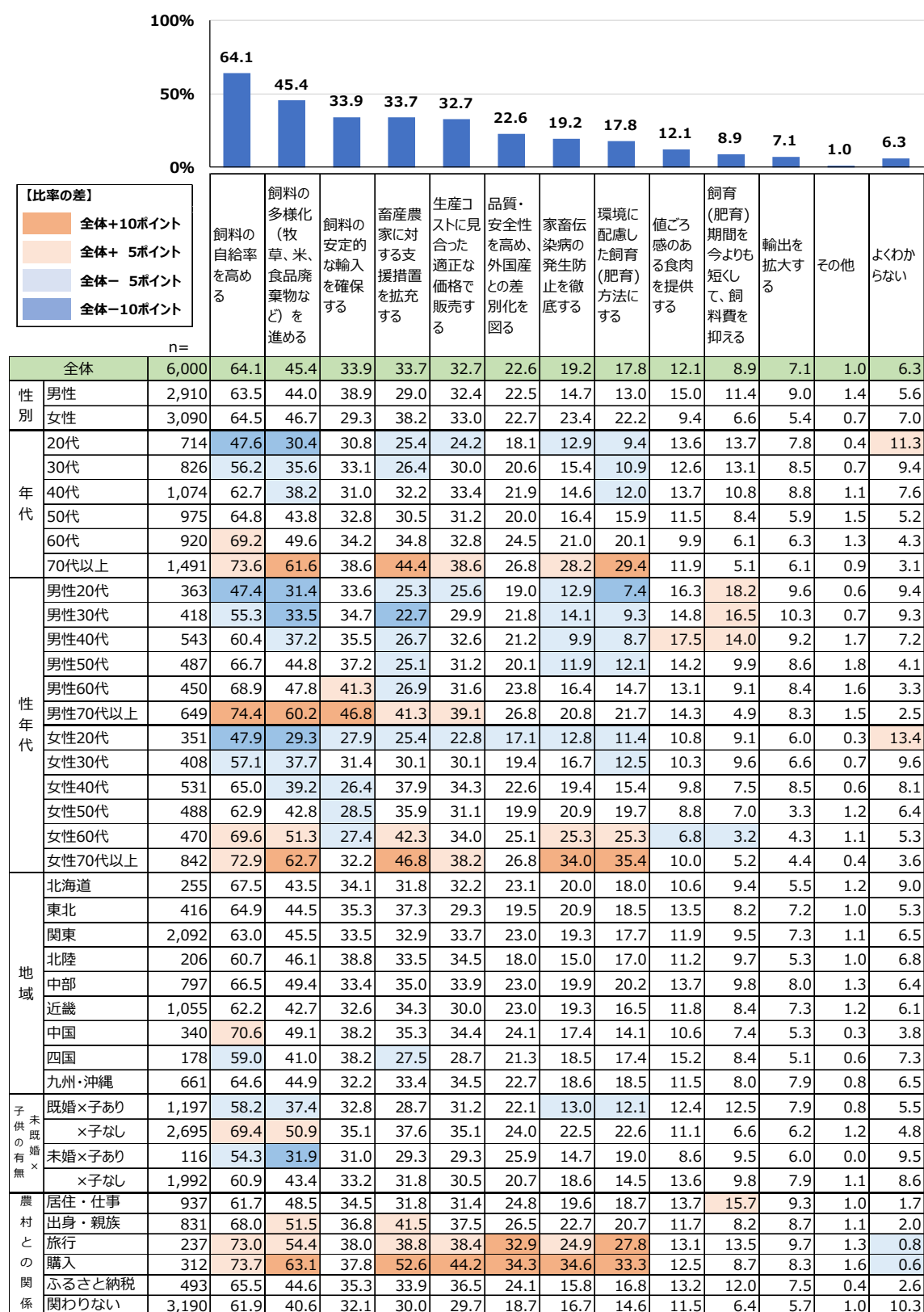
Q31-7. ここで改めてお聞きますが、あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

ひき肉

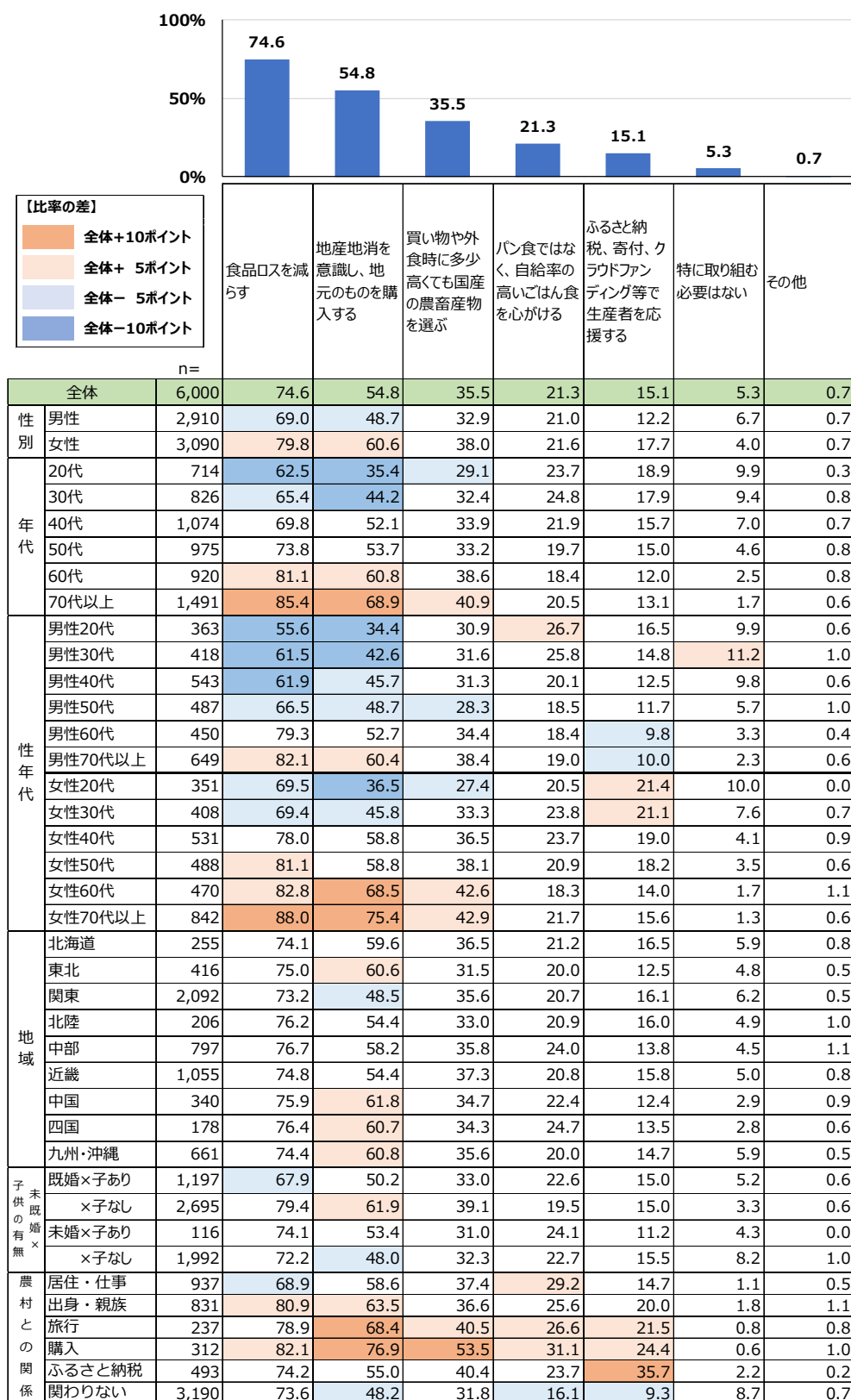


(※)10%を許容：「10%まで許容できる」「15%まで許容できる」「20%まで許容できる」「20%を超えても許容できる」の合計値

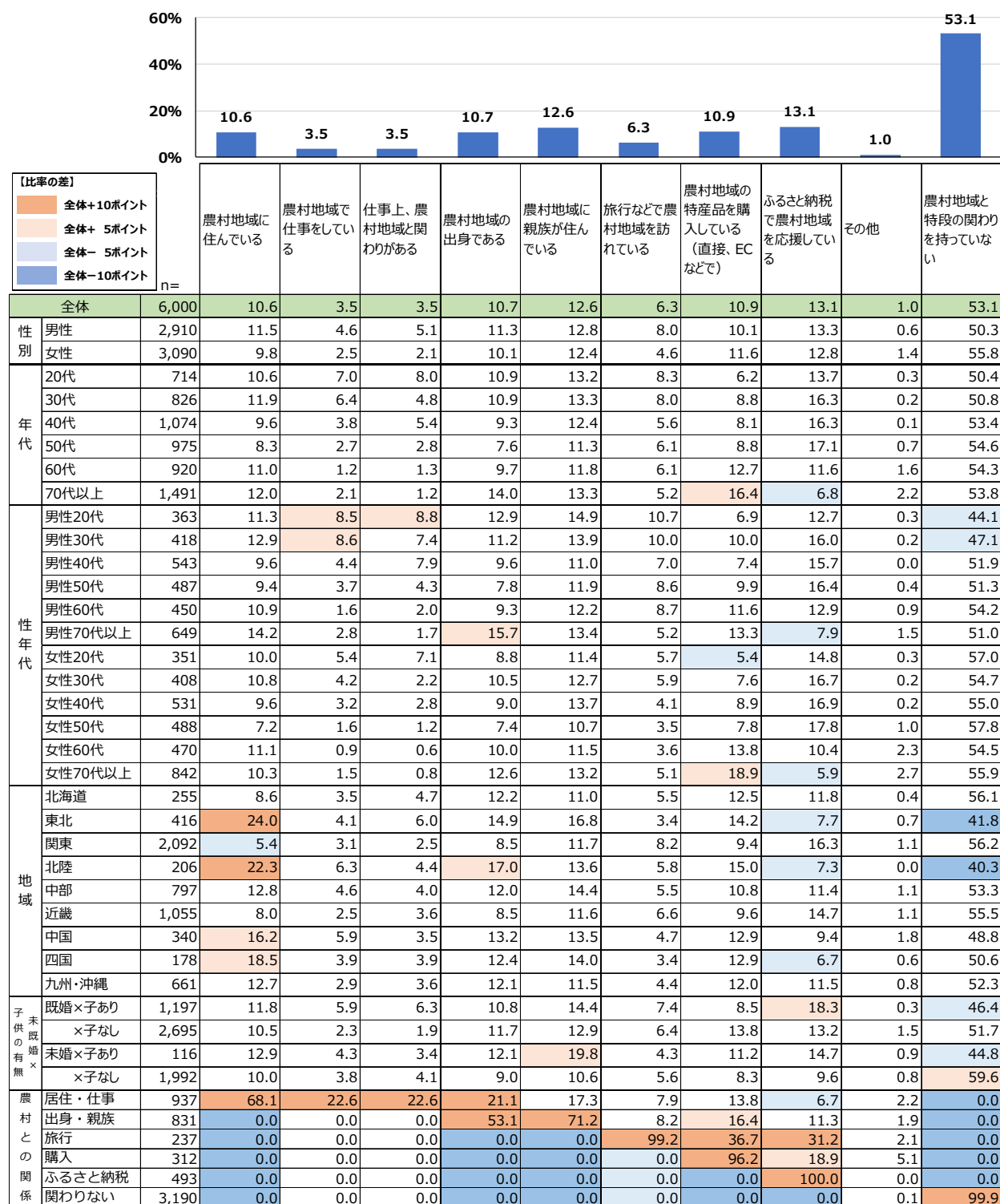
Q32. 食肉の安定供給のために、日本の畜産業にとって必要だとあなたが考えることを、全てお答えください。



Q33. 食料・食肉の安定供給のために、消費者が取り組むべきとあなたが考えることを、全てお答えください。



Q35. あなたは、現在、農村地域とどのような関わりを持っていますか。あてはまるものを全てお答えください。



調査票

F1 あなたのお住まいを教えてください。

ひとっだけ

必須

☐ 男性

☐ 女性

F2 あなたの年齢を教えてください。

必須

歳

F3 あなたの住まいを教えてください。

ひとっだけ

必須

選択してください

>

F4 あなたは結婚していますか。

ひとっだけ

必須

☐ 結婚していない（離別を含む）

☐ 結婚している（事実婚を含む）

F5 あなたの職業をお知らせください。

ひとっだけ

必須

☐ 会社員・役員

☐ 自営業

☐ 専門職（医師、弁護士、美容師、デザイナー等）

☐ 公務員

☐ 学生

☐ 専業主婦・専業主夫

☐ パート・アルバイト・フリーター

☐ 無職・定年退職

☐ その他

F6 同居のご家族の人数を教えてください。
またそのうち、あなたの子どもとの人数と、65歳以上の人数もそれぞれお知らせください。

必須

何人でお住まいですか。あなたも含めた人数をお答えください。
※ 普段、最も過ごす場所（ご自宅）での同居人数をお答えください。

同居されている方のうち、未成年（20歳未満）のお子様は何人ですか。

同居されている方のうち、65歳以上の方は何人ですか。
※ あなたご自身が65歳以上の場合は、あなたも含めた人数をお答えください。

	人
	人
	人

F7 あなたの世帯年収をお知らせください。

必須

☐ 200万円未満

☐ 200～400万円未満

☐ 400～600万円未満

☐ 600～800万円未満

☐ 800～1000万円未満

☐ 1000～1200万円未満

☐ 1200～1500万円未満

☐ 1500～2000万円未満

☐ 2000万円以上

☐ わからない

SQ1 あなたは、どれくらいの頻度で食品の買い物をしますか。

ひとっだけ

必須

☐ 毎日

☐ 週に4～6回

☐ 週に2～3回

☐ 週に1回

☐ 月に2～3回

☐ 月に1回

☐ それ以下

5Q2 あなたは、どれくらいの頻度で食肉を購入しますか。

※食肉・・・牛肉、豚肉、鶏肉を言い、ひき肉を含みます。

ひとつだけ

必須

☐ 毎日

☐ 週に4～6回

☐ 週に2～3回

☐ 週に1回

☐ 月に2～3回

☐ 月に1回

☐ それ以下

☐ 食肉は購入しない

Q1 1年前と比べて、あなたが特に価格が上昇していると感じている食品は何ですか。
3つまでお答えください。

3つまで

必須

☐ 米

☐ パン

☐ 鶏肉

☐ 野菜

☐ 果物

☐ 牛肉

☐ 豚肉

☐ 鶏肉

☐ 鶏卵

☐ 牛乳

☐ 乳製品（チーズ/バター/ヨーグルト等）

☐ 魚介類

☐ 食用油

☐ 惣菜・冷凍食品

☐ その他

☐ 価格が上昇していると感じている食品はない

Q2 最近の価格上昇により、あなたが購入量を減らした食品は何ですか。
3つまでお答えください。

3つまで

必須

☐ 米	
☐ パン	
☐ 麺類	
☐ 野菜	
☐ 果物	
☐ 牛肉	
☐ 豚肉	
☐ 鶏肉	
☐ 鶏卵	
☐ 牛乳	
☐ 乳製品 (チーズ/バター/ヨーグルト等)	
☐ 魚介類	
☐ 食用油	
☐ 惣菜・冷凍食品	
☐ その他	
☐ 価格上昇で購入量を減らした食品はない	

Q3 普段、購入する量が最も多い食肉は何ですか。

ひとつだけ

必須

☐ 牛肉	
☐ 豚肉	
☐ 鶏肉	
☐ ひき肉	

Q4 普段、牛肉の中で購入する量が最も多いものは何ですか。

ひとつだけ

必須

☐ 和牛	
☐ 和牛以外の国産牛	
☐ 輸入牛肉	
☐ 牛肉は購入しない	
☐ わからない (牛肉の種類は気にしない)	

◆Q5は、Q4で「牛肉は購入しない」とお答えの方にお伺いします。

Q5 牛肉を購入しない理由について、あてはまるものを全てお答えください。

いくつでも

必須

☐ 環境に影響を与えるから（牛のゲップなど）

☐ 脂質が多いから（健康、ダイエットで）

☐ 商品の当たり外れが大きいから

☐ 料理が苦手だから（美味しく作れないから）

☐ 豚肉や鶏肉の方が好きだから（豚肉・鶏肉で十分だから）

☐ 牛肉が好きではないから（美味しいと思わないから）

☐ 価格が高いから（コストパフォーマンスが悪いから）

☐ 外食で食べているから

☐ 惣菜で食べているから

☐ 牛肉は食べない主義だから

☐ その他

◆全員にお伺いします。

Q6 それぞれの食肉について、最もよく食べる場面をお答えください。

※中食は、惣菜や弁当を購入して家や職場で食べる行為を指し、テイクアウトやデリバリーを含みます。
※内食は、家で食料を調理して食べる行為を指します。

それぞれひとつだけ

必須

	牛肉	豚肉	鶏肉	牛き肉
	↓	↓	↓	↓
外食	☐	☐	☐	☐
中食	☐	☐	☐	☐
内食	☐	☐	☐	☐
この肉は食べない				

Q7 1年前と比べて、あなたは最近の食肉価格をどのように感じていますか。
それぞれの食肉についてお答えください。

それぞれひとつだけ

必須

	牛肉	豚肉	鶏肉	牛き肉
	国産 輸入	国産 輸入	国産 輸入	国産 輸入
	↓	↓	↓	↓
とても高くなった	☐	☐	☐	☐
やや高くなった	☐	☐	☐	☐
ほとんど変わらない	☐	☐	☐	☐
やや低くなった	☐	☐	☐	☐
とても低くなった	☐	☐	☐	☐
わからない/判断していない	☐	☐	☐	☐

Q8 以下の食肉を輸入する頻度をそれぞれお答えください。

あなたは、食肉を 週に2～3回 輸入しているとお答えになっています。

それぞれひとつだけ

必須

	牛肉	豚肉	鶏肉	ひき肉
頻度	頻度	頻度	頻度	頻度
↓	↓	↓	↓	↓
○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑
1日に1回以上	○	○	○	○
2～3日に1回程度	○	○	○	○
4～6日に1回程度	○	○	○	○
1週間に1回程度	○	○	○	○
2～3週間に1回程度	○	○	○	○
1か月に1回程度	○	○	○	○
それ未満	○	○	○	○
この肉は輸入しない	○	○	○	○

Q9 前問でお答えいただいた食肉を輸入する頻度について、1年前と比べてどのように変化しましたか。それぞれの食肉についてお答えください。

それぞれひとつだけ

必須

	牛肉	豚肉	鶏肉	ひき肉
頻度	頻度	頻度	頻度	頻度
↓	↓	↓	↓	↓
○	○	○	○	○
↑	↑	↑	↑	↑
輸入頻度はとても増えた	○	○	○	○
輸入頻度はやや増えた	○	○	○	○
輸入頻度はほとんど変わらない	○	○	○	○
輸入頻度はやや減った	○	○	○	○
輸入頻度はとても減った	○	○	○	○

Q10 あなたが食肉を輸入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全てお答えください。

※ 「その他」の回答が複数ある場合には「その他1」～「その他4」に分けて記入し、該当する食肉にチェックしてください。

それぞれいくつでも

必須

	牛肉	豚肉	鶏肉	ひき肉
↓	↓	↓	↓	↓
価格	☐	☐	☐	☐
数量	☐	☐	☐	☐
賞味期間・日持ち	☐	☐	☐	☐
内容量	☐	☐	☐	☐
食肉の部位	☐	☐	☐	☐
食肉の形態（ブロック、スライスなど）	☐	☐	☐	☐
産地・ブランド	☐	☐	☐	☐
霜降りの割合・脂肪の割合	☐	☐	☐	☐
ドリップ（赤い汁）の有無	☐	☐	☐	☐
調理にかかると時間	☐	☐	☐	☐
味付けの有無	☐	☐	☐	☐
目新しさ	☐	☐	☐	☐
その他1	☐	☐	☐	☐
入力してください				
その他2	☐	☐	☐	☐
入力してください				
その他3	☐	☐	☐	☐
入力してください				
その他4	☐	☐	☐	☐
入力してください				

Q11 今後さらに食肉の価格が上昇した場合、食肉を輸入する際に重視する点を、それぞれの食肉について、あてはまるものを全てお答えください。

※「その他」の回答が複数ある場合には「その他1」～「その他4」に分けて記入し、該当する食肉にチェックしてください。

それぞれいくつでも

必須

	牛肉	豚肉	鶏肉	ひき肉
	↓	↓	↓	↓
価格	☐	☐	☐	☐
解凍	☐	☐	☐	☐
賞味期間・日持ち	☐	☐	☐	☐
内容量	☐	☐	☐	☐
食肉の部位	☐	☐	☐	☐
食肉の形態（ブロック、スライスなど）	☐	☐	☐	☐
産地・ブランド	☐	☐	☐	☐
霜降りの度合い・脂身の割合	☐	☐	☐	☐
ドリップ（赤い汁）の有無	☐	☐	☐	☐
調理にかかる手間	☐	☐	☐	☐
味付けの有無	☐	☐	☐	☐
目新しさ	☐	☐	☐	☐
その他 1	☐	☐	☐	☐
入力してください				
その他 2	☐	☐	☐	☐
入力してください				
その他 3	☐	☐	☐	☐
入力してください				
その他 4	☐	☐	☐	☐
入力してください				

Q12 国産食肉又は輸入食肉のいずれかを選ぶ際に意識することは何ですか。それぞれの食肉についてあてはまるものを全てお答えください。

※「その他」の回答が複数ある場合には「その他1」～「その他4」に分けて記入し、該当する食肉にチェックしてください。

それぞれいくつでも

必須

	牛肉	豚肉	鶏肉	ひき肉
	↓	↓	↓	↓
価格	☐	☐	☐	☐
品質	☐	☐	☐	☐
安全性	☐	☐	☐	☐
産地・ブランド	☐	☐	☐	☐
その他 1	☐	☐	☐	☐
入力してください				
その他 2	☐	☐	☐	☐
入力してください				
その他 3	☐	☐	☐	☐
入力してください				
その他 4	☐	☐	☐	☐
入力してください				
国産食肉が輸入食肉とは問わない／意識しない	☐	☐	☐	☐

Q13 国産食肉と輸入食肉とを比べて、どれくらいの価格差までであれば国産食肉を購入しますか。それぞれの食肉についてお答えください。

それぞれひとつだけ

必須

	牛肉	豚肉	鶏肉	ひき肉
	↓	↓	↓	↓
価格に関係なく国産食肉は購入しない	○	○	○	○
同じ価格なら	○	○	○	○
+5%まで	○	○	○	○
+10%まで	○	○	○	○
+15%まで	○	○	○	○
+20%まで	○	○	○	○
+30%まで	○	○	○	○
+50%まで	○	○	○	○
+100%まで	○	○	○	○
+100%以上でも国産食肉を購入する	○	○	○	○

Q14 あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。

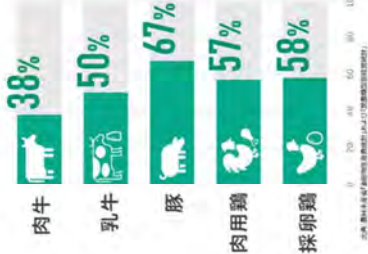
それぞれひとつだけ

必須

	牛肉	豚肉	鶏肉	ひき肉
	国産 輸入	国産 輸入	国産 輸入	
	↓	↓	↓	↓
値上げは許容できない	○	○	○	○
5%まで許容できる	○	○	○	○
10%まで許容できる	○	○	○	○
15%まで許容できる	○	○	○	○
20%まで許容できる	○	○	○	○
20%を超えても許容できる	○	○	○	○

以下の図をご覧になってから、お答えください。

畜産物の生産にかかる飼料費の割合(64年)



Q15 畜産物を生産するためには様々な費用がかかりますが、上記の図をご覧になって、畜産物の生産にかかる飼料費(エサ代)の割合について、あなたはどのように感じましたか。
次の中から最も近いものを1つお答えください。

ひとつだけ 必要

☐	初めて知ったが、飼料費の割合が高いと感じた
☐	初めて知ったが、飼料費の割合は妥当だと感じた
☐	初めて知ったが、飼料費の割合は低いと感じた
☐	経験した事があるが、改めて飼料費の割合が高いと感じた
☐	経験した事があるが、改めて飼料費の割合は妥当だと感じた
☐	経験した事があるが、改めて飼料費の割合が低いと感じた
☐	その他
☐	わからない/特に何も感じない

◆Q16は、Q15で畜産物の生産にかかる飼料費の割合について「飼料費の割合は妥当だと感じた」「飼料費の割合が低いと感じた」とお答えの方にお伺いします。

Q16 畜産物の生産にかかる飼料費の割合が妥当または低いと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。

いくつでも 必要

☐	家計に占める食料支出の割合も同じくらいだと思うから
☐	家畜を育てる以上、飼料にかかるのは当然だと思うから
☐	日本の畜産は、家畜に飼料を沢山（必要以上に）与えていると思うから
☐	ニュース等で飼料の価格が値上がりしていると聞いているから
☐	製造業など他の産業でも原材料費はこの程度がかかっていると思うから
☐	家畜を育てるためには、もっと飼料費がかかると思っていたから
☐	その他
☐	なんとなく

Q17 日本は飼料の約75%を海外から輸入しています。この輸入割合について、あなたはどのように感じますか。
次の中から最も近いものを1つお答えください。

ひとつだけ
必ず

- ☐ 初めて知ったが、飼料の輸入割合が高いと感じた
- ☐ 初めて知ったが、飼料の輸入割合は妥当だと感じた
- ☐ 初めて知ったが、飼料の輸入割合は低いと感じた
- ☐ 見聞きした事があるが、改めて飼料の輸入割合が高いと感じた
- ☐ 見聞きした事があるが、改めて飼料の輸入割合は妥当だと感じた
- ☐ 見聞きした事があるが、改めて飼料の輸入割合が低いと感じた
- ☐ その他
- ☐ わからない／特に何も感じない

◆Q18は、Q17で日本の飼料の輸入割合について「飼料の輸入割合は妥当だと感じた」「飼料の輸入割合は低いと感じた」とお答えの方に伺います。

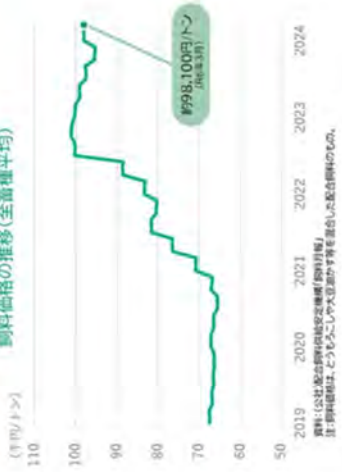
Q18 現在の飼料の輸入割合が妥当または低いと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。

いくつでも
必ず

- ☐ 日本で本来飼える頭数以上に家畜を飼っている結果だと思うから
- ☐ 国産より輸入飼料のほうが入手しやすいと思うから
- ☐ 国産より輸入飼料の方が安価だと思うから
- ☐ 人間の食料も大部分を輸入に依存しているから
- ☐ 日本は気候や地形などが飼料生産に適していないため、飼料を輸入せざるを得ないと思うから
- ☐ その他
- ☐ なんともなく

以下の図をご覧ください。期間にお答えください。

飼料価格の推移(全畜種平均)



Q19 飼料の価格はトン当たり6〜7万円で推移していましたが、最近10万円前後になっています。こうした飼料価格の動向について、あなたはどのように感じますか。
次の中から最も近いものを1つお答えください。

ひとつだけ
必ず

- ☐ 初めて知ったが、飼料価格が高騰していると感じた
- ☐ 初めて知ったが、飼料価格は妥当だと感じた
- ☐ 初めて知ったが、飼料価格はそれほど高騰していないと感じた
- ☐ 見聞きした事があるが、改めて飼料価格は高騰していると感じた
- ☐ 見聞きした事があるが、改めて飼料価格は妥当だと感じた
- ☐ 見聞きした事があるが、改めて飼料価格はそれほど高騰していないと感じた
- ☐ その他
- ☐ わからない／特に何も感じない

◆Q20は、Q19で最近の飼料価格の動向について「飼料価格が安当だと感じた」「飼料価格はそれほど高騰していないと感じた」とお答えの方にお伺いします。

Q20 現在の飼料価格が安当、またはそれほど高騰していないと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。

いくつでも

必須

☐ 飼料価格は変動が激しいものだと思うから

☐ 世界的に食肉の需要が高まり、飼料の需要が高まっているから

☐ ウクライナ情勢等で世界的にもノの流通が滞阻しているから

☐ 円安だから

☐ 飼料だけでなく、さまざまなモノの価格が高騰しているから

☐ 異常気象や自然災害により、トウモロコシなどの飼料原料の生産が増害を招いているから

☐ その他

☐ なんとなく

Q21 国内の肉用牛農家は、この10年間で57,500戸（2014年）から36,500戸（2024年）へと約40%減少しています。このように肉用牛農家が減少していることをあなたはどうのように感じますか。
次の中から最も近いものをお答えください。

ひとつだけ

必須

☐ 初めて知ったが、減少割合（数）は深刻だと思う

☐ 初めて知ったが、減少割合（数）は安当だと思う

☐ 初めて知ったが、それほど減少していないと思う

☐ 見聞きした事があるが、改めて減少割合（数）は深刻だと思う

☐ 見聞きした事はあるが、改めて減少割合（数）は安当だと思う

☐ 見聞きした事があるが、改めてそれほど減少していないと思う

☐ その他

☐ わからない/特に何も感じない

◆Q22は、Q21でこの10年間で肉用牛農家が減少していることについて「減少割合（数）は安当と思う」「それほど減少していないと思う」とお答えの方にお伺いします。

Q22 肉用牛農家の減少が安当、またはそれほど減少していないと考える理由について、あてはまるものを全てお答えください。

いくつでも

必須

☐ 生産性の低い肉用牛農家が廃業し、生産性の高い肉用牛農家が残っている結果だと思うから

☐ 消費者が牛肉を以前ほど食べなくなってきているから

☐ 農家全体が減少しており、肉用牛農家に限ったことではないから

☐ 輸入牛肉や同業者との競争が激しくなっていると思うから

☐ 肉用牛農家は儲からないと思うから

☐ もっと減少している他の産業もあるから

☐ 肉用牛生産の労働がまいついと思うから

☐ その他

☐ なんとなく

◆全額にお伺いします。

Q23 飼料価格の高騰等により、食肉の生産コストが上昇していますが、生産コスト上昇分を食肉価格（小売価格）に転嫁することについて、あなたのお考えにあてはまるものをお答えください。

いくつでも

必須

☐	生産コストが上昇すれば、食肉価格が上昇するのは当然である
☐	日本の畜産が存続していくためには、食肉価格が上昇しても仕方ない
☐	生産コストの上昇は生産者や関係者の努力でカバーし、食肉価格の上昇はできるかぎり抑えて欲しい
☐	食肉価格が上昇すると購入量が減ってしまうので、畜産業者の働きでは変わらない。食肉価格への転嫁より、畜産業者の支援面を充実した方がよい
☐	その他
☐	よくわからない

Q24 食肉の生産コストの上昇により食肉価格（小売価格）も上昇していますが、両者の関係について、あなたはどのように感じていますか。最も近いものを1つお答えください。

ひとつだけ

必須

☐	生産コストの上昇分以上に、食肉価格へ転嫁されていると思う
☐	生産コストの上昇分がほぼ、食肉価格へ転嫁されていると思う
☐	生産コストの上昇分の割に、あまり食肉価格へ転嫁されていないと思う
☐	その他
☐	よくわからない

Q25 今後の食料・食肉の供給についてあなたは不安を感じますか。

ひとつだけ

必須

☐	とても不安を感じる
☐	やや不安を感じる
☐	あまり不安を感じない
☐	全く不安を感じない
☐	よくわからない

◆Q26は、Q25で今後の食料・食肉の供給について「とても不安を感じる」「やや不安を感じる」とお答えの方にお伺いします。

Q26 今後の食料・食肉の供給に不安を感じる理由を、全てお答えください。

いくつでも

必須

☐	安全な食品を食べられなくなる可能性があるから
☐	質の高い食品が食べられなくなる可能性があるから
☐	食品の選択幅が減る可能性があるから
☐	食品価格がより上昇する可能性があるから
☐	今まで食べていたものが食べられなくなる可能性があるから
☐	日本の食料自給率がさらに低下する可能性があるから
☐	その他
☐	なんとなく

◆Q27は、Q25で今後の食料・食肉の供給について

「あまり不安を感じない」「全く不安を感じない」とお答えの方にお伺いします。

Q27 今後の食料・食肉の供給に不安を感じない理由を、全てお答えください。

いくつでも

必須

☐	供給不足や価格上昇はすぐには起こらないだろうから
☐	ある物や他の安い物を食べれば良いから
☐	値上がりしても価格を気にしないから
☐	供給不足や価格上昇はすぐに元に戻るだろうから
☐	自分には関係なさそうだから
☐	その他
☐	なんとなく

以下の文章をご覧になってから、説明にお答えください。

食料需要の増加、気候変動、世界情勢の混迷等は、食肉をはじめとする食料の世界的な安定供給に影響を及ぼしています。このような食料供給に影響を及ぼす可能性のある要因が供給リスクです。

◆全圖にお伺いします。

Q28 世界的な食料供給リスクについて、あなたのお考えに最も近いものを1つお答えください。

ひとつだけ

必須

☐	現在は食料の供給リスクが増大しており、中長期的にもリスクは継続・増大すると思う
☐	現在は食料の供給リスクが増大しているが、中長期的にはリスクは増大しないと思う
☐	現在は食料の供給リスクが増大しているとは思わないが、中長期的にはリスクは増大すると思う
☐	現在は食料の供給リスクが増大しているとは思わないし、中長期的にもリスクは増大するとは思わない
☐	食料の供給リスクについて考えたことがない
☐	よくわからない

◆ Q29は、Q28で「現在は食料の供給リスクが増大しており、中長期的にもリスクは継続・増大すると思う」「現在は食料の供給リスクが増大しているとは思わないが、中長期的にはリスクは増大すると思う」とお答えの方にお伺いします。

いくつでも

必須

Q29 中長期的に、世界的な食料の供給リスクが継続・増大するとあなたが考える理由を、全てお答えください。

☐ 世界的な人口増加や所得増加により食料需要が増大するから

☐ 温暖化等の気候変動や異常気象が頻発するから

☐ 政治的経済的事由（ウクライナ情勢等）により食料供給が不安定化するから

☐ 土壌流出や地力低下等により、農用地の生産力が低下するから

☐ バイオ燃料として利用する等、農産物の食料以外の用途が拡大するから

☐ 鳥インフルエンザ等の家畜伝染病のまん延が懸念されるから

☐ その他

☐ なんとなく

◆ Q30は、Q28で「現在は食料の供給リスクが増大しているが、中長期的にはリスクは増大しないと思う」「現在は食料の供給リスクが増大しているとは思わないし、中長期的にもリスクは増大するとは思わない」とお答えの方にお伺いします。

いくつでも

必須

Q30 中長期的に、世界的な食料の供給リスクが継続・増大しないと考えられる理由を、全てお答えください。

☐ 品種改良やバイオ技術等により、収獲量の多い農畜産物が栽培・飼養されるようになっていくから

☐ 機械化の進展、生産技術の向上、肥料使用の拡大等により、農畜産物の収獲量が増えているから

☐ 世界的には、農用地の開墾余地が残っているから

☐ 政治的経済的な不安定化要因は一時的なものであり、いずれ正常化するから

☐ 世界の人口や食料需要は、予測ほどには増大しないと思うから

☐ 培養肉や代替肉、未利用魚（一般的ではないが食べたらおいしい魚）などの代替品の開発が進んでいるから

☐ その他

☐ なんとなく

◆全員にお伺いします。

Q31 ここで改めてお聞きしますが、
あなたは、食肉価格の値上げについて、どれくらいであれば許容できますか。
※「許容」は、「特に変わらず今まで通り購入する」という意味でお考え下さい。

それぞれひとつだけ

必須

	牛肉		豚肉		鶏肉		ひき肉
	国産	輸入	国産	輸入	国産	輸入	
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
値上げは許容できない	○	○	○	○	○	○	○
5%まで許容できる	○	○	○	○	○	○	○
10%まで許容できる	○	○	○	○	○	○	○
15%まで許容できる	○	○	○	○	○	○	○
20%まで許容できる	○	○	○	○	○	○	○
20%を超えても許容できる	○	○	○	○	○	○	○

Q32 食肉の安定供給のために、日本の畜産業にとって必要だとあなたが考えることを、全てお答えください。

いくつでも

必須

☐ 飼料の自給率を高める

☐ 飼料の安定的な輸入を確保する

☐ 飼育(肥育)期間を今よりも短くして、飼料費を抑える

☐ 飼料の多様化（牧草、米、食品廃棄物など）を進める

☐ 品質・安全性を高め、外国産との差別化を図る

☐ 生産コストに見合った適正な価格で販売する

☐ 値ごろ感のある食肉を提供する

☐ 畜産農家に対する支援措置を拡充する

☐ 輸出を拡大する

☐ 家畜伝染病の発生防止を徹底する

☐ 環境に配慮した飼育(肥育)方法にする

☐ その他

☐ よくわからない

Q33 食料・食肉の安定供給のために、消費者が取り組むべきとあなたが考えることを、全てお答えください。

いくつでも

必須

☐	買い物や外食時に多少高くても国産の農畜産物を選ぶ
☐	地産地消を奨励し、地元のものを購入する
☐	食品ロスを減らす
☐	パン食ではなく、自給率の高いごはん食を心がける
☐	ふるさと納税、寄付、クラウドファンディング等で生産者を応援する
☐	その他
☐	特に取り組む必要はない

Q34 食肉の安定的な供給について、あなたが期待／希望することを、どんなことでも結構ですのご自由にお答えください。

必須

--

Q35 あなたは、現在、農村地域とどのような関わりを持っていますか。あてはまるものを全てお答えください。

いくつでも

必須

☐	農村地域に住んでいる
☐	農村地域で仕事をしている
☐	仕事上、農村地域と関わりがある
☐	農村地域の出身である
☐	農村地域に親族が住んでいる
☐	旅行などで農村地域を訪れている
☐	農村地域の特産品を購入している（直接、ECなどで）
☐	ふるさと納税で農村地域を応援している
☐	その他
☐	農村地域と特産品の関わりを持っていない

アンケートは終了です。

この調査はあなたの回答によって進められます。
今後ともよろしくお願いいたします。

戻る

